
正義の街

杉林機構

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正義の街

【Zコード】

Z1252T

【作者名】

杉林機構

【あらすじ】

魔界、魔力、そして魔法。現代社会の裏側に隠されていた秘密が何者かによって明らかにされようとしていた。魔法を研究していたが親友に裏切られ猫にされた父、かつて守護者としてその秘密を守り死んだ母、そして力を受け継いだ息子、小さな家族がそれぞれの幸せを求めようとすると、彼らは正義と対峙する。

1 私の息子はアホのやつだった。（前書き）

下ネタが含まれます。

1 私の息子はアホの子でした。

目を覚ますと、私は猫にされていた。
毒虫でなくてよかつた、などと古典的ジョークを言つてゐる場合ではない。

夜空に星が瞬いでいる。

街灯もなく、暗い場所であるはずだが、私の目はよく見えていた。人間であつたころよりよく回る首で己が黒猫になつてしまつてゐることを確認し、相対的に広くなつてしまつた世界を認識する。見覚えがないのか、あるいは地表から十数センチから見上げる視界によつて印象が違うのか、どこにいるのかまるでわからなかつた。凍える冬の空氣に、総毛立つ。

「……こうなるのか」

思わず独り言を口にして、私は人語が話せていることに気が付いた。

「私は、馬園圭介。まそのけいすけ三十七歳、A型」

もう一度、喋つてみる。少なくとも「ヤー」と言つてこらゆうに耳には響かない。

デカルトは言った「我思つゆえに我あり」と。現在、認識できる限りの私は猫に他ならないが、しかし私は人間であつた意識を保てている。心まで猫になつてしまつたわけではない。名前はある。私は私で、私以外の何者でもない。記憶にさしたる欠損もない。

どうしてこうなつてしまつたのかも覚えている。

「亮平」
りょうへい

私は、私を猫にした男の名前を口にした。頭の中には顔も浮かんでいる。

『悪いな、圭介。でもな、お前が迂闊なんだぜ？ 周りが見えてなかつた。この研究がこの世の中を根底から変えちまつてことがわかつていながら、注意を怠つた。だが、俺も長年同じ釜の飯を食つてきた友だちを殺すのは忍びない。だから』

野末亮平、私の親友にして、共同研究者であつた男は最後にそう言つた。

それで猫か。

親友の慈悲深い温情を思い返すと喉から毛玉が出そうな気持ちになる。

冷静にならなければ。

私はどこかもわからない原っぱに四本の肢で立ち上がり、新たな身体の動かし方をひとつひとつ確認する。駆けてみる。意識は人間だつたが、肉体は猫に順応しているらしく、イメージと運動に大きな齟齬はなかつた。むしろ人間だつた時より軽やかですらある。後は慣れだ。

「よし。だいたいわかつた」

爪を出し入れしながら、私は己を鼓舞する。

この境遇を嘆いてもはじまらない。

もはや私に絶望などない。それは妻が死んだあの日に置いてきた。研究は実を結び、彼女を蘇らせる日は近かつた。だからこそ、今、私はこんな目にも遭つてゐる。世の中を根底から変える。野末はそう言つた。その通りだ。私は私が属する世の中をえてでも、己の運命を変えてみせる。人間に戻り、妻を蘇らせ、家族と共に暮らす、その日まで立ち止まらない。

そう決めていた。

それは私が猫になつてしまおうと変わらない。

人間として記憶する最後の日付から半年が過ぎた。

季節は冬から春が過ぎ、夏になつていた。

月に一度しか連絡船も来ない離島に捨てられていた私は、人間社会と猫社会の狭間を漂い、やつとの思いで自宅のある懐かしい街、木乃市に帰り着いた。苦難の旅路についてはまったく思い出したくもない。人間の心を持つが故に、エサを惠んでもらう状況への抵抗感、心ない人間からの虐待的愛玩で受けた屈辱、珍奇な猫社会との

軋轢や迫害、何度「ただの猫になつていれば良かつた」と弱気になつたかわからない。

それでも諦めずに帰つて来ることができたのは、家で帰りを待つている息子・勇希を思えばことである。妻が残してくれたかけがえのない私の宝だった。寂しい思いをさせたに違ひない。それを考えると猫の心臓も痛む。

だが、人間に戻らないことには合わせる顔がなかつた。

いくら人語も操れるとは言え、見知らぬ黒猫に「父だ」と告げられても勇希は困惑するだけだろう。わかっている。けれども、人間に戻るために亮平との対決は避けられず、最悪、今度こそ殺されてしまう可能性もないとは言えない。それならば顔だけでも見ておきたいのが親心というものだ。妻に似て明るく朗らかな子だ。失踪状態の父を思つて落胆の日々を送つているのやもしない。出来うるならば「心配はいらない」というメッセージを残したい。

あるいはそれが最後になるとしても。

それに今日は、勇希の十一歳の誕生日もある。

なにかプレゼントを、と探し回つた四葉のクローバーの束を咥えて、私は半年振りの我が家を見上げる。猫の身体が刻む正確な体内時計は夜の零時を回つた。二階にある息子の部屋はまだ明かりが灯つていたが、生活面での世話をしてくれている私の母は眠つたようだ。

行こう。

私はブロック塀へ飛び上がり、一階のルーフバルコニーへ飛び移つて二階のベランダへ駆け上がる。部屋のカーテンは閉じられていたが、窓は網戸になつていた。これならば中に入つて息子の顔を見ることができる。猫の身体には辛い夏だが、今日ばかりは感謝しかない。

しかし、こんなに夜遅くまで勇希はなにをしているのだろう?

小学生の息子には夜十時には寝るよつこ、と口を酸っぱくして言つてきた。

私の失踪状態が生活サイクルに影響を与えてしまっているのだろうか？不安からくる不眠。ありえないとは言えない。幼くして母を亡くしている勇希にとつて見れば、さうに父もという想像は大きなストレスになっているだろう。

私が不甲斐ないばかりに。

「これではいけない」

私は口の中でつぶやいた。

感慨に浸っている場合ではなかった。一刻も早く人間に戻らなければ。

力を貸してくれ、勇希。

最後などと弱気になる己の心をねじ伏せるように意を決し、私は網戸を静かに細く開けて頭を突っ込み、猫としてのしなやかな身のこなしでカーテンの外側へ、夜風にそよぐカーテンの隙間を肉球による無音ウォークで内側へと入っていく。たとえ見つかったとしても、息子は猫が好きだったからどうということもない。私にしては大胆な判断だった。

しかし、それが仇になつた。

「あ、猫だ」

鏡の前に立つ勇希は即座に私を見つけた。

「…………」

猫らしく鳴くことも忘れて、私は口を開けたまま硬直した。

これはなんだ？

「近所じゃ見かけないヤツだなー」

そう言う勇希は女装していた。

猫の視点から見ればパンツが見えるのと同義と言つべき短い丈のタイトなデニムのスカートを履き、上はキャミソール、半年でそれほど髪が伸びるとは思えないので、黒髪の長髪はウイッグなのだろうか。しかしながらより問題なのはその見えるパンツが明らかに文物であることだった。子供用ではない。見覚えがある。妻のものであるような気がする。

なんだこれは？

「ぶつさいくな顔。毛並みもきつたねーの」

「そう言いながらも、田の前でしゃがむと私の頭を撫で、顎の下をくすぐつた。

「ノラだよなー、バアちゃんが猫アレルギーじゃなきやなー」
さらに背中から腹へ遠慮の欠片もなくわしゃわしゃと毛をかきわける。

「……」

田の前に見てはつきりと確認する。「これは妻の下着だ。

私に似ず、美人だった妻に似て女顔で、最近の流行としても美少年の類だと評判の息子には似合っているとさえ言えたが、父親としては信じがたい光景であった。うつすらと化粧もしている。街で見かけたら間違いなく勇希ではないどこかの女の子と思つたに違いない。我慢ができなかつた。

「なにをしているんだ、勇希」

「……？ 今、喋つたのおまえ？」

勇希は、長い睫毛をカールさせて一層ぱっちりとした田を何度もまばたきした。

私自身もはじめて鏡で人語を喋る口を見たときは驚いたものだが、人の言葉を話そうとするとき、私の口は猫の口にあるまじき奇妙な運動を見せる。

「私だ」

もはや私に誤魔化すつもりはなかつた。

「うそだろ？ 猫がしゃべつた？」

「そうだ」

「……すっげー。マジかよ」

勇希は子供っぽく「ククク」と何度も頷いて私の口を引っ張つて広げた。

「やっぱくねー？ ……って？」「こいつ、わつか、おれの名前？」

「この声に聞き覚えはないか？」

「」の際なので、私は「」で確認しに「」かつたことを尋ねてみる」と
にした。

私自身では私の声が人間のときのままなのかどうなのかよくわからなかつたのだ。

「……え？ もつかい、なんか言つて」

勇希はウイッグをかきあげ、耳を出すと指を立てた。

「なぜ女装をしているんだ、勇希」

私は、ゆつくりはつきつと発音した。

「もつかい」

今度は田も瞑つた。

「勇希」

「……もしかして、父さん？」

パツと田を開け、勇希はまじまじと私の顔を見た。

「わかつたか」

「うつそ、なんで猫になつてんの？」

「話せば長くなるのだが……」

もうすべてを語るしかない。そう思つたのだが、

「じゃ、いい」

私が語り出そつとするのを遮つて、勇希は興味を失つたように立ち上がる。

「……いい、つて勇希」

あまりに気紛れな物言いで、私は取り残されたよつに動けなくなる。

「声が似てたつて、父さんなわけないや」

「……それは」

合理的判断ではあつた。

少なくとも我々の研究を知らなければ、そつとしか言えない状況である。息子は立派に科学的思考をしている。だが、それではこうして私が私であることを明かした意味がない。

「しかし、喋る猫は珍しくないか？」

「」

興味を引こうと私は言った。

「前、テレビで見たことある。おはようとかおかえりとか言つやつ」「それは、そう聞こえる鳴き声だらう、意思疎通とは……」

「どーでもいい」

自分がスカートを履いていることなどお構いなしに胡坐をかくと、勇希はそう言い、つまらなそうにケータイを弄りはじめた。生意気にもスマートフォンだ。

「……そんなの買つてやつたつけか？」

確かに最小限の電話とメール機能のみのものを貰えていたはずだった。

「誕生日プレゼント、バアちゃん買つてくれた

「そうか」

まったく、デジタルに疎い母はすぐに欲しがるものを探してしまった。子供にここまでハイテクはきちんと使い方を教えてやらなければむしろ毒だらう。いや、いかん。これでは仕事にかまけてたまに家に帰つても子供に相手をしてもらえない父親そのものだ。

「私も勇希に誕生日プレゼントがある

私は気持ちを立て直し、さきほど驚きのあまり床に落としてしまった四葉のクローバーの束を咥えて息子の膝の上に置く。二十本もの四葉は探すのに難儀した。

「……へー」

勇希はそれを摘み上げると躊躇うことなく「ミミ箱に入れた。

「おー、それは少し」

「ありがとう。気持ちほうれしい。でもあれ、そういうのって信じてない。草だよ」

「……草」

確かにその通りではある。スマホという現実の利器に対して四葉のクローバーは無力であった。なにより猫になってしまった私が無力ということだが。

「あのや、父さん?」

勇希はぽつりと言つた。

「おれは、信じないんだ。幽靈とかそういうのって。そりや、死んじやつて心残りがあつて猫に化けて出てきたんだとしても、父さんの自由だけど、心配いらないから。母さんと向こうで楽しく暮らしなよ。おれ、ちゃんとやつてくから」

そう言つた勇希のタッチパネルに触れる指先はまったく動いていなかつた。

フローリングの床にぽたりと涙が落ちる。

「……勇希」

息子が立派に育つてゐる。一瞬、私は感動しかけた。

が。

「いや、ちょっと待て、私は死んでいるのか？」

「え？」

勇希は掌で目を擦つてこちらを向いた。

「死体はでていなはずだろ？」「

「あつたよ？ 葬式して、焼いて、骨を拾つた」

勇希は箸をもつジェスチャーをした。

「しまつた。そういうことか」

私は己が大変なことを失念していたことに気が付いた。私に施された猫化は『変異』であると理解していたのだが『転位』であつたのだ。どこかの猫と肉体を入れ替えられた。だからこそ人間としての意識が残つたのだ。冷静なつもりがまるで頭が回つていなかつた。そして私の肉体はこの世から失われた。

「どういうこと？」

「……人間に戻れない」

私は愕然として床に倒れると、腹を天井に向けて脱力した。

なんたることだ。肉体と魂の物理的遮断。亮平はおそらくこれを見越して、私を猫に『転位』したのだろう。これでは私が元に戻ることは死者の蘇生より困難な状態と言える。

少なくとも猫の身体のままではどうにもならない。

「おーい？ 父さん？ 意味わかんないよー？」

勇希は私の腹を撫でながら囁く。

その女装してすっかり少女にしか見えない息子を眺めている内に、私の脳裏にはおそるべき計画が組み立てられようとしていた。それは研究者にとって、直感が理屈の先に立つ恍惚の瞬間、抗い難い発見の予兆そのものであった。亮平が私を完璧に始末したのだと安心しているのならば、やってやれないことはないはずだ。

父親としての理性は己の子供を巻き込むべきではないと告げている。

「勇希、母さんを蘇らせることができるとしたら、どうする？」

だが、私はその言葉を口にした。

父親失格の瞬間だった。しかし、このまま人間に戻れないとすれば、どちらにしても猫であり、父親になど戻れるはずもない。家族で暮らす日がやつてくることは永遠にない。

ならば、私はあえて獅子の心で息子を千尋の谷に突き落とそう。

「へ？ よみがえらせる？」

勇希は可愛らしき少女のような仕草で首を傾げた。

「そうだ」

「生き返るってこと？」

「その通り」

私は起き上がり、尻尾を立てて強く頷いた。

「勇希が協力してくれるなら、可能だ」

「……父さんも生き返る？」

「もともと死んではない。だが、人間に戻ることもできる」

だらり。

「なり、やるよ、おれ。どうすればいい？」

勇希の目に光が宿っていた。

最後にこんな目を見たのはいつのことだつただらり。あるいは一度も見たことなどなかつたのかもしれない。母の不在、家を空けがちな私、親の愛に飢えていることは想像に難くなかったというのに、

私はそんな息子の気持ちを考えてやつたことがあつただらうか。

酷いことをしている。

手を汚すのは己だけのつもりだつた。

だが、もはや後戻りはできない。

「綿密な準備が必要だ。だが、その前にひとつ、確認しておきたい

」

妻の蘇生、私にとつてそれが唯一生きる希望であった。

ならば勇希にとつてもそれが生きる希望にならうはずだ。親のエゴを押し付けていると言われようとも、親が子供にしてやれることは、子供にも伝わるよう^Hに愛情を表現することだけだ。そこには一貫論としての正しさが入り込む余地などない。

「 その女装は、どういう意味だ」

私は、一連の出来事とは別個で気になつていた問題に踏み込む。これから協力していく上で、理解を共有しなければならぬことだつた。

「 どういふ意味つて?」

私の質問の意味が伝わつていなこらしへ、勇希は繰り返した。

「つまり、だな。その。なんと言つたらいいか…… 勇希は女になりたいのか?」

父親としては複雑だが、科学的に言えば、肉体と精神の性がバラバラになつてしまつとこうことは起こつたりむことだった。きちんと気持ちを聞いておかなければならぬ。

「あー、これ? ちがうよ」

あつけらかんとした口調で勇希は答えた。

「違う?」

「ちがう。おれは女になりたくない、ぜんぜん」

そう言つて、息子は手に持つていたケータイを置くと、立ち上がつた。

「 なればなぜそんな……」

「なぜって、オナニーするとモーフンするから」

「……」

私は一の句が継げなかつた。

見上げる目の前で勇希はスカートの前をめくりあげ、自らのパンツに手を突っ込んでずらそうとする。実際のところ、最初にそれを目にした瞬間から薄々気付いてはいたのだが、息子の息子はずつと興奮状態にあつた。それは、つまり、性的嗜好としての女装癖。

「猫パンチ！」

私は反射的に飛び上がって全身をねじのようにひねりながら伸び上がり、勇希の顔面に肉球を叩き込んでいた。半年間、猫社会で鍛え上げたパンチ力は伊達ではない。

「あいたつ」

「爪を立てなかつたことに感謝するんだな！」

全体重を叩き込まれて床にへたり込んだ勇希に向かつて私は言い放つ。

「……見せろひてことじやなくて？」

「私がいつそんなことを言つた？」

息子が女装して自慰に及ぶさまを見たいなどといつ父親はいない。「どういう意味つて言つから……」

勇希は唇を尖らせてスカートの裾を元に戻す。

私は深く溜息を吐いた。

「すること自体が悪いとは言わない。自分で処理することがわかつてくる年頃でもある」「

最大限の譲歩をしながら私ははつきりと言つ。

今、教育しなければ息子の性は明後日の方向へ突っ走つてしまう。「とは言え、十一歳でそれは趣味が過ぎる。どうしてそんなことになる。なにがきっかけでそうなる。父さんの言つていることはおかしいか？ 勇希にもわかるだろう？ こと性に関して普通という概念ほどアテにならないものもないが、しかし、普通ではない

「……」

胡坐をかいた膝に頬杖をつき、勇希はむくれつ面で話を聞いてい

る。

「父さんはわかんないよ
そう呟いた。

「なにがだ」

「……」

勇希は答えない。

「言わなければ永久にわからない。勇希、不便ではあるが、人間は言葉で意思疎通を図らないことにはなかなか互いの気持ちを理解しあうことができる。言ってほしい。すぐに理解できると安請け合ひはないが、私もわかりあうために努力を惜しまない」

「父さんは猫だろ」

「人と猫ともだ」

私の熱意が伝わったのかどうかはわからない。

田の前にいるのが黒猫であるということが、息子が父親に対して自らの性的嗜好について告白することへのハードルを下げていたのは事実だろう。しかし、それでも勇希はきちんと正座し、私と向き合つた。親子の関係にこれは大きな一步と言えた。

「怒らないで聞いてくれる?」

「ああ、もちろんだ」

私も可能な限り背筋を伸ばし、猫として凛々しく座り直す。
気持ちを落ち着けるためか、勇希は深呼吸する。

静かな間があつた。部屋の中をそよいでいた風が止む。

そして息子が口にしたのは、私の予想もしない一言だった。

「おれ、モテすぎるみたいなんだ」

「……なに?」

「なんていうか、クラスの女子とか、女の先生とか、中学生とか高校生とか、父さんの大学にいる女人の人とか、街で出会う人とか、みんな、おれを見ると目の色が変わるんだよ」

「冗談を言っている口調ではなかつた。

勇希は真剣に言つている。だが、受け止める私の方が真剣になれ

なかつた。

「……」

白漫話か？

「気のせいとかじやなくて、本当なんだよ。女ってちょーこえーんだ。父さんは知らないかもしないけど、おれ、ずっとなんだよ。保育園とかのころから、すぐキスされたり、信じられないかもしないけど、学校でキスしてない女子の方が少ないくらいなんだ。気が悪くて保健室で寝てたらだれかがベッドに入つてくる。女の先生は口コツにおれをヒイキするし、それがわかつてるから男の友だちもできない。街をひとりで歩けば年上の人になンパされて、強引に連れまわされたり、ともかく色々、大変なんだ」

「それは、犯罪に巻き込まれたとか、そういう話なのか？」

「たぶん、ギリギリセーフぐらい」

勇希は首を振つた。

「ああ……」

つまりモテすぎる、と。

男の友だちができるないというのは確かに深刻ではある。好かれすぎて孤立している。そんな状況なのだろう。それは大変だ。大変なのだ。だが、真面目に気がしない。

おじさんはそんな少年時代を送りたかったですよ？

恵まれた容姿を持つ息子に對して小さな嫉妬心を抱いていることを悟られないように、猫として真面目な顔を作りながら、私は勇希と田線を合わせる。

「事情はわかつたと思う。それと女装の関係は？」

私は努めて平静に尋ねた。

勇希はコクリと頷いた。

「父さんの葬式のあとぐらいから、なんかそれがどんどんひどくなつてきて、女のカツコしてたら安全かもと思ったんだ。やつてみたら、それがうまくいって。休みの日とかは女のカツコがフツーになつてた。バアちゃんには秘密にしてたんだけど。で、それで……」

正座した膝の上で組んだ指を落ち着かなくさせながら、息子の田
が泳ぐ。

「それで？」

「息子に嫉妬しても仕方がない。私は仏の心で優しく先を促した。
「ふと、鏡、見てたら、おれって美人だなーって」

「……うん？」

「聞き間違いだろうか？」

「だつ、だから、女のカッコしたおれのことが好きになっちゃった
んだ！」

勇希は顔を真っ赤にして言った。それは美少女に告白されている
ようでもあつたが、実際は女装した息子であり、極めて歪んだ、あ
るいは真っ直ぐなナルシスト宣言であった。
「ここまでイつてしまふと矯正不可能かも知れない。

「話を整理しよう

なにか大きな勘違いをしているとも限らない。

「勇希は、女の格好をした自分を好きになり、鏡の中の自分を見る
ことでの性的興奮を得る、つまり女装しての自慰行為に及ぶようにな
つた」

「じいこうい？」

息子にこんなことを言わせているのが知れれば私も変態だらうか。

「オナニーのことだ」

「へー、じいこう……」

「間違いないか」

「うん！」

勇希はなにもかも白状してスッキリしたのか屈託のない笑顔で頷
いた。

その様子を見ると、私は逆に不安になる。

「本当に間違いないか？」

再確認した。

「ないよ」

自信を込めた表情で勇希はきつぱりと言った。

「勇希が好きなのは？」

「女のカッコしたおれ！」

私の息子はアホの子でした。

いや、ちょっと待て、それだと私がアホといつことになる。

1 私の息子はアホの子でした。（後書き）

お読みいただきありがとうございました。
ご意見、ご感想ありましたらよろしくお願いします。

1 聖木乃女子学院アニメ研究会（初夏）（前書き）

時事的なアニメネタしかありません。

1 聖木乃女子学院アニメ研究会（初夏）

聖木乃女子学院アニメ研究会。

会員数三人、部活動の要件を満たさないことから部費も部室もない彼女らの活動は図書室の片隅でひつそりとはじまる。こつこつと創作活動に勤しむ文芸研究会や、図書室を利用する一般生徒に迷惑をかけないよう会話は小声で行なわれる。

口火を切るのはいつもナツメだった。

「ゴールデンウィークも終わって、そろそろ2001年春アニメも1クール物は中盤に入つて、内容的な当たり外れがハッキリしてきたと思うつす」

会長なのだが、古臭い下つ端口調で言ひ。

校風的にこれまでなかつたアニメ研究会を立ち上げた張本人である。色黒の肌と、その快活さからスポーツ少女にしか見られないが、本人の運動能力は惨憺たる有様である。

「観るものは好き好きだと思うつすが、これだけは観とくべきみたいなの、いかがつすか？」

「春は数が多いから、どうしても全部は観れないものね」

図書室の本ではなく、自分で買つてきたマンガを読みながらヤタテが頷く。

ふんわりとウェーブのかかつた髪と、育ちの良さが外見からうかがえるこの女子高が理想とするおつとりとしたお嬢様なのだが、頭の先まで趣味はずつぶりである。

「でもイチオシつて言つなら、やつぱりタイバーかしら？ ベタと言われても」

「タイガー＆バーナーつす、そしてタイガー＆バーナーつす」

「スカイハイだ、ぜつと」

そう呟いてミズキはテーブルに広げた紙にさらさらと薄味の一枚目フェイスを描いていく。

ぴょんと伸びたアホ毛がトレーデマークの口りつ娘、たまたま名前が同じだったアニソンの帝王を崇拜して止まないが、当人の歌唱力に極めて難がある。

「スカイハイもいいけど、キャラクターとしてはやっぱりバーナビーよ」

マンガ本に指を挟んで机に閉じると、うつとりとした表情でヤタテは言う。

「主役ですから、そして主役ですから」

「ナツメぐどい、ぜつと」

「王子さまってきつとああいう感じなのよ。王族という家柄に生まれた宿命、自由を奪われた憂い。ヒーローという文脈に形が移つても、生まれもつた人助けの宿命と、表には出さない能力に対する憂い。流行らない古典的キャラクター造形と言われようとも輝いてるわ」

ヤタテは夢見る乙女になる。

その様子に、ナツメとミズキは顔を見合させて肩をすくめる。

「わたしの意見、変?」

二人の表情に気付いてヤタテは不安そうな顔をする。

「いや? ヤタテっちの意見は正しいと思つます」

「同感だ、ぜつと」

「それでやつぱりカップリングは……もーじもー」

「ああ、もう結構つすから」

ナツメは声が大きくなつてきたヤタテの口を塞いだ。

「ミズキつちはどうつすか?」

「断然。よんではますよ、アザゼルさん。だ、ぜつと」

ミズキは紙にさらさらとペンギンっぽいハエの絵を描いた。横にはチョコベビーも。

「らしいチョイスつすね。水島努監督のギャグアニメはテンポが良いです」

「ああ、ミズキちゃんは好きだものね。ああいう毒があるの。不思

議なんだけどギャグアニメってどれも声がいいよね。ヘタリアとか、再開した銀魂とかもそうだけど声の演出が上手いと思う。それでね、やっぱり新撰組が……もう」

「アニメ研究会にもさくちゃんみたいなメガネつ娘が欲しいです」ナツメは放しかけた手をヤタテの口に押し付けた。

「くふつ」

ミズキはそれ以上語らず、思い出し笑いをしながら悪魔のキャラクターを描いていく。

「悪魔のデザインいいですよね？」

「秀逸だ、ぜつと」

「憎たらしさとちょっととぼけた滑稽さが見事にマッチしてると思つす。自分としては、主人公のアザゼルが好きつすけど、ミズキつちはどうつすか？」

「岡田だ、ぜつと」

そう言いながらミズキはライオンの魂を持つ男の絵を描いた。

「岡田さんは悪魔じやなかつたと……声はアレつすけど」

「岡田トカゲ」

「ふはつ、それでナツメさんのイチオシは？」

硬直したナツメの手を外して、ヤタテが尋ねた。

「あ……自分は、戦国乙女／桃色パラドックス／がイチオシつすね」体勢を立て直してナツメは言つた。

「戦国乙女？」

「エンディングテーマしか覚えてない、ぜつと」

ナツメの顔を見て、二人は信じられないという風に顔を見合せ

る。

「お一方の言いたい」とはわかるつす。自分も1話の直後は完全になんらかのブームを外したと思つたつす。けど、2話、3話と観ていくうちに裏表のないヒテヨシちゃんが可愛くなつてくるんすよ」レガ。そうなつてくると、全員女性化ではなく、ポイントを押された武将キャラクター配置がわかつてきて、強いノブナガ、ノブナガが

好きだけど報われないミシヒデ、おとほけヨシモトに腹黒イエヤス、そして本当にをしでかすかわからないことほけたヒデヨシ、このいつ崩れるかわからない歴史ネタ百合ネタとしての微妙な緊張感と、ほどよいギャグが心地好くなつてくるんですよ」とうとうとナツメはまくしたてた。

「……そつかな？」

「ナツメの趣味は変わってる、ぜつと」

「奇しくも同時期にやつてるヘンザものも時代は近いんすナビ、どちらがどっちを打ち消しあうといつものでもなく、あちらの緊張感がある秀吉との対比もあって戦国乙女も両方とも味わい深いアニメになつちゃうつす。信頼のように強力なイメージの刷り込みもなく、家康のよひに落としどころが定まっているわけでもない、秀吉の面白さを再評価できる、お徳つす」

「……引かずる一人のことなどまるで気にせずナツメは喋る。

「こんなこと言つたら観なくなつてきたっす！ これからみんなで……」

「図書室は静かに」

その時、少し離れた席に座っていた、たつたひとりの文芸研究会がぴしゃりと言つた。

「……すみませんっす、以後氣をつけるつす」

「わたしたち、悪くないよね」

「ナツメが暴走した、ぜつと」

「申し訳ないっす」

そんなこんなでアニメ研究会は細々とつづいていく。

彼女らが少年と出合つのは、もう少し先の話だ。

「へうげものつて言え、急にオープニング変わったよね？」

「そうそう、なんだつたんすかね？ 秀吉が話の主役だったから特殊オープニングですか？」

「幾三の歌が楽しみだつたんだ、ぜつと」

「だから、静かに！」

1 聖木乃女子学院アニメ研究会（初夏）（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

2 子供でもセクハラはセクハラです。（前書き）

下、とこりが胸が出ます。

2 子供でもセクハラはセクハラです。

夏休みである。小学生のフットワークは軽い。

「じゃあ、今日、学院に行けばいいんだ」

予想通り、勇希は行くことを躊躇わなかつた。

「出かける準備するから、しばらく父さん外で時間つぶしてよ」
看護師を長年務め、定年後も在宅ヘルパーとして働きつづける私の母に代わって、掃除と洗濯をする勇希の姿は、私が人間だった頃から馴染んだ光景ではあったが、猫となつた今見ると、己の無力を痛感しないわけにはいかなかつた。実際、よくできた息子なのだ。勉強も運動も人並み以上にこなす。学校で問題を抱え、女装に逃避するほど追い込まれていたとは想像もしなかつた。自分の研究にかかりつきりで父親らしいことをあまりしてこなかつたことに強い后悔がある。

とは言え、息子のナルシズムに特効薬はなさそうだつた。

女装して女の外見を手に入れた自分自身を好きになつていて。正直に言つて私にはイメージできないが、感情としては完結しているように思える。学校側の問題を解決しようにも夏休みであり、その前に保護者である私が猫のままでは力にもなれない。しばらくは近くで様子を見ていくしかあるまい。あるいは女装した自分よりも好きになれる人間が現れれば問題は簡単に解決するのかもしれないが、真面目に思考しているつもりだつたが、気付くと私は日向でうとうとしていた。

猫の身体は昼間の行動に向かないのだ。人間時代には味わつたことのない眠気と常に戦うことになる。実際、家に帰つてくるのに半年もの月日を要した理由の半分はそれだつた。動物的勘というやつなのか、時間というものを肌で感じられるのだが、人間と同じ生活ができるようにはできていない。

「おまたせつ」

だが、勇希の声で頭を上げた私。じゅー気に眠気が飛ぶのを感じていた。

出会った頃の妻がいた。

「これでいい？ 学院の夏服つて」

「……」

「母さんの昔の写真をサンマークにウイッグをおさげにしてみたけど」「ああ、よく似てる」

長いふたつのおさげ、白いシャツに指定のリボン、プリーツの入ったチェックのスカート、黒いハイソックス、こちらも指定のローファー。少しサイズが大きい風であることを除けば、妻が女子高生だった頃の姿そのままだった。時間が巻き戻ったような気がして、私は口を開けたまま硬直し、そして鼻の奥にツンとした痛みを感じていた。泣きそうだった。

「父さん、泣いてるの？」

勇希は首を傾げる。その仕草も似ていた。

「いや、なんでもない」

私は頭を振った。一瞬、永遠に息子が女装していてもいいような気になっていたからだ。

身勝手な人間、もとい猫である。

「じゃ、行こ！ レッツ、魔法！」

「あまり大きな声で言うな、それに想像している魔法とは違う。魔界の生活技法、だからな」

てくてくと歩き出した息子を追いかけて、私も家の敷地を出る。

「鍵は閉めたか？」

「うん！」

歩き方だけは小学生男子のそれで勇希はご機嫌だった。

無理もないだろう。魔法が使えるようになると詭かしたのは私だ。魔界の生活技法、通称・魔法。それが我々の研究対象だった。過酷な環境に適応し、生き残るために編み出された技法は本来こちら側の世界では使えない。その魔法をこちらへ持ち出すための条件整

備が我々の課題であり、その目標は達成されつつあったのだ。

しかし、奪われた。

「でも父さん、なんで学院に行けば魔法がつかえるの？」

「穴がある」

私は答えた。

「あな？」

「魔界の穴だ」

そう。この世界と魔界を繋ぐ穴、すべてのはじまりがそこにある。

「それってどんなの？」

「普通の方法では見えないのだが……しつ、人が来た」

表で猫が会話しているのはまずい、私は勇希に注意を呼びかける。

「……」

口を閉じ、勇希は一度足を止めると、気持ち内股氣味にゆっくりと歩きはじめる。少なくとも口を開かなければ少年には見えない。髪型をおさげにしてしまったことで少しレトロではあるが、制服を着ている限りでは女子高生であることを疑わることはないだろう。

私は野良猫のふりをして身体を舐めながらその場に留まる。自転車に乗った少女が我々の脇をすり抜けていった。

「後は、打ち合わせたとおりに」

先に進んだ息子に追いつき私は叫ぶ。

「……あれ、クラスメイトだよ」

勇希は憂鬱な口調で言った。見るからに顔が青ざめている。

「それは……どういうクラスメイトだ」

「ストーカーなんだ」

「ストーカー？」

「……」

私の問いかけに勇希は答えなかつた。

「バスに乗つて行けばいいんだよね？」

「あ、ああ

「じゃ、行こう」

そう言つと駆け足で道を折れる。一刻も早くこの場から離れたいかのようだ。

「ストーカー……？」

好きな男子のとこに女子が行くことを指しているとすれば過剰反応だろう。

だが、結果としての息子を見れば必ずしも状況は私が想像しているほどのどかな話では済まないのかもしない。父親としては事情を確認したかつたが、しかし猫のままはどうにもならない。無力、だからこそ、それ以上は追及せずに後を追つた。

勇希は高校生としての料金を払い、私は迷い込んだ猫を装つてバスに乗車する。

何度やっても、ということだが、交通機関への便乗は緊張する。乗客の中に一人でも迷い込んだ猫を降ろしてやろうという優しい心根を持つた人間がいるぐらいなら抵抗もできるが、猫嫌いや猫アレルギーがいて彼らに配慮する場合は逃れようもない。

夏休みの午前中ということもあってバスの乗客はまばらだった。先に乗つた勇希は事前の打ち合わせ通り関係ないフリをしている。乗客のほとんどが私に気付いたが、ケータイのカメラを向けられる程度のことでの猫の無銭乗車を黙認してくれた。

聖木乃女子学院高等部までは一十分弱、よく知った道のりだつた。私がまだ高校生だった頃、同じく高校生だった妻と出会つたのがこの路線バスである。こうして利用するのは久々であり、窓の外に見える街の変化など、ある種の感慨を抱けるのだろうが、猫の視線から見えるのは人の足と薄汚れた足元の景色だけである。

出会わなければはじまらなかつた。

だが、出会つていなければ私はどうしていたのだろう。

私は女子学院前ひとつ手前の停留所でバスを下車して、学院へ向かう。下手に乗降を同タイミングにすると勇希が連れているのだと疑われかねない。単なるマナー違反ではあるが、あまり他人との余計

な接触を持つことは避けたい。息子の女装がバレるのもあまりよろしくはないだろ？。だが、降りてすぐ私は後悔した。夏の焼けたアスファルトは肉球に厳しい。

「…………」「やあ

猫の身体が悲鳴を上げる。

己の身体にまとわりつく毛皮を脱ぎ捨てたくなるような気分で、激しい照り返しの灼熱を歩いて行くと、バス停の日陰でアイスを舐めている妻に瓜二つの息子が見える。感情の整理がまるでつかなかつた。軽い殺意と、強い懐かしさ、相殺し合わない動搖で猫の小さな脳みそが溶けてしまったようになる。

「…………」「あ

勇希は私に気付くと食べかけのアイスを持ったまま私に駆け寄ってくる。

「…………食べる？」

しゃがみながら小声で言つた。猫の肉体を得てから味覚は役に立たない状態だが、食べたい気持ちはあった。しかし、よりにもよつてチョコレートアイスである。

「猫にチョコレートを食わせるな」

私も小声で答えた。

「いらない？」

「食べられない、下手をすると死ぬ」

「チョコレートで？」

「そうだ……と、あとひとつ、なんで今日も下着が女物なんだ」

見たくないのだが、猫の視点からは見えてしまう。

「だつてスカートめくれて男物とか変じやん

「変なのはおまえだ！」

苛立ちから思わず叫んで、勇希がハッと周囲を見回す。人の気配がないのはわかっていた。

いかん、頭ごなしに言えばいいというものではない。

いや、女物なのは百歩譲つていいとして、母さんのものを穿くの

は止せ」

用途的にも、いろんな意味で危ない。

「……わかつた、帰りに買つてく」

勇希は頷く。

「買うのか……」

「いづかいはまだあるから」

言いたいのはそういうことじやなかつた。

小学生の男子が抵抗なく文物の下着を買う状況がおかしい。常識が大きくずれていくのを感じる。男用のブラジャーなどもある時代になにを言つてもはじまらないのかもしけないが。

私の先導で学院の敷地内に入る。

夏休みと言えど学校には生徒たちの活気があつた。運動部が盛んな学校であるし、併設されている大学部の学生たちの出入りもある。人の出入りは多いし、普通に言えば見咎められる可能性は低い。問題があるとすれば、普通ではない生徒の存在だけだ。

「こんにちは」

「……」

すれ違う生徒に声をかけられ、勇希は、につこりと微笑んで会釈する。声で違和感を持たれないようにという私の指示だ。声質自体は声変わり前ということもあって女子に対応できるのだが、まだ演技力が伴っていない。

私は花壇へ潜り込んだり、木を引っかいたり、猫らしく気まぐれに移動し、勇希はそんな私を追つているように見えないよう立ち止まつたり、ベンチに座つたりしながら広い敷地の奥へと入つていく。警戒して警戒しすぎということはない。

私の目論見が当たつたとして、問題はそこから先の立ち回り方なのだ。

複数の校舎に取り囲まれる高等部の中庭はそこだけが植物園のようになつていて、校内の他の場所と違い、手入れがされていないのではないかというように生い茂る植物が人を寄せ付けない。蜂の羽

音、鳥の轟り、色とりどりの花々、夏の中庭は生命力に溢れていた。まつたく変わらない、あの時から。私の猫的感覚器官である鬚と眉が激しく反応する。

「もう喋つていいぞ勇希」

私は中庭に入つて少年らしい表情の緩みを堪えることができなくなつてゐる息子に呼びかけた。この場所には滅多に普通の生徒が入つてくることはない。

正確に言えば、入れないのだが。

「すつげー、なにここ。ジャングルみてー」

「魔界の穴だ」

私は緊張しながら中庭の中心へ足早に歩を進める。

「あな？ どこ？？」

勇希は私の後を追いかけながらキョロキョロと辺りを見回す。

「あれだ」

顎をしゃくりあげて、私はそれを見上げた。

「あれ？」

息子は見当違ひな空を見上げる。

「樹だよ、大きな桜の樹があるだろ？？」

「桜なんだ、あれ」

青々とした葉を茂らせる巨樹がそそり立つてゐる。かつて、その幹の内側に当たる空間に魔界の穴が開いていた。この中庭の植生が極端に激しいのも、樹齢百年に満たない桜の樹が古木のような佇まいを見せるのも、魔界から吹き出す魔力を含んだ風の所為である。私も、直接見たのは二度目なのだが。

「勇希、ペンドントを出してみろ」

「え？ うん」

息子はシャツの胸元から母の形見、鍵の飾りがついたペンドントを取り出す。

母の形見として仏壇に仕舞つておいたものを持ってこさせていた。

「光つてる……」

無色透明のクリスタル、だがその内側に小さな紫色の光が宿つていた。その光は私たちの目の前で徐々にその勢いを増し、一筋の光線となつて桜の樹へ。

「やはり」

反応している。私は呟いた。予想通りだ。

光のあたつた部分の幹が意志を持ったように動き、鍵穴が開かれる。

「勇希、それを差し込むんだ」

「……うん」

どこかぼんやりとした表情で息子は樹に近づいていく。そして私の鬚がそれを察知した。

「現れたか」

「待ちなさいっ！」

守護者だ。

ぐつしょりと汗をかいしたTシャツにショートパンツ、運動着姿の少女がそこにいた。中庭に強く降り注ぐ日差しが、光沢のあるブロンドのポニーtailに乱反射する。青い眼、日本人離れしたハツキリとした目鼻立ち、厚ぼったい唇、遠目にわかるスタイルの良さ。なるほど、海外から優秀な人間を引っ張ってきたというのは聞いていたが、外見的にも優秀だつた。

だが、遅い。

「勇希！」

駆け寄つてくる少女を視界の端に捉えながら、私は振り返つて叫ぶ。

「……」

「ぐりと頷く息子の手には、力を取り戻し、輝きを定着させた鍵が握られている。

よくやつた。

「猫がしゃべ……つて、あなた、それは」

「……」

振り返つて、勇希はにっこりと微笑んで会釈した。

「どうしたことなの？」この守護者は……」

守護者の少女は動搖していた。無理からぬことだ。これ以上の長居は無用だった。

「さあ、勇希、帰ろう、田代は達し……」

私がそう言いかけ見上げた時、息子は自分の胸に鍵の先端を押し込んでいた。

「おい！ 待て、ここで！」

「……はっ、はっ、はっ」

荒い息を吐きながら、そのまま勇希は鍵を突き立てるように押し込み、捻る。

開放された。

「……なっ！」

次の瞬間には少女の身体が宙に舞っていた。

勇希が立っていた場所にポトリとおさげのウイッグが落ち、少女が立っていた場所に拳を突き上げる息子がいる。そのままは冷ややかな光を湛えていた。

「気持ちいい……」

そう呟く勇希の姿に私はぞっとした。

「いきなり攻撃してくるなんて、ふざけないでよー。」

「……は」

不完全ながらも防いでいたらしく、体勢を立て直し叫んだ少女に向かつて、息子は躊躇うことなく飛び上がった。空気が震え、中庭を取り囲む校舎の窓がガタガタと音を立てる。巻き上がるような風が一瞬に吹き抜け、空中で息子と少女が組み合っている。

「どうじつつもりー、どこの守護者よー。」

「じゃま、するなよー！」

組み合つた手を器用に動かして、勇希は身体を捻ると少女の腹を両足で蹴り上げる。

それを読んでいたのか少女は、パツと手を放してかわす。

「男の子？ なんで？」

「勇希、止せ、戦う意味はないっ！」

「……」

私の声に息子はちらりとこちらを見たが、すぐに視線を外した。
「なんでもいいわ、仕掛けてきたことを後悔させてあげる！」

二人はほとんど同時に着地する。

その一瞬の後には勇希が校舎の一階、壁面に叩きつけられていた。少女が脚を振り上げていて、息子が脇腹を押さえていることから、蹴られたらしいと推測はできるが、目では追い切れない。私は動けなかつた。

丸く凹んだ壁から前のめりに生い茂った植物の影へ勇希が落ちる。
「そこの猫、逃げようとしたら殺すわ」

確かに殺氣を込めた瞳で少女が私を睨んでいた。

「……っ」

無論、息子を放置して逃げるつもりなどなかつたが、私の全身は恐怖に竦んだ。

「父さんを、いろすなよ」

植物を搔き分けて、勇希がよろよろと歩み出でくる。

「父さん？ この猫が？」

「……そうだ」

そう答えて、息子はスタンスを両足を踏ん張りながら少女を見据える。

まだやる気なのか。

「ふーん？ 複雑な家庭の事情があるみたいね」

少女は私と勇希を交互に見たが、応戦する構えは崩していない。勝ち目などない。不意打ちであつた初撃ですら防がれている。そもそも守護者とは戦うなときちゃんと説明はしていた。息子もそれは納得していたはずだ。力を手に入れて、小学生男子らしい好戦性が出たのかもしれないが、しかしここれまでの流れで息子自身にそれを補強するだけの爽快感はなかつたはずだ。少なくとも単純に力を

振るつてそれが通用する相手ではない。それがわからないほど勇希はアホの子ではないはずだ。

ならば、何故？

「そんな怖い顔したつて無駄。あなたも死にたくなかつたら止めなさい」

そう言いながら、まるで冥福でも祈るように目の前で十字を切る。黄金色に輝く光跡が中空に現れ、少女はそれを握りしめた。

守護者の剣だ。

「女に指図されたくなーつ！」

そう叫んで、少女の言葉を払いのけるよつに勇希は大きく腕を払つた。

横一文字に紫色の光跡、見様見真似だらうか、それを握りしめる。「女に…… そつか」

私はようやく理解する。

さつきの「気持ちいい」という咳きも、唐突に開花したかに見える好戦性も、すべては女性に対する屈折した感情に起因するものか。確かにそれは計算外だった。この場所のことを考えれば守護者になつている人間が九割方女性であるとわかつていたのだから、もつと慎重に気を配るべきだった。気付くのが遅すぎた。

「うああああああっ！」

先に踏み出したのは息子の方だった。

もちろん剣の心得などないから、力任せに振りかぶつてしまつすぐに突つ込む。

「なんにもわかつちゃいないわ、あなた」

少女はその場を動くこともなく剣の先でそれをいなして避けた。勢いそのままに勇希は反対側の校舎に激突した。

振り返つて少女は腰を少し落とし、構えた。アンガルド、フェンシングの構えだ。

「死にたがりにつける薬は、ない」

そう言うと、深く息を吐いた。

本気だ。

本当に殺されるかどうかはわからない、だがどちらにしても、魔界の穴があるこの場において、守護者の判断はすべてに優先する。仕掛けた以上、殺される可能性はある。なんにしても息子は無事ではすまない。止めなければならなかつた。

「動くな！」

踏み出しかけた私の肢は少女の声で硬直した。

「おおおおおおっ！」

ほぼ同時に、植物を薙ぎ払いながら、勇希が飛び出してくる。

「ちつ……」

舌打ちをしながら少女は輝く剣を突き出した。

二つの光が交錯して弾ける。

あまりの眩しさに私の猫の目ですら一瞬眩んだ。

ぶらりと垂れ下がつた息子の手から剣が零れ落ち、霧散した。中庭に敷かれたレンガに鮮血が飛び散っている。少女の剣が勇希の脇腹をかすめて止まっていた。制服が大きく裂け、そこが見る間に真っ赤に染まっていく。決着はついていた。

「甘いわ、あたしも」

悔しそうに少女は呟いた。

「……ほんとにね」

硬直していた私はその呟きにハッとする。

「は？」

電光石火の早業だつた。

勇希が少女のTシャツをまくり上げていた。俊敏な動きでブラジャーのフロントホックも外され、ぷるんと重力に逆らう丸みを帯びた乳房がまるびでる。私は自分の目を疑つた。すかさず息子が両手でその胸を鷲掴みにしてもみしだく。

「え？」

なにが起こつたのか少女にも即座に判断できないようだつた。

「ええ？」

「おっぱいがでかけりやいいと思つてんなんよー。」

血を流しながらも、そんなことは気にもならない様子で勇希は笑つた。

「……！」

彼女でなくともこんな状況で絶句しない方がおかしい。自分の胸と、それを握る息子の顔を交互に何度も見て、事態を飲み込んだようで、見る見る少女の顔が真っ赤になつていぐ。気温に汗が相まつてうつすらと湯気すら立つてゐるようであつた。

「ひひひひひ

心底、嬉しそうに勇希は笑つた。子供っぽい笑いだつた。見ているにつちも呆れるしかなかつた。父親の前でそういうことをするかね。

「い、このおつ

今度は手加減してないであろう少女が剣を振るつたが、先程のような鋭さはもはやなく、息子はパツと胸から手を放してかわし、そのまま私とウイッグを拾つた。

「やーい、おっぱいでつかい女

そのまま過ぎる罵倒をして、勇希はベロを出した。

「……あなた、こんなことしていいと思つてんの？」

剥き出しになつてしまつた胸を片手で押さえながら少女は抗議する。

「ぶーすー！」

もはや小学六年生としても幼稚すぎる捨て台詞を言つと、息子はそのまま中庭から逃げ出した。小脇に抱えられながら私は息子が無事であったことに安堵する。ともあれ勝てないと「い」とは理解してくれていたようではなによりではあつた。

だが、美人の胸を揉んでブスとなんて、将来必ず後悔するとおじさんは思つ。

「……くつそ、あの女、ほんとに刺すなんて、いつてーよ」

勇希は校舎の壁を駆け上がり、大きくジャンプして学院の敷地内

から飛び出す。

「大人だったらそんなもんじゃ済まないぞ」
説教したいことは色々あつたが、私はひとまずそつ忠告するに留めた。

「どういう意味？」

「……いや、ま、いいんだが」

子供でもセクハラはセクハラです。

その言葉はいいものを見せてもらつたので飲み込むことにした。

2 子供でもセクハラはセクハラです。（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

3 私の息子がソフトなプレイに巻き込まれていました。

勇希は一気に家まで飛んで帰るつもりだったようだが、いくつかの建物に飛び移ったところで肉体が鍵を排出した。予想していたことだが子供の身体では守護者の力を維持できる時間に限界がある。体感ではおよそ三十分と言つたところだろうか。

コツン、ヒコンクリートの上に落ちた鍵はそれでも静かに光を放つてゐる。

「…………はあ、はあ」

着地したマンションの屋上で息子は膝をつき、脇腹を押さえている。

「痛くないか?」

「はあ、こつてーよ、ちょーこつてー……さっきまでそーでもなかつたのに」

息子は半泣きで言つた。

守護者の鍵は魔力の源となる魔界の穴を使用者の体内に『転位』する。その上でクリスタルに刻まれた魔法情報で肉体を戦闘向きに『変異』させる。使用者の行動を制限しない程度に痛覚を弱めるのもその効果のひとつであった。

「戦うなどあれほど言つたのに、ほら傷口を見せてみろ」

私は切られた脇腹を検分する。衝突の勢いのせいしか多少派手に血は出ているが、表面が裂けた程度の傷であった。既に血も固まりはじめている。一応、医者には見せておきたいが。

「…………はあ、だつて、ペンダント見てたら、なんかコーフンしてきて」

「興奮?」

魔力が人間の感情に影響を与えるといつのは知つていたが、聞いたことのない事例だ。

「はあ……でもなんで、これ、胸にさしても痛くなかったんだろ?」

勇希はペンドントを拾い上げ、シャツの中に入れた。

「そのクリスタルは魔力を伝導するとき、こちらの世界と魔界の境界に存在するからだ」

そう説明してもわからないだろうが。

「……はあ？」

「勇希が使えば痛くないってことだ」

「そー……」

息子にはあえて説明していないことがある。

守護者の鍵が家にあつた理由、そして勇希がそれを使える理由。だが、それは知らなくてもいいことだ。妻さえ蘇るのなら過去の諍いなど子供には関係ないことであるべきで、私もこれを復讐のための戦いにするつもりはない。

「疲れたか？」

「うん……かなり」

勇希はコンクリの屋上に横にならうとしたが、熱かつたのか、這いするよつにして屋上の出入口のドア横にできた日陰へ移動する。南中間近の影は極めて小さかった。

「これも説明したことだが、肉体への負荷を考えると多用は禁物だ」頬ずりしかねない勢いでコンクリにへばりつく息子の顔の前に私も腰を落ち着けた。

「一日一回？」

「それでも多いぐらいだが……待て、誰か来る」

私の耳がドアの向こう側の音を拾つて勝手にそちらを向いた。

細く硬い足音、おそらくはヒールのある靴を履いている。守護者はそう簡単に持ち場を離れないし、あの少女の気配ならば髪が感じるだろうが。私は緊張する。

「女だ」

「え……やば」

勇希はあわててウイッグを頭に乗せた。すこしづれている。

「それより傷が不味い、事情を説明……」

屋上に隠れる場所は、この内側が階段の出入り口上にある給水タンクがあるだけだった。それもいまの息子の状態で梯子など登らせたくないが、他に遮蔽物はない。

「……勇希、上に

ガチャヤリ。

ドアのシリンドラーが回って、私は開きかけた口を閉じた。傷も不味いが、猫が喋っているのも同程度かそれ以上に不味い。なるようになるしかないのか。

ぼさぼさ頭の女だった

「う、あつつ」

ヒールのあるくたびれたサンダルで現れた女はそう呟いて目を細めて空を睨みつける。化粧つ氣のない顔は完全に寝起きであり、相当に着込まれて首回りが伸びきったTシャツに、ゆるゆるのスウェット、という組み合わせは男つ氣もないことを示している。年齢は二十代後半から三十代前半、間違いなく独身だらう。

「あ、いた」

女はこちらを見てぼさぼさの髪の毛を搔き上げた。

私は身震いする。この手の女性は気まぐれに猫を拾つて飼おうとする。エサをねだるには丁度いいのだが、一度ばんやりしていて捕まりかけたこともある。油断できない。

「夢か寝惚けて見間違えたのかと思つたけど、うちの生徒だ」

うちの生徒？

「によいよ不味い、その口ぶりは教師だ。

「いや、いやいや、飛んできたつてのは非常識だ、予知夢だつた？どう？」

「……」

脇腹を押さえ、脂汗をかきながらも息子は微笑もうとしている。律儀に私のアドバイスを守ろうとしてくれることは親として嬉しいもあるが、上手く誤魔化してくれないと大変なことになる。私は焦れる。怪我も不味い、女装も不味い、制服を着ているという状況

も不味い、飛んできたのを見られてるのも不味い、不味い不味い不味い。こういう時、猫でしかない自分の無力さは、限りない己への怒りへ転嫁する。

畜生！ 己の猫畜生たる身体が憎い。

「お腹が痛くて喋れない？」

「……」

笑顔のまま勇希は首を振った。が、声を出さないのでは一緒に。「見覚えのない顔なんだよな、こんな可愛い子忘れるかな……」ぶつぶつ呟いていた女は、はたと気づいて息子の腕をつかんだ。傷口を押さえたことで真っ赤な掌と、避けたシャツから覗く傷口は見えているだらう。言い逃れはできそうにない。

「血、だけど……あれ？ これ……なにがあつた？」

一気に目が覚めたようで、さつと屈んでシャツをめぐり上げ女は真剣に尋ねた。

「……」

強い視線に射すくめられ、勇希の表情も強張る。

「なんとか言つたら？」

「だ、だいじょうぶ、です」

シャツをつかむ女の手を血のついていない方の手でやんわりと退け、消え入りそうな声で息子は答えると、ようよると立ちあがった。最低限の演技はしようとしている。

私が小さく頷くと視線が合つた。逃げるといつことだらう。ベストではないがベターな選択であるように私にも思えた。

「大丈夫つて」

「しんぱい、いりません、から、つ」

痛みと疲労が祟つたのだろう、女の横を通り過ぎようとして勇希はよろめいた。

「ほら、大丈夫なんかじゃな……」

とつさに女がその上半身を受け止める。

「…………あれ？ やっぱり？」

「つ！」

自分を受け止めた女の腕から跳ねるように逃れた息子の姿を見て私も気付く。

触れられれば男だということがバレるのだ。

「君、もしかして」

「し、しつれい、しますっ」

そういうて小走りに逃げようとした息子だったが、それよりも早く女の手がウイッグのおさげを掴んでいた。ただ乗っていただけのカツラはふわりと頭から離れた。

「男の子だ」

「ち、ちが……」

ぶんぶんぶんと涙目で勇希は首を振った。そしてさらに振る。その涙が痛みからくるものなのか、バレたことによるものなのか私は区別できない。足が震えているのが見える。私が目撃した時と反応が違いすぎるような気がしたが、それは私が猫だったからなのだろうか？

「クリ」という生睡を飲み込む音が私の耳に、やけにはつきりと聞こえた。

なんだ？

私は女を見上げる。熱い場所のせいか、出てきた時より血色がよく見える。

「……わかった。もうなにも聞かないから、傷の手当だけさせて」女は中腰で息子と視線を合わせ、優しい声色でそう言つ。

「なにも？」

「そんな状態で街を歩いたら大変でしょ？」

「……うん」

「そう、それでいいから」

ポロリと目から涙を溢れさせて頷いた勇希の両肩に女は手を置いた。

なにかが不穏だった。

「そこの猫は、君の？」

「うん」

「じゃ、一緒におりで」

そう言つと、よろける息子の肩を抱いて屋上から出ていりつとす
る女を追つて、私も建物の中に入る。外と比べると中は一気にひん
やりとした空気が漂つていた。

胸騒ぎがする。

それがなにに起因しているのか私にはわからなかつた。息子の女
装がバレたことは問題だがなにか大事なことを見落としている。そ
れがなんなのか。

六階建てのマンション六階の八号室、女の部屋は角部屋にあつた。
部屋はある意味において予想通り片付いていなかつた。人間の度
合いだとそれほどでもないのかもしれないが、猫の鼻には十分に異
臭が漂つている。主に腐敗し始めた食材だろうか、ゴキブリの気
配もある。私は自分が少し空腹を感じていることに気付いた。
いかん、人としての意識が弱まつていて。

虫や鼠に本気で食欲を感じるという感覚は恐ろしい。狩猟の本能
とも結びついているらしくそれは時に極めて抗いがたい衝動として
やってきて、拒む私に耐えがたい飢えを引き起こす。人として越え
たくない一線がそこにあつた。残念ながら猫化して半年、一度以上
は越えてしまつた一線だが、しかし息子の目の前で父がそんなもの
を食つてゐるなどと。

「それじゃ、服を脱いで」

「え、あの……ここで？」

「そう。まずお風呂で汚れを洗つて、それから」

息子たちのやりとりが聞こえる。

薄汚れた洗濯物が山積みになつた脱衣場で女が勇希のシャツをめ
くりあげていた。恥ずかしそうにしている息子と、嬉々としている
女の表情、もどかしげにスカートのホックに手をかけている。傷口
を洗净して消毒をするには……私はハツとして気付いた。

鼠がいる！

空っぽの胃がよじれ、口の中いっぱいに唾液が分泌される。

全身の感覚が張りつめ、一瞬にして研ぎ澄まされる。動物的集中力。

私はそろそろと「ミ袋が並ぶ廊下を進み、生活感がむき出しになつているリビングに踏み出した。髪にピリピリとくる甘美な衝動、肉体に刷り込まれた狩りの快楽、人間だった頃には味わつたことのない本能が毛先まで行き渡り、それを探り出す。

一匹……。

迂闊なヤツだ。

積み上げられ崩れた雑誌の山、脱ぎ散らかされた服、干しつぱなしの洗濯物、割り箸が引っ掛けたままのカツプ麺、散乱する書類、その気配は移動していく。

人家に住む鼠が巣に戻ろうとするルートを先読みして、私はその気配に爪を立てた。

「んみやつ！」

「ちつ！」

転がっていたクッショングから綿が飛び出す。

僅かに残るフローリングの床に姿を現したそいつは丸々と肥えた大鼠であった。

「ちいー」

ミミズのような尻尾をピンと立てて、鼠は丸々と太った身体をさらに大きくして威嚇する。

「……にやあお」

そこからは乱戦であった。

小回りの聞く鼠と、障害物を弾き飛ばさねば室内を移動できない私、速度においては互角であった。だが、私はヤツの逃げ道を推測していた。人家において、脱出ルートをふさがれた鼠はまさに袋の鼠であり、この世に猫が鼠に敗北する道理はない。

ほどなく、私は部屋の隅に相手を追い込んだ。

あとは料理してやるだけだ。

「み、見逃しちゅあもられやせんか！」

鼠は髪をピリピリと動かし動物共通語の周波数で訴えた。

動物には種族固有の言語の他に、共通語と呼ばれる異種族との「ミコニケーション手段がある。そんなことを知ったのはもちろん猫になつてからだが、駆るものと駆られるものの間ににおいて、言語が通じることはある意味のないことであった。

弱肉強食の世界は極めてシビアである。

「見逃す理由がない」

鼠の味を想像しながら、私は冷酷に伝えた。

「わかつておりやす。あつしと鼠^{だんな}捕りは遭遇した時点で食つか食われるか、そいちゅが猫と鼠の理だつちゅーことはわかつておりやす」

「ならば私の糧となれ」

私は四肢のばねを溜め、トドメの一撃を繰り出そうとする。

「しかし、鼠捕りに捕らえられた鼠があつしだけでないとしたらどうしやす？」

「なに？」

「鼠捕りが連れてきた鼠、お連れさんの身に危険がせまつてやす」

「……勇希」

私はハツとした。

シャワーの音が急に耳に大きく響く。

「お気付きになつたようではやすね、この部屋の主、そいちゅが本当の鼠捕りあのアマは熟さぬ果実ならば男でも女でも食つちゅまつちゅー極悪非道雑食無頼の徒。食つか食われるか、人の世も空しさしないのでやす」

「なんということだ。」

私が本能にかまけて鼠を食らおうとしている間に、息子が食らわれようとしている。

『なんていうか、クラスの女子とか、女の先生とか、中学生とか高校生とか、父さんの大学にいる女人の人とか、街で出会う人とか、み

んな、おれを見ると目の色が変わるんだよ』

勇希が言つた言葉が脳裏を過ぎる。

胸騒ぎの正体。

非常事態であつた。『この場合、あの女が教師である』ことはなんの安全性の担保にもならない』とは世間に疎い私でもわかることだ。鼠を追いかけている間に息子の純潔がわやくちやにされてしまったなどとこうことになれば妻に合わせる顔がない。

慌てて浴室へ駆け戻ると、開け放たれたままの扉から湯気が立ち昇つてゐる。

「いたいたいたいたいたい、やめて、やめて、おばさん…」

全裸にされ、浴室の床に転がっている勇希は身を捩つて言つた。

「おばさん？　おねえさまと言ひなさい！」

脇腹めがけて熱いシャワーを当てる女も下着姿だった。

「お、おば、おねえさま、やめて、やめて、いたい、はずかしいよ！」

「恥ずかしい？　君は不思議なことを言ひ。自分で女装していた癖に、裸がなに？　さあ、ほら、傷口を洗う間に答えなさい！　どうしてうちの学校の制服を着ていたの？　『びい』から持つけ出したの？」

それを着てどうしたの？　答えなさい…」

「学院に、行つたんです、中に入りました！」

「入つただけじゃないでしょ？　なにをするつもつだつたの？　なにをしたの？　君が穿いていた下着はもしかして盗んだもの？　どうなの？　答えなさい…」

「パンツは、母さんの……」

「お母さん？　君、それはいけない。それはいけない！　倫理に悖る…」

「『じめんなさい！』『じめんなさい！』

「謝つても許さない、君の穢れを洗い流さなければ…」

「『じめんなさい！』『じめんなさい…』……」

「せりほら、傷口に黴菌が…」

私の息子がソフトなプレイに巻き込まれていました。

あまりの状況に私は一瞬立ち尽くしたが助けなければと周囲を見回す。

「あつしの申し上げた通りでやしょう、ああして洗つて食つちまうんでやす」

こいつだ。

バカ正直にも逃げていなかつた鼠を私は無言で洗面所脇の洗濯機に叩きつけた。あまりに理不尽な不意打ちだったからだろう、鼠は避けることもできず、バンとぶち当たつてキュウと伸びた。助言に免じて命だけは助けてやろう。

「おね、おねえさま、そこはやめて！」

「ほらほら、そんなことだから男の子にも女の子にもなれやしない！」

これ以上は不味い。

私は鼠の首の皮を咥えて女の足下へ飛び込む。

「と、父を……」「

「ね？……ねずみ？」

女の顔が恐怖に歪んだ。大概の女性はそうだらつ。

いける。

「なあ」

猫の鳴き声と人の呼びかけ、その中間的な発音で私は女の足めがけて鼠をぶつける。

「ちょ……つと、あつ」

それをかわそと足を持ち上げたところにすかさず私は転がつていた石鹼を滑らせた。下ろした足がそれを踏ん付け、女はあれもない体勢で仰向けに浴槽へひっくり返った。熱いシャワーがばしゃばしゃと壁と天井に反射して降り注ぐ。

「勇希、逃げるぞ！ 外へ出て、なにかで腹の傷口を塞げ、できれば消毒もしろ、それからこの女の服を適当に着ひし！ ペンダントを落とすなよ」

「え？ う、うん」

首にぶら下がった鍵を握りしめ、転がるように飛び出した息子を見送つて、私は女が転がる浴槽に飛び入る。女は仰向けに転がつたまま痙攣している。ペチペチと肉球で顔を叩くと反応はある。それほど心配はいらないだろうが、打ち所が悪いと困るかも知れない。出来る前に119番でもしておるべきだろうか。出っ放しのお湯もよろしくはないか。

そこまで心配してやる義理もないことではあるが。

カラソは猫の手でもどうにかなるタイプであつたのでお湯だけは止めると、私は浴槽の縁に立ち、しばし思案する。勇希の顔は覚えられてしまつただろうが、再び出会う確率は低い。ペンドントを田撃しながらも気付かなかつたことから言つて関係者でもないだろう。「だ、だんな、酷えでやすよ」

お湯を浴びて田覚めたのだろう。鼠もじちらもピクピクと身体を震わせて立ち上がろうとしていた。まつたくしぶとい生き物である。だからこそ美味しいのだろうか。

「命があつただけ幸運だろう？」

「……この恨みは、忘ねえでやすよ」

怒りに濁つた瞳をこちらに向け、鼠はさつと逃げていった。

「鼠風情が

この半年ですら食べた鼠の数など覚えていない。

「う、う……？」

女が薄田を開けた。

無事ならばいいだろ？ 仮に女が被害を訴えたとしても息子が不利になることもあるまい。鼠の言葉のすべてを信じる理由はないが、叩いて埃が出るようならなおのことだ。

「父さん、準備できたよ」

ウイッグを被つた勇希は白いブラウスにスースカートの装いで戻ってきた。女教師っぽい雰囲気になっている。この場面なのだからあえて女装してこなくても良かつたのだが、時間もないのでなに

も言つまご。

「腹の傷は」

「包帯とかどこにあるかわからんないからタオル巻いてる」

息子は言いながらブラウスを捲り上げる。

「その袋は？」

私は息子が片手にぶら下げているファストファッション店の袋を見た。

「母さんの制服が入つてる」

「そうか」

確かにそれは捨ててはいけない。

私たちは頷きあつと、『ミミの山をすり抜けて部屋を出る。もちろん勇希は痛みも疲労も抜けていない。だが、足元がおぼつかないながら、それでもこの場所から一刻も早く離れたいと言う気持ちのようで、顔を歪めても足を止めることはしなかつた。何度もうしろを振り返り、人通りの少ない裏通りを進んで、マンションが街並みの影に隠れて見えなくなるところまで来ると、緊張の糸が切れたのか、電信柱に手をついて地面に崩れ、荒い息を吐く。

「あのおばさん、なにも聞かないって言つたのに……」「は？」

「女はいつもそうだ、すぐウソつく」

あのシチュエーションを理解していなかつたのだろうか。

純真といふかアホの子というか。

「ひつじうこと、初めてつてわけではないのだらう?」

言葉を選びながら私は尋ねた。

「うん……」

「ならば、責任は勇希にもある、そう簡単に人を信じてはいけない。モテ過ぎるという自覚があるのなら尚更だ。自分の身は自分で守らなければ……」「だつて! 父さんが横にいたから……その、だいじょうぶだと思つて……」

徐々に声を小さくしながらも勇希は反論した。

「う……む」

私も口ごもつた。鼠を追いかけての危機だ、息子だけを攻め立てられはしない。

だが、父親として引き締めるべきところは引き締めなければなるまい。

「勇希、そつやつてすぐ人に頼つてはいけない。私は確かに父でもちろん勇希を守るために行動するが、見ての通り猫だ、人ですらない。出来ることにも限界がある。守護者の力を手に入れたからには、自分の身は自分で守る覚悟が肝要だ」

「己の無力を棚に上げた我田引水な論法であつたが、ここで父の威厳を保たなければ。

「それに勇希は女性にそういう田に合つことを嫌がつてゐるようだが、さつきの学院でのことを思い出せ、あの金髪の守護者に対してやつたことはどうだ？ 自分にやられて嫌なことを人にやるのは一層よくない。わかるだろ？ これはある意味因果応報の出来事だったのだ。あの場はあれで助かつたとは言え、ああいうことは一度としてはいけない。わかるか？」

喋りながらふと氣付くと田の前に息子はいなかつた。

「勇希？」

私は周囲を見回す。

息子はすぐ田の前の店のショウウイングドウを覗き込んでいた。私の視線に気付いたのか振り返ると、笑顔でコクコクと頷き、店の中に入つていく。

「ああ、帰りに買つて言つてたな……つて」

ランジェリーショップだつた。

男子として躊躇なくそういう店に入るのがどうかとか、さつきまでへたばつていただろうとか、そういう問題はこの際どうでも良かつた。言いたいことはひとつだけだ。

「説教を聽け、よ」

父の威厳などランジエリー一枚の重みもないのかもしれない。
私はアスファルトにぐつたりとのびた。

3 私の息子がソフトなプレイに巻き込まれていました。（後書き）

お読みいただきありがとうございました。（後書き）

4 私の息子に舌が入っています。

これからのことを考えなければならぬ。

いくつか想定外の事態は起こつたものの、準備の第一段階、勇希に守護者の力を持たせることには成功した。危険な領域に息子を巻き込むことについて良心の呵責がないではないが、それが妻の資質を受け継いでいるものである以上、いづれは通る道であると理解すべきだらう。私が私の目的を達したときには世の中が変わつてしまふのだ。

なにより勇希が魔法を得たことで、私はより動きやすくなつた。少なくとも魔法を使えない者に対しても圧倒的優位に立つことになる。その点ではむしろ息子は安全になつたと言えるだろう。猫の身体ではどこまでやれるか不確定だった要素もおよそクリアされ、奪われた研究を取り戻すこともそう難しくはなくない、はずだ。

亮平が単独で私を裏切つたのであれば、

問題はあの男の裏切りに別の要因があつた場合だ。

研究成果を独占したくなつて私を陥れた、と言つ推論にそれほど違和感はない。私たちの魔法研究は極秘裏に進められていたことも間違いないはずだ。魔法はもともと世界の一部の人間によつて独占的に管理されたものであり、それが世界の大きな秩序であった。だから、もし研究の存在が外部に漏れたとすれば、亮平の裏切りを待つまでもなく、私たちは闇から闇へ葬られていたはずだ。とすれば、ありうる要因は外部ではなく、内部。

極秘の研究と言えども予算はある。亮平のバックに私たちに資金を出した人物がいるとすれば、話は非常にキナ臭くややこしいことになつてくる。これを猫の身体で前もつて調べるのは容易ではない。なにせ相手は私が猫になつていることを知つてゐる可能性がある。この場合、息子もかなりの危険を抱え込むことになるだらう。それは断じて避けなければならない。

まさかあの人があの私を裏切るとは思えないのだが。

バスを降りて自宅へ向かう道を歩きながら、私はこの半年間絶えず繰り返してきた自問自答から抜け出せなくなっていた。もし、私に對して行なわれたことが、親友の単なる裏切りで済まないのだとしたら、という可能性の検証。それは、ただ最悪を想定する研究者としての基本的な思考パターンに過ぎないのだが、心許ない猫の身体になってしまった己には妙なリアリティが感じられて堪えるのである。

「……んにやつ」

そんな考え「」とをしていたせいで、立ち止まつた息子の足に鼻をぶつけた。

「どうし……た？」

見上げた私は、勇希の目が一点を見つめて動かないことに気付く。自宅の玄関前に止められた一台の自転車、後輪の泥除けに「如月舞」と書かれている。どこかで見覚えがあるなと思い、それが今朝家を出た直後に見た息子曰く「ストーカー」のものであることを思い出すのにさほど時間はかからなかつた。

家に上がつているのか？

「バアちゃん、またー……？」

勇希は咳いてしゃがみこむと脱いだ制服を入れた袋に手を突っ込んでケータイを取り出す。メールをチェックしているようだつた。本日付の未読が溜まつていて「如月 舞」の名前がずらずらと並んでいる。時間は朝から……五分間隔？

「……すごいな」

そう言ひしかなかつた。

「……」

それには答えず、息子はそのメールを内容も読まずにすべて削除する。

「外面良くなつて、バアちゃんに取り入つて、勝手に家にあがんだよ、約束してたーとか」

「なるほど」

時刻は十一時を回りつつしている。仕事を一端抜けて、孫の昼食を作りに戻ってきた母が認めれば確かに家には上がれる。だが、三時間近く待っていたというのだろうか。

「しかし、メールアドレスは？」

普通に考えればそれを教えた時点では友好的関係であったのではないだろうか。

「盗まれたんだ」

勇希はうんざりした表情で吐き捨てた

「学校で、体育の授業中に。見学とか言ってわざわざ来る女なんだよ」

「そうか……」

女性不信が鬱積している。

「あー、めんどくせー」

そう言つと勇希は体勢を低くして、家の周囲を回つてリビングの窓に向かつ。どうやらその女子が家のどの部屋にいるのかを確認してこるようだつた。確かに、女装していることがバレないように帰宅する必要があるのであらう。

「バアちゃんと話してた。父さん、先行つて、一階のベランダで待つてくれる?」

「ああ、わかった」

勇希は玄関からこいつそりと入ることに決めたようだ。

リビングに母とその少女がいるのならば、玄関すぐの階段を上つて、自室へ向かつことが可能だつた。これでは息子も自分の家に入るのでまるきり泥棒のような振る舞いだが、こればかりは致し方ない。私は頷いて昨晩入つたのと同じルートへ向かつ。ベランダに到着してしばらくして、窓が開いた。

「暁」はんはこれで、我慢して

バス停前のコンビニで買ったネコ缶を開けて床に置くと勇希は言った。

「悪いな」

我慢などとんでもない、文化的な猫生活である。味覚的にもつまうまだ。

田の前で勇希は素早く着替える。

それから、本棚から一冊の辞典を取り出し、そこから一本の古びた鍵を取り出すと、音を立てないようにゆっくりとクローゼットを開けた。買ったものと脱いだもの、そしてウイッグをまとめてクローゼットの中の鍵つきの大きな宝箱に放り込む。かつて、息子が幼かつたころにちょっと洒落たオモチャ箱として買ってやったものが、こうして禁断の趣味の秘密保持に役立つては親としては複雑な心境である。

「腹の傷は大丈夫か？」

まぐろ味を咀嚼しながら私は小声で言つた。

「……もう血は止まつたみたいだ」

血が固まつていて、巻いていたタオルをはがすときに少し顔を歪めた息子だったが、そこに滲んだ血はそれほど多くなかつた。そのタオルも箱に放り込んで、中にある化粧落としのシートで「じじ」と顔を拭く。女装とは実に大変なことだ。

「ふきのこしないな、よし」

勉強机の引き出しから鏡を取り出し、自分の顔を確認してはいる。そしてすべてを箱に詰め込んで、鍵をかけて元通りにする。

これで母がいない間に洗濯・乾燥を行い、服のシワには自らアイロンをかけ、と面倒な手順を厭わずに自己管理で女装をつづけてきたと言つ息子の努力には頭が下がるが、その情熱をどこか別のところに向けるべきだらうとも思つ。とりあえずは褒めるべきだらうが。

一連の手順は十分足らずで行なわれた。

「…………たつだいまー、バアちゃん、腹へつたー！」

静かに玄関まで戻り、勇希が帰宅をやり直す声が聞こえた。

私はネコ缶を隅々まで舐めると、毛繕いもそこにして床に丸まつた。

これからのことを考えるのは後回しでいい。今日の目的は達した。
猫は寝子。これは生態なのだから。

だが、一時間もしない内に、私の安眠は阻害された。

「だから、うつぜーよ、あっちーよ、帰れよ」

「ひどい、舞、ずーっとまつてたのに！ メール何度もしたのに！」

バタバタと階段を上がってくる足音は一いつ、

私はそれとなく部屋の隅に移動する。

「それがうつぜーって」

「そうじやないと夏休みに会えないんだもん！」

「あいたくねーから！」

部屋の扉が開かれ、息子が空ろな表情で現れ、まとわりついている少女を振りほどいて自分だけ椅子に座る。邪険に扱われているのがわからないわけがないと思うのだが、少女はそれでもひるまずひとつ椅子と一緒に腰掛けようとしていた。

彼女が勇希の言つ「ストーカー」なのだろう。如月舞。

通りすがりで記憶に残るようなパーツはないが、クリつとした目をしていて、賢そうな顔立ちをしている。気の強そうな柴犬つて感じだろうか、年を取つてくると子供の顔の見分けが曖昧になつてくる気がするのだが一般的に可愛い子であるように思える。

「勇希くんのイジワル」

舞は息子の拒絶的態度はまったく氣にならないようだ、どんどん身体を密着させていく。

「イジワルで言つてねーよ、ホンネだ！」

「ううん、舞、わかるから」

ぴつたりと身体を寄せると、思い切つたかのように勇希の身体を跨ぎ、正面から向かい合つ体勢になる。私の脳裏を不適切な単語が駆け抜けたが、要するに馬乗りといつやつだ。近頃の小学生はなんと大胆なのだわつ。

おじさんか子供の頃は手を繋ぐぐらいでいっぱいぱいでしたが。

と、それも見栄つ張りな発言で、私の小学生時代、そして中学生時代、さらには高校生時代まで進んでもそんな出来事はありませんでした。ごめんなさい。この二十年の間になにかが起こってしまったのか、それとも私の息子が異常なのか。ごめんなさい。

死にたくなつてきている。

冷静に言えば大学の一時期、結婚後の一年と少し、私の人生に華があつたのはたつたそれだけの期間しかない。妻がいてくれた期間それだけ、妻が死んで十年余り、もちろん一途に想つてきました。そこに嘘偽りは一片もない。しかし、この親にして勇希の人生の華やかさはどうなんだ。私がはじめておっぱいを揉んだのはいつ？ 大学三年のとき。それをこの息子は十一歳で成し遂げている。これは敗北感？ 泣いているのは私？

いかん、完全に僻み根性と独り身の寂しさが出てしまつていてる。

「わかつてねーよ……」

私は勇希の眩きで目を覚ました。

そうだ。息子は女装した自分が好きというナルシストで、好きでもない女の子に迫られまくつて辟易しているつて羨ましい人生だなこの野郎、ではない。父親が息子を妬んでどうするというのだ。落ち着け、私には妻がいる、妻がいる、妻がいる。妻が。

その妻がいないからこんな目に合つてているのだ、畜生め！

笑子！

「わかるよ、すぐに」

「な……んぐ」

舞の唇が開きかけた勇希の口に覆いかぶさつた。

私の息子に舌が入つています。

一瞬、見開かれた勇希の目が私を捉えた。涙が溜まつていてる。好きでもない相手にキスされればそうなるかもしね。だが、私もわかる、そうしている内に好きになることもある。それは悪いこ

とではない。人の心は弱く、脆い。荒療治かも知れないが、あるいは舞が、息子を心の袋小路から引き上げてくれるのかかもしれない。

大人になれ、勇希。

私は、あるいは子供のままだったのかもしれない。死んだ人間を蘇らせようとして、親友に裏切られ、恩人を疑つて、息子を妬んで、大人になるどころか猫になつていてる。

『でもな、お前が迂闊なんだぜ？ 周りが見えてなかつた』

人として聞いた最後の言葉。

『この研究がこの世の中を根底から変えちまつてことがわかつていながら、注意を怠つた』

記憶が耳鳴りのように頭の中を反響する。

これは私の弱い心だ。

「やめろよ！」

勇希は舞を突き飛ばした。

「あ、つと」

だが舞はそれを予想していたかのようにかわして自分で飛び降りる。結果的にバランスを失つて倒れた椅子ごと息子が床に崩れ落ちた。カシヤカシヤカシヤと椅子のキャスターが空転する音だけが室内に響く。

「お昼の冷やし中華の味がしたね？」

舞は口元に垂れた唾液を舐めとりながら微笑む。とても子供に見えない。

「もう、やめてくれよ、こんなの……」

倒れた椅子の上で、ぐつたりと動けずにいるらしい息子は俯いて呟いた。

「やめてもいいけど、そしたら勇希くん、また元通りだよ」
「それは、もともと如月が……」

「舞」

空気が凍りつくような鋭く冷たい声だつた。

俯いたままの勇希に近寄ると、少女はその顎に手をかけ顔を上げ

させる。

「舞のことば舞つて呼んで、つて言つたよ、ねつ」
そういう言いながら脚を振り上げる。息子の顔色が変わるのがわかつた。

「つあぐああつ」

突き刺さつた爪先は、完璧に傷口を捉えていた。

「いつもより痛がるね？」

床を転がつて荒い呼吸を吐く勇希を見下ろしながら、舞はとんでもないことを言つた。

いつもより？

唖然とする私を余所に、少女は息子の上着をめくり上げる。男子もののTシャツの裏側に新しい血がついていた。閉じかけていただけだから簡単に開いてしまうのだ。

「どうしたの？ この傷」

少し驚きながら、しかしむしろ嬉しそうに舞は尋ねる。

「な、なんでもねーよ……」

暑さのせいだけでない汗をかき、明らかになんでもなくはない表情で勇希は答えた。

「なんでもない？ なら、こんな風に」

ことあるうちに舞は傷口の周りの腹を圧迫する。

「…………う」

「痛い？ でもね？ ひつやつて勇希くんを痛くする舞も痛いんだよ？ 痛がつて勇希くんを見るたびに、思い出すんだ。舞のおでこを、ね？ これが一人のキズナだもん」

歯を食いしばっている息子の顔を覗き込みながら、舞は前髪を持ち上げて、縫合されたと思しき額の傷を見せつけた。それを見て、勇希の表情が苦痛に歪む。

「そんなの、如月が勝手につけ……」

「だから、舞」

少女はそういうながら耳元にあつたヘアピンを外し、その先端を

傷口に突き刺した。

「ぐ……があああああ」

息子はブリッジするようにのけぞった。

「勇希くんだけ、舞と付き合つてることになつて、ううとうしこ女たちから解放されて嬉しかつたはずでしょ？ それなのに、約束無視して家にいなかつたり、メールの返事もくれなかつたり、何時間も待たせたり、舞、傷ついちゃう……」

傷口をえぐりながら、しかし少女はうつとりとした表情でシャツをさらにめぐりあげ、息子の身体に頬ずりをする。猫の世界でそれはマーキングを意味する行為だが、もちろんそんなことは関係ないだろう。

止めなければ。己の弱い心に負けている場合ではない。

私は焦つた。だが、これは守護者の場合とも、偶然出会つた女教師の場合とも違う。相手は息子のクラスメイトであり、今後も会う可能性の高い人物なのだ。そして、すでに入り組んだ人間関係を形成している。状況を把握せずに下手な手出しをすることは事態の悪化を招きかねない。その上に私は猫である。私の存在がなんらかの形で広まることも避けなければならない。それはさらに息子の安全にもかかる問題になる。胸を揉んで逃げるとか、鼠を投げつけて逃げるとか、この場を切り抜けるということだけでは問題解決にならない。

だが、どうすれば。

「だから、勇希くんが感じてる痛みは、舞の痛みだよ？」

舞は傷口を押さえるのを止め、滲みだした血を舐めとつていく。

「……はつ、はつ、はつ」

息子はのけぞつたまま天井を見上げ、小刻みに呼吸する。

どうすればいいのかはわからなかつたが、止めるしかない。私がそう決断した瞬間、

「これ、きれいなペンドントね？ 舞、これ欲しいな」

少女の手が息子の素肌を滑つた鍵を拾い上げ、

「それにさわんな！」

直後、勇希の平手が舞の頬を打つていた。

「……今度は、本当に叩いてくれたね？」

だが、少女はショックを受けた風でもなく、嬉しそうに笑った。

「帰れよ！」

そんな舞から逃れるように立ち上がり、壁に全身を預けて勇希は部屋の入り口を指し絶叫した。少女に突進しようとしていた私の股も止まる。

「いいよ。今日は、帰つてあげる」

「……」

「メール、するから」

「いらぬーよ……」

パタパタと少女が部屋を出していく音が遠のいて、息子はずるずると床に座り込んだ。ガチャン、と玄関が閉じる音の後、自転車のベルがアピールするように何度も鳴らされる。

しばらく気配は去らなかつた。外から確かにこちらを見ている圧迫感を私は感じていたし、おそらくそれは勇希も一緒だつた。静まり返つた部屋の中で、息子の顎から垂れた汗がフローリングに落ちる。室温の上昇は留まるところをしらないようだつた。

ケータイが鳴つた。

緩慢な動作で息子はそれを見て、叩きつけようとするように振りかぶつたが、すぐに肩の力を抜いた。コト、と軽くはない音を立てて床に転がされる。

「どうして、ずっと見てたんだよ」

傷口を押さえて、刺さっていたヘアピンを抜くと息子はそれを私に投げつけた。手元が狂つたようでその金属片は細かい血を飛び散らせて見当違いの床を跳ねた。

「勇希……それは」

「父さんは、父さんなの？」

そう言つて私を見た勇希の目に映るのは不格好な黒猫一匹だつた。

「……」「

私はなにも言えなかつた。

勇希もそれ以上なにも言わなかつた。

父親が父親であるということはどうことなのだろうか。

人であつた頃、私は研究にかまけていたが、勇希のことをおろそかにしていたつもりはなかつた。授業参観や運動会や年中行事、保護者の集まりにも積極的に参加していた。知るべきことは知らうとしていたつもりだ。たまの休日は一緒に過ごしていた。

けれども、今となつてはしてやれたことよりしてやれなかつたことの方が気がかりになつていて。私は息子のなにを知つているのだろう。好きなもの？嫌いなもの？食べ物の好みぐらいは言えるだろうか。でもそれは相当幼いころのものだ。子供は成長する。

現に、息子の学校での人間関係は把握していなかつた。母に様子の変化があれば伝えてくれとは頼んでいたし、ある程度のことは知つているつもりだつたが、不十分であつた。そしてあの女装のこともある。あれも昨日今日のことではないだらう。

『母さんと向ひで楽しく暮らしなよ。おれ、ちやんとひやつてくから』

猫として遭遇した最初の晩、勇希は言つた。私の死を諦めとともに受け入れていた。

そのことの意味をよく考へるべきだつた。

勇希の中に、私は不在だつたのではないか？

『だつて！ 父さんが横にいたから……その、だいじょうぶだと思つて……』

あるいはチャンスをくれていたのかもしれない。

『父さんは、父さんなの？』

十一年前、勇希が生まれた日のことは覚えている。

私はまだ二十五で、ただのボスドクだつた。笑子の両親には結婚を反対されていたが、子供ができるので仕方なく許すというような

形ではじまつてしまつた新婚生活の中、なんとか周囲にこの結婚を認めさせようと必死だった。だから予定日にも関わらず海外出張に出ていて、予定通りに生まれた息子の顔をビデオ電話で見たのだ。

『ほらここ、おでこの形があなたによく似てる、あと耳の形も』

私に似なくて良かつた。

確かにそう思つたのだ。後にその話をして笑子に怒られたのだが、私は私という遺伝子が息子に伝わることを恐れていたような気がする。チビで髪が薄くて、目も悪くて、顔だちも残念であることと、私の孤独な人生が必ずしも関係性をもたないと理解していくも、可能性の芽はないほうが良かつた。妻の分身が生まれた。そういう喜びだつた。

伝わつていたのだ。

笑子の死後、勇希は幼い頃からおそらく気付いていた。自分に向けられる父親の視線が、自分の背後にある母親に向けられていることに。最初は小さな違和感だつたのかもしれない。だがそれは蓄積して、大きな疑惑として息子の中に根を張つている。

父親にならなければ。

ベッドに眠る勇希の顔を見ながら私は己の弱さに後悔していた。なにもかもが迂闊だつたのだ。

だが、私はまだ己の本当の迂闊さに気付いていなかつた。

4 私の息子に舌が入っています。（後書き）

お読みいただきありがとうございました。こました。

5 私の息子がプロポーズしていました。

「傷が治つてからでも構わないのだが」

「え？ なんで？ 父さんだつて早く人間になりたくねーの？」

ボブヘアーのウイッグをセットしながら、勇希は鏡越しに私を見た。

傷口の処置も自分で器用にこなし、今朝方ガーゼを取り換えたときも、あれだけのことがありながら化膿すらしていなかつたので傷そのものに不安はなかつたが、それでも。

「いや、私のことより、勇希の安全をだな……」

「やつべ、おれ可愛い」

手櫛で全体をふんわりとさせながら、勇希は表情を作る。

昨日の今日だつたが、息子は表面的にはなにもなかつたように振る舞つている。そのことが私には余計に辛かつた。正面切つて親子喧嘩ができるほどの関係を築けていないことが明るみに出たに等しい。責められた方が楽だ、といつのが己に都合の良い考え方なのだと痛感させられる。

「それに、今日は女装せずとも」

「昨日ウイッグが外れたのは重いヤツだつたからだと思つんだー？」

「そうではなく」

「今日は父さんの大学で野末のおじさんに会つかもしれないんだろ？ 魔法使うときの一見しておれだとわからない方がいいって言ったのは父さんだ」

リップクリームで唇に光沢を出しながら息子は私の言葉を遮りうつとする。

棘がある。

「……今日は、鍵を使うことはない」

私にできる」とは、これからでもきちんと父親として振る舞うことをだけだつた。

「なんで？」

「使わなければいけない場面になりそつなれば、そつなる以前に逃げているからだ」

昨日のように出たとこ勝負では動かない。そう決めていた。「危ない気配があれば、私が勇希に指示する、逃げてほしい」

前髪を整えながら息子はじっと鏡に映る私の顔を見つめていた。静謐な瞳だった。化粧を整えると五歳は大人びて見えるその表情をうまく読み取ることができない。それが今のお私と勇希との距離だ。

「わかった。そうする」

田を瞑つて頷いた。

「そつか」

「でも、おれ、男のカツコで外、出歩かないよ？」

そう言つと、空色のワンピースを翻してターンした。

「……それは、好きにしてくれ」

そちらについては昨日の件で問題の根深さを感じている。一朝一夕にどうにかなりそうではない。我慢せめるよりストレスがないのならば、当面は口を出さないことにする。

「父さんがあんまり言つから、下にホットパンツも「見せなくていい」

スカートをめぐり上げようとする息子を制して、私は床に置かれたりユックサックに潜り込む。今日は電車に乗らなければならない。暑いのも息苦しいのも身体には堪えるが、いつもする他ない。大学に行つてから野末に目撃されるのも問題だ。

「じゃ、行こ！ レツツ魔法の装置！」

つばの広いストローハットを被ると勇希は少しの隙間を残してリュックを閉じた。

しかし、親バカのつもりはないが、昨日といい今日といい、まったく見た目が美少女そのものである。自分で自分に惚れるというアホ

の子つぱりは別の問題として、昨日は女子高が目的地だからそれほど心配しなかつたが男ばかりの工学部キャンパスとなると別の心配がある。

私の学生時代を思い返してもシャイな学生が多いのは確かだが。「よいしょ」と

持ち上げられると袋の中は激しく揺れた。

私の持ち物であつたリュックには、勇希に頼んで開けてもらつた覗き穴があり、外が見られるのだが、歩行中は揺れが激しそぎて酔いそうなので、私は力を抜いて横になる。

一時間半ほど電車に揺られ、駅から十数分歩くと私の勤めていた大学がある。

勤めていた。

法律上は完全に死亡してしまったのだから、そうとしか表現のしようがない。元に戻つても復職しようという気はないが、学生時代から二十年近く通つた場所だ、感慨はある。冷静に考えると夫婦揃つて社会的には死んでいるという状況をどうするのかという問題もあつたが、それは後回しでいいだろ。

生前、という表現もややこしいが、私が勤めていた頃、魔法を研究していないオーブンな方の研究室には何度も来ていた勇希はまったく迷うことなく広大なキャンパスを歩いていく。後方しか見ることのできないリュック内からの視界でもそれはよくわかつた。

私は集中し、猫としての五感を研ぎ澄ませる。

「えーっと、この建物の……」

外で勇希が紙を広げる音がした。

息子にはすでに秘密の私たちの研究室への道筋は地図として渡してある。まず突破しなければいけないのは暗証番号とID認証である。番号はもちろん知っているし、IDカードは家に保管してあつた私の予備を持ってきてはいるが、普通に考えれば使えはしないだろう。その場合は別の侵入方法ということになる。だが、私のもの

を試す意味はある。

亮平が私を警戒しているかどうか、ということが計れる。

『転位』の魔法実験は何度も行つてはいたが、人間を別の生き物にしたときに意識がどうなるかということについては未検証だった。それでも猫と犬を入れ替えて猫が犬になるぐらいのことは試しているから、人間もそうなるという推論は立つが、猫の身体にいれられた私が、ここに戻つてくることまで推測の内に入つてはいるかどうかということだ。

あの認証システムを入れたのは私だ。本音を言えば指紋認証か網膜認証でもっと高度なセキュリティにしたかったのだが、表向きの研究内容との兼ね合いもあり予算を取るのが難しいのと、あまり目立つと余計な疑いを持たれかねないということもあり、最低限のものになつた。

私の登録が消されていれば警戒されている、と判断できる。

それさえわかれれば十分と言えた。

警戒されているとなれば、手の打ち方もある。魔法の使いどころも明確になるだろう。息子の安全のためにも危険は極力排除しなければならない。

人の気配はまばらだつた。廊下ですれ違つた学生の数人はすこしごくクリした顔をして息子を振り返る者もいた。鮮やかな色彩のライフル一は、少なくとも普段構内で見かける色ではない。派手すぎるのでないかと私は指摘したのだが「ハデな服の色はおぼえても顔はおぼえねーから」と勇希はケロリと言つてのけた。確かにそうかもしけない。

一般的に言えばおそらく学生の誰かがカノジョを入れたのだというぐらいいに思われるだろう。そういうことは珍しくもない。そういう目立つことをする学生の評定を下げる僻み根性の強い教授もいるので、場合によつては「君、誰をお探ししかね?」などといやらしく呼び止められる可能性については伝えてあつたが、そういう不運にも出くわさなかつた。

勇希の歩みが止まつた。

「この部屋？」

くるりとリュックが回転し、私の正面、つまり息子の背中側にドアが見える。

「……そうだ」

室内の照明は消えている。内側に人の気配も臭いもない。私はリュックの上から鼻先を突き出して答える。それを聞くか聞かないかの内に再び横方向の遠心力がかかり、私はリュックの蓋側にへばりつく。そんなに機敏なターンをしなくてもいい。

「んじゃ、カードを通して……」

ハケタの暗証番号を息子が押すと、ロックが解除される聞き慣れた音を確認する。

「開いたけど、どうする？」

「……ちょっと待て」

罷か？

なにかすんなりと進みすぎている。亮平は私を殺さなかつたのだから、やつてくる可能性に気付かなかつたとは思えない。学生時代からの長い付き合いがある。私の執念深い性格も熟知しているはずだ。中の装置を守るならIDを消さない理由がない。それが消されてないとすれば、私をここに招きいれようとする狙いがあると考えるのが自然ではないか？

いかん、逆に不安だ。

ここに来た狙いは研究室内の装置である。その装置は巨大になりすぎて簡単には運び出せなくなつていて、半年前の時点で場所を移転するかどうか真剣に話し合つていたが、機密保持の観点で安全な代替地は見つかっていなかつた。私を猫にしてから運び出せたとも思えない。室内のスペースを使い切つているそれは十中八九、まだ中にある。

人工魔力生成装置と、蘇生の石版。

猫にされた日から半年、装置が順調に稼動しているとすれば、私

の肉体ぐらいはすぐに蘇生できるだけの魔力が生み出されているはずだ。

「……入らないの？」

「勇希、鍵を握つておけ」

情けないことだが前言撤回である。私は覚悟して言った。

「使うの？ 別にいいけど」

息子は特に気になった様子もなく答えた。

「使わせないと言つたのは本気だつたんだが、すまない、予定が変わった」

身体が取り戻せるとなれば話は別だ。

危険を冒す価値がある。ドアの向こうになんらかの罠が仕掛けられているとしても、既に守護者の力を手に入れた息子を捕らえることなど同等以上の魔法でなければ不可能だ。息子は安全である。この世に守護者と同等の力など、守護者以外にはない。

罠は意味を成さない。

要するにこれはチャンスだ。

「入ろう」

漠然とした不安を振り払つて私はリュックから飛び出すとドアを開けるように促した。

「うん」

勇希はドアノブに手をかける。

装置は変わらず静かに稼働していた。

部屋の大部分を天井まで埋め尽くす巨大な箱を見上げて、勇希はポカーンとしている。

私は罠を警戒していたが、研究室の中は半年前とほとんど変わることろがない。装置をモニターするための機材もそのままであり、私の椅子もそのままあつた。ひとつだけ違うのは、私が最後に作っていたカプセルが完成していることだった。

箱の壁面に埋め込まれたそれには蘇生魔法使用の基となる青い魔力溶液が注がれている。澄み切った青は水に溶けた魔力濃度の高さ

を示している。見た目にはただの縦長の水槽だが、底部にはめ込まれた石版も本物に違いない。私は内心の高揚感を抑え切れずに駆け寄つてカプセルの中を見分した。設計通りだ。そして準備万端整っている。

まるでお膳立てされているかのように。

「なんか、地味」

気付くと私の後ろでカプセルを見ていた息子がつまらなそうに咳いた。

「地味？」勇希、開けて見せられないのがアレだが、この装置の中には人工的に再現された魔界を封入している。わかるか？ この壁ひとつ隔てて別の世界があるということの凄さが。そして原理的には無限に魔力を生み出すんだ。計算上ではこの装置の大きさを東京ドーム二つ分まで大きくすれば魔界の穴が一年に吐き出す魔力とほぼ同等の……」

「つまんない」

子供にはわからぬか。

確かに音も光も発せず、ただ魔力を生み出して溜めるだけの装置ではある。この技術にたどり着くまでの糺余曲折を語つても研究者の苦労と喜びに共感しろというのは無茶だろ？ ならばここで実際に私の肉体を蘇らせてその凄さを示すしかあるまい。

「少しそこで見ていろ」

そう言つて、私はモニター装置に飛び上がり、猫の手でキーボードを叩く。

この日が来ることはわかつていたから、猫の肉体で「コンピュータをいじるためのトレーニングはしてきたのだ。まさかここまで早く役に立つとは思つていなかつたが。

「私を猫にしたときのデータが残つているはずだ……」

貴重な実験である、研究者がそれを破棄するわけがない。猫を『転位』させた私の肉体を観察し、最終的には殺すに至るまで、どのくらいの期間だったのかはわからないが、私が亮平だったとしたら

間違いなくやつていい。私たちはある意味で似た者同士なのだ。

「あつた」

私は興奮していた。それが己の肉体の死という残酷な現実を見る行為であると感じないではなかつたが、蘇るという大きな希望の前には大した衝撃ではない。交通事故死に偽装？　まったく、人の身体を好き勝手に弄んでもくれたものだ。

力チヤ。

耳は無意識にドアが開く音を聞いていたが、脳の処理はそれを無視した。

「父さん！」

息子にそう呼びかけられて、私はハッと入り口を見る。
「相変わらずだな、圭介。その姿になつて相変わらずといつのも変だが」

ひつかけた白衣の下はアロハシャツに短パンにビーサン、髭面の長身男が立っていた。気障つたらしく長髪を搔き上げる仕草、見間違えようにも見間違えようがない。

「……そうだな、それはこっちの台詞だ」

亮平。

「来ると思ってたよ。だからＩＤは残しておいた」

そう言いながら、亮平は白衣の胸元に手を突っ込んだ。

「ならば、このまま私が蘇つてもいいだろ？」

「それは困る、やつと溜まつた魔力なんでね」

ガツン、と鈍い炸裂音が室内に反響する。

亮平が拳銃を抜くのと、私が飛び退いたのはほとんど同時だつた。データを映し出していたモニターが弾け飛んだ。

「よく俺が拳銃を持つているとわかつたな？」

「動物の勘つてとこだ」

私は肉体が訴える激しい危険の予兆に従つただけだ。

亮平のアメリカ留学中における拳銃狂いは同期の間で語り草であり、一緒に仕事をしているときも、ガンマニア向けの雑誌などをわ

ざわざ向こうから取り寄せて悦に入っていたことから、改造拳銃でも作っているのではないかという噂が広まつたこともあつたが、頭の中でそれが一瞬に結び付いたというわけではない。

「なるほど、意外に猫が板についている……半年もあれば当然か？」

亮平は笑いながら銃口を私に向いていた。

「招き入れておいて殺すのか、穏やかじやないな」

まずい。

「発目をかわすことは無理そうだつた。研究室内の狭いスペース、直線で十メートルもない距離、先程の的確な狙い、隠れる場所もない。猫の身体だ、当たれば必ず死ぬ。

恐怖で肢が竦んだ。

「お前を生かしたのは俺だ、俺の手で殺してやるのが慈悲だろ？」「友だちとしての、な」

「……」

引き金にかかつた指に力が籠められる。躊躇つてはいない。

「発目の銃声は響かなかつた。

拳銃が床に叩き落とされてスルスルと床を滑つた。

「勇希」

「……おじさん、なにやつてんだよ」

片方の手を胸に当てた息子が、亮平の腕を弾き飛ばしていた。守護者の力が開放されている。

助けてくれたのか。

「勇希？　なるほど、猫になつたとはいえ圭介が女の子を誑かすなんて変だと思つたんだ。お父さんの葬式ぶりじやないか、男子三日会わざればと言うが、これは、美少女に育つて。その上、お母さんの力を受け継いだ訳か、お笑いだな圭介！」

「なんで父さんを！　友だちだろ！」

「友だちだからこそ」

そういうと、亮平は息子の頭を撫でた。

「？」

「笑子さんを蘇生するのは俺だ」「なんだって？」

拳銃を亮平から遠ざけようとしていた私も思わず振り返った。

「おじさん、なに言つてんの？」

「ずっとお母さんのことが好きだつた。そつ言つてゐ」

なに言つてんだコイツ。

私も息子も言葉を失つて亮平の顔を見ていた。

冗談を言つているという雰囲気はない。私が亮平に妻を紹介したのはいつのことだつただろう。学生だつた頃なのは間違いない。それ以前に会つていたという話を聞いたことはないし、その時が初対面のはずだ。その時から？ 確かに、私と違つて女にモテるタイプの男がいまだに独身で、浮いた話も聞いたことはなかつたが、いやまさか。

混乱する私を余所に、亮平は息子の両肩を掴んで田線を合わせた。

「勇希、実はおじさんが、君の本当の父親なんだ」

「え？ ええ？」

「おいつ！ むちゃくちゃ言つな！」

頭に血が上つた。気付いた時には私は全力でその顔面に体当たりしていた。

しかし亮平はひるまなかつた。

「ならば確信をもつて言えるのか圭介、このどこもお前に似ていな美少女が、本当に自分の息子だと！ ビッちかつていうと俺の方が似てるだろう…」

「似てたまるか！ 確信もあるに決まつてるだろうがアホ！」

冷静には言つていられなかつた。

「どうかな？」

「なにがどうかな、だ！ バカ！ 大体、四十手前にもなつて、十年前に死んだ人の妻に惚れてたとか正気なのか？ 中学生や高校生じゃないんだぞ、頭おかしいんじゃないのか！」

「圭介、お前にも秘密にしてたことだが、俺、童貞なんだ」

「はあ？」

直前まで父親を騙るつもりしていた男がなにをいきなり。「どうてい？」

勇希は私たちのやりとりにはまつたくついていけないようで呆然としている。

それでいいとは思うが。

「今でも思い出すよ、笑子さんをお前に紹介された日のこと、一日惚れつてやつだよ、悔しかった。チビでハゲの癖にうまごことやつやがつてと憎しみを抱いた」

「……」

私は絶句した。子供以下だ。

「笑子さんが亡くなつたと聞いたときは落ち込んだよ、俺がついていながら

ついてないだろ？

「その後、お前から魔法の話を聞かされて、チャンスだと思ったね。蘇生した彼女を俺のものにできるチャンスが巡ってきたと、確信した。思つたより時間がかかつたが

「それで私を猫にしたのか？」

こんなヤツと親友のつもりだった自分を恥じながら私は言った。

「理由は他にあるが、俺の気持ちとしてはそうだ」

「バカだな、魂を蘇生する限り、蘇るのは同じ人間だぞ？」

「未熟な魂ならばどうかな？」

そう言つと亮平は残っていたモニターの前に駆け寄つてキーを叩いた。

「まさか」

「そのまさかだよ！」

「また、そんな試してもいいことを思い付きでやるなんて」

私はその背中に飛びかかつたが、人間の身体をどうにかできるものではない。

「十五年待つた！ もういいだろ？！」

エンターキーを叩く様を目撃しただけだった。

魔力溶液に満たされたカプセルの底、蘇生の石版が反応し、液体に次から次へと水泡が湧き上がつてくる。魂と肉体を死亡した当時の完全な形で蘇生するには絶対的に魔力が足りない。魔法的に自明のことだった。

「なんてことを！」

私は呻いた。

我々の目前で、水槽内に肉体が蘇っていた。それは胎児から一気に成長していく。魔力が十分ならばデータに残された死亡時の状態まで行くのだが、青い溶液の色が見る見る透明になっていく。そして完全に透明になるとカプセルは定められた通りに水を排出した。少女の妻が立っていた。

「子供にしかならなかつたじやないか！」

私は友の顔面に爪を立てた。

「俺的にはむしろストライクだ」

亮平は真顔で答えた。

「バカ野郎！」

もうこんな男、友でも仲間でもない。

おそらく今の勇希と同じぐらいの年齢辺りだ。もちろん全裸である。私も見たことのない姿だ。ぱっちりと目を覚まし、内側からカプセルを開けようとしている。なにか声を出しているようだが聞こえない。しかしそれにしてもよく似ている。

女装した勇希と瓜二つだ。

「……魔法、すっげー」

息子がカプセルを引っ張がした。

正しい開け方ではない。それにやわなものではないが守護者の力の前には紙同然なのだろう。

半年で溜まつた魔力は使い果たされ、妻は不完全に蘇った。これはもう動かしようのない現実だ。人の魂はひとつしかない。また蘇らせるということはできないのだ。

しかし、どうすればいいのだ。

「……あの、ここ、どこですか？　わたし、なんで裸なんだらん？」

あなたは？」

懐かしいような初めて聞くよつた声で笑子はもう喋っていた。
そうだ、ともかく妻をここから連れ出さなければ。考えるの任せ
の後だ。

「おれは……馬園勇希」

「まぞの、ゆうきくん？　男の子？」

笑子の髪が長く、勇希はおかげば、それ以外はまるで鏡[写]しのよ
うに一人は向かい合ひ。息子が物心つくまえに妻は亡くなつたのだ
から、これがはじめての母子対面とも言える。

数奇な運命だ。

「とりあえず、おれの服を着てよ」

顔を真っ赤にして、息子は素早くワンピースを脱ぐと、笑子に手渡
した。

「う、うん、ありがと」

「あ、あと、おれと結婚してくだねーーー」

上半身裸にホットパンツ姿の勇希はそつまつと深々と頭を下げた。

「……わたしと？　結婚？」

「うん」

私の息子がプロポーズしていました。
母親に。

5 私の息子がプロポーズしていました。（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

6 私の息子が失恋しました。／私と君とで作った子です。

蘇った笑子はまじまじと勇希の顔を見ながら、受け取ったワンピースを着たのだが、生地が身体にべつたりと張り付いたことで自分がびしょ濡れであることに気付いたようだつた。長い髪の毛に触ると魔力溶液のぬめりがわかつたようで顔をしかめた。

「……女装してる人は無理です」

そして容赦なく宣告した。あるいは不愉快さをそのままぶつけるように。

私の息子が失恋しました。

同時に、私は懐かしさを感じていた。私が出会う以前の妻なのが、きつぱりとした性格と物言いはまったくそのままだ。不本意な形ではあるが本当に蘇つたのだ。

「わたし、十三歳だし、初対面だし、結婚とかありえないけど、女装してる人は無理、生理的に受け付けません。ごめんなさい。それで、ここはどこですか？」

「……」

息子は言葉を失っていた。

失恋させることはあっても、したことはなかつたのだろう。だがそれはいい。当たり前の結果だ。この場と状況で上手くいくわけがない。母と息子とか、それ以前の話である。

だが、問題は山積みだ。

この状況を本人にどう理解させればいいのだ？

死んだ年齢で蘇つたという状況は想定していた。その場合も大人の笑子ならば魔法についても十分に知つていて話の把握も困難ではないだろうと思えたが、蘇つた子供の笑子からすれば十年以上も若返つた上に世の中は二十年以上進んでいる。ありのままに説明しても飲み込むのが大変だろうし、猫の私の話を信じてくれるかどうか。「こうなるとお前の立場はないよな」

息子の失恋風景をにやにやと眺めていた亮平が私に向かつて呟いた。

「な……」

「結婚以前の状態に戻つたんだ。お前の妻でもなきや、お前は夫でもない。夫婦として話を信じさせることは不可能だ。この意味、わかるだろ?」

「……」

髭が萎えた。

亮平がこの場で一番、説得力のある言葉を述べられる。女装してプロポーズして断られた勇希はそもそも子供同士である。ついせつき人間性に欠陥があると分かつたとはいえ、大人で外見も常識の範囲内であるこの男が、一番信用のおける存在に他ならない。

猫が喋るよりはよほど。

「ここは大学の研究室です。笑子さん」

動けないでいる私を嘲笑するような表情を浮かべ、亮平は笑子に向かつて歩み寄る。

「大学? あなたは? なんでわたしの名前を」

「野末亮平、この研究室の責任者です。そして笑子さん、あなたは一度死んで、この研究室で蘇ったのです。そう言われてもすぐには理解できないとは思いますが」

「わたしが死んで、よみがえった?」

笑子はビクと身体を震わせた。

「詳しい話は場所を変えましょ? その前に着替えとシャワーを用意します。サッパリした後で、落ち着いて現実を理解してください。時間はあります」

亮平は淀みなく語りながら、笑子の手を取ろうとする。

パン。

「なにもなかつたようなフリ、してんなよ」

その手を払つたのは勇希だった。

「なんだ? 君の出番はもう終わりだろ? 失恋少年、いや少女か

な？」

「つるせーっ！」

次の瞬間、亮平は研究室の壁に叩きつけられていた。

勇希が怒りにまかせて振り上げた拳が強かに顔面を直撃したようで、ずるずると床に崩れ落ちたその顔は血に染まっていた。意識も失っている。守護者の力を使っていることに気付いていたのに、子供を煽つたらこういう結果になる。バカだ。同情には値しない。だが息子のことだ、私を猫にしてくれた件は、これでキャラにしておこう。

友情の釣り餌ぐらいくれてやる。

「なんでこの人を！」

笑子の声で私は振り返る。

「無意味に暴力を振るうような人は、最低です！」

「……」

笑子に詰られて、勇希は無言のままウイッグを外して床に捨てる。「なんとか言つたらどうなんですか！」

「……」

息子はなにも言わず、履いていたブーツサンダルを脱いで笑子に押し付ける。顔を背け、私を見つめる泣き顔を見れば、私もかける言葉がない。

堪えていたのだ。

よく我慢したといつべきだろつ。私は勇希に頷いてやる。

「ちょ、つと？」

「父さん……おれ、先、帰る……から」

震える声を押し殺すよつに勇希は言葉を絞り出した。

「ああ、わかった

リュックからs u i c aだけを抜いて、両手をポケットに突っ込んで歩いて行く後姿を私は見送るしかなかつた。この状況で私と笑子の帰宅手段まで考えているのなら冷静だ。上半身裸、脇腹の傷口にバイアステープで張られた痛々しいガーゼ、裸足、ホットパンツ

のみの息子が部屋を出でていくのを私は見送る。

あんな姿で表に出してしまってよくはないだろ？が、このまま一緒の空間にいるというのも酷だった。女装した自分と同じ容姿を持つた少女、勇希にしてみれば運命の出会いに他ならないだろ？。一人といなはずの理想の女性だ。それが母親だとしても、むしろ母親だからこそであるのかもしれないが、恋破れた今となつては苦痛でしかないだろ？。

私は捨てられたウイッグを見つめた。これは、もう……。

「猫が、しゃべった？ 父さん？」

声をした方を見上げると、笑子が私を見ていた。

「驚かせてすまない。私は馬園圭介、勇希の父親だ。見ての通り猫の姿だが」

「それってどういう……！」とですか？」

「私たち親子のことはいい、とりあえず君の話をしよう」

こうなつてしまつた以上、すべてを理解してもらつのは不可能だ。特に私と夫婦であったことはとても受け入れられまい。だからこそ、なによりも先決なのは笑子が蘇つたこの世界で生きられるようにすることだ。ならば、私も、私の感情を殺すしかない。

「わたしのこと、死んで、生き返つたって……」

「本当だ。その証拠はこれから見られる。だが、その前にこの部屋を出よう。そのリュックの中にタオルが入つている。少々、猫臭いかもしれないが、それで身体拭くといい。君の記憶する季節とされているかどうかわからないが、今は夏だ。外ならばすぐに乾く」

「……夏、ですか」

口に手を当てて、笑子は考え込む。

「あと、そのサンダルも履いてやつてくれないか？ 気持ち悪くはあるかもしれないが、息子も悪い人間ではないんだ。その男を殴つたのも、君を守ろうとしてのことだ」

「……わたしを、守ろうと？」

押し付けられた履き物を見つめて呟く。

半分以上、腹いせのハツ当たりだったとは思つが、それは言わな
いでおく。

「すぐに信じては貰えないだろ？が、とりあえず、私も息子も君に
危害は加えない。いや、見ての通り、私は猫なので加えようと思つ
ても大したことはできないのだがね」

つまらないジョークだ。

「ふふ、そうですね。まぞのさん」

だが笑子は笑つた。そう、彼女はいつも笑つてくれた。

呼ばれた名前に私の心臓がズキズキと痛んだ。出会つた頃、そう呼
んでくれた記憶は私の中で変わらず生きている。けれども、彼女の
中にそれが蘇ることはない。

もう一度と。

魔法における蘇生は、すべての技法の基礎となつていて。

滅びかけた、あるいは滅びた肉体を『変異』し、魂を『転位』する。
それが結果的に魔法という形へ発展、発達した根本には魔界におい
て人間が極めて短命な生物であったことがあると伝えられている。
魔界に暮らす人間は一定年齢までに生きる上で必要な生活技法のす
べてを習得し、死亡前、あるいは死亡後に、魔法によつてその年齢
まで退行して自己蘇生する。その繰り返しによつてのみ魔界で生存
が可能であったのだ、と。

この説を採用するならば、魂は上書きされるとのことだ。

十三歳で蘇つた笑子は、十三歳までの記憶は魂が刻んでいるが、
それ以降は新たな経験をもとに記憶を魂に刻んでいく。つまり、私
との出会いは二十年前のことではなく、猫としての出会いが最初と
いうことになる。

「2011年つて、未来つてことですか？」

「未来……確かに君の記憶からすればそうなる」

大学構内からほど近い、池を臨む公園ベンチに腰掛け、私は順を
追つて笑子に事情を説明する。この状況は確かにほんとタイムト

ラベラーのそれだ。

「そんな、わたし……二十五年も前に死んじやつたの？」

「そこが複雑なところなのだが、君は一十七歳までは生きている」

笑子が死んで十年、いや、もうすぐ十一年。

「……え？」

「君が十三歳で蘇つてしまつたのは私の不手際だ」

亮平のことも含め、これは己の迂闊さが招いたことだ。

私は地面に飛び降り、頭を下げて体勢を低くした。四足歩行動物に土下座もへつたくれもないが、もはや私にできることはこれ以外になにもなかつた。

「君が生きた残りの十四年、これを失わせたのは私だ。申し訳ないと思っている。言葉で償いきれるものではないだろうが、これから君のためにできることはなんでもする。猫の身体でどこまでできるかはわからないが、それでも……」

「いいですよ、まぞのさん。顔を上げて」

頭の上から降り注ぐ優しい言葉が痛かつた。

私は鼻を地面にこすりつける。

「まだよくわからないけど、死んでいたわたしが生き返つたのなら、それって凄いことじやないですか。二十七歳で死んで四十歳になつちゃつとかならそれはかなりくやしい感じですけど、十三歳に戻つたならやり直せるつてことで、むしろトクします」

「……申し訳ない」

本当によくわかっていないだけだ。

ある意味で失われた十四年を惜しんでいるのが私であることは事実だが、しかし、その失われた時の重みを彼女はまだ知らないだけなのだ。家族も、友だちも、皆が二十五年の月日を生きている。一人だけ取り残されていることに気が付いたとき、そうは言えないだろう。

憎まれても仕方ないことだ。

「詳しい話は、君のお母様のところでしょう。重ね重ね申し訳ない

が、私が詳しい事情を説明するので、リュックに詰めて運んでほしいのだが……」

私は笑子を見ないよつにして、ベンチに上がりリュックに潜り込む。

「あ、はい。あの、でも疑問なんですか？」

チャックを閉めながら笑子は言つ。

「詳しい話は……」

「まぞのさんは、どうしてわたしを生き返らたんですか？　というか、お母様を知つてゐることはお母様が生き返らせるように頼んだんですか？」

「……」

リュックの中から笑子の顔を見上げて私は答えに窮した。

本当のことはもう言えないのだ。

「あの、まぞのさん？」

「……実験だ。正直に言つて」

きちんと彼女と距離を取らなければいけない。

「死亡した肉体のデータがあつたのが偶然、君だつたというだけのことだ」

どうしようもない嘘だ。だが、そう言つしかなかつた。

私は私の感情を殺し、私の妻であつた笑子の死も改めて受け入れなければならぬ。蘇らせることが私の生きる希望だつた。そして蘇つた。想定外であろうと、不手際であろうと、私の本意でなからうと、目標は達成されたのだ。それが私の笑子であつて欲しかつたというのはエゴだ。そう、私の愛情がエゴと等価である限り、死んだときのまま蘇らせたとしても、私が拒絶される可能性はあつたのだ。その事実から目を瞑つていただけだ。

本人が蘇りたいと言つたのではない。

私のエゴに私が責任を取るだけのことだ。

「実験？　ですか」

私の答えにガツカリしたような顔で笑子は呟いた。

「申し訳ない」

「いいえ、運が良かつたってことだと思います」

「……」

私は未熟な人間で、今や人間ですらない。

結局、息子にも妻にも、まともに向き合えていなかつたのだ。

「あの、まぞのさん？」

リュックを背負おうとした笑子が肩ベルトを掴んで怪訝な顔をしている。

「どうした？」

「ここ、震えるんですが？」

「震える？」

私はリュックから頭を突き出して笑子の手元を確認する。

「ああ、ケー・タイだな」

リュックのベルトに専用ポケットがある。息子が持つていかなかつたのだ。

「ケー・タイ？」

「携帯電話……とそつか、君は

知つてゐるわけがない。

「ポケットを開けて出してみると。今の時代では広く普及しているものだ」

「電話？…………この薄い板が？」

笑子は両手で表裏をためつすがめつしていだが、液晶画面に目を奪われたようだ。

「テレビ？」

「現在のテレビという意味ではおよそ間違つていないので、電話だ。通話ボタンを」

いや、ケー・タイがある生活を前提に説明しても伝わらないな。

私がどうしたものか考へている内に、しかし子供の笑子はシンプルにボタンを押して電話をするように画面を耳に当てた。適応が早い。そして本当に繋がっている様子だった。

「どうか、相手は誰だ？」

「もしもし？ どちらさま？ え？」

私は耳を立てて集音能力を高める。人間の耳にはできない芸術だ。

『だれなの？ これ勇希くんのケータイでしょ？』

聞き覚えのある声だ。

「あ、そうです。ゆつきくんの？ けいたい電話？ です。わたし
は聖^{ひじ}笑子^{ひじ}、そちらはどちらですか？」

『あの？ 電話受けといて名前がわからんないってことないでしょ？』

『いえ、わたしこういうの初めてで』

『画面見なさいよー』

『画面？』

笑子が太陽光に反射する液晶画面の角度を変えて田を細める。
如月舞、あの少女か。

『舞さん？』

『そうよ、舞、ひじりだかひじきだか知らないけど、そっちこそ何
者なの？ どうして勇希くんのケータイ持つてるの？ 勇希くんは
そばにいるの？ 変わりなさいよー』

距離を取つてみると恋人の母親を母親と知らずに怒鳴りつける自
称カノジョという具合で、ある種のおかしみを感じないでもないが
それほどのどかな状況ではない。

『んー……』

つるさくなつたのか笑子はケータイを耳から離した。もちろん元
々は電話で道具としての接点がなくもないとはいえる、飄々と新しい
ツールを使いこなすものだ。

『まぞのさん、この人知つてますか？』

『ああ、息子のクラスメイトだな、なんなら私が代わるが……
電話越しなら猫でも父親として対応できる。』

『クラスメイトかー』

だが笑子はふいと電話に戻った。

『 ちょっと！ 聞いてんの！』

「舞さん、ちょっと不羨じやないですか？」

『な？』

「電話に違う人がするのは当たり前でしょう。それなのにいきなりケンカ腰で、家族でもない単なるクラスメイトがそういう態度、よくないと思います」

ケンカ売ったよ！

私はすぐにでも止めたかったのだが、間の悪いことにベンチのそばを人が通りかかっていたので、リュックから出した前足をじたばたさせることしかできなかつた。

『単なるクラスメイト？』

電話の向こう側で舞に火が点いたのは聞くまでもなくわかつた。

『舞は、勇希くんの恋人です！ そっちこそ家族でもなくクラスメイトでもない、何様？』

「恋人？ 恋人なんですか？」

驚いたように笑子は私の顔を見たが、私はなにも言えない。

『そうです』

「別れた方がいいですよ、舞さん」

『はい？』

なんだって？

じたばたしそぎたせいでリュックが転び、私はベンチの下に転げ出る。

「実はわたし、ついさっきゆうきくんに結婚してくださって言われたんです。わたしは裸だし、ゆうきくんは女装してるし、初対面なのにどうかしてるんでお断りしたんですが」

『……裸？ 女装？』

息子の秘密があつさり暴露。

「にやああああ！」

私は猫として精一杯の静止をかけた。

だが、そんな私の様子など意に介さず笑子は喋つた。

「恋人がいるのに別の人と結婚してくれなんて言つてるんですから、

舞さん、間違いなく騙されてます。別れた方がいいです。あの、もしもし？ 聞いてます？」

『……でよ』

「すいません、よく聞こえないんですが？」

『ふざけんなつて言つてんのー。』

「つー。」

一気に上がったボリュームに笑子は顔をしかめた。

『何様のつもり？ このひじき女！ 雨希くんがプロポーズした？ そんなことがあるわけないでしょ、あんまりペラペラ嘘ついてるならその舌引つこ抜いて炭火焼にしてやるー。』

この子も大概メチャクチャだ。

「ウソなんか言つてません。本当のことですー 別れなさいー！」

笑子はまったく退かなかつた。

『ひじき女、どこにいるの？ 直接あつてケリをつけてあげる。』
『ここは上野の不忍池ですけど、それには及びません、わたし가そちらに伺いますー。』

『来る？』

「行きますよ。舞さん。何度だつて言います。ゆづきへんに騙されてしまうー。」

いや、息子は割と被害者なのですが。

などと、私が今更言つても遅いのだろう。笑子の瞳が燃え滾つていた。もはや己の迂闊さを疑う余地もない。こういう性格だったのだ。しかしさかとは思つっていたが、魔法のことを知るより以前、守護者になる前から、彼女はすでに彼女であったのだ。懐かしくもある。

笑子の正義感は尋常でない。

『なら来てみなさいよー。舞の家は木乃市の』

『わかりました。よく知っています。ちょうどいいぐらいです。わたしあそちからへ向かうといひでしたから。まつすぐそちらに伺います』

だが、その正義感が彼女を死に至らしめた。

いかん。違う、蘇った彼女は、彼女であつて以前の彼女でないのだ。同じ運命が繰り返すわけがない。なにより守護者の鍵は息子が持っている。新しい守護者も街に来ている。

頭を振つた。そくならないために私がいるはずだ。

「電話、切れました。これこのまましまつていいですか？」

「……それは、いいんだが」

舞と笑子が会つて事態がどう打開されるのか私にはまるで見えなかつた。

止めるべきだ。

「その、君が会いに行つてもおそれくなにも解決しないと思つのだが」

「まぞのさん、ちゃんと息子さんを教育してますか？」

笑子は私の首根っこを掴んでリュックに放り込みながら睨んだ。

「え？ あの……」

「女装といい、恋人がいるのに結婚の申し込みといい、ゆうきくんはまるで普通じゃありません。親のあなたの責任じゃないんですか？ どういう躾をしているんですか？」

「……親ですいません」

私と君とで作った子です。

言つてもはじまらないことしか頭に浮かばず、しかし笑子の言葉は正論で、私は小さくなるしかなかつた。躾が行き届いていなかつたのは厳然たる事実だ。

「これからちゃんとしましょ！」

「はい、そうします」

なぜ説教されてるんだろう？ 十三歳の女の手口。

でも。悪い気はしないのだ。

「さ、急ぎますよ。やることがひとつ増えました」
蘇つたばかりとは思えないバイタリティ。

そう、彼女はネガティブに陥りがちな私と違つて、まっすぐにポ

ジタイプな女性だった。憧憬、私の胸にあつたこの感情は間違いなく、かつての彼女に向けられたものだが、でも今、ほとんど変わることのない感情も新たに生まれている。愛している。

伝えることが叶わなくとも、この気持ちだけは死はないのかもしない。

6 私の息子が失恋しました。／私と離れて作った子です。（後書き）

お読みいただきありがとうございました。こまました。

木乃駅前のファストフード店、二階。

ロータリーを見下ろす窓際の席にヤタテとミズキは向かい合つて座っていた。会話はない。ナツメがいない場において彼女らは基本的に噛み合わない。アニメを見るスタンスも、楽しむポイントも、ある面においては反発しあう立場がある。

見るからにお嬢様然とした流行の服を身にまとったヤタテはひたすらに自分の本を読み、見るからにサイズの合っていないラフな既製服を着たミズキはPSPの画面に釘付けだ。とはいっても、集中しているのでそれほど気まずいという訳ではない。

正午過ぎの店内は混み合いはじめていた。

「ナツメちゃん、遅いね」

ページをめぐりながら、ヤタテは何度目かの言葉を繰り返した。

「いつものことだ、ぜつと」

画面から目を離さず、ミズキはも繰り返す。

二人は、一人だけ補習で学校に行っているナツメを待っていた。

「おい、あれなんだ？」

誰の声かきつかけかはわからなかつたが、店内の人々がざわつきはじめる。それでも一人は自分の世界に没頭していたのだが、ざわめきは収まることなく広がっていく。

「映画の撮影？」「コスプレのイベントじゃね？」「このくそ暑い中よくやるよなー」「そんな情報あつたか？」「なんかのオフ会とかだろ、ほらあつち系の」「ああ、そういう？」

客たちの視線は窓の外に向かっている。

流石の一人もちらりと視線を向け、それが異常事態だと気が付いた。普段なら客待ちのタクシーが並んでいる駅前のロータリーを、若い女の子たちが占拠している。ヤタテやミズキと同じぐらいの年齢層、それぞれがカラフルで華やかなコスチュームを身に纏っている。

彼女たちは駅の改札口を取り囲むように集まっていた。

その数はざつと三百人。

「……ミズキちゃん、なんのコスプレかわかる?」

「……知らない、ぜつと」

「人は息を飲んだ。」

「魔法少女?」

ほとんど同時に同じ単語が浮かぶ。

「でも、なんの?」

「未知だ、ぜつと」

古典から最新作まで、ナツメによって相当数の作品について知識は入れ込まれている一人だつたが少なくとも記憶する限り、似たようなものはあっても、同一というものはない。なにか特定の作品について集まっているとは思えない状況だつた。

「ナツメちゃんに連絡しないと」

慌ててヤタテはキー・タイを取り出し、

「記録だ、ぜつと」

こちらも慌ててミズキはカメラで撮影をはじめる。

「　　あ」

そして二人は同時に気付いた。

その魔法少女たちの輪に向かつて、聖木乃の制服を着た女子が一人、走つていることに。遠目にもわかるほど興奮している彼女はローラリー中央を貫く横断歩道の赤信号で足踏みをしている。

「ナツメちゃん」

「ナツメだ、ぜつと」

二人が顔を見合わせて苦笑いをした直後、

「やばい! ここから逃げる!」

店内の一人の男が叫んで、椅子を倒して二階席から飛び出していつた。

客たちはそれぞれ顔を見合せたが、追随するものはいない。

「なんだつたの?」

「……駅からなんか出てきた、ぜつと」
ミズキが窓を指差した。

「なになに？」

ヤタテが見ると、改札口から上半身裸に裸足で、ホットパンツのみという少年がとぼとぼと歩き出てきたところだつた。俯いていた少年だつたが、正面に居並ぶ魔法少女たちに気付いて立ち止まる。少年の風体も夏とはいえ都市部には異様な光景であり、奇妙な緊張感が店内にも漂い始めていた。ざわめきが大きくなる。

「……なんて美少年」

それとは関係なくヤタテは頬を緩めていた。

「だめだめだ、ぜつと」

ミズキが肩をすくめた次の瞬間、店の窓ガラスが吹き飛んでいた。店内に悲鳴が響き渡る。

「え？」

「……！」

ガラスが店内に吹き込んだ衝撃で床に転がつた一人は、さつきまで自分たちが向かっていたテーブルの上に立つ少年の背中を見上げていた。そして、その向こう側から大勢の魔法少女が店内におしあせようとしているのを。

「いてーよ」

そう呟くと、少年は信じられないような速度で店の外へ飛び出していった。

彼が足場にしていたテーブルが店内奥の壁に突き刺される。

「……なんだつたの？」

「わからない、ぜつと」

呆然とする一人を余所に、店内はパニックになつていた。

?がつたままだつたケータイが途切れだ。

「ヤタテっち、聞こえてるっすか？」

待ち合わせ場所だつた店の二階を見上げながらナツメは意味がな

いとわかりつつも叫ぶしかなかつた。駅を取り囲むように立つビルからビルへ、次々と爆発のような煙が立ち昇る。駅前は騒然としていた。立ち止まるナツメを押しのけて人々が逃げ惑う。

「なんなんっすか？」

魔法少女たちが集まっていたのだ。

なにかのイベントだと駆け寄ろうとしたナツメは、駅から出てきた裸の少年に金髪の魔法少女が襲い掛かるのを目撃した。だがそこまでだつた。吹き飛んだファストフード店、それからは空気がはじけ飛ぶような音と同時に、そこかしこで爆発が起こっていることしかわからない。彼女の脳裏ではいくつかのアニメの名前が浮かんでいたが、もはや現実には不適当なだけだつた。

なにより一刻も早く友たちの無事を確認しなければならない。

ビルから吐き出される人々の流れに逆らつて、ナツメは待ち合わせ場所へ向かう。すれ違う人の中には血を流している者もいた。ヤタテとミズキ、二人の顔を探しながらも、彼女は目を瞑りたくてたまらなかつた。こんなことは夢かアニメであるべきだ。

「ヤタテっちい！　どこっすか！」

不安を振り払うには叫ぶしかなかつた。

「ミズキっちい！　返事してほしいっす！」

後悔しかない。

自分が勉強をしなかつたこと、赤点をいくつもとつたこと、補習を受けていること、補習の後に遊ぼうなどと一人を呼び出したこと、そして待ち合わせに遅れたこと。

「ヤタテえ！　ミズキい！」

すべて自分の責任だつた。

「邪魔だ、どけ！」

誰かに突き飛ばされて、ナツメは転んだ。

すりむいた膝から滲む血、そして視界が滲んでいく。目の前の道路が吹き飛んだ。丸く凹んだアスファルトに魔法少女の一人が仰向けて倒れている。現実とは思えない光景だつた。ナツメはごじごじ

と目を擦つて周囲を見回す。よく見ると、そこら中に魔法少女が倒れている。また爆発音。見上げると少年が飛び上がり、魔法少女の一人を蹴飛ばしていた。

「あの子が、たった一人で……？」

この惨状を。

ビルの屋上の看板に巨大な穴が開いた。
ナツメは自分が立ち上がれなくなっていることに気付いた。腰が抜けるなんて、フィクションの話だと思っていたのに身体が自由にならない。脚に力を込めようにも地面の上を滑る。焦る。早く二人と合流しなければ、一人になにかあれば自分の。

じたばたしていると不意に腕を掴まれて身体ごと引っ張りあげられる。

「君、大丈夫かい？」

口ひげを生やした男だった。短く刈り揃えた髪には白髪が混じっているが、顔立ち自体は若く、日焼けした腕は引き締まっている。「は、いっす」

一瞬ボーっとして、ナツメは首を振った。

「そうか、なら早く逃げるといい、ここにいてはダメだ」「ダメっす、自分、友達を待たせてるっすから……」

「この状況だ、友達も逃げている」

「いえ、さっきまであの店にいたはずなんす、だから、ありがとうございましたっす！」

ナツメは店を示して頭を下げる驅け出した。

「わかった、一緒に行こう」

男はそう言いながら、ついてきていた。

「そ、そんな、オジサンこそ、逃げた方がいいっす！」

「君みたいな可愛い子を見捨てられない。あとオジサンじゃなくてオニイサンでよろしく」

「かわ……っ、なに言つてるっすか！　おおおおオニイサン？」

「そういう感じが可愛いんだ。はははは」

「そそそ、それ以上言つと、け、警察呼ぶですよ！」

「そりや困るな」

そんなことを喋っていたので、ナツメは横を通り過ぎた一人を見落とした。

「ナツメだ、ぜつと」

「ナツメちゃん！」

気付いていた二人は呼び止める。

「呼ばれてるの君じゃないかい？」

「え？　あ、二人とも、無事だつたんすね？」

振り返つてナツメはほつと安堵して笑つた。

二人とも少し埃まみれで汚れた雰囲気はあつたが、傷などはなさそうだった。

「良かつたつす、ホント、良かつた……」

そして涙が溢れてきていた。

ナツメは両手を広げて二人にかけよつていく。

「……なにを、この非常事態につ！」「ラブコメしてるんだ、ぜええつつと」

そこに一人のカウンターパンチがダブルで入つた。

ナツメは仰向けにぶつ倒れる。

「もう、信じられないっ！　ナツメちゃんがそんな尻軽吊り橋効果女だつたなんて！」

ヤタテは地団太を踏んだ。

「見てた。ずっと見てた、ぜつと。アニメしか愛せないと誓つた星を忘れたか」

倒れたナツメの顔に向かつてミズキは呪詛を吐く。

「ちょ、君ら、友達なんだろ？」

「黙れ口リコン」

「口リ……？」

男は一人の勢いに気圧され、一人の制裁を止めることができなかつた。

2 聖木乃女子学院アニメ研究会（盛夏）（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

3 子供にもわかること

子供にもわかることがある。

「大人しく従うなら、丁重に扱うわ」

昨日の女が冗談のように黃金色に輝く衣装で目の前に立つて言う。身体にフィットするような素材で出来ていて、上半身はピッタリしているのに、下半身は花の薔薇をさかさまにしたような膨らんだスカート状になっている。変なカツコだ、と勇希は思った。だが自分もおよそ変なカツコだという自覚はあった。ホットパンツしか履いていない。だからそのことは口にはしなかった。

「……おとなしく？」

自分を取り囲む奇妙な装いの女たちと、首にぶら下げた鍵が魔力に反応してか勝手に光を放ち始めたのを交互に見て、勇希は笑つた。大人しく従うと思つていなかから、仲間を集めてきている。そんなことは口にしなくともわかり切つたことだつた。

躊躇うことなく鍵を胸に突き立てた。

「ぶーす！」

力は瞬時に解放される。

「一回目よ、それ」

正面から向かってくる女の拳は勇希にも見えていた。そして彼自身が考えるより早く、頭の中にその拳を払つてカウンターを決めるイメージが浮かんでいる。父親が説明したところによれば「鍵には過去の戦闘経験が蓄積されていて、必要に応じて使用者の脳へ干渉する」ということだが、理解はしていないし、使用する当人には反射と変わりない。

「だあー！」

改札口の地面に女の拳を片手で叩き付け、その顔面を残るもう一方で捉えようとする。

だが、

「大人しくしなさい！」

突進してきていたのは他の女たちも同時であった。

死角から飛び出してきた別の女に勇希は脇腹を強かに打たれて吹っ飛ばされる。傷口が露わになり、蘇ってくる痛みに勇希は歯を食いしばる。

なんとか踏み止まろうと突つ込んでいく壁に体勢を立て直すものの場所がガラスだつたため思い切り碎ける。裸足の裏に痛みは感じることはなかつたが、殺しきれなかつた勢いのまま店内に降り、テーブルの上に踏み止まつた。

「いてーよ」

相手は本気で自分を倒そうとしている。

逃げるべきだ、と鍵の経験は告げていた。だが、同時に勇希が見下ろすロータリーに居並ぶ女たちはそれをさせまいと動いているのもわかつた。近くの五人ほどが距離を詰め、その周囲は彼の動きを見逃すまいと囮みながらも注意深く見つめている。

やるしかない。

逃げられないとしても、大人しく捕まるのは論外だつた。捕まるうものなら女たちは自分にどんな要求をしてくるかわからない。それが勇希にとって自分と女たちとの関係をめぐる世界のすべてだつた。モテるということがポジティブな特質であるということは彼自身もわかつていたが、初恋もまだだつた勇希にとって、気がついたら押し付けられている好意はただひたすらに理解不能で恐ろしいものでしかない。

好きでもない子に好きではないとはつきり伝えても攻め立てられ、曖昧に誤魔化せば攻め立てられ、嫌いだと言えば攻め立てられた。そんな風に言わなくても、はつきりして、そこまで言うなんて酷い。どうすればいいのか答えはなかつた。

思い切りテーブルを蹴つて高く飛び立つ。

「どけえええええつ！」

目の前に来た一人を勢いのまま突き飛ばすが、周りの数名にカウ

ンターを食らつて鋭角に別のビルへ叩きつけられた。全身の骨が激しく軋む。

「……っが」

意識は空ろになり壁面が崩れるのと一緒に地面に向かつて落下する。

しかし回り込んでいた別の女が視界に入つて、勇希はハッと壁を蹴り、自ら選んだ地面へ着地し、挟み撃ちにしようとした別の一人の蹴りを防御する。

「何人いるんだよ！」

数え切れなかつた。

二人の攻撃を受けて動けない勇希に向かつて更に一人が突つ込んできている。

「あなたみたいな子供が、この力を使っちゃダメなの！
勝てつこないのわかるでしょう？」

「……っ」

勇希は全身に力を込めた。

胸の中で鍵が激しく熱を帯びているのがわかつた。それは降り注ぐ太陽の熱とも、足の裏を焼くアスファルトの熱とも違う、勇希自身の奥底に点火する熱だつた。負けたくなかつた。打ち勝ちたかつた。自分を取り巻く不自由に。

「だあああああっ！」

目の前の一人に拳を振り回したが子供の腕ではリーチが足りなかつた。

軽くかわされ、別の三方から頭と胴体に打撃を受け、踏ん張りきれずに地面を転がる、別の誰かに蹴り上げられ、更にまた別のビルへ。ピンボールのように空を舞つた。何度も意識が飛ぶ。何度も痛みを堪える。何度も足搔く。コンクリートの壁が打ち碎かれ、瓦礫が飛び、人々は逃げ惑つていた。それはまるでスローモーションのように見える。オフィスになだれ込み、ガラスが飛び散り、粉塵が巻き上がつた。

そして限界が訪れる。

「……もつ」

身体が鍵を拒絶しはじめている。胸の辺りで熱が瀠む。吐き気のような、眩暈のような、耳鳴りのような。今日は一回目だが、合わせても十分も経っていない。

まだ、ダメだ。

「なるおつ！」

勇希は胸を押さえて踏み止まると田の前に迫っていた一人を反射的に後方へ投げた。立ち上がった場所はビルの空きテナントのようで、フロアにはなにもない。三方に窓があり、数人の女たちがじりじりと迫ってきていた。逃げるのは無理だった。

子供にもわかることがある。

「負けられねえーんだ！」

そう叫んだものの、勇希の意識は朦朧としていた。

フられるとは思つていなかつた。

自分とまったく同じ顔の少女が自分の母親だと勇希も理解していた。本当は父親が人間に戻るはずだったのがどうしてそうなつてしまつたのか、父らの会話からは理解できなかつたが、母親のことを話しているのだと理解していた。

でも蘇つたのは母親になつていらない母親だつた。

カプセルの中で肉体が形作られる様の一部始終を見届ればわかる。顔立ちも背丈も変わらない、そんな母親を目の前にして勇希は混乱した。

しかし混乱しながらも銃弾でモニターが碎けるような、そんな激しい衝撃が彼の胸を突き抜けていた。それが恋なのだと理解するまでもなかつた。いつも鏡の向こう側に見ていた、ありえないもう一人の自分が現実の世界に現れたのだ。

そして同時にそれが母親であることもよくわかつた。確かな記憶にはないにしても、写真では何度も見て、いてくれたらどんなにいものかと何度も夢想した相手がそこにいるのだ。入学式も、授業

参観のときも、遠足のお弁当も、運動会も、学芸会も、誕生日も、クリスマスも、欲しかったもの、心が躍らないわけがなかつた。

母さん、そう呼びたかつた。

けれども、この母親はまだ自分を産んでいない。これから産むことも決してない。

母親ではあるが、決して母親ではない。

衝撃と感動の中で、勇希はそんな残酷な事実に直面していた。

『あ、あと、おれと結婚してください！』

口走つたのは自分のものにしなければという焦りだつた。それ以外には思いつかなかつた。父親にも渡せない。仮に父親と夫婦になつて、そこに生まれてくる子供は決して自分ではないのだから。勇希には直感が働いていた。自分がモテてきたのはこの瞬間のためだつたのだと、ある種の運命すら感じる。告白するのははじめてだつたが、フられるわけがない。

だが結果は。

あそこで逃げずに、いつそ無理矢理にでも連れて来れば。

一瞬の思考だつた。スローモーションでよろける視界の中、勇希は悔しさを噛み締める。

「呆れた子ね、どれだけ頑丈なの」

「油断しないで、ティディさんも言ってたでしょ、この子は……」

女たちはもう半歩で手の届く位置にいた。

「あー、そーか……」

鍵穴に鍵が納まるような感覚があつた。

ぴたりと足の指が床を掴むのを感じながら、勇希は呟いた。

「わかった」

自分も、自分に好意を押し付けてきた女たちと、結局は同じだとうことを。

力チリ。

それは小さな音なのに、バラバラと崩れる壁の音や、ビルの外から聞こえてくる騒音をものともせずフロアに響いた。勇希の耳はそれ

が意味するところを理解している。

シリンドラーは回る。扉を開く準備が整つたのだ。

その低い響きで、フロアにいる女たちは顔を見合させて立ち止まる。

「……聞こえただろ？」

殴られた身体中が痛んでいた。

「負けられねーんだ」

それでも、こんなところで捕まつて立ち止まつてはいられない。

母さん。

勇希の肉体に変化が現れはじめていた。鍵を突き立てた胸の中心から、うっすらと光の模様が描かれはじめる。それは地中に張る根のようにじわじわと首へ、腕へ、腹へと伸びていく。限界は超えていた。吐き気も眩暈も耳鳴りも、もうない。

その様子を見て、女たちはすかさず剣を抜いた。

「まずい、あれって」

「《変異》を制御できない、止めないと」

「おそいよ」

勇希は床を蹴つていた。

最初の女がビルから飛び出したのと、最後の女を突き飛ばしたのはほぼ同時だつた。八人、勇希を取り囲んでいた全員がビルの四方八方から飛び出してフロアが一気に崩れ始める。壁と柱を貫通するように平手で押し出しただけ。力関係は逆転していた。

勇希は悠々と歩いてロータリー側の破れた壁に向かう。

「父さん……」

ビルを囲む女たちを見下ろして勇希は唇を吊り上げた。

「やつぱり、おれ、父さんに母さんをわたせないよ」

抜けのような青空を見上げ、肌を焼く太陽の輝きに目を細めながら、それにも負けず胸の中で力を増していく感触を勇希は感じていた。迷う必要はなかつた。

子供にもわかることがある。

本当に欲しいものは自分で手に入れなければならぬ。

3 子供にもわかる「」と（後書き）

お読みいただきありがとうございました。（後書き）

力チリ。

その音を聞きながら、テディは運命を呪つていた。

数秒も経たず、ひとつビルが崩壊をはじめる。追い込まれた少年の『変異』が暴走をはじめた証だった。こうならないことだけを祈つていた。

「おじいちゃん」

神を信じないテディは胸に手を当てながらそう呟く。

テディ・N・ボーラードウイン、彼女は四分の三までアングロサクソンの血を受け継いでいる。母方の祖父だけが日本人だったが、結果的にテディが守護者になることを決定付けたのは、少ないその四分の一の血であった。両親の不和が原因で預けられた日本の地、そこが木乃市であり、そこで魔法と出会ってしまった。

そして今、こうしてここで守護者をしている。

不満はなかつた。テディにはその資質があり、それを為す意志があつた。道のりはまっすぐで脇道も寄り道もなく、障害は自らの努力によつて破つてきたのだという自負もある。これまでしてきたことに疑問も疑惑もない。魔界の穴を守護し、この世界の安定を保つ。それは、まぎれもなく彼女にとつての疑う所のない正義であり、守護者としての拠り所であった。

だが、それも一夜にして一変しつつある。

あの少年との遭遇によつて

初めての失敗。

守護者の最も重要な仕事は、魔界の穴そのものの守護である。

とは言え、基本的には穴の存在がまず秘密であり、穴周辺には魔法によつて一般人は近寄ることもできない。その上、日本という治安の良い条件、木乃市の場合は長年に渡つて女子高の構内という極め

て特殊な場所を維持していることなどで、世界的に見ても安全と看做される場所であった。事実、三十年遡つても重大事案はたつたの二件しかない。だからこそ、まだ若いテディ一人が正式な守護者として任命されたのだとも言える。そして彼女が一高校生として聖木乃女子学院にやってきてから一年半、そして大きな事件は起こらなかつた。

しかしそのことでのテディが油断していたという訳ではない。小さな事件は月に数回のペースで必ず起ころる。多い月は十数回、守護者の主な仕事はそちらになる。

魔法の穴に近付く者の選別だ。

近付く者はおよそ一種類に分けられる。

一つ目は資質を持つ者たちだ。魔力に対して反応する魂を持った人々、彼らは望むと望まざるとに関わらず魔界の穴に誘引される。二つ目は知識を持つ者たちだ。非合法に取引されている書物などから魔法を知りその悪用を口論む人々、彼らは望んでやつてくる。守護者はその二種類を選別する。その内にある資質によって他意なく近付き、魔法を知ってしまう人々を守護者は捕らえ、そして専門の教育機関に移送する。魔法の存在を知り、それを悪用しようと近付く人々を守護者は捕らえるか、あるいは殺すことを許されている。

しかし、少年は前者であり後者でもあるように見えた。

テディには最初からいくつかの誤算があつたことは確かだつた。少年の女装を見破れなかつたこと。穴の周辺にテディが張つた魔法が破られ、駆けつけ、その後姿を見た彼女はある意味において安堵してしまつた。同じ学校の生徒ならば、二種類の前者であれ、後者であれ話し合えないということはない。

その油断。

猫が喋つたこと。魔法を使えばそういうことは起こりうるという知識はあつたが、現物を見たことはなかつた。ほんの一瞬だが目を奪われた。

その一瞬の隙。

少年が鍵を持っていたこと。鍵は守護者がその候補生であるときに与えられ、その当人にしか使用できない。その数は厳重に管理されており、使用者が引退するか死んだときにのみ候補生が補充されるシステムで、過分も余分も原理的に存在しないはずであるものだつた。それ持つていてるということは「敵ではない」という確信があつた。

その思い込み。

猫が父親だつたこと。テディの身体は、刻み込まれた激しい訓練の結果をきちんと飲み込んでいた。強襲を防ぎ、反撃を与え、確実に追い込んだ。少年は魔法を知つて、それを悪用している。だが子供だ。悪意があるのか、父親に唆されているのか、それが判断できなかつた。子は真剣に父を心配し、父は本気で子を心配している。それが感じ取れることで、殺すつもりで動かした選別の手は気付かず緩んでいた。

その甘さ。

そして最大の誤算。

「あなたらしくなかつたわね」

「……申し訳ありません」

どうしようもなく下らない手口を思い出して、テディは俯く。

中庭を見下ろす学院の理事長室。報告を受けて夜半過ぎに出先から戻ってきた理事長は、椅子の背を彼女に向けて、窓の外を見ている。窓ガラスに映る顔には深い皺が刻まれている。この地において何十人の守護者を見てきたという老女もかつてはひとりの守護者であつた。

「怒つている訳ではないわ、少年と、喋る猫だつたかしら」

「はい」

ガラス越しに理事長の目を見て、テディは頷いた。

「私に心当たりがあるわ。管理外の鍵の件を含め、あなたが気に病むことはない。すべては私の責任だわ。あなたがされたことも、十

八歳の乙女がそれを受け流すようでは、守護者としてはともかく、学院の生徒としては問題があると思わなければ」

「……」
「うーん、理事長は満更でもないように笑つた。

「けれど、タイミングは最悪だつたわね」

「え？」

テディの目の前で理事長の椅子がぐるりと回転した。

「失態は私が被りますから、名誉は自らの力で挽回なさい。あなたに、その少年の捕縛、さもなくば抹殺を命じます。その際、学院外での鍵の使用、扉の開放も認めます。補助として関東近縁から召集する候補生3~4名を付けます。有効に活用なさい」

「学院外、ですか」

テディは青ざめながら言ひ。

守護者は通常、鍵の使用を定められた場所のみに限定されている。それは魔法の秘密を守るために、同時に、周辺への被害を最小限に抑えるためであつた。

「無関係の人々を巻き込むのが恐ろしい？」

「いえ、相手は鍵を持つています、ですから、必要な措置だと……」

「魔力は人の魂を魔へ導く」

理事長は守護者たちが絶えず聞かされる言葉を口にした。

「それはあなたたちも例外ではない。扉を開ければ、確実に魂は魔に染まつていく」

「……」

テディは唇を噛む。

理事長の表情に搖らぎはない。だが、彼女は十年前に、この地で守護者をしていた孫を失っている。その事実はこの学院にいる候補生含め、全員の知るものだ。

「あなたたちが外で戦えば、相応の被害は出る。それでもあなたたちが敗れれば」

覚悟を持って自分たちを送り出している。

「わかっています」

正義を行使する者にとって、迷いは弱さに他ならない。

テディに全ての人々を守ることはできなくなっていた。

鍵の使用が都内で観測され、その波長が木乃駅へと向かう路線で移動はじめたとき、駅前は決戦の場と定められた。魔法について説明することができない以上、事前に人々を逃がすことも出来ない。守護者も、その候補生も鍵の使用時は一般市民との接触を断つ。

その覚悟を示すのが戦闘装束である。

少年がこの場から逃げ出さないように抑え込みつつ、派手に暴れて危険を知らせ、人々が自動的に退避する時間を稼ぐこと、それだけがテディにできることだった。

「テディさん……大丈夫です、一百人は配置に着きました」候補生のリーダーが、ロータリーの中央に立つテディの前に現れる。

「やれます」

「街の人たちは？」

少年が次々に候補生たちを弾き飛ばしていた。胸元の布地を掴んでテディは感情を抑制する。自分が戦えば仲間たちを助けることはできる。だが、それでは被害が拡大するのだとわかつっていた。それでも相手に殺意がないのがせめてもの救いだった。

「範囲内からは逃げてくれたようです。ケガ人も相当数……ですが確認する限り、死者は」

リーダーはそう言いながらも目を伏せた。

「わかった、みんなは順次下がって、あとはあたしがやる」

テディは頷き、意識を集中する。

装束の内側で身体に流れ込む魔力が増大するのがわかる。

「三分……それで扉を開けるから」

「了解しました。生きて、帰ってきてください」

リーダーはそう言うと、少年に吹き飛ばされた候補生を拾いに離

れていく。

「……死ぬつもりは、ないけど」

呟いた。

覚悟は持っている。

テディは大きな十字を切り、剣を抜き放つて地面に突き立てた。ロータリーの中心から地割れが広がり、光が溢れ出す。それが会図だった。少年に立ち向かっていた候補生たちはそれぞれが決然と立つ守護者の姿を見て、その場から離れていく。空気が変わったことに気付いたのだろう、少年は周囲を見回している。

「……」

そして地上から見上げるテディと田が合つた。

ふわりと空中を蹴つて、少年が駅舎の屋根の上に降り立つ。

「おれのことあきらめてくれた？」

「そう見える？」

少年に合わせて、テディは声を張り上げた。

「ぜんぜん！」

悠然と、少年は笑つて言つ。

「あなた、名前は？」

「馬園勇希」

「コウキ。そう。あたしはテディ」

名前を聞いたことに理由はなかつた。だが、誰を殺すのか、知つておくことが必要であるようにテディには思えた。ここで少年が死んだ場合、その最期は彼女しか知ることができない。

「テディ。おれ、昨日みたいにはいかないよ？」

そう言つ少年の身体は溢れ出す魔力を受け入れようと《変異》をはじめていた。

扉が開かれつつある。

「それはこっちのセリフね。女に恥をかかせて、無事で済むと思わないで」

軽口に応じつつも、テディは緊張して、その様子を見守る。

残り一分。

テディの目の前で少年の肌が紫色に染まる。血管を通じて伝わる魔力は白由まで染める。両肩から生えてきた角のようなものは、その紫の皮膚を広げ、毒々しい翼となつた。少年自身も自分の身体の変化に気付いたようで驚いたような顔をしている。女の子のようだつた身体も、ごつごつとした骨が浮かび上がつてまったく別のものに変わつていく。

「なんだこれ」

「ユウキの魂は開かれた」

テディは迷いを振り切る。

扉の開放。

鍵を使うことによつて起こる肉体の『変異』は本来『そのもの』の形に影響を与えることはない。魂は『そのもの』の形を記憶し、この世界に繋ぎとめ、魔力に対しても自己防衛のために閉ざされているものだからだ。だが、魂がそれを求めるとき、鍵はその扉をこじ開ける。それは鍵に内在する性質であり、魔力が持つベクトルそのものである。

魂が望む限り、扉が再び閉ざされることはない。

「それはあたしを排除するまで戻らない」

テディは自らの扉を開けていく。

十秒。

「そして、あたしのこれも」

そう言つた瞬間、一人の頭上に輝いていた太陽が消えた。

4 麗の開放（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

5 境界域の戦い

暗くなつたといつより、自分の周りからなにもかもが消えてしまつたかのような一瞬の闇の後、勇希の目は淡い光を見ていた。それが胸に突き立てられた鍵の輝きでることに気付くのにそう時間はかかりない。駅前は夜よりも暗く、静かだつた。立つていた駅舎の屋根はそのままであり、目の前に見える景色も変わつていないので、街が平坦に見える。

遠景が失われていた。

見渡しても、数百メートル先にはなにもない。見上げてもなにも見えない、空はなかつた。木乃駅前の見慣れた景色が切り取られたセットのようになつてしまつていて。だが、勇希にも数十メートルのビル數十個と学校のグラウンド一つ分はあるロータリーと駅をひとまとめに配置できる巨大なスタジオがそろそろあるものではないことはわかる。

変わつていないのはテディが目の前にいることだけだ。

しかし、その姿は先ほどまでの奇妙な衣装を身につけた女ではなくつている。

金色の体毛に覆われた獣がそこにいた。その《変異》によつて破れてしまつたであろう衣装が足下に落ちていて、人々の人間としてのラインは残つていて、顔の正面、身体の正面、掌にこそ体毛は生えておらず、テディであることは確認できる。勇希が昨日もみしだいた乳房もむき出しになつてそこにあつた。野生味溢れる姿であつた。

「……テディ、カッコいいー！ クマみてー！」

勇希は正直に感想を述べた。

「どうもありがと」

あまりうれしくなさそうにテディは苦笑いする。

「おれはどう？」「どう？」

勇希は自分に生えてきた翼を広げて見せた。思つ通りに動かせる。広がった薄い皮膚の部分が魔力の光を帯びている。ふと触るとお手口に小さな角も映えていた。肘の骨が鋭く伸びて槍先のように見える。身体中から力が溢れてくるような気がする。

「強そうね、魔力的に」

「マジで？ つよそう？ やつたつ！」

単純に嬉しい言葉だった。男子として一度は言われたかったことである。コンプレックスがあつたということではないが、普段、男らしさについて褒められることはまずなかつた。

思わず羽ばたいて宙返りした。

「んんっ」

浮かれる勇希にティが咳払いする。

「忘れないでね、あたしたち、敵同士だから」

「……あつ、そうだつた」

ふわふわと浮かびながら胡坐をかき、勇希は手を叩く。戦うのだった。自分と相手と世界に起きた変化にビックリして頭から吹き飛んでしまっていた。

「でもこい、どい？」

「こいは境界域、あたしたちの世界でもなく、魔界でもない、世界の狭間」

その質問を待つていたかのように、すかさずティは説明した。

「……？」

浮かんだままかわまになつて勇希は首を傾げる。

「わからないとは思つ。理解しようと誓つても難しいだらうつてこと

もね

「そつか、じゃ、やるひー！」

考えてもわからないことで勇希は悩まない。翼を大きく広げて、きりもみ回転すると、彼はロータリーに向かつてまっすぐ突撃する。一瞬の加速だつたが駅舎の屋根がめぐれ上がる。拳に魔力を込めティに振りかぶる。

だが次の瞬間、テディイは飛び上がって勇希の背中に組んだ両手を振り下ろしていた。

「……んげがつ」

「まったく子供なんだから」

地面に叩きつけられた勇希は背骨がへし折れるような嫌な音を聞いていた。既に割っていた地面は、衝撃で瓦礫を巻き上げる。潰れるように伸びた彼の両翼をテディイの足が踏みつける。足の裏にも体毛は生えていない。

「この世界について理解はしなくてもいいけど、ユウキ、あたしを倒してここからどうやられば出られるのかわかつてんの？ 浅はかな子ね」

そう言いながらテディイはグリグリと爪先に力を込める。

「……んぬぬーっ」

踏まれた翼で強引にはばたこうと勇希はもがく。

その力は強く、上に乗ったテディイをものともしない風を周囲に起こしていた。

「まったく……」

「えっ？」

まったく不意の動きだった。テディイがその場でジャンプしたのだ。その瞬間、勇希の翼は自由になり、一気に飛び上がる。

だが、

「痛い目を見て頭を冷やすことね」

それも一瞬だった。

テディイの両手、そこにある鋭い爪が翼の筋肉に引っ掛かり掴んでいた。浮力を失い、落下していく勢いもそのままに勇希は振り回され、今度は頭から地面に叩きつけられる。

「はがつ……」

勇希はテディイの冷たい双眸を見てこの状況にはじめて恐怖する。

「まだよ」

垂直に地面に突き刺さるような状態の勇希をテディイは蹴り倒し、

その背中を踏みつけ、掴んだままの両翼を容赦なく思い切り引き千切つた。

「うあああああっ！」

ぎちぎちぎちぎと肉が避ける嫌な音が勇希の全身を駆け巡る。見上げると、テディのテディの手の中で切断されたトカゲの尻尾のように、自分の翼が暴れていた。紫色の肉の中に、白い骨のようなものも見える。

「……殺^やる、つてこいつことよ？」

そう言つて、テディは翼を地面へ投げ捨てる。

「う、うう」

「でも、まだ殺さない。話し合いで解決するならそれが一番だからね？この境界域の内から元の世界に出る方法は一つしかない。鍵を一本使つ。わかる？ここに刺さつている状態で、もう一本刺そうとする。簡単でしょ？」

「……」

テディがその大きな乳房の谷間を指差すのを勇希は涙目で見ていた。

痛みが治まらない。血は止まっていたし、翼が取れた場所はすぐに再生しようとしているのがわかる。けれども動けなかつた。痛みもそうだが恐ろしかつたのだ。殺される。その意味がようやく実感として彼の中で理解されつつあつた。

「この場所に鍵は一本しかない。あたしの一本と、ユウキの一本。お互い、相手から殺して奪うか、殺されたくなれば相手に鍵を差し出すか、そうしなければ出られない。でも、安心して、一人一緒に出ることは可能よ？」ここはあたしたち守護者が実戦に即したトレーニングをする際に使う場所もあるから。使い方さえ間違えなければ安全に出られる。ただし、二人一緒に帰れるのはユウキがたしに鍵を差し出したときだけ。元の世界に戻つて、あなたは一度と鍵を使わない、そういう条件でならば生きて出してあげることができる」「

血飛沫を浴びた状態だったが、テディイは妙に朗らかに喋った。

「意味、わかる？」

「……おれが」のまま出るには、テディイを殺すしかないってことだろ？」「

再生して一段大きくなつた翼を広げて、勇希は飛び上がった。しかしそれは、戦う意思を固めたというより、逃げる意識からだつた。完全に飲まれていた。

「正解」

そう言いながら、テディイはスタンスを開いて空を飛ぶ勇希に向かつて拳を突き出す。

「でも、無理つ

「つえ？」

先に両翼が本のページを閉じるようにぺたんと張り付いた。

直後、風と言つにはあまりにも硬い空気の壁が勇希の自由を奪う。気付くと背後のビルに叩きつけられていた。そこでようやく拳の風圧が大砲のように自分を打ち抜いたのだと理解する。コンクリートの壁を数枚突き破つてもその勢いはなくならず、ビルを貫通して勇希の身体は中空に投げ出された。

「バケモノだ」

貫いたビルの向こう、テディイの背後で駅舎が跡形も無く吹き飛んでいるのが見える。

反動だけでの破壊力である。

「……勝てねー」

もう鍵を渡してしまつた方がいいのではないか。
はばたく氣力を奪われて、勇希の視界はぐらりとなにもない空間を見上げた。

少年を弱気にさせるには充分な一撃だつた。あれだけの力を持つ相手が自分に鍵を渡すことなどありえない。そんなことは勇希にもすぐにわかった。殺さないでいてくれているだけなのだ。丁寧に事情を説明してくれたのも、鍵を差し出せば殺さないという意思表示

でしかない。テディは負けるつもりがないのだ。

「けど」

鍵を渡してどうなる？

死にたくはない。生きていなければ母親にもう一度会うこともできない。だが、大人しく渡して会えるのだろうか。そんな願いが通るのだろうか。勇希は理解している、この戦いは自分が挑んだものだ。学院で、そして駅前で、女が嫌いだつたから。

身勝手だ。

「許されるわけねーよ」

都合のいい、どこまでも自分に都合のいい甘えた考えだった。

勇希は地面すれすれで踏み止まり、正面を向く。

間髪入れずにビルの壁を突き破つてテディが現れる。

「死ぬ覚悟は決まったの？」

金色の体毛はその一本一本が生きているように動き、徐々に内側から発光していく。魔力が満ち満ちているのが伝わる。それはそのまま威圧感そのものとして周りの空気を細かく振動させていた。降り注ぐ瓦礫がテディの周囲だけ弾かれて飛散する。そのひとつが勇希の頬を掠めて皮膚を切り裂いた。

「……死なねーよ」

異様な重い音と共に、傾くビルを見上げて勇希は唾を飲み込む。

「死ぬのはそっちだ」

来る。

「そ」

勇希は高く飛び上がろうとした。だがそれよりも早くテディの掌が彼の顔面を掴み、地面へ叩きつけた。声も出せないような衝撃だった。その地面を中心に、周りの建物が吹き飛んでいくのを顔に当たられた指の隙間から叩撃する。

「楽に殺してあげる」

「……っ」

仰向けの顔面に振り下ろされる拳を翼で防いだのは反射的なもの

だつた。

硬くなれ。

両側から勇希を包んだ翼はその思いに応えるかのように硬度を増す。衝撃は内側まで貫いていたが、一枚重ねてめり込んでくる拳そのものは止めていた。それで勇希はようやく自分の翼の使い方を理解した。一瞬、柔らかくして拳を受け流すと、横にゴロゴロと転がつた。

「死なねーだろ？」

血反吐を吐きながら、勇希は強がった。

直撃でなくともテディの拳から受けれるダメージは尋常ではない。

「……苦しくなるだけ」

そう言つた次の刹那にはテディの脚が勇希を捉えていた。腕で受けるより早く翼が勇希を守る。だが、衝撃で地面と水平に吹き飛ばされる。水切りの小石のように地面をバウンドし、自ら踏ん張つて、勇希は飛び上がる。

信じられない光景が広がっていた。

「あんなの、勝てねーよ」

テディの正面方向にあつた駅前の建物は粉々になつて真つ暗な空間へ広がっていた。一瞬にして風化してしまつたような具合である。周りを見ると、来た時にはあつた街の大部分がもう跡形もなくなっている。身体が無事であることの方が不思議なぐらいだつた。

「余所見してていいの?」

「げつ」

気付くとテディは目の前まで飛び上がつてきていた。

振り下ろすよつた拳が身体を反らせた勇希の正面を掠める。

「厄介な力」

そう言いながら落ちて行くテディの足下、眼下の光景は街の風景を砂漠に近付けていた。翼を?ぎ取られるような暴風に流されながら、勇希はさらに高く舞い上がる。自分に唯一あるアドバンテージは高さだけだ。

「……でも」

逃げていても勝てない。勝てない限り、これからも出られない。

地上のテディイが豆粒に見えるまで高くまで上がり、勇希は息を吐く。自分でも拳を握って振つてみたが、対抗できるような腕力は備わっていない。鍵の『変異』が自分の身体にどう影響するかは個人の資質によるもの、父親のそんな説明を思い出す。

勇希ははばたく自らの武器を見る。

「そつか」

紫色に輝く翼、それは魔力が通っているということだ。
やるしかない。

勇希は思い切り翼を硬くして、一気に急降下した。

一直線に金色の獸に向かって。

「ちっくしょおおおおおおおおつー！」

ぐんぐん速度を増していく。鍵は告げていた。翼を剣のよつて使え、と。

見上げるテディイと目が合ひへ。

「死ねえええつー！」

「……バカな子」

ほとんど無造作にテディイは勇希の突撃をかわした。

「予想してるよ、そのくらいつー！」

切り返して、背中にその毛むくじらの背中に向かつて翼を当つて行く。

一閃。

滑り込むように着地した勇希はバツと立ち上がってテディイと正対する。

「この毛が飾りで生えてると思った？」

「え？ あつ」

ボロボロになっていたのは翼の方だった。硬さで負けていたのだ。

「剣は、この使うー！」

テディイの指先、鋭く尖った爪が輝いたかと思つと、勇希の両翼が

バラバラに切り落とされた力のヒレのようになつた。そして田の前に立つている。

「終わりよ」

まさにクマが獲物を仕留める時のように掌を振り上げるテティ。

死ぬ。

「なあ……」

その時、勇希の脳裏に過ぎたのは、昨日の戦いのことであった。相手の懷に入り込み、スキを作る。

「これでどうだあっ！」

むぎゅ。

そういう感触を想像して掴んだのだがそこはまるで金属のようだ。

硬かつた。

「あれ？　え？」

勇希は半笑いで田の前のテティを見上げた。

「……」

振り上げたのとは逆の掌が勇希を突き飛ばしていた。

「ひとつ教えておいてあげる」

地面を転がる勇希に追いついて、拳を振り上げながらテティは勝ち誇つた。

「おっぱいは女の武器…」

その通りだ。

薄れゆく意識の中、顔面にめり込む衝撃と共にその言葉は強く勇希の魂に刻み込まれた。気安く手を出していくものではない。迅闇に触れようものなら死を招く。

5 境界域の戦い（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

時は少し遡つて。

声をかける相手を間違えたかも知れないと大友好男おおともよしおは後悔してい
た。

今まさにこの木乃駅前が異様な状況にあると、このに、

「申し訳なかつたつす！ ヤタテつちのマンガと、ミズキつちのP
SPとソフトは自分が弁償するつす！ するつすけども、この人と
はそこで会つたばかりで、ラブコメなんて誤解なんすよ。信じてく
れないつすか？ 自分、アニメに魂売つたつすから！」

好男が声をかけた少女は地べたに跪いて頭を下げ、

「それはこれから行い次第だからね？ ナツメちゃん」

「反省は行動で示すのだ、ぜつと」

それを見下ろす友人らしき二人は仁王立ち、この女子高生たちには緊張感というものがこれっぽっちもない。好男は上空で戦つてい
る少女たちが自分の方へ落ちてこないかビクビクしながら待つてい
た。後悔はあるが、チャンスはチャンスなのだ。

「あー、君ら、話がまとまつたなら早く避難しよう、ここは危険だ」

「……オジサンに言われなくても私たちは逃げられますから」

「心配無用だ、ぜつと」

そう言つと私服姿の二人は制服姿の少女の手を引っ張つていきなり走り出した。

「え？ ちょ、ちょっと待つて」

「オニイサン、さよーならーつすつ！」

ずるずるとひきずられて少女は細い路地に入つていく。

「……おいおい」

呆気にとられた好男だったが、すぐに追いかける。

瓦礫が落ちてくるかもわからないのにどうしてそっちへ逃げるの
がまるでわからないが、女子高生に論理性を求めて仕方がない。

この街に来て、最初に見かけた聖木乃の制服、それを追いかけた結果こうして奇跡的な現場に居合わせることができたのだ。掴んだ糸は最後まで離すまい。半信半疑だつたが本当に世の中が変わるものしねり。好男にもそういう高揚感があつた。

魔界の穴とやらが開かれる現場を見られるかもしけない

そのタレコミは半年前、冬。

「大友さん、魔法、わかりますか？」

挨拶もそこそこに、男は話しました。

「……あれでしょ？ ハリー・ポッター？ なんであんなに売れたんですかね？」

好男はテーブルに置かれた名刺の肩書きと、男の顔を交互に見ながら苦笑いした。

都内の喫茶店。上司が世話になつた政治家の紹介だから、と取材を押し付けられて出向いてみれば、国立大学の教授、ラフな格好だったが、年齢的に言えば出世コースに乗つている方と言うべきだろ。やり手ということだ。しかし、世の中に出ていないのが丸わかりというか研究に没頭してきたという子供っぽさも同居している。「そういうふうにフィクションの魔法ではなく『魔界の生活技法』、それが魔法です」

「はあ……生活技法ですか」

好男の頭に浮かんだのは、油汚れが驚くほど落ちる裏ワザ、みたいなものだつた。そもそも、女性が必ず喜ぶセックステクニック。どちらにしても上司の話の「秘密のスクープ」という響きからは程遠い。期待していたわけではなかつたが、あるいは魔法のセックスというタイトルなら穴埋め記事ぐらいにはなるかもしけない。

「信じられないのが当然だと思います」

「いえいえ、そんな。魔界の生活技法、興味深いですね」

つまらなそうな顔をただろうかと、好男はコーヒーを飲んで誤魔化す。

「あるものはある、としか言えない面があつて、魔法の実在という前提を議論すると長くなってしまうので、こちらの資料を渡します。後で確認してください」

「……はあ」

そこは大事じゃないのだろうか、と思いながら、好男は男の差し出したフラッシュメモリを受け取る。面倒な話ならば聞かないで済むに越したことはない。

「それで、魔法を使うには魔力、というものが必要なのです。大友さん」

「魔力」

ふんふん、と頷きながら好男は今晚なに食べようかと考えていた。魔力、魔法、魔法と言えば床とかにごちゃごちゃと円を描いてうんたらかんたら。まりょ、まりょね、マヨネーズでごちゃごちゃと、そうだ。お好み焼きを食べよう。鰯節が踊り、ブタ玉が召喚される。考えると胃がきゅっとなった。

「魔力はこの世界には存在しないものです」

「……え？ 存在しない？ でも魔法はあるって、先生？」

脳内で焼ける鉄板から現実に戻つて好男は反応する。

「魔界にあるのです」

「……はあ、だから魔界の生活技法」

魔界があるのかよ。

好男から真面目に聞く気力は失せていた。一人でお好み焼きは少し寂しい、最近、いい感じになつてきただあの子を食事に誘おうか、そんなことしか頭には浮かばない。

「この世界で魔法を使うためには、魔界から魔力を持つてこなければなりません」

「はー、大変ですね」

相槌だけは職業的に欠かさない。

学校の先生をやつてるつて言つからなー、急に呼び出しても来てくれないかなー。

「そこで魔界の穴、というもののが登場してきます」

「ええ、ええ、穴、穴ですね」

「いいケツしてんだ。

「しかしそれは基本的に閉ざされているものです。何故なら、魔力と言つ工ネルギーは工ネルギーであると同時に人間の魂に強い影響を及ぼす危険なものもあるからです」

「なるほど」

「魔力によつて魂が『変異』すると多くの人間は自らが持つ本来的な欲望から逃れられなくなると考えられます。その先にあるのは社会秩序の崩壊に他ならない。それ故、世界中に数千箇所あるとされる穴ですがひとつひとつ厳重に守られている」

「ガードが堅い、わかります。」

落ちそうで落ちない。

「そう、本来は決して開かれるものではないのです。にも関わらず、ある勢力が魔界の穴を開こうとしている。その事実を広く世間に伝えてほしいと考えています……」

男は結局それから一時間ぶつ通しで話しつづけた。

しかしそのタレコミが広く世間に伝わることはなかつた。その日、好男は女にフられた。そのショックもありメモこそ取つていたもののその存在を忘れたままになる。それを記事にせよとの上司の指示もないまま、春になる前に彼はクビになり、結果としてそのタレコミの存在自体、最初からなかつたのと同じことになつてしまつた。失業後はずつとパチンコに通うばかりのプラプラした生活を送っていた好男は、金に困つて売るものを探していたときに、男から受け取つたフラッシュメモリを見つけ、気紛れの興味と暇に飽かせて男の話を追うことにしてたのは氣の迷いみたいなものだつた。季節は夏になつていた。

そして、世の中なんて変わつてしまえばいい。

魔法は胡散臭かつた。それでも好男の関心を集めたのは男から受

け取った資料の中には、大規模で不透明な予算である。防衛予算が形を変えて、国内のいくつかの私学へ流れ込んでいる。そこまでわかれれば充分だった。魔法の実在は信じられなくとも、金の動きは信じられる。金が動く所にはなにかがある。魔法よりもっとマジカルな利権が。

魔界の穴。

好男の頭の中で、それは金を飲み込んでいくブラックホールのようにになりつつある。長くつづく不況、下り坂の世情、上がりつづける税金、失業した自分、なにもかもがそのせいであるようを感じられてくる。ハツ当たりには違いない、だが当たる理由はある。それが開かれて世界が変わってしまうなら、自分を取り巻く境遇も変わるはずだ。

シンプルな確信だった。

そして確信は実感に結びつく。

木乃市、そして聖木乃女子学院を選んだ理由は単純にリストの中で最も近場だったからという理由だが、結果的には正解だった。

守護者。

男の資料によれば、魔界の穴を守るために教育されている少女たちで、幼い頃から清廉潔白な魂を育て魔力に対しても抵抗力を獲得した魔法使いであり、その任務遂行のために超法規的権限を与えられているとのことだ。

「…………一般市民を勝手な戦いに巻き込んで痛くも痒くもないつてことだ」

駅前の惨状を後に見ながら、好男は細い路地を駆けていく。

「あいつらこそがこの世の癌で、

「頑張れ、少年」

ならばそれと戦うあの子供こそが正義に違いない。

男子が魔法使いになることはない。そう男の資料には書かれていた。

それは女子と男子の魂の生育過程とやらに根本的な違いがあるから

だという。男は欲望から成長し、それを理性で押さえつけていき、女は理性から成長し、それに応じた欲望を持つ。好男にも同意すべきなのかどうなのかはわからない意見だが、あの少年が男である時点でそうした魔法の裏事情から外れた存在であることは確かだつた。誰かが魔界の穴を開けてくれればいい。

その現場を見届けてやる。

「にしても、足速いな、あの子ら」

ナツメと呼ばれていた少女の足が遅いらしく、時々もたつくので離されるということはなかつたが、あと二人はまだまだ余裕がありそうだつた。体力に自信があるつもりだつた好男だが、若者にはなかなか勝てない。脇腹が痛くなつてきていた。

運動不足だ。

一キロぐらいは走つただろうか、肩で息をしながら追いかけると不意に三人の動きが止まつた。来た方を見て硬直している。変質者と勘違いされたかと好男は作り笑顔をしてみたが、その表情が恐怖に染まつてゐるので振り返る。

「街が……」

思わず呟いた。

四人が立つ百メートルほど先から、線路辺りまで、直線で五百メートルほどだろうか。

好男は慌てて駆け戻る。

ケーキにナイフを入れて四角にくり貫いたかのように、地上の建物とそれを支える地面が忽然と消失していた。十メートルはあろうかという深さまで抉れた地下は、寸断された上下水道から溢れていると思しき液体が広がつてきている。

「魔法少女っす！」

背後からした声で見上げると、守護者の少女がその周辺からジャンプして飛び去つていくところだつた。あの少年ごと街の一角を消し飛ばしたのだ。魔法で。好男がそう理解するのに時間はいらなかつた。なんということだ。

たつた一人でこの腐つた世の中に戦いを挑んだ少年が死んだ。

「これで社会の秩序を守つたつて？」

「そんなバカな話はない。」

「ふざけんな」

それでいいはずがない。

陽炎の立ち昇るアスファルトの上、ぽつかりとあいた巨大な穴、一気に流れ出してきた汗を拭いながら、その時、好男は決意していた。

「穴を守るために街に穴をあけて、それではいそうですかとは言えないと。」

「誰も開けてくれないなら、自分で開けよう。」

6 魔法よりもマジカルな利権（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

7 君の尻を見ていいのは私だけだと思いたい。

列車が一度急停車し、しばらくして動き、近くの駅に降ろされた。リュックの中にいる私には細部の状況までは把握できないが、人身事故の類ではないらしい、ということぐらいは聞こえる音からもわかる。少ない乗客の戸惑いの雰囲気も伝わってくる。どうやら異常事態のようだ。

「Jの駅もきれいになつてゐる……」

笑子の方はと言えば、二十五年で大きく変わってしまった駅や街並みの数々に驚くことばかりのようだ。自動改札には引っ掛けかり、山の手線の広告モニターは信じられないようだつた。長年この沿線に暮らしている私でさえ、ふと氣付くと昔の風景がひとつも残っていないことに驚いたりするのだからそうだらう。それでも、彼女は自分が過去から未来へ来たのだということそのものは落ち着いて飲み込んでいるようだ。SF小説が好きだといつか言つていたから、おそらく心の準備が出来ていたということなのだろう。

「……ふあー」

感嘆している。

ゆつくり二十五年後に慣れてもらいたいところだったが、私の髪が感じる気配はなんらかの危機を感じ取つていた。

虫の知らせもそうだが、半裸の状態で先に帰してしまつた勇希のことも気がかりになつてきていた。子供だから捕まりはしないだらうと考えていたが、冷静になつてみれば、なんらかの事件に巻き込まれたと警察に保護されるというような事態は充分に予想される。それでもまだ警察ならいい。鍵を使わせてしまつたことで『転位』反応から息子の居場所が守護者側に発見される可能性もあつた。

そんな私の心を反映しているのか、ホーム内を行き交う人々の顔もどこか不安そうに見える。嫌な予感がする。最近の私の裏目づきから言つても。

「君、駅員か誰かに事情を聞いた方がよくないうちつか？」
リュックの内側から背中を押し、私は呼びかける。

「え、あ、そうですね。まぞのさん」

やはり異常事態だつた。改札脇の駅員室前が騒然としている。キップの払い戻しや振り替え輸送について尋ねる人々、そして完全に顔色が変わっている人々。私も思わずリュックから半分出していた頭を思い切り出して聞き耳を立てる。

「木乃駅が消えたってどういうことですか？」

中年の女性のヒステリックな叫びが突き刺さる。
消えた？

「どういうことですかね？」

「……」

笑子の問いかけにも、頭を出している状態なので返せなかつたのだが、そもそも返す言葉はなかつた。消えたと言われてもわけがわからない。事実を確認している、そんな通り一遍の答えをする駅員の顔も突つ撥ねているというよりは本当に確認している最中という具合だつた。断片的に聞こえる人々の会話からすると、そういう情報がネットを通じて流れているということしかわからない。

私はリュックに引っ込んで笑子の背中を押す。

「とりあえず出よう、タクシーを拾つて行くしかない」

「タクシーですか？ お金あります？」

「あ……」

私は中で勇希の財布を確認する。私が死んだことになつた後、母からずいぶんな小遣いを与えられているらしく財布の中身が潤つていたのを最初の晩に見たが……案の定というか、下着を買ってかなり目減りしている。ギリギリ、いや笑子の実家ならば、と言つても笑子が十三歳になつていては事情を説明して金を出してもらつたにも時間がかかる。

悩ましい所だ。

「あ、この地下鉄開通します」

「え？」

リュックから顔を出すと、笑子が路線図を見上げている。

「小学生のとき、授業で習つたんですよ。そういう計画があるって。大人になるまで乗れないなって言ってたんですけど、本当に二十五年つてすごいなー。これに乗れば、隣町まで行けます。そこからならバスで市内まで、バス残つてますよね？」

「……ああ。そうだ、つた」

首を引っ込めて私は落ち込んだ。使つていなかつた路線は失念しがちとは言え、タイムトラベル状態の少女に現在の路線の的確な利用法を指摘されるなんて赤つ恥もいいところだ。

私が過去の人間か。

「なんかこんなに早く乗れるつて得した気分ですね」

「そうかもしれない」

足取りも軽く笑子が歩き出すのを感じながら私は深く深く沈んでいく。

地下鉄には影響が出ていないようだった。その車内の会話からおよその事態が私にも飲み込んでくる。そしてそれの意味するところも。『魔法少女』という単語がしきりに出てくる。私も詳しい方ではないがそれが守護者たちをある種のフィクション的な存在として捉えた呼び名だろう。話の大枠は、魔法少女が少年を襲い、街が壊れたという未確認の情報。そして駅前のビル群と駅舎の消滅。そのタイミングから類推されるものはひとつしかない。

勇希だ。間違いなく。

しかしあまりにも手回しが早い。半年前の時点でも、そこまでフットワークの軽い組織ではなかつたはずだ。確かに管理されていな鍵とそれを使う男子が現れたことは重視される案件だろうが、そこまで強引な手法を取る事前準備が一日やそこらで整うとは考えにくい。つまりは準備が出来ていたということになる。

私たちに対しても手回しが早い。半年前の時点でも、そこまでフ

隣町の地下鉄駅にも微妙な雰囲気が漂つていて。

この目で見るまでは信じたくないが、噂として流れている情報が本当ならば当然だろう。

「バス、運休ですか

笑子が残念そうに言つていて。

私はすぐにでも飛び出して向かいたい気持ちを殺してリュックの底で丸くなる。猫の私が出で行つても笑子に背負われて行くより早く移動することはできないし、消えた街の中に勇希がいるとするならばすぐに外から助ける術はない。私の力だけでは及ばない。それを考えると笑子に事情を説明もできない。まずは笑子の母に会い、そこから話を通すのが事態を開する最短の順序だ。

これは本当にタイミングが悪いかもしね。

「ここからはタクシーを使うしかなさそうですね」

駅周辺で客待ちをしているタクシーに乗ろうとするが、運転手たちから木乃市近辺の道路は大混乱で到着が困難だと言われ、次々に乗車を拒否される。大通りに出て数台を止めてみたが結果は同じだつた。笑子が子供なので乗せたくないという裏も伺える。

しかし恐らくそれすらも表向きの事情だろう。

笑子は人気のない裏路地に入り、リュックを地面に置いて私を引つ張り出した。

「どうなつてるんですか、もう」

憤懣やるかたない様子で、そう言つ。

「木乃市は今、封鎖されている」

状況から導き出される推測を私は口にした。

「封鎖、ですか？」

「電話も通じないはずだ……」

極めてまずいことになつた。

これは私が知る限りでも非常事態の対応に相違ない。人間の行き来を止め、物理的な封鎖が行なわれると同時に、内側では外からの情報が封鎖されているはずだ。市民にも知らさないまま、街は孤立

している。パニックを封じるための自衛隊も活動をはじめているはずだ。

勇希への対応はその一部でしかない。

むしろ私と息子の行動がなにかのきっかけとなつたのかも知れないが、この際どちらが先で後でも問題は同じことだ。笑子の実家も、私の家も同じ市内にあるわけだから行く手を阻まれたに等しい。完全に蚊帳の外。いや、それは人間だからだ。

そう、今私は猫だった。

猫ならば封鎖もなにも関係ない。市内に入ることも難しくはないはずだ。笑子を連れて行けない状態で笑子の母親に会つて説明するのは大変かも知れないが、それくらいはやつてやれないことではないだろう。笑子をここで待たせることになつてしまつが、息子のことを放置しておくわけにもいかないだろう。どちらが危険かと言えば息子の方である。

「……君、しばらくここで待つていて、え？」

思考から、顔を上げると、笑子はいなかつた。
どこへ？

私は周囲を見回して路地から通りへ出る。その左手側、五十メートルほど行ったところにケータイを耳に当てて首を傾げている笑子が立っていた。まったく知らない道具だったはずなのにもうその使用を飲み込んでいる。のはともかく何をしているのだ？

「あ、それでお願いします」

集中して声を拾う、なにかを指差して、何度も頷いてくる。

「乗つて帰られますか？」

女性の声もある。

「はい」

「少々お待ちください」

リュックから離れることも出来ないので見ていると、笑子がこちらに気付いて、両手で大きな丸を作った。なにがオーケーなのかさっぱりわからない。と想う間もなく、笑子の正面の建物から自転車

を押して女性の店員が現れ、値札等をテキパキと外し、ペダルを取り付け、タイヤに空気を入れ、サドルの調整をしている。

自転車だ。

ものの十分で、笑子は赤いそれを押して戻ってくる。

「本当に電話繋がりません。直接行くしかありませんね？」

「……いや、君、封鎖の意味を」

「それにしても自転車って安くなったんですね。さつきタクシーを止める時に見つけて気になつてたんですよ。さあ、行きますよ。舞さんと約束しましたから、なにがなんでも」

そう言って、笑子はリュックと私を拾つて、自転車のカゴに放り込む。

そしてワンピースの裾を気にながら自転車に跨つてペダルを漕ぐ。服の下にはなにも着けてない状態だから無理もないが、サドルに乗せた尻が落ち着かないようでもあった。どうよくなことはどうでもよくて、

「自転車で行つても通れやしない」

私は周りを気にしながら小声で囁く。

「まぞのさんは、わたしに約束を破れつて言つんですか？」

身体より少し大きな自転車をふらつかせながら、笑子は私を見んだ。

約束を守る、それはかつて少女が私の妻だった頃にも、大事にしていた正義でもあった。変わつていない。そのことは少し嬉しかつたが、怒らせたのは確かだつた。

「そつは言つてない、言つてないが……」

慌てて取り繕おうとするが、笑子は取り合わない

「わたしの街です。行けばなんとかなります」

それだけ言って、腰を少し浮かせてスピードを上げた。

向かい風が来て、瞬間、ワンピースがまくれあがつた。

なんの反射なのかわからないが、道行く男数名が凄い勢いで振り

返る。

「き、君、落ち着いて、丸見えだから！」

「見たい人には見せておけばいいんです！」

完全に前傾姿勢の立ち漕ぎで、笑子はぐんぐん加速していく。

「それ絶対ダメだから！ 捕まるから！」

なにより気前が良すぎる。

君の尻を見ていいのは私だけだと思いたい。

まだ、今のところは。

「お願いだから、君！ お母様に会わせる顔もなくなるから！」
猫が喋っている状態を見咎められるかも知れないという懸念すら
忘れて、私は時を越えた嫉妬に駆られて喫しつづけた。どんなサー
ビス精神があるうとも、安売りしていいものではないし、そんなに
安くもないはずだ。

「わかった！ ジャあ、せめてパンツ、それか下に履くものを買
つていこう！」

「というか、女の子として先にそつちを思いついてほしい。

「自転車、買つたらお金なくなりました！」

笑子は変速機を変え、さらにスピードを上げていく。

「ギアチョンジなんかできなくて、もつと安い自転車あつただろ
う？」

「だつて、この自転車がいちばん可愛かったから！」

「……可愛い？」

私はママチャリと呼ぶにはワインレッドでスポーティに過ぎるシ
ティサイクルを見る。可愛い要素がまずわからないが、その点は男
子と女子のセンス差として、優先順位が端からおかしい。可愛い自
転車の前に可愛いパンツでも買つてくれ、真面目に。

加速していく景色の中で、私は笑子の顔を見つめながら、それ以
上なにも言えなかつた。こいつ無鉄砲な気質は、確実に息子に遺
伝している。そう強く感じながら。

勇希、無事でいてくれ。

7 君の尻を見ていいのは私だけだと思いたい。（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

7 自作自演のキズナ

「なら来てみなさいよ！ 舞の家は木乃市の東側、駅からなら、すぐ近くに小学校があるからそこで会いましょう、木乃東小学校よ。そこに午後一時、わかつた？」

『まっすぐそちらに向います』

笑子との電話を切つて、舞は勢いでケータイをソファーに放り投げた。

「なんなの、ひじき女…」

落ち着かない気持ちでうるさいと家中を歩き回る。

「舞が、勇希くんに騙されてるって、結婚を申し込まれたって、なに！」

無意味に壁を叩いたり、じたじたと足を踏み鳴らしたり、クッシヨンを放り投げたり、家中を散らかしながら少女がたどり着くのはいつものように両親の寝室にある立派な鏡台の前だつた。ゆっくりと前髪を持ち上げ、額を見て、深呼吸する。

キズナだ。

左眉の上から額の中央に向かつて周りの皮膚とは違う白く細長い傷跡が残っている。これがある限り、勇希と…がつてているのだと確認できる。舞はそれが変わらずそこにあることに安堵する。どんな相手が現れたとしても、これがある限り勇希は自分を裏切らない。舞が勇希と同じクラスになつたのは小学五年のクラス替えが初めてだつた。

勇希の名前は既に女子の間では有名だつたが、舞はそれほど興味を持つっていたという訳はなかつた。彼女はみんなが熱狂していると逆に冷めるタイプだつた。美少年だといふことも、モテるといふことも認めるが、バレンタインに貰つたチョコを全部ゴミ箱に捨てたとか、告白してきた相手に容赦なく「ぶす」と言うとか、やたらと「女は」と口にして邪険に扱うとか、悪い評判は枚挙に暇がない。

それがクールなのだとうつとりする友人もいたが、彼女に言わせれば単なる嫌なヤツでしかなかつた。

実際、同じクラスになると、その嫌なヤツっぷりは明らかだつた。勇希は最初からクラスで孤立していた。男子の友だちもいる様子はなかつたし、女子は遠巻きにけん制し合つてゐる。いい気味だ、そう舞は思つた。いくらモテたつて人望があるということにはならない。すまし顔でいるから男子からは避けられ、告白してきた相手を雑に扱うから女子も遠巻きに眺めるだけになる。自業自得だ。舞が見る限り、勇希は子供だつた。

昼休みなど、男子がサッカーやドッヂボールで盛り上がつてゐる様子をずっと眺めている。理科の授業中に新しいことを見ると目を輝かせている。図工で絵を描いているときは妙に真剣だ。朝から憂鬱そうな顔をしていると思うと給食で嫌いなおかずが出たらしい。恋愛に関して妙に大人っぽい扱いを受けている癖に、内面はまったく子供だ。

特別に観察しなくてもすぐにわかる。

要するに不器用だつた。恋愛のことはよくわかつていなくて受け入れられないが、人に好かれたいとは思つていて、でも上手く表現できない。舞の中で嫌なヤツ勇希は、いつの間にか、可哀想なヤツ勇希に変わつていた。それが恋のはじまりだとは彼女自身も気付かなかつた。

女子の間で勇希の話題は度々出た。その顔や、運動神経や、勉強のできるできない、立ち振る舞いが語られたが、可哀想なヤツとしての側面が語られるることはなかつた。そのことが、舞の中で「自分が一番勇希を理解している」という見えない優越感を育んでいく。

クラスメイトになつて一年近く、勇希が忌引きしたのは半年前のことだつた。

「お父さんが亡くなつたんだつて」

どこからの情報なのか教師が事情を説明するより早く噂は広まつた。

勇希が既に母親も亡くしているという事実は周知のことと、両親共に失つたのだということを皆が把握する。それを知ったときに、舞の心の中で膨らみ続けた優越感が化学反応を起こした。なんとかしてあげられるのは自分しかいないのでないか？ 純粹な親切心のつもりであった。

「馬園くん、おはよう」

舞が意識的に勇希に話しかけた最初だつた。

一週間ほどの忌引き明けで、他のクラスメイトがどう話しかけるかと様子をうかがう中、彼女はその一步を踏み出していた。自業自得で、可哀想なヤツでも、もう放つてはおけない。

「……おはよう」

勇希はしばらく間を置いて視線を逸らしながら答えた。

「これ、休んでる間のノート。舞ので良かつたら使って」

父親の死という話題には触れないように、そう悩んで決めたセリフを舞は口にする。賭けだつた。これまでの勇希は女子から貰つたものはことごとく捨ててきていた。

でも今ならば間違ひなく受け取る。

寂しさを誤魔化してカツ口つける余裕はもつないはずだ。舞には確信がある。勇希の心をわかっているのは自分だといつ強い思い込みを疑う客觀性までは彼女になかった。

「あ、ありがとう」

そして、勇希ははにかみながら受け取つた。

「うん」

賭けに勝つたという事実は少女の母性を満足させた。

手のかかる子供に対するような舞の態度とタイミングの妙。複合的要因が結果的に勇希の女性に対する基本的な警戒心を解いたのだろう。二人が次第に親しいクラスメイトの関係を築きはじめるのには時間はかかるなかつた。目に見える不幸な境遇に、同情的になつていたクラスメイトたちも、彼女を基点にそれなりに穏やかな輪を形成していく。

大きな変化があつたといつわけではない、ただ少し勇希が素直になつただけのことだ。

そうして小五の冬が終わる。

小六、毎年の、そして最後のクラス替えがあり、舞はまた勇希と同じクラスになる。

「また一緒に、馬園くん

「そうだな、如月」

二人の関係は変わらなかつた。よく話すクラスメイト。

だが、クラスを構成するメンバーの変化は、それを許さなかつた。舞は気付くと女子グループから浮いた存在になつていて。そして陰湿な嫌がらせがはじまる。上履きを隠されたり、体操服を水浸しにされたり、あからさまに無視されたり。それがイジメだと言うことはすぐにわかつた。しかし、彼女には最初、自分がイジメのターゲットになつている理由がわからなかつた。そういう状況になることを初めてで、どうすればいいのかわからなかつた。

先に気付いたのは勇希だつた。

「おれにこーすりやーいー話だろーが！」

ある朝だつた。

憂鬱な気持ちで登校した舞は、教室に入つて、自分のロッカーにぶちまけられたゴミと、自ら頭にゴミをぶちまける勇希を一度に見て、それを理解する。

嫉妬されていたのだ。

「だれがやつたかしらねーけど、おれが原因なんだろー！」

勇希は怒りをぶちまけていた。

そんな風に怒りを露わにする彼を見るのは舞もはじめてだつた。自分を守ろうとしてくれていることがわかつた。呼吸が苦しくなつて胸が痛くなる。

「おれが如月と……っ！　如月」

さらに叫びかけてだが教室の入り口に立つ舞を見て、バツが悪そくに黙る。

「馬園くん」

その瞬間、舞は恋に落ちていた。

「……如月のロッカー、やつたのおれだから」

だが勇希は、意外なことを口にした。

「え？ それは……？」

わけがわからず、舞は彼を取り囲むクラスメイトを見回す。

だれもなにも言わなかつた。

「わかんねーかな？ 上履きも体操服もおれがやつた、うぜーんだよ、ぶす」

「ゴミまみれの髪の毛をくしゃくしゃと搔いて勇希は言った。

掲げていたゴミ箱をその場に放り投げ、舞の横を通り過ぎる。ボドン、とプラスチックの空箱が間の抜けた音を立てて床に転がつた。気まずそうにしていたクラスメイトたちがすぐに掃除用具をもつてゴミを片付けはじめるのを見ながら、彼女は立ち去ります。

その日、勇希は教室に戻つてこなかつた。

それからイジメはピタリと止んだ。翌日からは勇希も登校していくが、舞はこれまで通りに話しかけることができなくなつていて。勇希の拙い自作自演を信じたというわけではない。自分を犯人にして原因ことなかつたことにしようしてくれたのは、自分を想ってくれればこそのことだ。その真心をムダにしていいのか彼女にはわからなかつた。

それにイジメられるのが怖くないと言えば嘘になる。

舞にも、かつて女子たちがけん制し合つていた気持ちが理解できるようになつっていた。勇希はモテるのだ。一人が仲良くすれば間違いない他の嫉妬を買う。多くの女子たちが段階を踏まずに告白一発勝負に出るのも道理だった。あるいは勇希がそのこと」とくを無下にしてきたことも、勇希自身がその立場をよく理解していたからなのではないか。

自分が知らないだけで似たようなことはこれまでにもあつたに違いない。

しばらく舞は悩んだ。

気持ちを整理しなければならなかつた。好きになつてしまつた気持ちは疑いようがなかつたが、果たしてそれがイジメを甘受して耐えられるだけのものであるのかどうか。友だちが友だちでなくなるかもしれない恐怖で舞は何日もつぶなされた。クラスでの孤立に耐える自信もなかつた。

「でも、馬園くんは耐えてたんだ」

そう思つたとき、舞の覚悟は決まつた。

放課後の教室に勇希を呼び出したのはGW前。

廊下の窓に沈む夕陽を見ながら、舞は教卓の上に腰掛けて待つていた。呼び出され慣れている勇希ならば、手紙を見ただけで意図は伝わつてしまつ。それでも、告白されるとわかつていながら、彼が呼び出しをすっぽかしたことがないことを彼女は知つている。

「如月、か」

教室後方の戸口から、長い影と共に勇希が入つてくる。

「うん」

舞は教卓からぴょんと飛び降りる。

「舞は、馬園くんのことが好き」

高鳴る胸の鼓動に急かされるように、その言葉が真つ先に出た。

「おれは……」

「わかるよ。あの時、馬園くんが舞のことを好きだつたら、あんなやり方じやなくて、みんなにそう言えれば済んだもん。馬園くん、好きな人がいるんでしょ？」

もし、仮に勇希自身がだれかを選んでいたら、こんな状況にはなつていない。

両想いの可能性は最初から外していた。

「……」

黙る勇希に向かつて、舞は教室を縦断する。

「おれは、如月には感謝してる。友だちとして」

「友だちじゃダメなんだよ」

舞は、俯く勇希の前に立つ。

「恋人じゃなきや」

状況は変わらない。

「でも、おれは好きでもないのに付き合つたり、そんなの「優しいんだね。でも、これから好きになつてくれれば、舞は、いいよ?」

「やわら……わ」

舞はそう言いながら勇希の顔を掴んでキスをした。彼女自身にとつてもはじめてのキスだつた。告白するだけではダメだとわかつていた。なにか結果を、彼の感情を動かさなければいけないと思い詰めていた。彼女は映画の見様見真似で唇を舌でこじ開ける。味はよくわからなかつた。

「やめろよ!」

顔を仰け反らせて、勇希は舞を突き飛ばす。

ふらりとよろけたが、舞は完全に踏み止まる。だが、キスしてもダメだつたという絶望感が彼女の胸の中をいっぱいにしていた。本当に好きな人がいるのだ。自分以外に。そう思つと鼻の奥がツンと痛んで、まともにものを考えられなくなつていた。

だからこそあんなことができた。

机の脇にぶら下がつていた習字道具入れ、黒く長方形の箱を留める金具、それが視界に入った瞬間、反射的に舞は跳んだ。頭で突っ込んで、机と椅子ごとひっくり返す。

「如月!」

「……やつた」

舞は痛む額を撫でて、手についた血を見て呟いた。

「やつた? なに言つてんだ、血が……」

舞からは逆光で、勇希の顔は良くなつた。

「ねえ? 勇希くん、舞の顔に怪我させた責任、取つてくれるんでしょ?」

舞は、真つ黒な勇希の顔を血のついた手で撫である。

「如月？」

「舞。そう呼んでよ。恋人になつたんだから」言つてゐることがメチャクチャなのはわかつてゐた。

まるきり当たり屋の手口だ。この怪我の責任を押し付けて脅迫している。

「どうして、おれなんかのためにそんなこと

「それは――」

鏡に写るデジタル時計が正午を告げる。

額から流れ落ちる汗に、長時間ぼんやりしていたことに気付いて、舞は前髪を元に戻す。どんな相手も恐れることはない。あんな脅迫の結果でも、勇希は表向き恋人として一学期の残りと一緒に過ごしてくれた。自分の気持ちさえ変わらなければ、この関係は終わらない。

「好きだから、だよ？ 勇希くん」

鏡に向かつて微笑むと、舞は立ち上がった。
だれにプロポーズしようが、裸を見ようが、女装をしていようが既に関係ない。

勇希の本心を無視した時点で、浮氣されることも舞の想定の内だつた。どれだけ浮氣しようとも、自分にこの傷がある限り浮氣以上の意味を持つことはない。それが浮氣である限り、帰つてくる場所は自分以外にはありえない。

舞は、クスクス一人で笑いながら、階段を降り、リビングに戻る。ソファーに投げっぱなしになつていていたケータイを拾つて相手にかけなおそうとする。別れるつもりなんか毛頭ない。それだけを告げれば会う必要もないはずだった。

「……あれ？」

リダイヤルをして、じぱりぐ。

「圈外？」

市内で圈外なんて話は聞いたことがなかつた。なにかの通信障害だろうかと、舞はリビングにある家族用のパソコンを立ち上げる。

起動までの間に麦茶を飲む。あとで勇希になんと言おうか考える。そろそろキスより先を強請つてもいいのではないか。

冷凍庫からアイスキャンディを取り出し舐めながら液晶画面に向かう。

「……ネット、？がんないや」

ページを表示できません、の文字。

深く考へる」とはせず、できなにならばと電源を落とす。

「テレビ、テレビ」

そして舞も知ることになる。

テレビの画面にほどのチャンネルを回しても同じ文字しか表示しない。

「市民の皆様は指示があるまで屋内で待機してください。」この街に起じる事態を。

7　自作自演のキズナ（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

魂の奥まで刺さつた鍵は、その器である肉体を壊さない限り引き抜けない。

「……バカな子」

テディは呟く。渾身の力を込めて放つた一撃によつて出来た巨大なクレーターの中心、頭から突つ込むような体勢で地面に埋まる勇希へゆっくりと歩み寄る。子供の細い脚が萎れた花のように垂れ下がっていた。

意識があればすぐに回復することから、気絶したのだとわかる。殺すしかない。

これまでも、テディは必要があれば人を殺してきた。魔法は、その源泉である魔力が魔であるが故に、どう使おうとも人の魂を蝕む。放置しておけば地上に拡散する魔力を魔界の穴で食い止め、そこに近寄る人間を排除する。それが守護者であり、その力を与えられた人間の責務だった。躊躇いは自らが為してきたことさえも否定する。呼吸を整え、テディは勇希の脚を引っ張つて持ち上げた。

「綺麗な顔だつたのにね……」

泥に塗れ、原型を留めず歪んだ顔を見ながら少年の肉体を高く放り投げる。

「せめて跡形もなく」

心臓と脳、肉体を壊すためにはその両方を一度に潰す必要がある。そうするだけならば容易いことだつた。だが、テディには、だれに葬られることもない亡骸を、無残な形で残していく気にはなれなかつた。神を信じない彼女にとつて人を葬るのは人だけだ。そして、ここにいる人間は自分だけである。

合掌でもするように両手を合わせる。

勇希の上昇が止まり、吊り上げる糸が切れるように頭から落下に転じた。

「……消してあげる」

テディが力を込めるごとに、合わせた両手の先から金色の剣が現れる。少年の身体ひとつぐらいならば易々と飲み込むであろう幅広の刃を構えて、彼女はタイミングを待つ。

「同じ世界の人間同士、殺しあうこともなかろうに」「魔人……」

それは足下からの声だった。

瞬間に、テディは飛び上がるうとしたが、それよりも早く地面から伸びた手が彼女の脚を掴んで地面に引きずり込んだ。それと入れ違いに、複数の人影がクレーターの地面から這い上がってくるのを目撃する。

「このつ」

半分埋まつた脚を掴んでいる手と土ごとテディは蹴り上げる。

「おつと、どつこい」

足先にぶら下がるようにして地表に現れたのは普通の人間の姿をした男だった。土で汚れてはいるが時代劇の着流しのようなラフな着物を着ている。そして腰には刀をぶら下げていた。男は掴んだ手を離して自ら空中に放り出されると、落ちてきていった勇希の身体をキャッチしてすんなりと着地する。

普通の人間業ではなかつた。

「やれやれ、まったく派手なお嬢さんだ」

男は、勇希を地面に横たえると、着物についた土を払う。

「あなたたち、何者なの？」

結果的に、テディは地面から現れた人たちに取り囲まれていた。男もいれば女もいるが、一様に若い。そして皆、洋服ではなく着物を身に纏い、刀を携えている。髷や結髪でこそないが、どう見ても現代的でない雰囲気がある。

「俺たちや、魔界帰りさ」

男はそう言つてすらりと刀を抜いた。

「あんたらの方じや、魔人、とか言つんだつたか？」

「魔人……」

男をきっかけに、周りの全員が一斉に抜刀したのを確認しながら、
テディは呟いた。

本物の魔人を見るのははじめてだった。

近代まで全世界的に魔界の穴にはある種の使い道があつたことはテ
ディも知識として知っている。魔界送り、と呼ばれるそれによつて、
各々の時代、迫害を受けていた人々であつたり、罪人であつたり、
敵国人間であつたり、その他諸々、穴を利用する者、多くは時代
の権力者たちの主義主張によつて邪魔なものをこの世界から送り出
すために利用された。

ただし、魔力がこちらの世界に出てきているように、魔界の穴は一
方通行ではない。送り出せるということは戻つて來ることも可能と
いうことであり、魔界の環境に適応して帰つてくる魔界帰りが歴史
には時折現れる。『魔界の生活技法』をこちら側に伝えた人物が、
記録に残る最初の魔人とされているように、常にこちらの世界の脅
威というわけではない。

だが、多くの場合、こちら側の世界に対して恨みを抱いている、と
言われている。

テディは慎重に口を開いた。

「私は、守護者です。正式な手続きを踏んでいただければ、こちら
側にはあなた方を帰還者として迎える準備があります。必要なならば
私の方から話を……」

「そんなこたあ、知つてゐるぞ」

丁寧に話そうとするテディを遮つて、男は言った。

「そちらの世の中が大分変わつたつてこたあな。お嬢さん、あんた
方が作つたこの境界域に俺たちが現れたことをまずあ考へた方が賢
明だらうよ?」

「……」

テディは黙るしかなかつた。

男の言う通りである。境界域へ駆前の時空間ごと《転位》するこ
の魔法に魔界から干渉する術は限られていて、そして限られた術の

どれを使うにしても、いつ、どの場所を、どこへ《転位》するかを把握していなければならぬ。なにもないが故に、ほぼ無限にひろがる境界域に当たずつぱつで魔界からやつて来られるものではなかつた。

それが出来たということは、

「俺たちがここにいるのは偶然じゃねえってこつたな」

だれかが自分たちを裏切つたということだ。

薄く笑む男を見ながら、テディは状況が逆転していることを知つた。

「望みは、あたしの鍵つてこと?」

テディは唇を舐めて言つた。

「あんたがそれを素直に差し出してくれるなら、ここでだれが死ぬこともなく片あ付くんだがね。いやまあ、あんたが自分の務めを優先して、このガキから鍵を取り出して、俺たちを連れてつてくれると約束してくれるなら、それでも構わねえんだが……」

「それはない」

守護者の誇りにかけて、鍵を誰かに渡すことはありえなかつた。だからと言つて、こちらの世界の法を侵してやつてくる魔人に道を与える理由もない。正式な手続きを踏まないという意味は、彼らの目的が正式でないということだつた。事情も動機もわからなくとも、それが有害であることはわかる。

戦うしかない。

「あたしが守護者である限り」

集中力を高めるように、テディは深く息を吐いた。

「さつきの戦い、ずっと見てたぜ。あんたは強い。だが、魔界帰りを舐めちゃあいけねえ。俺たち全員を相手にして勝てる法があると思えねえなあ……」

男は自然体の構えで切つ先をテディに向ける。

魔人は魔力に馴染んだ魂と肉体を持っている。それだけで扉を開放した守護者と同程度の力がある。彼らが人間の形を保つてゐるの

は、その形を重視しているからというだけで魂が閉じているわけではない。むしろ完璧に開放されていると言える。

数の差で圧倒的不利、それが冷静な状況分析だった。

「それでも、勝つ」

しかし、そんなことでテディは揺らがない。

十五人、彼女は視線を動かして魔人の数を数えて両手を地面に突く。四足歩行。鍵が告げる獣の本性に従う。獣でありながら人の冷静さを持つこと。

「やつちまえ！」

男の合図で数人が一斉に切りかかると、テディが突進したのはほぼ同時だった。

勝算はひとつ。

殺されるより先に、勇希を殺してしまっしかない。

最高の想定はその鍵を奪つてテディのみで元の世界に帰還するこ^トだ。そうするだけで魔人たちはこの境界域を超えることができなくなる。最低でも勇希の息の根さえ止めてしまえば、自らの命と引き換えにして魔人たちの越境を食い止めることができる。

やることはさつきまでと変わらない。

テディは正面の男に突っ込むフリをして、勇希に向かう。

「おつと、そうはイカ焼きタコの墨つてね」

だが、男は読んでいた風で、彼女の行く手を阻んで刀を払つた。喉首を掠めるすんでのところで切つ先をかわして、テディは背後から突っ込んできていた一人にパンチでカウンターを決めた。その一瞬で男の力量を察知する。

「強いねえ。だが、お嬢さん、俺がいる限り、あなたの目論見は達成されないぜ？」

男は横たわる勇希とテディの間に立ち、鋭く睨みつけた。それは丸く迫力を欠いた目で、よく見るともつさりとした眉毛が上に乗つ^かつている。ざんばらの長髪に尖つた耳、開いた胸元から胸毛をのぞかせている。腕や脚に生える体毛も濃い。

要するに毛深い。

「志賀良木、俺の名だ。覚えておくといい、冥土の土産にしな」

「……ふつ」

テティは笑ってしまった。

獸になつた自分が他人の毛深さに不快感を覚えている。

「残念。まだ八十年は生きるつもりだから、そんなお土産貰つても

腐らせちゃう」

にじりよる氣配をけん制しながらテティは言つた。

「死んでもいいらない」

8 魔界帰り（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

9 敵の敵は

敵の敵は味方なのか。

勇希にはわからなかつた。

目を覚ました勇希は口の中に溜まっていた血を吐き出して、自分がまだ生きていることを確認した。吹き飛ばされたのではないかと思つた顔が残つてゐる。どのくらい意識を失つていたのかわからぬ。だが、状況が大きく変わつたことはわかつた。

テディが戦つていた。

金色の体毛をなびかせ、刀を持つた集団に囮まれながらも一步も退かず応戦している。両手の爪先から出でている光の剣が刀と接触するたび、閃光が弾けた。しかしそれでも数にはおされてゐるようで、血飛沫のようなものも見える。決して優勢ではない。

時間が経てば負けてしまいそつだつた。

「お田覚めのようだな」

「……だれ？」

抜き身の刀を下げる横に立つ男を勇希は見上げる。全体にタヌキっぽい外見の男だつた。父親よりは若そつたが、しかし垢抜けなく泥臭い。それは薄汚れた着物のせいといつより中身の問題であるように思えた。胡散臭い。

「黙つて見てな、そうすりやあ、てめえの命はひとまず助かる」

男はそう言って、勇希の首筋に刀を当てた。

「……っ！」

「切り落とすのは造作もねえ」

敵の敵も敵だ。

けれど、なぜ自分を殺さないのだろう？

男を睨みながら、勇希はそうも思つ。結果的に、この男によつてテディに殺される所から助けられた形ではある。だが、友好的かといふとそうでもない。しばらく考えて、勇希は父親の言つたことを

思い出した。鍵は資質がない者には使えない。

そしてテディーは言つた。鍵を一本使わないとここから出られない。

「にひ」

それはひらめきだつた。

「なに笑つてんだ？」

「おれのこと、殺せないんだ？」

挑発するように勇希は唇を大きく吊り上げて男に笑いかける。

「…… それでもねえさ」

男の表情に薄い動搖が浮かんだのを勇希は見逃さなかつた。

翼を広げて飛び上がつたのと、男の刀が走つたのは同時だつた。相手は結局、勇希の予想通り首を狙わなかつた。ワンテンポ遅れた片翼が切り取られたが、痛みに歯を食いしばつて回転しながらもう片方だけで力任せに上昇する。

「ガキが」

男が自分めがけて刀を振るつた。

直後、

「な？」

勇希の身体を斬撃が駆け抜けた。脚から脇腹、胸、そして顔を通過する。

バランスを崩して墜落しかける。

「このくらいでつ」

テディの一撃に比べれば痛くない。

片翼で滑空、地面すれすれで復活したもう片翼を加えて飛翔。

巨大なクレーターを巻き、勇希は高く高く境界域の中空へ昇つて行つた。地上の男が刀を振り回すたび、空気の層が裂け、彼の身体も切り裂いたが、致命傷ではない。斬れる痛みは、むしろ意識を確かにする。テディを相手にしても、あの男たちを相手にしても、勝ち目などない。そのことをはつきりと把握する。

だからこそ。

「負けなきや勝ちだろ」

勇希は咳いて、地上で戦いつづける集団に向かって降下する。

「なにをする気だ？」

男が刀を振るう手が止まつた。射程範囲に仲間がいる。

「……っ？」

テディがハツと勇希を見上げ、それにつられて刀を持つ男女も勇希を見る。

この一瞬だつた。

勇希は翼を剣に変えて集団に突撃する。数人が彼を避け、数人がカウンターで彼の身体を斬つたが、それに構わず中央を突破する。そして目標を抱きかかえて飛び上がつた。

「な、なに？」

「へへ……やつた」

集団を突き抜けたとき、勇希は両手にテディを抱いていた。降下の勢いで高く上昇し、瓦礫と化した駅前が小さく見えるところまではばたく。

「どういうつもり？ あたしを助けたつて、あなたは……」「助けてない」

血と共に噴き出す痛みを堪えながら、勇希は言つた。

「は？」

「あのや、テディの鍵、おれにくれ」

「……はい？」

「だから、ここでおれに鍵をくれて一緒に元の世界に帰るか、このまま落としてあいつらに殺されるか、テディが選んでよ。はい！ わーん、はーい、はーい……」

言いたいことだけを言つて、カウントダウンする。

「そんな、あたしは、あなただけであいつらだつて

「……ち、ゼエー」

ふわりとテディの身体を空中に放り出す。

「んんっ！ わかった！」

テディが空中で鍵を抜いた。身体を覆っていた金色の輝きが光の

粒になる。

「悔しいけど、あいつらを外に出すよりはマシよー。」

「そう叫んで握った手を勇希に向かって伸ばす。

「そうこなくつちやー」

その手を掴んで、勇希は裸のテディを抱え直した。

そのままぐんぐん男たちが見えなくなるまで遠くへ飛んでいく。

「まさか、鍵を受け取つたらあたしを落とすとか……」

「しないよ。おれ、別にテディを殺したいわけじゃねーもん」

この場所から元の世界に戻りたいだけだつた。

母に会うために。

勇希はテディから鍵を受け取り、鍵の告げるままにもう一本を胸に突き刺した。するとなにかのスイッチが切り替わるようだ、パツと見慣れた夏の太陽が頭上に輝きだす。

ロータリーを中心に切り取られた街の上空を飛んでいた。

「ひつでー」

勇希は街の惨状に顔をしかめた。

「他人事みたいに……」

テディは空を見上げて目を瞑つた。

「もうあたし、守護者失格」

そう独り言のように呟く。

「……」

血の気が引いていた。

駅前がなくなつたことも異常だつたが、勇希は街に人が極端に少ないことも気付いていた。代わりに、自衛隊の車両や、自衛隊員と思しき人々がいたるところを歩いている。異様な雰囲気で、胸騒ぎのする光景だつた。自分がやつたことで街が大変になつている。

じわじわと不安に襲われながら手近なビルの屋上に降り立つ。

「テディ、鍵、返す」

勇希は熱くなさそうな口陰のコンクリートの上にテディを置いて、

「一本目の鍵を渡した。

「え……これ、どうして？」

信じられないという風に目を見開いて、テディはそれを受け取る。

「おっぱいもんだことは「めんなさい」

勇希は深々と頭を下げる。

「は、い？」

「その、テディはぶすじやなくて、その、美人だと思います。あのパンチも痛かったし、もう戦いたくないし、死にたくないし、でも、おれ、おれは……おれが母さんに会うまで捕まえるの待つてもらえませんか？ お願いしますっ！」

「……ごめん、あたし、コウキがなに言つてるのかわからぬ」

勇希が頭を上げると、呆れ顔のテディと目が合つ。

「じ、自首します、あとで。信じてください……」

「それがあたしが信じると？」

テディはよろめきながら立ち上がり、自らの胸に鍵を刺す。

「う……」

信じてもらえるわけがない。

街の様子を見たら、自分がやったことが恐ろしくなつたなんて都合のいいことを。

「……お母さんに会つたら、あたしのところに来るのね？」

「う、うん」

鋭いテディの目に射竦められ、勇希は縮み上がる。

逃げるだけなら逃げられた。だが、勇希は父親から守護者が何人もいることを聞いている。これから先のことを考えると、テディのような相手と永遠に戦いつづけるわけにはいかないことに気付いた。だからこそ大人しく鍵を渡したのだ。

「行きなさい」

「え、あの、いいの？」

「あたしは、命を惜しんでるわけじゃない。でも、コウキに救われたのも事実。戻つてくると約束するなら、一度ぐらいは見逃してあ

げる。でも嘘だつたら……」

立てた親指を首の前で一文字に滑らせながらテディは言つ。

「や、約束する、約束する！」

勇希は慌てて答えた。

「……わかつた、行つて、あたしの気が変わらない内に」「
テディは鍵を引き抜き、疲れ切った様子で、ずるずると座り込んだ。

「ありがとう！」

「行つて、いいから」

「うん！」

何度も頭を下げながら、勇希は空に飛び立つた。

「おかしな子」

それを見送りながらテディは頭を振る。甘かったかも知れない。
「でも、あそこに魔人を呼び寄せた裏切り者があたしたちの中にいるなら、あの子は利用されただけなのかも知れない。この状況を作り出すために。それが何者か……」

敵の敵は味方なのか。

「あたし、裸でどうやって帰ろう……」
テディにもわからなかつた。

9 敵の敵は（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

8 君はここまで自分から見せていたと思います。

自転車を選んだことは笑子の慧眼だったと言える。

次第に渋滞していく道路を見ながら、私はそう感じていた。タクシーや運転手らの言っていたことは正しかった。交通の混乱ばかりは隠しようがない。木乃市に近付くにつれて自動車はおよそ動かなくなり、およそ市境の幹線道路まで出たところでそれは現れる。

対向四車線が封鎖されていた。

手前までの混雑ぶりが嘘のように一般車両が一台も走っていない道路。ただし、装甲車両が交差点を塞ぐように停車していて、完全装備の自衛隊員が一定間隔で立っている。まるでこの道の先を占領したとでも言つような異様極まりない光景だった。

「なんで行けないんだ！」

「申し訳ありません。現在、木乃市内への通行を制限しています」「だから、それがどうしてなんだと聞いている」

「我々はその質問にお答えする立場にないので」

少なくはない野次馬が歩道の半分を埋めていた。笑子は自転車を押して、歩道に上がっていく。道を越えようとする人々とそれを止める自衛隊の小競り合いがいたるところで起つっていた。どこもかしこも騒然としている。

「困りますね……」

笑子はそれを見ながら独り言のよつに言った。

「……東西南北、どこもこうだろ？」

自転車のカゴの中から私は小声で答える。

封鎖された道路に沿つて歩道を歩くが、細い路地に至るまで人員が配置されていて、少なくとも道路の向こう側へ人間が渡ることはできそうもなかつた。息子が気がかりである。

「やはり、私が行こう」

「まさのさんがですか？」

「ああ、彼らも流石に猫を追いかけて持ち場を離れたりはしない。私が先に行つて、君のお母様に会つてくる。約束のことなら今日でなくとも大丈夫だ。相手もわかつてくれる」

笑子もこの雰囲気に触れれば、ここを越えられるとは思わないだろい。

「……」

「君を一人にしたくはない。だが、確實に市内で勇希が巻き込まれている。父親としてはここで手をこまねいてはいられない。どこか安全な場所で待つていてほしい。ここに来る途中に図書館があつただろう？ あそこなら長時間いられるだろうし、それなりに人目もあつて安全なはずだ。なのに、こんな状況は一日もつづかない。夜までには迎えに……」

「わたしも行きます」

「……は？」

笑子は私がなにかを言つよりはやく走り出していった。
歩道の切れた先には広い交差点が見える。

「どいてくださいーーー！」

自転車のベルを鳴らしながら、笑子はペダルに片足を乗せ、人垣に向かつて一直線に進んでいく。気迫のこもった表情だった。ぎょつとした様子で野次馬たちが道を開ける。複数の自衛隊員がこちらを見るのが私にはわかつた。

「ちょっと待ちなさい、ここから先は……」

一番近くにいた一人が自転車の正面に立ちはだかるのと、「ごめんなさいっ！」

笑子がワンピースの裾を翻して自転車に跨るのはほぼ同時だった。喧騒が止む瞬間があつた。

丸見えだ。

「にやああああ！」

私が猫として叫んだ気持ちは理解してほしい。

汗を流しながら、笑子は躊躇わなかつた。一気に最高速までペダ

ルを漕ぐと一人目の脇をすり抜け、その背後から迫っていた二人目をドリフトで威嚇、ジグザグに交差点の中央へ飛び出していく。私は振り落とされないようにカゴにしがみついて精一杯だった。

猫の三半規管をもつてしても目が回る。

「その少女を止めろ！」

だれかが叫んだ。

反対車線で待機していたと思われる複数名が向こう側に暴走族を止めるときに使う柵を開いていた。このまま進むことは出来ない。左右も同様に封鎖されていた。

「まだのさん、リュックに入つて！」

そう言いながら、笑子はカゴからリュックを引っ張り上げ、背負つた。

私はぶら下がるように中に潜り込む。

「飛びますよ！」

飛ぶ？

「せーのっ！」

自転車の速度を維持しながら、笑子はまっすぐ突っ込んでいく。3メートルはあるつかという柵と自転車が衝突する寸前、ペダルから離した両足でサドルを蹴り、飛び上がつた。
伸身の縦回転。

空中でリコックから飛び出してしまった私は、足先まで揃えた美しい体勢で柵を飛び越えていく笑子を目撃していた。体操選手ばかりである。幼い頃から守護者になるべく修行を積んできた、というような話は聞いたことがあつたが、サークルの訓練まで受けていたとは、などとつまらないジョークを言つてゐる場合ではない。

その様子を見る隊員たちが目を丸くしている光景までスローモーション。

「十点！」

小気味いい音を立てて、両手をピンと挙げ、揃えた両脚のまま着地する。

その瞬間、胸元までめぐれあがつたワンピースを見ていたせいで、
猫の私が着地失敗。

「行きますよ、まぞのさん！」

笑子は間髪いれず市内に向かつて走り出す。

「あ、ああ」

私もその後を追いかける。

自転車は乗り捨て。

その道は木乃市中央を南北に結ぶ古くからの街道だった。ここ十
数年で道幅は拡幅され、街並みも近代的になつている。道なりに行
けば駅、とは言つものの、距離としては直線でも4、5キロはある。
そして市内にも自衛隊員はいる。いくら運動能力が高い笑子でも走
つてすぐ移動できる距離ではないし、そもそも市内を通過できるか
どうかは、別問題だ。

横を走っていた笑子の脚が止まる。

街道の左右から、車両が次々に現れて私たちの行く手を塞いでい
く。

「……どうします？」

「どうもこつも、君はなんにも考えてなかつたのか？」

呆れるほど楽観的に行動している。

この際、笑子は保護してもらった方が安全かも知れない。蘇つた
ばかりという特殊性を差し引いても、この状況に対しても笑子は関係
ない一般市民に過ぎない。封鎖を突破するという荒っぽいことはし
たが、子供もある。手荒な扱いは受けないだろう。なんとなく見
捨てていくようで心苦しいのは確かだが、これ以上危険な行動をさ
れてからでは遅い。

私がそんなことを考えていると、

「対象、確認……」

声が上空から降つて来た。

私が見上げるのとほぼ同時に、笑子の正面に着地する。

「えつ？」

「……任務、遂行」

睡蓮の花のような白い戦闘装束を身にまとった少女だった。小柄で、身長は息子よりも小さい。暑い最中だというのに汗粒ひとつ出でない白磁のような肌が陽射しを受けて輝いている。胸元には透明の光、表情のない大きな瞳に笑子の顔を映していた。

「危ないっ！」

私がそう叫ぶより早く、少女の細い腕が笑子の首筋に伸びていた。

「つあ……！」

避けたことも出来ず、首を捕まれた笑子の身体が地面から離れた。じたばたと脚を振り回して、何度も少女を蹴っていたが、少女は眉一つ動かさない。気付くと、私たちの周りを自衛隊員が包囲して、その様子を見ている。なんで急にここまで……。

「あ

私は気付いた。

勇希と誤解されているのだ。女装した息子と十三歳の母には外見的な差がほとんどない。

「待ってくれ、その子は違う！」

私は少女の足にすがり付いて言つた。

「……喋る猫、確認」

少女はちらりとこちらを見て、感情のこもっていない声でそう言う。

「違うんだ。君は守護者だろう？ 昨日、魔界の穴を襲撃した子供は少年だという情報を聞いているんじゃないかな？ その子は女の子だ！ 関係ないんだ！」

「……」

少女は無表情に笑子を見つめ、そして無造作にスカートをめぐり上げた。もちろん、そこで見えるのは隠されていない笑子の下半身である。遠巻きに様子を見ていた自衛隊員の何人かが視線を逸らした。少女の方はかなりじっくりと見ている。

「女子

そう呟いてパツと手を放す。

私は溜息を吐いた。これほどノーパンが役に立つ日もないな。

「はつ、こほつ……けほつ」

落とされた笑子はアスファルトに膝を付いて呼吸を整えていた。しかしこれはチャンスである。

「その、君、守護者なら教えてほしい。君が見間違えた少年は……」「信じられません!」

私が少女に話しかけるのを遮つて、笑子が立ち上がり叫んだ。「あなたも女の子でしょう? どうしてスカートをめくつたりするんですか!」

顔が真っ赤だった。もしかして恥ずかしがっているのだろうか、今更。

君はここまで自分から見せていたと思します。

「いや、そんなことはどうでもよくて……」

私は一人の間に入るうとしたが、笑子が少女の両肩を掴む方が早かつた。

「なんとか言つたらどうなんですか?」

「……邪魔」

その後、少女は笑子を突き飛ばした。

守護者の力を使つっていた。胸を圧迫された笑子がガクンと仰け反つて倒れる。

声も出でていない、ピクリとも動かない。

「え、笑子!」

駆け寄ろうとした私だが、身体がふわりと浮かんで、見上げると少女に首の皮を掴まれていた。じたばた暴れてみるが、ふりほどけない。

「確保」

「何故だ! あの子は関係ない! 関係なかつた!」

「……関係ない」

少女はそう応えると、私を掴んだまま、その場を立ち去るうつす

る。

無関係の人間だろうと関係ない、と？

「ふざけるな！ 君は守護者なんだろう？ 人々を守るためにそうして力を……」

おかしい。

なにかがおかしかった。本当にこれは魔界の穴を守るために行動なのか？

少女が歩き出すのと同時に、周りを囲んでいた自衛隊が笑子に向かって動きはじめる。私を不安が襲っていた。安全に保護してくれる気がしない。ついやつて考えていたことを、ぞわつく髪が否定している。わけがわからない。

「……やめろ！ さわるな！ 彼女にさわるな！ はおひはー……」

叫ぶ私の口を、少女の手が塞ぐ。

力なく横たわる笑子の身体が抱きかかえられていく。

笑子！

「母さん！」

その声で、少女が空を見上げ、私を放り投げるまでは一瞬だった。空中をぐるぐると回りながら、私も空にその姿を確認する。見間違えでなければ、

「勇希、なのか？」

巨大な翼を広げた息子が空を飛んでいた。

8 駒は「Jリーグで自分から見せていたと思こまか。（後輩）

お読みいただきありがとうございました。（後輩）

9 息子よ、父は無力だ。

白い少女がアスファルトを蹴った。

その弾かれた空気だけで吹き飛ばされそうになり、私は爪を立て踏ん張る。弾丸のように飛び上がった少女はこちらに向かつて飛んできていた勇希の、身長の三倍はあろうかという翼に剣を突き立てぶら下がる。互いの光が反発して弾けていた。

「……う」

痛みがあるのだろう、苦しそうな顔をした勇希に向かつて少女はもう一振りの剣を抜き放ち、容赦なく振り下ろしたが、それはもう一方の翼が防いでいた。それでも両翼を塞がれ、揚力失った勇希と少女は回転しながら道路に落下する。

下にあつた車両がくしゃりと潰れ、砂埃が舞い上がる。

「戦うつもりないから！」

身体を守るように巻きつけた翼を広げて、勇希が叫んだ。

「……関係ない」

一振りの剣を構えた少女がそう答えたのと同時に飛び込んでいた。「ちょ、あはれたら、街壊れっ……」

「抹殺」

勇希の躊躇いを少女は見逃さなかつた。逃げようとはばたいた瞬間には剣の一本が勇希の左肩と翼を貫いていた。動きを制限し、袈裟懸けにもう一振りを振るう。びしゃ、ヒトマトが潰れるような音と共に、熱いアスファルトに血が飛び散つた。

「つてえつ！」

「……！」

だが、直後、少女の身体は後方に吹き飛ばされていた。まっすぐに街道の南に向かい、笑子を運ぶ自衛隊員の頭を越えていく。砂埃をかき消して現れた勇希の右翼がその力を示すように風を巻き起した。

「勇希！」

私は大声で呼びかけた。

「……父さん」

左肩を押さえながら、勇希は苦笑いをする。人間の肌の色ではない紫色に、「じつじつと尖った骨、額には小さな角、そして翼、類型的な悪魔の姿と言って過言ではない。

「それ、どうしたんだ？」

「ちょっと……」

なにかを言いかけた息子の声を遮つて、獣の咆哮が響き渡つた。犬に似ているが、より大きな生き物であるとわかる遠吠え。周囲の建物のガラス窓が一斉に軋む。

白い狼がそこにいた。

「扉を開放しているのか……」

思い出すより早く口をついて言葉が出ていた。

少女の装束が破れ、身体中から光り輝く体毛が生え、身体一つ分はあろうかという真っ白な尻尾が空を突くように実体化するのを見ながら、私は動けなくなっていた。猫の身体が恐怖に震えている。かつて笑子に聞いたことがあった。守護者がその魂を魔力に預け『変異』の力を完全に引き出すことを、扉を開放する、そう表現していたことを。

ならば勇希の姿も。

「勇希、戦つては」

「わかってる！　でも、母さんを！」

勇希は駆け出していた。息子の視線の先には笑子がいる。私たちがこうしている間にも彼女は自衛隊の車両に乗せられ、連行されようとしていた。左右の翼のアンバランスにふらつきながら、勇希は地表すれすれで飛び、突進する。

「オオーン！」

だが、白い狼が既に息子の前に高らかに吠えながら立ちはだかっていた。四足歩行で走り、しなやかに伸びる身体をひねりながら飛

びかかっている。勇希は翼を器用に動かして衝突をかわしたが、狼の輝く牙がその脚に喰らいつぐ。二人は地面を転がった。

「はなれろっ！」

勇希がその腹に向かつて足を振り上げると同時に、尻尾がその身体を薙ぎ払う。

「……」

狼は空中で身体を仰け反らせながらもぴたりと着地する。

呑きつけられた勇希はうつ伏せに倒れていた。

「ちく、しょ……」

笑子を乗せた車両が走り出していた。

立ち上がろうとする勇希に狼となつた少女がゆづくりと近付き、その背中を押さえつける。アスファルトの地面が息子の身体ごとジワジワと沈んでいく。私は走り去る車両と、その様子を交互に見ながら動くことができずにいた。

どちらも助けなければならず、どちらも助けられない。

もはや己の無力は罪であった。猫だから、などといつ言い訳が通用するものではない。私が全ての原因なのだ。息子を巻き込んだのも、笑子を蘇らせたのも、もとを糺せば私である。ここまでの事態になることを想定できたかどうかなど関係なく責任を……。

「あーっ！ もーっ！ どちらしょおっ！」

勇希が叫んで、翼をジタバタと動かし、地面に拳を叩きつける。道路が陥没し、狼が飛びのくと同時に一気にはばたいた。地表から数メートルの高さに浮かんで相手を睨む。

「街が壊れると思つて、大人しくしてれば……！」

言葉を言い切らず、悔しそうに息子はぎりぎりと奥歯を嚙んだ。

「関係ない」

白い狼は鼻先をツンと上げて言った。

「あーっ！ ムカつく、おまえマジムカツくー！」

勇希はくしゃくしゃと頭を搔いた。

「こちこちローテンションでぼつそぼそしゃべりやがつて、じゃー

おれも関係ねーよー 街^アとぶつ 飛ばしてやるー 後で泣いてもやめねーかんなー！」

「……」

「なんとか言えよー」

後周りにぐるぐると回転しながら勇希は怒りを露わにする。いかん。

「勇希、落ち着け！ 戦つては……」

「うつせーんだよ！ 役立たずの猫はそ二だたまつてやー！」

勇希は私の言葉を遮つて怒鳴つた。

役立たずの猫。

私は息子の言葉に射竦められる。その通り、しかし……その通りだ。頃垂れるしかない。実際、なにもできていない。笑子の暴走を食い止めることも、息子を助けることも、状況を開することも、これから道を示すことも、父親らしく、あるいは夫らしく振舞うこと。

なにも。

「酷^ク……」

私たちの関係を知つているのか狼は鼻を鳴らして言つ。

「よそ見してんじゃねーつー！」

「……」

突撃してきた勇希を難なくかわして狼はその爪を振るつた。私の位置からは翼の影になつて見えなかつたが、息子の体勢がぐらりと揺らぎ、ぼど、と鈍い音で地面に転がつたのは肘から先、腕である。斬り落とされた。それでも、なにかを掴むように指先が動いている。

「うああああああああああ！」

勇希の絶叫が響いた。

「外した……」

そう呟いた狼の尻尾が息子の身体を続けざまに打つ。

腕を押さえて苦痛に顔をゆがめた息子が街路樹にぶち当たる。

幹^アごとメキメキとへし折れるその様子を私は身動き一つできずに見

守るしかなかつた。

「ああ……こんにやうつ」

それでも勇希はすぐに立ち上がり、ぱたぱたと血が溢れる右腕を押さえて飛ぼうとする。その瞳には鬼気迫る光が宿っていた。命懸けの目である。

「勇希、もういい、それ以上は」

「よくねーんだよ！」

息子は私を見なかつた。見ているのは正面の敵だけだ。

勇希。

「よく……ねー」

翼は動いていたが、勇希の身体は浮かばなかつた。ようようと狼に向かつて歩いていく。それではエサになりにくようなものだ。笑子を乗せた車両が角を曲がつて視界から消えていく。大切なものの両方を失おうとしている。

私が猫であるばかりに。

いや、人間だったとしてもなにも出来はしなかつた。私には資質がないから守護者の力を使って戦うこともできない、笑子を助けようにも、自衛官と戦う運動能力もない。もとより無力な中年男でしかない。出来ることなどなにもなかつた。

だが、私がいけなかつたのか？

妻と子と、幸せに暮らす未来を欲したことが。

「にやーああ……」

気付くと空に向かつて私は啼いていた。降り注ぐ太陽の光が私の無力な魂を焦がす。

白い狼が機先を制して勇希に飛び掛った。

息子は両翼でそれを正面から防いだが、衝撃で踏ん張った地面が凹んでいく。

「なめんなあつ！」

翼の内側でそう叫んだ勇希の右腕が見る間に生え変わる。作り出されたばかりの血管が魔力の輝きで煌めいていた。息子の回りだけ

太陽の光が暗く感じられるほどに発光している。翼を開いて狼が弾かれたところに、勇希はその光を放つ拳を叩きつけた。

「……！」

インパクトの瞬間、少女の身体を覆っていた狼の体毛が弾けた。閃光、そして旋風。

なにもかもが真っ白に染まる光と、吹き荒れる風に私の身体はず術なく宙を舞つた。息子と少女がぶつかりあつた場所に爆弾でも炸裂したかのような穴が出来ていて、そしてその中心に、勇希は立つていた。翼がなくなり人間の肌色に戻っている。

正面には全裸の少女が倒れていた。

「……父さん」

そう言つて息子が私を見上げた直後には抱きかかえられていた。街道脇の建物の壁を蹴つて、着地する。

「勇希、大丈夫なのか？」

全身が傷だらけだつた。

「母さんは？」

「五つ目の信号を右折して……」

「わかった！」

コクと頷いて、勇希は私を抱えて駆け出した。

私たちの様子を残つてみていた自衛隊員が道を塞ごうとしたが、構わず飛び越え、停車する車両を飛び石のようにしながら、風より早く駆け抜ける。

車両はすぐに見つかった。おそらく息子の姿をバックミラーに捉えたからだろう、加速したが、追いつくという状況に変わりはなかつた。勇希は走行する車両のボンネットに乗つて無理矢理に停車させると、有無を言わさずフロントガラスを叩き割つた。

自衛隊員の顔が恐怖に歪むのは私からも見えた。

「かあ……」

「うわあああつー！」

パン。

乾いた音だつた。ガラスの破片を浴びた助手席の一人が発砲している。

「ぐつ」

銃弾が勇希の塞がりきつていない左肩の傷口に当たつた。

「よせつ、相手は」

運転席の男がその手を押さえつける。

「……さんを、返せ」

左腕に抱きかかられた私に向かつて血が流れ出していたが、それに気を留めることもなく勇希は言つ。子供の声ではあつたが、尋常ではない迫力を孕んでいた。

私は声を出すこともできなかつた。

「わかつた」

運転席の男がドアを開けて出ると、助手席が「ひつ」と悲鳴にもならないような声を上げて転がり出て、後部座席の一人も降りた。勇希はガラスを踏みながらそのまま中に入り、後部座席に横たえられていた笑子の顔に触れた。

「……んう

「生きてる……」

勇希は反応があつたことに微笑んで、そう呟く。

そして、私を笑子の腹の上に乗せて、両腕で抱えて車を降りた。

私たちを取り囮むように、自衛官たちは立つていた。

「悪いことはいわない、これ以上は止すんだ。君のやつていることは……」

「どけよ」

勇希は踵で自動車を蹴り上げ、ひっくり返した。

充分な威嚇だつた。私を含めて、その場にいた大人全員が言葉を失う。

「どけ」

だれも、息子の前に立ちはだかりはしなかつた。

猫よりも軽やかに、息子は住宅街の屋根伝いに市の東側に向かって走つていく。

「どこへ行くつもりだ？」

「ガツコ、バアちゃんいるし、あんなことしちゃって家には帰れねーから」

そう答える勇希の顔色は良くない。

撃たれた傷も塞がつてはいる。だが、疲労は隠しようもなかつた。扉を開いたことで、鍵からほぼ無限に『転位』で魔力を得られるとは言つても、肉体の消耗だけは如何ともしがたい。電車が止まつた時間から戦いつづけているとすれば一時間近く、加えて死ぬか生きるかの戦いだ、精神的負担は私の想像を超えている。

そこまでわかつても、私にできることは僅かしかない。

「……少し先だ」

「うん」

勇希はぴたりと足を止め、体勢を低くする。
家と家との間、静まり返つた街中を、一人の自衛官が歩いていく。
住宅街を巡回する自衛隊。私は、最低限、彼らに見つからないよう移動するためのセンサーとしての役割をこなすだけだ。息子と笑子を安全な場所で休ませるためにはどうしても必要なことではある。しかし、たったこれだけのことしかできない。

屋根瓦を踏みしめる息子の足が熱そつた。

「行つた？」

笑子のワンピースにぽたぽたと汗をたらしながら、勇希は言つ。

「ああ……いや、待て、もう一人」

小さな足音も聞き漏らすまいと私は耳を立てる。

「……ふー、うん」

深く息を吐いて、勇希は頷く。

胸が痛む。助けにもなつてやれない己が呪わしかつた。

夏休みの小学校は静まり返つていた。勇希が入つたのは、外からの目隠しが行き届いている屋外のプールサイドだった。悪くない判

断である。日除けのあるベンチに笑子を横たわらせると、勇希はコンクリートの上に仰向けに倒れて、自分の胸から鍵を抜き取った。

「もー、ダメだ……」

大の字になつて目を瞑つたが、すぐに起き上がると、

「くそあつちーよ！」

そう叫んでプールに飛び込んだ。準備運動は既に十分だろう。私はベンチの下で丸くなつてその様子を見つめる。水飛沫が弾け、小さな虹がかかる。

「しみるーっ」

傷口に染みるのか、冷たさが染み渡るのか、両方なのかわからなかつたが、息子はそれでも気持ち良さそうに泳いでいた。先ほどまでの鬼気迫る緊張感は一瞬で解けたようだ。こうしているとただの小学生である。それにして元気だが。

「ひとまずは、安心、ということか」

私も冷たいコンクリートに身体を伸ばす。

情けないことではあるが、力を持った息子がいることで、笑子を無事に家まで送り届けることはそれほど難しいことではなくなつた。後は事情を説明し、事態が収まるのを待てばいい。こんな状態、一日つづけるのも困難なはずだ。魔界の穴にどういった危機がせまつているのかわからないが、そこまでは私たちが預かりしるところでない。

なにか忘れているような気がする。

毛繕いをしながら、私はふとそんなことを思つた。なにかを見落としている。勇希は無事で、笑子もまだ目を覚まさないがここにいる。街は大変な事態だが私たちの問題ではないはずだ。あそこで置いてきた白い守護者も救助はされているだろう。やや乱れていた私の毛並みもすっかり整つた。どこへ出ても恥ずかしくない猫だ。あとなにが。

それに気付いたのは私の耳だった。

ガシャン。

学校の内側、施錠されているプールの入り口フローナスが揺れ、少女がよじ登っている。その姿には見覚えがある。クラスの子だろうか、だれだつたか、

「……あ」

笑子があの如月舞と話をつける約束だつた。どこで待ち合わせか聞いていなかつたが

「学校だつたのか……ゆ」

「勇希くん！」

私が呼びかけるより早く、フェンスの頂上から少女が手を振つた。

「げつ……」

勇希がそう呟いて水中に潜つた。

それでは逃げられまい。

「まずい……ような気がする」

勘の域をでないものだつたが、私もおちおち丸まつてはいられない。髪にビンビンと嫌な予感がしている。だが、この状況をどうすればいいのだろう。勇希は笑子にプロポーズをしていて、笑子がそれを舞に告げていて、舞は笑子と戦う気だらう。これは要するに三角関係というやつのはずだ。息子を挟んでの。

おじさんにはこういった経験がありませんが。

いや、今日になつて、親友だと思っていた男が自分の妻を長年狙つていたという実にどうしようもない話は聞かされたが、それはともかく、血みどろの修羅場の後に、ドロドロの修羅場となつたら息子が流石に不憫だ。どうにかして

『 役立たずの猫はそこでだまつてろー。』

そうだつた、私は役立たずの猫……。

「勇希くん、どうしてここに？」

嬉しそうな顔でプールサイドをかけてくる舞の姿を見ながら、私は丸くなる。

息子よ、父は無力だ。

9 息子よ、父は無力だ。（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

10 マザーハンプレックス

学校へ行くことはそれほど難しくなかつた。

舞の家から学校までは五分もかかるない距離であつたし、生まれ育つた街でかくれんぼをして大人に負けるといつともない。表に出ると言われたとしても彼女の側に従う理由がなかつた。両親は共働きで家にいないから止めるものもない。

しつかりと日焼け止めを塗つて家を出る。

「いつになつたら出られるんですか？」

「それについてもテレビやラジオでお知らせします」

街を見回る自衛隊員たちは大人の相手が急がしそうである。

方々の家の前で繰り広げられる問答、近所の住民たちもこの屋内待機に納得していないのだとわかつて、舞は安心する。危険があるということではないのだ。なにか大人たちの不手際で混乱が起こっているだけ。子供の自分が気にすることではない。

生垣の隙間や、庭先を通つて道路は最小限横切るだけ、そんな風にして学校にたどり着いたのは約束の十五分前だつた。そこで舞は、学校とは言つたものの具体的な場所を決めていないことや、そもそも相手がここまでやつて来られるのかについて考える。

ケータイはやはり?がらなかつた。

夏休みでも最低一人は先生が来ているはずだつたが、学校は締め切られていた。職員室の窓も白いカーテンで中が見えない。冷房が使われている様子もない。この暑さで窓も開けずにいられるはずもない。敷地内を舞は歩き回つたが、本当に人がいないことで少し不安になつてくる。だれかに会えばこの状況について教えてもらえる、そういう楽観があつたのだ。

「ひじき女め」

心細さから、会いたくない相手を想像して舞は呟いた。

蝉の声も聞こえない静まり返つたグラウンドを、とぼとぼと歩く。

よく見る寂しい夢のようだ。舞は思つ。目的もわからないまま、見慣れた風景をぐるぐると回る。だれにも会わない。なにかに追われているような気がする。それがなにかはわからない。漠然と目覚めの悪い嫌な夢。正夢だったのだろうか。陽炎が揺らめくトラックを見つめる。

ぱしゃん。

水音が聞こえたのは直後だった。

「あ、そつか」

グラウンド脇に設置されたプール。舞は参加したことがないが、夏休みは開放されている。先生もそれを監視しているのかもしれない。だれでもいいから会いたかった。

勇希がいた。

見間違うはずもなかつた。フェンスの向こうにプールに浸かる姿を見て、舞は思わず顔を隠した。どういうことなのか、ケータイストラップの手鏡でおかしなところがないか真つ赤になつていての顔を点検しながら考える。結論はすぐに出た。ひじき女が電話に出たことを知つた勇希が自ら事情を説明しようとしている。それ以外にありえない。

舞は思い込みが激しい。

客觀性皆無で都合の良い答えを導くと、舞はプールの入り口に向かう。フェンスの扉には鍵がかかっていたが構わずよじ登る。どうして開いてもいい中にいるのかという基本的な疑問は抱かなかつた。どうやって街をやってきたのかも。

「勇希くん！」

嬉しさが溢れた。

「勇希くん、どうしてここに？」

そう尋ねたのは、自分を選んでくれるという答えをはやく聞いたかつたからに他ならない。プールサイドを小走りに進み、飛び込み台の上に身を乗り出し、水面から顔を出した勇希に呼びかける。

「ねえ？　どうしてここに？」

「どうしてつて……そっちこそなんでここに?」

だが、勇希の答えはそうではなかつた。濡れた前髪を搔きあげ、首を傾げる。

「え? 勇希くん、聞いてきたんじゃないの?」

「聞いて? なにを?」

とぼけている風ではなくそつ言つているのは舞にもわかつた。

「ひじりえみこ、知らない?」

「……聖、つて」

その瞬間、動いた勇希の視線の先、プールサイドのベンチに横たわる少女がようやく舞の視界に入つた。どういうことなのか、結論はすぐに出た。ひじき女が説明もせずに連れてきたのだ。自分と彼を別れさせるために。それ以外にありえない。

舞は思い込みが激しい。

「へえ、そう……」

舞は寄り掛かつていた飛び込み台から立ち上がり、スタスタとベンチに向かう。

「そう、つて……如月? おい、ちょっと」

勇希が慌ててプールから上がろうとしている間に舞はベンチの前に立つ。

「……ええ?」

信じられないものがそこにあつた。

舞は横たわる少女の顔を見て、プールから上がってきた勇希の顔を見る。ほとんどまつたく同じ顔だった。髪の長さが違つて、身体つきを見れば隠せない性差があるものの、目も鼻も口もそつくりである。さつきまで湧いていた怒りの感情が一気に混乱する。

「如月、待て、その人は寝かせて……」

水滴をボタボタ落としながら勇希が舞の肩を掴む。

「勇希くん、この人だれ?」

その手を払つて、舞は振り返つた。

「はい? いや、さつきそつちが言つたら、聖、笑子つて

「勇希くんとどういう関係？」

「関係？ カンケー？ えー、と。それは……」

あからさまに勇希は困った顔をする。

その身体に昨日はなかつた大小さまざまな傷があることや、水着でもないホットパンツで泳いでいたことが舞の目には入つた。いよいよ状況がよくわからない。彼女の中でいくつもの想念が絡み合つてこんがらがる。思考がまとまらなかつた。

「……その、なんて説明したらいいか」

「無関係です」

園声に背後を見ると、二つの間にか笑子がベンチの上で起き上がつていた。苦しそうに胸元を押されて、周囲を見回している。

「話は途中からですが、わたしと、ゆつきくんは無関係です。今日、初対面ですから。えっと、それで、ここ学校ですか？ 舞さん、ですかね？ わたし、どうやってここまで来たんですか？ そうだと、まぞのさん？ どうですか？」

「そう、だけど」

なにを言つてくるかわからない。馬園は田の前にいる。

「……無カンケー」

その言葉に落胆する勇希を見て、舞は冷静になつて笑子に向き直る。

「そんなに顔そつくりで無関係とか信じられるわけないでしょ

「顔そつくり？ わたしと、ゆつきくんがですか？」

舞の言葉に、笑子は勇希の顔をマジマジと見て首を振る。

「いいえ？ まったく似てないです。なに言つてるんですか？」

「はあ？ 鏡みたことないの？ そつくりじゃない！」

舞は俯いている勇希の顔を掴んで、笑子の前に引きずり出した。

「あの、ちょっと、痛……」

「おでこと耳がぜんぜん違いますよ？」

「おでこと耳以外はほとんど同じよ……」

抵抗する勇希の言葉など一人の耳には入つていなかつた。

「……んんん？ そうか、わたし、よくいる顔なのかも知れませんね？」

しばらく勇希の顔をじっくりと見て、笑子は結論する。

「はあ？ なにそれ自慢？ そんなに可愛くてよくいる顔とか！ あまりの強情さに舞も怒りを抑えられない。

「え？ 可愛いですか？」

「褒めたんじゃなくて！ 真に受けんな！」

「あの、ちょっと、似てるか似てないか、そんなに重要？」

ヘッドロック状態の勇希が口を挟む。

「それもそうね。でも、プロポーズされたんでしょ？ その時点で無関係つてありえない」

「けれど、わたしが蘇つた直後ですよ？ いきなり。無関係でなくとも一方的ですよ」

「うえつ？ わー！ わー！ わー！」

「蘇つた？ なに言つて……」

「わー！ わー！ わー！ わー！」

舞の手を振りほどいて、勇希は一人の間に割つて入る。

「如月！ おれと、この人は無関係、それでいいだろ？ なにか問題あるか？」

自分と笑子を指差して、涙目で言つ。

「プロポーズはしたんだしょ？」

舞は冷ややかにそんな勇希を見た。言葉を額面通りに受け取れない。

「しましたよね」

背後から笑子が援護する。

「した、したけど断わられた！ な？ 断わられたら無関係だろ、フツーは」

半ば投げやりに勇希は言つ。

「舞と勇希くんは違うけど。それで？ 蘇つたって？」

舞は知りたかった。

プロポーズされるほど田の前の少女が勇希に好かれる理由を。

「だから一つ！ それはー！」

「実はわたし、一回死んでるらしいんです」

笑子はあっけらかんと答えた。

「言うなー！」

「死んでる？ なに言つてるの？ 生きてるじゃない」

舞は眉を寄せる。

「聞くなー！」

「ええ、だから蘇つたってことですよ」

「もうやめるー！」

勇希がじたばたと一人の会話を遮ろうとしたが、会話はもちろん筒抜けだった。

「死んで、蘇つた？ そんなことあるの？」

「わたしもびっくりなんです。でも地下鉄は通つてますし、電話は小さくなつて持ち運びできるようになつてますし、街の雰囲気もだいぶ変わつていましたし、東小も、あの校舎の建物、綺麗になつてますよね？」

「建て直したつて……」

思わず舞は考え込む。

瓜一つの顔をしていて一人が無関係とは考えられなかつた。なにがある。それは必死な勇希の姿を見ればわかる。それに彼に限つて初対面の相手にプロポーズするようなことはない。自分が告白したとき既に、彼にはずっと好きな相手がいたのだ。その相手が目の前の少女だったとすれば話は繋がる。蘇つた、その言葉通りの意味を取るならば、むかしに死んだ相手のことが好きだったということになる。

けれども、東小で新校舎と呼ばれる建物ができたのは舞が入学するよりも以前のことだ。正確に記憶しているわけではないが、生まれるよりも以前の話である。田の前の少女が見た古い校舎など見られるタイミングがない。それを見ている過去の人物と、同じ年の

勇希が出会いっていたなど仮定においてもありえない。

「は、はつ、はつ……」

勇希は息切れしている。

なぜ、ここまで必死なのだろう?

「どうかしましたか? 舞さん」

「死んだのつていつの?」

その疑問を解き明かすには知るしかない。更に質問を進めよつとする。

「舞!」

叫びが質問をかき消した。

そして、腕を引っ張られていた。

「勇希くん、いま、舞のこと舞つて……」

自分から?

「ちょっと来いっ、話しておくからー。」

「う、うん」

強引に自分を連れて行こうとする勇希を見ると疑問に嬉しさが勝つた。

「ゆうきくそ、舞さんと話をするのはわたしの……」

「その話は後で! あとベンチの下!」

舞は勇希が指差した先に黒猫が丸まっているのを確認する。

そのまま、勇希は舞をシャワーの影に連れて行く。

「あの人は、おれの母さんだ」

その事実は单刀直入に告げられた。

「……それってどういう?」

舞の中で疑惑が綺麗にまとまりを見せたが、結局、一点だけが問題だった。

「言つた通りだよ。母さんなんだ。おれらと同じ年ぐらいで生き返つた。でもそのことを本人は知らない。だからこれ以上、死ぬ前のこと聞くのはやめてくれ」

勇希は舞の目を見ず、シャワーヘッドを見上げて言った。

「やうじやなくて、勇希くんはお母さんだとわかつてプロポーズしたの？」

「……それは」

舞の目を一瞬だけ見て、勇希は目を伏せた。

「そんなのおかしい。お母さんでしょ？ そんなの……」

看過できない事実だった。

普通ではないのもそうだつたが、舞にしてみれば恋人を母親に取られるという状況そのものが許しがたかった。口にはしなかつたがマザコンである。

「わっかんねーよー！」

勇希は大きく首を振った。濡れた髪から水滴が飛ぶ。

「わかんないって」

「だつてそりゃだろ？ あの人はおれの母さんだけど、このまま生き続けたつておれを生んだりしない！ おれの母さんにならない！ 父さんとまた結婚したつて、おれは生まれてこない！ だつたら、おれの母さんになつてもらうこな……」

感情的に喋っていた勇希の目が不意に一点を見つめて止まった。

「どうしたの？」

つられて舞もそちらを見る。

「……わたしが、ゆうきくんのお母さん？」

ひきつった表情を浮かべて、十三歳の笑子が立っていた。

10 マザーランプレックス（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

10 諸々、私たち家族は大変なピンチです。

しばらくの間、三人は立ち尽くしていた。

どうすればいいのかわからないに違いない。勇希は自分を挟む二人と視線を合わせようとはせず胸元にぶら下がる鍵を握りしめていたし、笑子はだれかが「冗談だと言つてくれるのを待つてているかのような顔をしたまま言葉を失つていて、舞は考え込むように腕を組んで目を瞑っていた。そんな様子を見つめる私こそどうすればいいのかわからないのだ。

少し転寝をしている間にビーツしてこじれるのか。
などと、己の怠慢をなにかに転嫁しても仕方がない。

避けて通れる問題だと思つていたわけではない。蘇った笑子が、以前の自分がなにをしてきたのかということに興味を持つのは自然なことである。守護者として戦い、結婚をして、子供を産み、どうして死んだのか。そのすべてを、いつかは私が責任をもつて知らせなければならぬことはわかつていた。だが、蘇つて数時間、十三歳になつてしまつた彼女には受け入れられないであろう事実が多く含まれていることもわかつている。

だから時間が欲しかつた。

しかし、それも私の言い訳に過ぎない。いきなりのプロポーズなどで見失つていたが、幼くして母親を失つていた勇希の気持ちを考えれば、蘇った母親を、どういう形であれ自分の近くにあるものにしたいと思うのは必然的なことだ。これまで一度も息子の口から母親を求めるような言葉は聞いたことがなかつたが、それこそ死んだ笑子を唯一の母親と思えばのことだつたのかもしれない。時間を待つ余裕などなかつたに違いない。

遅かれ早かれ、いずれは直面しうる状況だった。

私は誤認していた。

これは息子の三角関係の問題ではない。

家族の問題だ。

「……そんな。わたしが、ゆうきくんのお母さんなら」「

笑子は勇希から私に視線を向ける。

「ゆうきくんのお父さんのもぞのさんは、わたしの「

「そのことは気にしなくていい！」

彼女の咳きを遮つて、私は口を開いた。

「猫がしゃべつた？」

舞が驚いているがそれには取り合わず、私はまっすぐに笑子を見る。バレることを気にしている場合ではなかつた。ここで沈黙することは私が私の責任を放棄するに等しい。

決断しなければいけないことだつた。

「まぞのさん……」

笑子が私を見る目には恐れが浮かんでいる。

自分では知る由もない、過去であり、未来でもある自分に対する恐れだ。

「はつきりと言つておく。かつての君がどう生きたかは問題ではない。君は、いま十二歳の君として自由に生きる権利がある。それが『蘇つた』といふことだ。私は君を過去に縛らない。他のだれの過去にも縛られることはない。もちろん、私の息子の過去にも」

そう言つて、私は勇希を振り返る。

「……」

勇希は私の目を見ると、なにも言わずに視線を外した。

「勇希、わかつてゐるはずだ。彼女は……」

「それなら！ 父さんはどうこうつもりで生き返らせたんだよ！」

「それは……」

私は答えに窮する。

死んだ人間が、蘇つたとして同じ人生のつづきを選ぶのがどうか。考えなかつたわけではない。それでも、私は信じていたのだ。死んだ当時の笑子ならば、私と、息子との、三人家族のつづきを選んでくれる。疑つ余地はなかつた。信じればこそ研究をつづけられた。

けれども十二歳で蘇らせてしまった。それが私の意思に反することであり、意図せぬことであつたにせしても、蘇らせた責任は負わなければならぬ。選択の余地はなかつた。信じるといつゝことが、そのリスクを飲み込むものである限りは。

「……仕方がない」

辛うじて口にできたのはその一言だけだった。

「なんなんだよ！ 好きなんだろ！ 愛してんだろ！ だったら…

…」

勇希は私の首を掴んで吊るし上げる。

「……」

「なんとか言えよ！ 父さん！」

鼻先に息子の悲壮な表情を見ながら、私はなにも言えなかつた。言つべきことはもうなかつた。

首が絞まつてきていた。息子の腕は記憶しているよりよほど力強かつた。猫の首ぐらい、容易くへし折れるに違ひない。私は空を見上げる。死ぬことは恐ろしくなかつた。死んでも魂は残るのだ。この世界でも、魔界でもない、魂の在り処とでも呼ぶべき場所へ行くだけだ。笑子を蘇らせた後、その研究を進めようと思つていたが、それももういい。

愛している。

妻だつた笑子を、私の息子を。

かけがえのない家族を。

雲ひとつない夏空が視界に広がつていく。もういはばずだ。私の十年は無為ではなかつた。笑子が新しい人生を選び、息子は自立する。そう信じられる。だれよりも過去に縛られていたのは私で、そんな私だから報われなかつた。ただそれだけだ。命を操つた、命が大事などとは言わない。息子に殺されるならそれでもいい。惜しむ命でもない。

仕方がない。

「なんとか言えよ！ 」

ぐいぐいと視界が揺れる。揺さぶられる。

「すま、なかつた、勇希」

「……っ！」

息子が両手で私の首を掴んだのがわかつた。
息が詰まる。

視界が白くなる

「ダメっ、勇希くん！」

「まぞのさん！」

時間間隔を失つて、氣付くと私は座り込んだ笑子の膝の上にいた。

だが、彼女は空虚な視線を正面に向けていた。

「どけよっ！ カンケーねーだろ、如月にはー！」

「よくわからないけど、お父さんなんでしょう？ うひん……お父さんじゃなくとも、猫を殺すなんてダメだよ！ 勇希くん！」

そこには舞に背中から両腕を抑えられ、うつ伏せに倒された勇希がいた。振りほどこうとしているが、ぴたりと少女が張り付いていて動けないようである。

「ムカつくんだよ！ ずっと、ずっと死んだ母さんのことしか考えてなかつたくせにー！」

射殺すような視線を私に向か、届かない手を伸ばす。

「夫婦だつたんだろ？ ずっと幸せにするつて誓つた！ だから生き返らせた！」

爪を突きたて、コンクリートを引っ掻く。

「なのに、いざとなつたらなにも言わない！ 父さんはオクビヨーダ！ 猫にされて、半年もかかつて戻ってきて、自由に生きるケンリ？ バカじやねーの？ そんなの怖がつてるだけだ！ おれは、おれは母さんを母さんにする！ そうじやなかつたら……」

息子の目から涙が溢れて、落ちた。

それは一瞬で蒸発する。

「そうじやなかつたら、おれは、なんでもいいいるんだよ……」

指先から力が抜け、勇希は地面に顔を押し付けた。

「苦しかつたんだ」

舞はそう呟いて慰めるよつて息子の背中を優しく抱いた。

私はなにも言えなかつた。

臆病。

その通りだ。

猫になり、笑子を十三歳にしてしまつた私には本当のことと告げる勇気がなかつた。息子の言う通り、好きで、愛していくも、それを伝えることができなかつた。そうすることができ彼女の幸せなのだと理屈をつけて、己の無力を言い訳に、欺瞞だけを口にした。

勇希が憤るのは当然だ。

「…………ゆづきくん」

不意に、笑子は立ち上がつた。

膝の上にいる私のことは忘れたようで、じてんと転がされる。

「わたしは、どうしたら……」

ババババババババババババ。

笑子の言葉をヘリコプターが搔き消した。私の耳には遠くの音として少し前から聞こえてはいたのだが、気付くとそれらは四方から一斉に向かってきていた。複数機の音が重なり合う爆音が校舎の窓を揺らし始めている。

その場にいた全員がそれぞれ空を見上げた。

ほどなくやつてきた一機がプールの真上でホバリングをはじめ、おくれて四機が東西南北から姿を現す。自衛隊機ではない。それらはまるで学校を囲んでいるようであり、だれがどう見ても異常な光景であった。舞が立ち、勇希も起き上がる。

プールの水面が激しく波打つていた。

「…………！」

声は聞き取れなかつたが、舞がなにかを叫んで指差す。

「ごきげんよう、諸君！」

私たちの真上にいる一機から男が身を乗り出していた。この暑さ

だとうのに上下きつちりとスーツを着込んだ男で、拡声器を構えこちらにむかって叫んでいる。

「（）覧の通り、諸君らは包囲されている！ 我々は警察庁警備局警備課特定魔法対策室！」

機動隊？

「そこの黒猫、馬園圭介には逮捕状が出ている！ 及び……双子？ 聞いていないのだが！ ……息子の馬園勇希は保護の要請がある！ おとなしく投降しなさい！」

男はへりの中に怒鳴る声まで拡声しながらそのまま宣告する。

「私の正体を知つて……野末か」

自発的に告発したとは考えにくい。喋られたのか。

「……！」

勇希が私を見てなにか言つているがまるで聞こえない。

「まずいな……」

私は首を振つた。

魔法の研究等に関しては日本国の法令はないので警察の出る幕はなかつたはずだが、大学に勝手に侵入し、施設を破壊したりもした本日の行動に関して言えば逮捕される理由がないわけではない。別件からの手回しは可能だろう。とはいへ、私たちの行動を見越していたとは思えない。それならば大学で取り押さえられる。考えられるのは、今日の事態に対する対応ということだ。自衛隊と連携していない彼らの行動が意味すること。

それは

「父さん、これは！」

勇希が近くまで来て叫ぶ。笑子と舞も私を取り囲んでいる。

「彼らが首謀者かもしれない」

「はー？」 「首謀者ってどういう……？」「警察でしょ？」

子供たち三人はそれぞれ首を傾げた。

正確に言えば彼らに指示を与えるだれか、だろう。実際のところ、心当たりがないわけでもなく、噂も聞いたことがなかつたわ

る。

けではない。もちろん類推と憶測から導き出した、あくまで私の予測だ。だが、予測が当たっている場合を考えれば、

「説明している暇がない、逃げるぞ！」

私は鼻先でプールの出口をさし、駆け出そうとする。

「に、逃げるんですか？」「え、えつ？ 舞も？ 逃げるの？」

「ムダだ！」

叫んだのは勇希だつた。

じつとヘリを見上げている。その視線の先、まだビルの七、八階はあろうかという高さから男が飛び降りていた。その他の四機からもスーツ姿の若い男女が計五名。パラシユートなど使える高さでもないというのに躊躇無く飛んでいた。

私と笑子と舞もそれを見上げるしかない。

「三人とも、そこにいろよ！」

だが、勇希の判断は早かつた。

胸に鍵を差し込み、剣を両手に構え、男に向かつて飛び上がる。閃光とともに、ヘリの暴風とは違う爆風が吹き荒れた。

それを合図にするようにホバリングしていた五機のヘリは散つていく。直後、プールから激しく水柱が立ち、私たちに降り注いだ。その最中、他の四人が、プールサイドの四隅を抑えるように地上に着地する。ほんの一瞬の出来事だつた。

水柱が消え、空に虹がかかる。

そして私たちの二十五メートルと少し先、プールサイドの更衣室が壊滅的に壊れていた。粉塵が舞い上がり、プレハブの屋根がひしやげ飛び、ロッカーらしきものが壁に突き刺さつている内部が露わになつてゐる。言葉を発する間もなかつた。

ヘリの音が遠のいていく。

ずぶ濡れの私たちはお互にお互いの顔を見た。

「どうなつてるの……？」

前髪からしたたる水滴を拭つて舞が呟く。

「その、よく考えたら警察から逃げるのはよくないと……」

ぶるぶると頭を振つて水気を払つて笑子は現実逃避的なことを口にした。

「へりから飛び降りる連中がただの警察だと？」

濡れた身体をどうする気力もなく私は俯く。

「いえ……それは確かにそうですけど」

「ゆゆゆ、勇希くんは、どこに？」

「おそらく

きちんと見えたわけではなかつたが、私はプールに視線をやる。

「…………このっ！」

すると、勇希が飛び出してきて、田の前の飛び込み台の上に立つた。

そして壊れたプレハブからもスースの埃を払いながら、何事もなかつたかのように男が現れる。なにかぶつぶつ呟いているようであるが、聞き取れはしない。私は、取り囲む他の四人にも注意を払つていたが、動く気配はなかつた。どういうつもりなのかわからない。だが、これだけはわかる。

魔法に対抗できるのは、同じスケールで考えれば魔法だけだ。相手がへりから飛び降りられる軽業師であつたとしても束ねられた魔力である剣を防ぐことはできない。空中で勇希とぶつかつて、互角。それが意味するものは彼らもまた魔法を使つてゐるということだ。肉体を強化し、そして攻防に魔力を用いてゐる。でなければ理屈に合わない。

あの男がそうであるということは、他の四人も同様だらう。息子の言つ通り、逃げることに意味はなくなつてゐる。なんと言つても、猫と普通の少女が二人。頼れるのは勇希だけだ。

「勇希

呼びかけると息子は振り返つた。

「父さんのこと、もう父さんと思わない。おれが守るのは、母さんと、如月だけだ」

そして私にだけ届くような小声で言つた。冷ややかな田で見てい

た。まるで他人を見るよつた目。そこには怒りや哀しみといった感情すらなかつた。なにが乱入してこよつと、すぐに忘れるはずもない」とではある。見限られたのだ。臆病な私が、勇希に。

「……」

私には返す言葉がなかつた。

「……ゆうきくん」

笑子はそんな勇希を頬もしげに見ている。

「勇希くん！」

舞が勇希に飛びついた。飛び込み台の上でくるつとスイングする。

「どうなつてゐる、わつきの光るの。なにしたの？」

「あぶねーから、ちよつと離れて待つてゐ」

「う、うん」

急に男らしく見える勇希の言葉に、舞は頬を赤らめた。つい数時間前まで女装していた息子だと言うのに少し見ないうちに逞しく成長している。少女たちに勇気を与えていく。

諸々、私たち家族は大変なピンチです。

私の存在を抜いても、母と息子と、その彼女で家族が成立してしまう。

いや、ちょっと待て、これは私がピンチなだけだ。

10 諸々、私たち家族は大変なピンチです。（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

11 しょっぱい戦い

一人ぐらいならば楽に隠れられるダンボール。

勇希と別れた後、屋上から入ったビルの内階段に家庭用エアロバイクの空き箱と、放置されたままのガムテープを見つけたときに、テディの腹は決まった。

これを使って自力で学院まで戻ろう。

テディは全裸だった。守護者が扉を開放して戦う上では、防御のために魔力を体表に展開する必要がある。彼女らはそれを動物の体毛としてイメージし肉体を『変異』させるのだが、その作用として衣服は破壊されざるを得なかつた。そういう意味ではどうしようもないことなのだが、まさかそのまま街を歩き回るわけにはいかない。ダンボールに身を隠して移動しよう。

あまり賢い方法とは思えなかつたが、選択の余地がなかつた。
街にいる自衛隊に助けを求めるることはできた。彼らは魔法についても基礎的な事情は把握している。近くにはテディが境界域から脱出した場合のためのバックアップもある。姿を見られることを覚悟して鍵を使えば自力で戻ることもできる。
だが、それらの方法を選べば、無事に戻ってきたことが知られてしまう。

不信感がテディを突き動かしていた。

境界域で受けた魔人の襲撃。

「ユウキがああしなかつたら、あたしは間違いなく死んでた」
目の幅に合わせてテディは鍵の先で突き刺してダンボールに穴を空ける。

認めたくないことだが事実だつた。あのまま魔人数人を相手に勝つ見込みはなかつたし、自分の命を引き換えにして魔人がこちら側に出ることを阻止しようとしていた。一連の事態の中心にいるように見えた少年は利用されていると確信した瞬間でもあつた。

現れるはずのない場所に現れた敵、それが意味するのは身内の裏切りだった。だれかが魔人を魔界からこちらの世界へ連れてこようとした。テディが巻き添えに死ぬことを厭わない方法で。結果的にそれは防ぐことができたが、裏切り者の正体がわからない。

堂々と生きて戻るのは危険だった。

テディ自身を狙う動機がある相手である可能性はもちろん、守護者、ひいてはこの世界に仇なす相手であつた場合、無事に帰つてこれで終わりにはならない。だれが裏切つているのかわからない以上、だれに助けも求められない。

守るべきは魔界の穴だ。

基本に立ち戻るしかなかつた。だれが敵でだれが味方かなど、考えてもわかりはしない。この世界を魔力の侵食から守ることが守護者の目的であり、それを邪魔するものが敵になる。テディはシンプルに考えることにした。

そんな風に大義名分を立て、シンプルに考えないと挫けそうだったのだ。

「これって、どう見てもヘンタイだし……」

建物を出て数分も動くと、ダンボールの中はサウナ状態になつた。全身にびっしょりを汗を搔き、それでも脱ぐわけにはいかない箱を被つたまま、かたつむりのよつに鈍い歩みで、さらに周囲を警戒しながらテディは進む。住人たちが屋内待機を指示されていることは知つていたので、警戒すべきは自衛官だけだが、冷静に考えるところしているところを見つかれば恥もいいところだった。

ダンボールを持ち上げられ、汗だくの裸と、張り付いた髪と陰毛を見られる。呼吸も荒く、おそらく湯上りのように上気しているであろう顔、自分がするに違ひない苦笑い。総合的に見て、相手がそれをどう捉えるかなど考えたくもなかつた。

「……死んだほうがマシよ」

垂れ落ちる汗がアスファルトに残つてないか背後も確認する。道の隅、ダンボールが置かれていても変には見えないであろう箇

所を主に選んで、極力道路を横断しないようにしながら、テディは確実に前進をつづける。やるからにはやり遂げなければならなかつた。守護者としての正義のために。

「のど、渴いたな」

箱の中にもつた熱気で朦朧としあじめていた。

真夏である。ダンボールの中である。ほとんど蒸し焼きの状態である。

テディは周りを見回し、一般家庭の玄関先に設置された水道を見つけると、ずるずると移動する。普段の彼女ならまず口にしようとも思わない水だが、贅沢は言えなかつた。むしろオアシスである。ずるずると移動して周りにだれもいないことを確認すると箱を半分持ち上げ、蛇口に直接口をつけゴクゴクと飲む。生温く、苦い水だつたが、染み渡つた。

生き返る心地。

「熱中症のこと、考えてなかつた……」

一息入れ、ダンボールを被つてアスファルトに座り込む。

太陽は無慈悲だった。別の意味で死ぬ寸前だつた自分に気付いて、テディはぞつとする。これをつづけるには水分補給の手段が必須だつた。水筒かペットボトルか、しかし全裸で、金も持たない彼女にはすぐにそれを手に入れる術がない。

「ペットボトルが道に捨ててあれば……」

そう呟いて彼女はハツとした。

「いけない。完全にダメな人になつてる」

ぶんぶんと首を振り、人間としての尊厳が残つている内にと先を急ぐ。

少し進んだところに自販機があつた。

その横には当然のことながら「ミニ箱がある。

「……捨ててあるペットボトル」

ごくりと喉が鳴る。

だれが口をつけたかわからないものだつたが、洗えばなんとかな

る。ここまま水を持たずに進めば死んでしまう。自分が死ねば街は危機だ。背に腹は変えられない。テディの脳裏に次々と自己正当化の文言が現れ、消えていった。

「いやいやいやいや、それはダメ、ダメよあたし、それならいっそ……」

自販機をぶつ壊して。

飲みたいものを飲み放題！

「それはもつとダメでしょ、あたし！」

ダンボールの中で這い蹲りながら渴きのことしか考えられなくなつている思考から這い上がるよつにテディは呼吸を落ち着ける。守護者の力をを使えば、位置を観測され、こうして隠れて戻ろうとしていることの意味がなくなる。自販機を破壊するのは論外だった。ならば。

「生きるために、生きるために……」

戦場の兵士ならば泥水をすすつてでも生き延びなければ、ここが日本で普段は平和な街と言つても、今は非常事態だった。ゴミのペットボトルがなんだといつのだ。世界にはもつと苛烈な環境で生きている子供たちがいる。

素っ裸でダンボール被つて、ゴミを拾つてでも。

正義のために。

「カツコつけてなんて……」

「自販機見つけたつす！」

テディがゴミ箱の横まで這つて行つた直後、背後から声がした。ばたばたと複数の足音が近付いてくる。あまりの渴きに周囲への警戒をおろそかにしていたことに気が付いて、テディは青ざめた。動いている所を見られただらうか。

おそるおそる覗き穴から外を見る。

「ここは自分がおこるつすよ、ヤタテつち、ミズキつち」制服を着た下級生と、

「紅茶おねがいします」「サイダーだ、ぜつと」

「了解つす」

おそらくその友人たち一人と、
「じゃ、緑茶で」

一人の男。

「オニイサンは自腹つすよ？」

「え？」

「大人じやないっすか」

制服を着た少女がチャリチャリと硬貨を機械に投入していく。ボタンを押され、小気味いい音を立てて落ちてきたペットボトルが一人に手渡される。冷えたドリンク。テディは唾を飲み込む。ブシュ、ヒキャップを外してその冷たさを飲み干していく。まるで嫌がらせのような光景だった。

「ケチだな、一緒に逃げる仲間じやないか」

「仲間つすか？ どうなんすかね？」

路上に置かれたダンボールには氣も向かない様子だったことに安堵するより、なぜ彼女らが街中をうろついているのか考えるより、目の前の飲み物を奪いたいという衝動を抑えるのでテディは必死だった。この世界を守る。その当人がまさか略奪などありえない。

テディは握りしめた鍵を見つめた。

欲望に反応し、光を帯びはじめている。守護者は魔に魂を支配されないために、自らの欲望と常に向き合うことになる。移ろいやすく、時に意思とは無関係に暴走しかねないもの。それを制してはじめて、魔に魂を支配されたものを制することができる。それが守護者の教えだった。彼女をはじめ、守護者はそのことに誇りを抱いている。

それがたとえ生存の本能的欲望であろうとも。

「自分たちは、オニイサンの言つてることを全面的に信じたわけじゃないつすよ？ あんな風に駅前を消し飛ばしちゃった犯人が学院にいるとか、アニメじやないっすか」

制服の少女は最後に缶コーヒーを買い、一気に飲む。

その言葉にテディは耳を濟ませる。事情を知つてゐる？

「それは酷くないか？ ならどうして俺の言つ通りに逃げるわけ？」

男は入れ替わりでお茶を買い、ペットボトルを額に当てる。

「ふはっ、それは……本当のことを知りたいからっすよね。現実なんてそんなに面白くないって、大したことないって、確認しなきゃアーメの方が面白いって言えないっすから」

「あれだけのものを目撃してまだアーメ？」

男は呆れたように言う。

「どれだけのものを目撃しようとかアーメっすよ。現実の価値なんて簡単に崩れたりしちゃうっすから。人間が価値を作つて、価値を制御できるのは非実在の世界だけっす」

そう言つと、残りの二人もうんうんと頷いていた。

ダンボールの中でテディは首を傾げる。

「……君ら、変わつてるつて言われるだろ？」

その気持ちを代弁するように男が言う。

「そういう標準を求められる価値觀から抜け出したいんですけどね」

「新しい価値が欲しいんだ、ぜつと」

男は一口お茶を口に含んで、キヤップを閉めた。

「本当のことを見て、それでもそう言えるなら立派だとは思つけどね」

そう言つとやれやれとダンボールに腰を下ろしてきた。

予想外の行動だった。ダンボール自体が厚手のものだったので凹んだり折れたりはしなかつたが、路面との間にあつた隙間がふさがれ、内部のテディは一気に息苦しくなる。もともとサウナ状態だったがもはや限界を超えていた。

蒸し焼きにされることを想像してテディはパニックになる。

「でも実際のところ、学院に近付くにつれ自衛隊の人数が増えてるのは事実だ。ここまでなんとかこれたけど、どうしたものかな。やっぱり四人で行動するのは無理があると思う。ここには一人ずつに

分かれていくのはどうだろう？俺とナツメちゃん、で、君ら一人

「ロリコン」「ロリコン」

「自分、そんなにロリ需要ないと思うつすけど」

「いい加減ロリコンから離れてくれないかな？ こいつ言っちゃなんだけど、君ら三人に女性としての興味は抱いてないよ？ 俺の好みは年齢つていうより成熟度なんだよ。いるだろ？ 同学年でも凄い完成されてるような子。年食つてもそうならない人もいるし、その逆もある、そこ辺りを無視されると困るんだよ。あえて言つならさ……」

動けない。

男はテディの頭上で長話をはじめていた。暑さに呼吸が激しくなり、そしてどんどん酸素が減っていくような錯覚が襲う。喉の渴き、べたつく汗、アスファルトに焦がされるような足の裏、密閉空間。なにもかもが耐え難かつた。いっそダンボールごと男を持ち上げ、爽やかな夏の風を全身に浴びたい。そんな衝動さえ生まれつつあった。

しかし、ここで見つかったらすべてが水の泡だ。

耐えるしかなかつた。

いつたいなにをしているのか、これが正義なのか、守るべき人々の無理解はわかっていたつもりだつたが、こいつして現実に虐げられる謂れがあるのでどうか。テディはとろけそうな脳みそを集中させ、身体を丸く抱え込み、耳を塞いだ。

「……美はそういうところにあるんだよ。そういうわけで、わかる？」

男はゆっくりとペットボトルを飲み終えるまで喋つていた。

「変態です」「変態だ、ぜつと」

「変態つすね、っていうかもう自分たちさつさと行くつす」

あまりの露悪趣味に三人は完全に男を信用できなくなつていた。

「ちょ、ちょっと待つて」

テディはしばらく、彼女らが去つていったことにも気付かなかつ

た。

汗は舐めるとしじつぱい味がする。

「熱中症には塩分補給、熱中症には塩分補給、熱中症には塩分補給

……」

現実的なことだけを考えるしかなかった。

結局、ゴミ箱からペットボトルを拾い、着実な水分補給をつづけ、一時間近い時間をかけてテディは学院の前までたどりつき、

「動くダンボールってこれ？」

「ええ、そうなんです」

学院の周辺を警備していた候補生たちによつてあつせりと発見された。

「て、テディさん？」

「はだか？」

そのときの彼女の顔は、涙と汗でぐぢやぐぢやであったと言つ。

事情はわからなかつたが、緊急事態であることは明らかであつた。発見した二人はテディの名誉のため、箱ごと速やかに保健室へ担ぎ込む。だれが敵か味方かもわからない状況においてこのことは結果的に彼女にとって幸運であつた。それもこれも正義を貫こうとする不屈の意志が引き寄せたものだろう、間違いなく。きっと。そう言わなければ報われない。

1-1 しょっぴに戦い（後書き）

お読みいただきありがとうございました。
ごめんなさい。

11 「……運命、ですか」

男はきちんと締めたネクタイを首から引き抜きながら、一十五メートルのプールを挟んで勇希の正面、飛び込み台に立つた。シャツのボタンを外し、胸元を露わにする。細身ながら鍛え上げられた筋肉が覗いていたが、しかしそれ以前に、その胸に埋め込まれた機械に私は息を飲んだ。大人の掌ほどの円形から胸の内部に向かつて植物の根のようなパイプが繋がれている。そしてその機械の中央には見覚えのある澄んだ青色の 液体。

魔力溶液だ。

「馬園圭介、見えているか！」

男は大声で言った。

「君の研究成果 人工魔力生成装置だ！ 小型化し、人間に埋め込んだ！ この意味はわかるはずだ！ これが新たな時代を開く『鍵』となる！」

「……バカな」

ありえない。装置の完成から半年で小型化を達成していることもそうだが、私の研究にない応用的な活用まで。野末が協力していたとしても、とても追いつくものではない。

いや、そんなことより、この状況は、

「勇希！」

息子が危険だ。

「……」

私の声に、ちらりとこちらを見た勇希だったが、頷きもしない。

「戦うな！」

「もう、おそい」

息子が呟く通りだつた。

田にも留まらぬ速さで移動できる彼らにとつて、一十五メートルという距離は間合いの内に入らない。プールを縦断して男が突っ込

んできていた。大人と子供の身長差そのままに覆いかぶさってきた手を受け止める。衝撃で足元の飛び込み台がひしゃげ、背後でプールの水が左右に溢れた。

「肝の据わった立派な息子だな、馬園」

余裕の笑みを浮かべ、組み合つたまま、男は私を見る。

「あんな猫の子のつもりはない！」

そう叫んで、勇希は男の腕を押し返そうとした。

反り返りかけていた身体を起こしながらプールに向かつてじりじりと進んでいく。

「なるほど、一理ある。だが、子は親を選べないもの、だつ…」「えつ？」

だが、男の方が一枚も一枚も上手だった。笑顔のまま、あっさりと力比べを放棄して、軽やかに身体を入れ替え、息子をプールに投げ落とす。全力の力を受け流され、ふたたび巨大な水しぶきがあがつた。完全に遊んでいる。

「我々の職務は、君の逮捕と、息子君の保護だ。馬園」

男はプールに沈んだ勇希を見つめながら言つ。

「だが、聞き分けのない子供に道理を説いてやる義理はない。この際、手荒な躰を施して、鍵を押収できるのならば手柄にもなる。本物の守護者と対する前にこうして『練習』する機会もそうはないだろう。我々にとつてこの状況はとても都合がいい」

プールの底が抜けたのか、奇妙な音を立てて水が流れ出しあはじめる。

男は私に決断を迫つている。

私の逮捕、勇希の保護などは警察として動く口実に過ぎないことは明らかだった。つまり、彼らは守護者と戦いに来ているのだ。その目的もおおよそ推測できる。

「ひとつだけ教えてくれないか」

私は呆然と立ち尽くす笑子と舞に目をやりながら言つ。

「我々に答えられることならば

「？先生？はなにを望んでいるんだ？」

「君もよく知つていいことだ」

男は振り返つて脣を皮肉に吊り上げた。

「世界平和」

荒唐無稽の響きだつた。

プールから紫色の光が进る。

「魔界の穴を開くことがか？」

私は推測を口にした。

「質問はひとつだけじゃなかつたのか？」

男は否定しなかつた。

「そんなことをすれば、こちら側が魔界になるのと同じだ！」

「君たち学者連中が誤解しているのはそこだ。魔力が人の魂を魔に染める？ 違うだろ？ 最初から人の魂は、魔だ。潜在的にあるものが引き出されているだけだ。だとすれば、それも力で捻じ伏せる必要がある。平和を望まぬ者たちに先んじて」

「それが世界平和だとでも……」

「君にそれを口にする権利があるのか？ 死んだ妻を蘇らせることさえできれば、この世界の秩序さえも破壊して構わないと言つたそうじやないか！」

「……っ！」

その通りだつた。

『　この研究が世の中を根底から変えちまつてことがわかつていながら』

人の生死が自由になつてしまつたらどうなるのか。

わかりきつたことだ。世界は混乱する。人口の際限ない増加、それから引き起こされる諸問題、あまりにも影響が大きすぎるでの、具体的なシミュレートをする氣にもなれなかつた。

それに私にとつてはそんなことはどうでもよかつたのだ。

「このおつ！」

濡れた翼をばたかせながら、勇希がプールから飛び上がつた。

血管を走る魔力が、身体の色まで変える。身長の三倍はあろうかといふ筋張つた翼、《変異》によつて過剰に強化された肉体、そして男を見る殺氣立つた瞳、それは正に悪魔的な姿だった。

魔法が人の本性を暴くのか？

そうではない。私が世界のことなど考えなかつたように、人は最初から……。

「勇希くん？」「……ゆつきくん」

舞は目を擦つてまばたきを、笑子は手で口を押さえた。

「扉の開放か。直に目にするのははじめてだ。なかなか凄いものだな」

余裕の態度を崩さず、男は咳いた。

「一Jのつ、ヤローーつ」

そう叫んで、勇希がさらに上昇、勢いよく反転して急降下していく。

男はその様子を見上げながら、ゆつきりと手を挙げた。

「撃て！」

銃声。

四方を囲んでいた四人が一斉に拳銃を抜いていた。

勇希はそれに気付いて翼を盾にしたが、銃弾が当たつた所に閃光が走り、見る間に大きな穴が開いて貫通した。直後、一射目の銃声が響く。三射目、四射目と立て続けに撃たれ、踊るように空中それを受けた息子の身体は、そのまま真っ逆さまに墜落した。またプールに水しぶきがあがつた。

私は慌ててかけより中を覗きこむ。半分ほどまで減つた水面に、勇希の身体は浮かんでいた。意識がないようで、肉体の回復がはじまつていない。水に紫色の血が広がっていく。

「圧縮した魔力を込めた弾丸だ。高密度の魔力は、それ以下の魔力を相殺する。結果、銃弾は銃弾としての威力を充分に発揮できる。効果は実証できたな」

「相手は子供だぞ！」

「その子供を使って戦わせている君が言つことではない」
急に無表情になり、男は言つた。

「……」

なにも言い返せず、私は首を振る。

そんなつもりではなかつた。あくまで私が人間の身体を取り戻し、妻を取り戻し、家族を取り戻す、そんな小さな、だれもが望む幸せを欲しだけだ。世界平和などという大それた正義を掲げるつもりもない。私は、ただ、それなのに。

「もう、やめて！」

「やめてください！」

舞と笑子がプールに飛び込んだ。

腰ぐらいままである水を搔き分けて、勇希のもとにかけよつていく。

「押さえろ」

だが、男は構うことなく部下たちを動かして一人を取り押さえさせた。

「はなせ！」「はなして！」

じたばたと暴れていたが、為すすべなくプールから引っ張り出される。

「繰り返すが、我々の職務は君の逮捕と、その息子の保護だ」

「……」

「だが、君の息子が魔法を用いて我々に抵抗する限り、それは制圧しなければならない。無軌道な力は平和を乱す。こちらには正当防衛を行なう用意がある」

男は淡々と言葉を繋いだ。

「だが、鍵から無尽蔵に魔力を得て、心が折れない限り戦いつづけようとする君の息子にいつまでもつきあうことはできない。現状、我々に埋め込まれた人工魔力生成装置から肉体の『変異』に充分な魔力を得られる時間は限られている。従つて鍵を奪う必要がある。魂の奥にまで突き刺さった鍵を抜くには、君も知つての通り、忍びないことだが……」

「私が説得して、息子に鍵を渡せる」

私は男の言葉を遮った。

どうあれ勇希を殺させるわけにはいかない。

「……賢明な答えた。父親としての責務を果たせ」

私はプールに飛び込んで、息子のところまで泳いでいく。猫の身体は水泳には向かないが、底には大きな穴が開いていて、水はどんどんと減っていた。

順序を見失つてはいけない。

たとえ、勇希が私を父と思わなくとも、私にとつてはかけがえのない息子であることは変わらない。笑子が私を夫だと思わなくとも、私にとつては永遠に愛した妻であることも変わらない。私たちはどうしても家族なのだ。そこに今は私の居場所がなかつたとしても、これから作っていくことはできる。私の思いひとつ、行動ひとつ、失つた過去をとつもビせなくとも、未来は作り上げていくことができる。

猫の身体で泳ぐのははじめてのことだ、溺れそうになりながらも、渦巻く水面を私は必死で四肢を動かし、進んでいく。浮かんだ、息子の身体は段々と穴に吸い寄せられていた。

「起きろ！ 勇希」

呼びかけると水が口の中に入つてむせる。

「勇希！」

「……う、あ？」

目を開けた息子の身体に力が入つて沈み、飲んだ水を吐きながら起き上がつた。

「げつ、げほ……、あれ？ おれ……」

「勇希、よかつた……おあ？」

私は安堵しながら、必死に脚を掻いて寄つていく。だが、息子の身体より、私の猫の身体の方が流されていた。流出する水の勢いに負けて、穴に吸い込まれそうになる。

いかん、あまりにも後先考えずに飛び込んでしまつた。

「助け、で」

と、言つた直後に、勇希の手が私の身体を掴んでいた。

「なにやつてんの」

「……すまん」

息子は私を抱えて水底をけり、プールサイドへ転げ出た。

「ちくしょ……母さん、如月」

私を放り出して、勇希は取り押さえられている一人を見ると翼を立てた。さきほどの銃弾で穴だらけのそれは徐々に回復をはじめているが、息子自身の疲労の色は明らかだつた。両腕で震える膝を押さえている。立つのがやつとの有様だ。

「もういい！ 戦うな」

私は息子の背中に向かつて叫んだ。

「？ ……ふざけんな。母さんと、如月を助けなきゃ」

「戦わなくとも助けられる。彼らは敵じやない」

味方でもないが、少なくとも彼らは職務としてここに来ている人間だ。

「……いみ、わかんねーよ。逃げろって言つたのは」

勇希は言いながら、前に向かつて足を踏み出す。

「私だ。だが、もういい」

あの男の言葉で状況は充分にわかっていた。

仕組まれていた。私が猫にされる以前、人工魔力生成装置の研究に金を回してくれ、私に不相応なポストまで用意してくれた？先生？が裏で糸を引いているのだと。おそらく野末を動かして私を猫にし、同じようにして他の人間にもさせていた研究を統合して、人工魔力発生装置を小型化し、ああして人間に埋め込む技術まで導き、警察内に魔法に対抗する組織を作つたのだろう。それができる人物だ。世界平和のため。それが本気かどうかはわからないが、口癖だつたことは知つていてる。

けれども、そんなことはどうでも良かつた。怒りの気持ちもわかない。それについて追求する気もない。私は世界平和などにはまる

で興味がない。しかし、だからこそ、彼らは私たちを殺しはしない。目的の障壁と思えば排除するだろうが、そうでなければ無事に済むはずだ。特殊な立場とは言え、警察である限りは無闇に人を殺したりはないものだ。

だが、そう言つても息子を説得する材料にはならないだろう。

「勇希、私は母さんを愛している」

「……」

息子は、さらに一歩歩こうとして、足に力が入らないのか崩れ落ちた。

「だからこそ、蘇った母さんが、聖笑子として新しい人生を歩むことを尊重したかった。それが私の愛なのだと思った。わかってくれとは言わない。私が臆病で、気持ちを伝えることを怖がっただけだと言わればその通りだ。言い訳のしようもない」

私はゆっくりと這い蹲る息子の正面に回り混む。

「でも、それでも、だ。息子である勇希のことも同じように愛している。その気持ちが伝わらなかつたかも知れない。不甲斐ない父だつたかもしれない。許してくれと言つても、許されるものではないかもしれない。だが、私たちは家族だ。どんな形にならうともそれは変わらないと私は思つてゐる」

「……わからぬー、よ」

荒い息を吐いて、勇希はよろけながら起き上がつた。

「鍵を渡すんだ。大事なものはなんなのか、わかるはずだ。もう魔法は必要ない。私たちは家族で、一人も欠けていない。それが大事なんだ」

「……これは、母さんの形見、だろ」

苦しそうに勇希は言つ。

「本人が生き返つてゐる。形見はもう形見ではない」

「おれは、母さんと、父さんと……」

勇希の身体の色が元に戻りはじめていた。

「そうだ。私も笑子と、勇希と」

歩こうとする足がもつれ、力なく座り込むと、翼が光の粒になつて消えていく。

「……これを渡せば、みんな、助かる？」

焦点の合わない目で私を見て、勇希は自分の胸に手を当てた。

「ああ、助かる。父さんが保証する」

「そつ、か。じゃ……」

鍵を抜き取つて、私に手渡そうとして限界を超えたのか、息子はぐつたりと倒れた。

すぐに寝息が聞こえてくる。無理もないことだ。

力チン、と転がった鍵を咥えて拾い上げ、私は男の前に向かう。

「これで、いいだろう？」

足下に鍵を投げ、私は言った。

視線の向こうで、押さえられていた笑子と舞が解放され、勇希のもとへ駆け寄つていく。完全に眠つてしまつたらしい息子を仰向けにして頬を叩いたりしているが起きる様子はない。

「十分だ。迎えも来た」

拾い上げた鍵をしげしげと眺め、男はプールの入り口に目をやる。コツ、コツ。

いつのまにやつてきたのか、制服の警察官が多数、その中央に杖を突く老婆が一人。葬式にでも行くような真っ黒な、それでいて明らかに高価な洋装を身に纏い、ゆっくりと歩いてくる。真夏の陽射しが降り注ぐプールには似つかわしくない風景だった。

その姿に私は目を疑つた。

「お婆様？」

背後で笑子が素つ頓狂な声を出した。

それも無理からぬことだ。

だが、私の驚きとはまったく違う種類の驚きである。なぜ、ここにいるのだ。

笑子の祖母にして、聖木乃女子学院の理事長、そしてこの街の守護者を統括しているはずのこの人物が、よりによつて？先生？と？

がっていたといふのか？

ならば、この状況は

「奇遇ね？」

動搖する私の心を見透かすよつた声で聖千笑は私に言つた。
「でも、じつじつことを運命つて言つたのよ？」圭介た。

「……運命、ですか」

そんなものは信じていない。

しかし、そのときの私は、それを否定する言葉を発することができなかつた。老婆は、笑子の姿を見てぽろぽろと涙を流していたからだ。そこに嘘はない。これがどんな理由による再会であれ、水を注す氣にはなれなかつた。

かつての孫に対する裏切りなのではないか？

11 「……運命、ですか」（後書き）

お読みいただきありがとうございました。
こましだ。

12 私自身、若かつたとは言え、ありえない返答でしたが。

「お約束のものはこれで宜しかったですか？」

シャツをきちんと着直すと、男は、私から受け取った鍵を千笑に手渡した。

「ええ、結構です」

ハンカチで涙を拭い、枯れた枝のよつた手で受け取った鍵をそれで包んだ。

「子供たちはお任せするわ」

「我々で責任を持つてご自宅までお送りします　おい」

男の指示で、制服の警察官たちがまず倒れている勇希を抱え上げた。迅速な動きだった。呆気にとられていた笑子と舞の一人も有無を言わざず運び出そうとしている。

「まぞのさん！　お婆様！」

「ちょっと、勇希くんをどうするつも……変なトコ触らないで！」

「抵抗しなくていい。警察の言つ通りにすれば安全だ」

私はそう声をかけるので精一杯だった。

制服たちと共に、四方を囲んでいた四名もプールサイドから立ち去り、私と男と老婆だけがその場に残った。奇妙な静寂の後、蝉の鳴き声が急に激しくなったように感じる。そして、気付くと一人は私を見ていた。

そうだった。私の思考がまとまらぬつが、私の立場は変わらない。

「覚悟ならできている、と言えば嘘になる。心残りも数え切れない

」

私は自分に向かつて口にした。

役目は終わったのだ。

男が迫っていた決断はつまり、私が息子を見殺しにするかどうか

だけだった。

最初に自らの身体に埋め込まれた人工魔力生成装置を見せ？先生？が私に見い出した価値の終わりを告げ、息子と戦い、必要以上に力を誇示して優位性を見せ付け、そして繰り返し『逮捕』を強調した。少し考えればわかることだ。日本で猫が法廷に引きずり出されることは、決してない。捕まえた先は殺処分なのだ。取引ですらない。

勇希を見殺しにはできない。それは考えるまでもないことだつた。逃げられない私が果たすべき責任はひとつだけだ。

「だが、笑子の命と、勇希の命、ふたつの命と引き換えなら、己の命も惜しくはない」

だから、私は息子を説得して男に鍵を渡した。この世界で魔法を知りながら生きられる道は一通りしかない。魔界の穴を守る側につく道か、それに対抗する側につく道か。笑子が生きていた頃、私は前者で、笑子が死んだ後、私は後者になつていった。どちらに正義があろうが関係なかつた。私に必要なのは笑子であり、勇希である。それだけだ。

それだけなのだ、

「が」

私は己の無力を感じながらも尋ねるしかなかつた。

「果たして、この状況で一人がこの先も生きていくことができるのか懸念している。この街にある魔界の穴を守る立場である聖家の当主と、そして世界の秩序を変革しようとする？先生？が手を結んでいるということがどういうことなのか」

「圭介さんの想像している通りだと思つわ」

千笑はハンカチを懷に入れ、ゆっくりと歩きだす。杖を突いて歩く、その横に男が従つた。

「あなたもいらっしゃい。笑子を殺したものの最期を看取りに」「笑子を殺したもの……？」

それは

笑子が守護者であることを知られたのはプロポーズの後だった。

「あ、その、笑子さんを、幸せに、だから、僕が、そう、えつ……と」

「どうしたの？」

「幸せを、僕に、笑子さんが？　違う、いや、違わないけど、結婚を」

「結婚？」

「だ、だから、はい。これを、受け取つてください。結婚してください」

悩みに悩んで選んだレストランで、考えに考え抜いたセリフが土壇場でひとつも出でこないという様にならない私に、彼女はひとり笑うと、少し言いにくそうに答えた。

「圭介くんがそう言つてくれたのは嬉しい。けど、少し考え方を渡した指輪の箱を静かに閉じた。

「わたしの家、ちょっと特殊だから」

「家？　それは、その格式？　みたいなこと？」

聖家が古くからつづく資産家であることはその時の私も知つていた。そういう意味で一般家庭の出である私はいくらか不釣合いであるところことは周囲からも言っていたし、結婚を申し込むに際してももちろん悩んだことではある。

「ううん、そうじゃなくて。わたし、圭介くんに隠していることがあるから」

「……隠している」と？

聖木乃女子学院の中庭に連れて行かれたのは那一週間後だった。魔界の穴を封じている桜の巨樹の前に立たされ尋ねられた。

「なにも感じない？」

「……え？　いや、女子校だからって興奮なんかしてない、本当に

私には資質がなかつた。

「はあ……圭介くん。そうじゃなくて」

「じゃなくて？」

「わたしの家は、代々この場所を守つてゐるの」

笑子は自嘲するように唇を歪めて、聳える樹の幹を見上げた。

「ああ、もともと木乃市一帯が笑子さんの家の土地だつたって話は聞いたことがある。市役所があるところとか、公園とか寄付した場所も多くて、市長も初代からしばらく聖家の人だ。街の歴史とは切り離せない。この学校が出来たのは大正年間だけ？」

「ここを守ることが、世界を守ることだつて言つたら信じる？」「はい？」

私はそこで魔法と守護者のことを見かされた。

笑子自身が守護者であることも。

「だとしたら、それは秘密つていうか、僕なんかに言つちゃつて、ここに連れてきちゃつて大丈夫なかつていうか、そりや僕は喋らないけど……あの、笑子さん？」

「じめんね、勝手に色々なもの、圭介くんに背負わせて」
氣付くと、笑子は泣いていた。

「そ、それは、あの僕はそんなつもりじゃ……」
涙を拭つても拭いきれない様子で、しゃがみこむ笑子を見ながら、当時の私はおろおろするばかりだった。極めて頼りない男であつたことは間違いない。

「でもね。わたし、あのね……」

泣きじやぐりながら、なにかを言おうとする笑子を私は抱きしめた。

「大丈夫。笑子さんが何者でも、僕の気持ちは変わりません」

「本当に？」

「本当に」

私は深く頷いた。

「……わたし、ズルいんだよ？　いつやつてなにもかも教えちゃつて圭介くんのこと、ここに縛つとした。わたしの家の事情に巻き込んで、わたしから離れられないようになつた。

「ズルくたつて縛つたつていい。むしろ、僕は笑子さんになら縛られたい」

私はその時、本当に彼女の全てを受け入れる覚悟を決めた。

「今度は、わたしから言つね」

照れくさそうに笑子は私の耳元に囁いた。

「結婚して」

あの時『僕たち』はキスをした。

私たちの気持ちはそういうことで固まつてはいたのだが、笑子の祖母、千笑は反対した。

「認められません」

初対面で、私が笑子の両親に「娘さんをください」と言つよりはやく、上座でお茶をすすりながら老婆は言つた。シチュエーションのあまりの容赦なさ故の錯覚かもしれないが、虫けらを見るような目であり、首筋に氷を当てられるような冷ややかさであった。

「認め……？」

まだなにも。そう言つ前に笑子が立ち上がつた。

「どうして？　お婆様」

「理由は言わなくてもわかつてはまずでしょ？　見ただけでわかる。その男の種では良い跡継ぎが生まれない。諦めなさい」

種。

あまりにストレートすぎて私は言葉を失つたが、笑子はひるまなかつた。

「なにそれ！　だったら、お婆様のときと同じでしょ？　自分のときにそれで失敗したからってわたしも失敗するみたいに言わないでくれません？」

資質は遺伝する（といつのが定説となつている）。

挨拶に行く前に説明は受けっていた。聖家は女系で、代々もつとも資質の強いものが守護者を務め、後に当主として家を継いでいくのだということ。許嫁というほどハツキリしたものではないが、各地にいる守護者の家系の男から適齢期になれば婿を取るのだという。

その意味で反対は予想の範囲内ではあったのだが、それ以上に私が資質を持つていないこと、が問題になるであろうこともわかつてていた。

ただ、笑子はその点については気にしなくて良いのだと余裕だった。

なぜならば、千笑こそ家の反対を押し切つて資質のない男と結婚した、聖家はじめての女だったからだ。失敗といつのはそのことで、笑子の母の資質が弱く（なつたと聖家の人々は思つてゐる。もちろん学術的根拠はない）、守護者になれなかつたことを指してゐる。なれなかつたというのは、千笑の時代から、外の資質を持つ人々を育てて守護者にするシステムがある程度確立され、候補生としての競争に敗れたということで、実際のところ、それは時代の変化とか言いようのない側面もあつた。

「別にいいでしよう？ わたしは守護者になつたけど、なれなかつたとしたつてわたしたちの家がすべてを引き受ける理由はもうないでしよう！」

自分もやつたことで反対されるいわれはない、というのが言葉の裏に隠された笑子の主張であり、筋も通つてゐる。私の立場ももちろんそれを支持するわけだ。

「私も若い頃はそう思いました。けれども、それだけではあります。この聖の家が力を持っているということこそが、どれだけ重要なことが、いざれわかります。諦めなさい」

「なんなの？ お婆様が言うから我慢して頑張つてやつと守護者になつたのに、わたしの人生まで我慢しなきゃいけないの？ そんなのおかしいでしょ？」

「私たちはこの国の皆様からお金をいただいて……」

「うつさいババア！」

「な！ だれがババアですか！ 口を慎みなさい！」

お婆ちゃんつ子だつたという笑子と、千笑の口論に私が口を挟む余地はなかつた。

片身小さく正座をして嵐が過ぎ行くのを待つてゐると、正面に座

つていた笑子の両親も苦笑いをしていた。後に知ったことではあるが、笑子の両親は結婚に反対していたわけではなかつた。家の中ににおいて絶対権力を持つている千笑に口答えができなかつたということらしい。それはそうだろう。笑子の母が守護者になりたかつたのかどうなのは知る由もないが、なれと言われ、しかし母親のせい（かどうかは明言できないが）で資質が弱く、その後、資質の強さだけで結婚させられたといふことで笑子の弁を借りれば「最大の被害者」である。実母とは言え、複雑な感情があつたに違いない。結局のところ「娘さんをください」というより「お孫さんをください」の方をなんとかしなければいけないのだということを理解する。

その日はそれから話が進まず、またの機会を。ということで終わつたのだが、私たちが千笑を説得することは最後までなかつた。笑子が勇希を妊娠したからである。既成事実を作つて強引に納得させようといつもりではなかつたのだが、結果的にそくなつた。

「やつてくれましたね」

その報告に行つたときに千笑に言われたことだ。

「……はい、やりました」

もちろん私の責任なので弁解はできない。

私自身、若かつたとは言え、ありえない返答でしたが。

妊娠に伴い、笑子の守護者としての任は解かれた。そして聖家からも出る形で、私たちは結婚することになつた。千笑は式には現れず、その後、勇希が誕生した時に一度だけ、私の実家にやつてきたことを除けば私は接点がまつたくなかつた。もちろん同じ市内に暮らしているので、なんだかんだで笑子は勇希を連れて時々顔を出していたようでもある。

「プチ勘当だよ」

状況を笑子はそう表現した。

「それは、どうだろ?……」

ともあれ、私もいつかきちんと千笑と話し合わなければいけない、そう思いながらも、仕事を言い訳に逃げつづけ、そしてあの日を迎

えることになる。

笑子が殺されることになった十年前のあの日を。

だが、今更だ。

学校の正門前に停められていたパトランプの乗つた黒い車に私と千笑と男が乗る。私と千笑が後部座席、ハンドルを握っていたのは、へりから飛び降りてきた一人の女だった。ドアを閉めると音もなく発車した。他の通行車両のいない道路はスムーズで、要所を封鎖する自衛官たちも、警察と見ると道を開けた。現実感のない光景だった。

「自衛隊と警察の間には協定がある。互いに邪魔をしない、というね。とは言え、管轄外なので外から入るときは手続きを端折るために強引な手段を使つたが」

男が説明したが、私はなにかを答える気にはなれなかつた。

シートの上に座つて、見上げる窓から見える街並みは見慣れたものとは少し違つた。

「笑子は蘇りました。見たと思いますが

十年越しに言つべき言葉を探した。

「今度は私のような男に引っ掛かるともない。やり直せます。元夫として、息子の父としては勇希との今後の関係に一抹の不安はあります。ですが、十二歳に若返つても彼女はやはり彼女でした。強い正義感を持つていて。それはつまり、そう育てられていたということだ。大きな愛情で。私の存在が許せない貴女の気持ちは今ならわかるかもしれません。でも、勝手な男の頼みとして聞いてください。笑子は貴女の孫で、勇希は曾孫だ。笑子を殺した相手のことなど、もういいじやないです。貴女が復讐に囚われても……」

「笑子を殺したのは、私たちよ」

千笑はまっすぐにシートに腰掛けたまま、こぢらを見ることもなく言った。

「私たち？」

「そう。IJの世界に住み、知らず守られ、力なく守られる『私たち』すべて」

すべて。

『笑子を殺したもの最期を看取りに』

「これは復讐ではなく……」

千笑はなにかを言いかけたが、きゅっと口を閉じた。顔中の皺の陰影が一層濃くなつたような気がして、私は寒気を感じ、尻尾が思わず立つていた。

復讐ではなく、なんだと言つのだ。

12 私自身、若かったとは言へ、あつたない返答でしたが。（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

12 進むべき道

氷嚢を額に当て、冷たいミネラルウォーターを「ぐぐぐ」と飲むテディを見ながら、養護教諭は溜息を吐いた。軽い脱水症状を起こしていたこと以外、異常なし。シャワーを浴び、候補生たちが寮から持つてきた制服を身に着け、小さつぱりとした少女のタフネスに言葉もない。常人離れした頑丈さだった。

「お世話になりました、先生」

ペットボトルを握り潰してテディは立ち上がる。表情にすっかり霸気が戻っている。

「……お大事に」

「ええ、死なないよ」に気をつけます

そう言って笑う。

保健室を出ると数人の候補生たちが待ち構えていた。

「待たせてごめん」

テディはそのまま学院の廊下を歩き出す。候補生たちもそれにつづいた。まだ乾いていないブロンドの髪が首筋に張り付いたがそんなことは気にしていられない。確認すべきことが数多くある。そして立場を決めなければならない。

「街の様子は？」

「それが……」

テディの斜め後を歩く候補生は言ひよどんだ。

「なに？」

「その、瀬尾さんがあられました。幸い、魔力解除を受けただけですが

「魔力解除？ 華夢衣が？ だれに？」

テディは思わず振り返った。候補生たちは目を伏せる。

「アンタが取り逃がした子供によ、テディ！」

候補生たちのさらに後方から廊下中に声が響いた。

明らかに外からそのまま履いてきたというヒールで床を叩きながら、パンツスーツ姿の細身の女はまっすぐにテディを睨み付け、つかつかと接近する。キリッとした男っぽい顔立ちで、細かいウェーブのかかった短い髪はボリューミーに膨らんでいる。

「玲於……」

「正井さん、でしょ？ 昔じゃないんだから」

テディの眩きに明らかにイライラしながら、鼻先まで近付いて立ち止まつた。女性としては充分に背の高いテディよりもさらに頭半分高く、靴の分で、頭一つ抜けた位置から威圧的に見下ろして鼻息荒く胸を張る。

「アンタたち、ここはもういいから持ち場に戻つて」

そのまま虫でも追い払うようなジェスチャーをする。候補生たちは玲於の気迫になにも言えず、深々と頭を下げて、その場から離れていった。

「あいさつには行こうと……」

テディはバツが悪そうに言った。

正井玲於はテディが候補生だった頃の先輩に当たる人物だった。だが、守護者になつたのはテディの方が先になる。

「ウソね。アンタがアタシを避けてたのはわかってる」

「それは……」

図星を突かれてテディは口ごもる。

候補生時代から強いライバル意識を持たれ、なにかというとケンカ腰になる玲於をテディは苦手としていた。瀬尾華夢衣と共に、今回木乃市に召集されたことは当然知っていたが、なんやかやと理由をつけて顔を合わせないようにしていたのは確かだつた。

「すいませんでした。その……用事があるので失礼します」

ともかく切り上げようとテディは会釈して踵を返したが玲於に肩を掴まれた。

「アンタの最年少記録を破つた華夢衣が憎かつた？」

「はい？」

テディは肩の手を掴み返しながら玲於を見る。

「言つたでしょ？ アンタが逃がした子供が華夢衣をやつた」

「……」

「アンタが裏切つたって言つてんの」

玲於にそう言われて、テディは自分が微妙な立場に立つていることを思い出した。

勇希の捕縛、もしくは抹殺。自らに下された命令を果たさず、少年を逃がし、その結果、味方の守護者がやられた。どこからどう見ても裏切りである。候補生たちが「だれに？」の問いに答えなかつたのは、自分が疑われているからだ。

けれども、そうなることは承知の上でテディはそうしていた。

「……最年少記録とか、あなたこそ昔のままじゃない」

ふつ、と息を吐いて、テディは玲於を見据えた。

「なつ……」

「そんな動機であたしは後輩を陥れたりしない。その程度の動機しか思いつかなかつた時点で疑われるのも心外だし、長い付き合いなんだからその位は信じてくれてもいいと思うんだけど？ 十五歳だろうが十二歳だろうが、早く守護者になることが重要じゃないってことは、いまや本部付きの玲於にはわかりきつたことでしょう？」

そう言いながら、テディは玲於の反応を見る。

位置情報さえわからなければ外部からは侵入されない境界域で魔人の襲撃を受けた。つまり、テディに下された命令は、彼女の命を狙うか、あるいはどうでもいいと思う者によつて利用されていた。裏切る前に裏切られていた。それを知りながら、ただ勇希を抹殺するという命令だけをバカ正直に遂行するわけにはいかない。それは彼女の正義に反することだった。

既に内部に裏切り者がいる。

「……それなら、なんである子供を逃がしたの？」

「逃がしたって言うのは正確な表現じゃないわ。あの子のお陰で、あたしは魔人から逃げられた。助けられたつてこと、情けない話。

最後に見逃したのは事実だけね」

テディは正直に言つてみる。もし、玲於が裏切つているのならば、

「……魔人？ 助けられた？」

一連の状況を知つていたとしても知らない素振りを装うはずで、言動に不自然なところが表れる可能性があった。同じ守護者同士、競い合つた者同士、信じたい気持ちは彼女にもあつたが、信じたいということと、信じられるということは別の問題だ。

そしてそれは相手も同じことである。

「アタシの次に負けん気の強かつたアンタがそう言つてことは、玲於はそう呟いて腕を組んだ。

「事情はある、と？」

怪訝な表情は崩していかつたが、攻撃的な気迫を抑制しながら目を大きく開く。

「今回ばかりはあなたが相手で良かつたと思うわ、玲於」

「正井さん。そこは譲つてない」

玲於は指差す。

「それはごめんなさい。正井さん？」

理事長室へ向かいながら、テディは玲於に事情を説明した。

「ということは、初の実戦で手痛い敗北を喫した華夢衣には申し訳ないけど、あたしはあの場で命令に従う気にはなれなかつた。あのまま魔人を相手にすれば死んでいたのはあたしに違ひないし、あの子がああいう判断をしなければ帰つてくることすらできなかつた」

そう言いながら、テディは理事長室のドアをノックする。

「ひとつ疑問だけど、そのユウキって子は華夢衣に勝てるレベルなの？」

「力を得たのは昨日、でも命懸けで戦つてるのは大きい。結果的にあたしが稽古をつけたみたいで心苦しい感じになつてゐるけど……あれ？ 理事長いない？」

テディはもう一度ノックした。

「華夢衣の件でさつき報告した時はいたけど、理事長！」

内側からの返事を待たず、玲於はドアノブを回して入った。

「……いない」

一人は咳いて顔を見合わせた。

「正井さん、あたしの見解を述べていい？」

ほとんど考へることなく、テデイは結論を出した。

「たぶん同じことを考へていると思つ」

そう言つて、玲於は頷く。

「裏切つたのは理事長だ」

「動機はわからないけど」

テデイはそう付け足す。

「この木乃市封鎖は最初からキナ臭かつた」

部屋の中央にある大きな机を叩いて玲於は言つ。

「襲撃があるという話は三ヶ月前ぐらいから盛んにリークされていて、本部も警戒していた。そこに起つた昨日の襲撃、そして理事長の封鎖決断、ここにタイムラグがほとんどない。普通なら関連性の有無を裏取りするものだけど、あの天才テデイがやられて、相手が鍵を持っていると言われば動かないわけにもいかなかつた」

「それじゃあたしが悪いみたいじゃない」

テデイは抗議した。

「アンタが悪い！」

玲於はスースのポケットから鍵を出し、自分の胸に突き刺すと、机を叩き壊した。彼女の身体からは真つ赤な光が迸つている。

「……えー」

そもそも十八歳のアンタが街を任せられるという話からおそらく仕組まれていた。だれの推薦だつたかは後で確認するとして、襲撃を利用して、あの子供とアンタを市内で戦わせ、境界域で葬り、封鎖。そのすべてを画策できるのはこの街で聖家の人間をおいて他にない。上のアンタに対する信頼の厚さも利用しようとしていたつてことよ……そして、ないつ！」

砕けた引き出しを壁に放り投げる。

「いきなり机壊したけど、そもそもそこにあったの？」

管理鍵はマスター

魔界の穴の開閉に使われる特殊な鍵である。

「今朝、確認した。箱ごとない」

「……そう、確定」

テディは少し寂しそうに言った。

理由はわからずとも他にやれる人間がない。信じていたかった。二人は俯いて沈黙する。大先輩であり、この街を守るために死んだ先輩の祖母、気丈にもそれから多くの守護者を育ててきた。そして彼女たちも育てられた。魔法と言う領域での母、同じ正義を信じていたはずの人の裏切り。その息苦しいまでの重みがこの学院にある。

そうした時、理事長室に、ひとりの候補生が駆け込んできた。

「失礼しまつ……え？」

一気に荒れた室内と苛立ちを顔面に滲ませている玲於の顔にビクツと背筋が伸びる。

「いい、言つて」

テディが促した。

「あ、はい、市内で強い魔力を観測しました。例の少年のようです。あと、どうも警察が動いているようで、ヘリが市内に……その、華夢衣さんとテディさんの件もあって、みんなに動搖が広がっています。理事長の指示を仰ぎたいのですが、理事長は？」

「アタシが指示を出す。それでいいよね、テディ？」

手についた埃を払つて、玲於は言った。

「どうぞ、正井さん」

「え、あの、それってどういう」

「街に散らばつてゐる候補生および学院にいる候補生は市内の住民の安全確保に努めて！ 中庭はアタシとテディ、売村の三人で守る。命の保証はないと伝えて。学院内の人間は全員退避！ 教職員含めて、守護者以外は全員、急いで！」

「は、はいっ！」

候補生は慌てて部屋から飛び出した。

「三人で足りる？」

それを見送つてテデイは尋ねる。

「どうかしらね……三人と言つても、連敗中の天才と、調整力ばかり買われる才能なしに、天然のんびり女だから……絶望感を深めるからアンタにはひとつ言つてなかつたけど、国内のこの街以外の穴は、今、襲撃を受けてる」

玲於は首筋を伸ばすように両手で頭を押された。

「……！」

テデイはあんぐりと開きそうになる口を押された。

「応援を頼まれて、一人守護者を送つた。呼び戻そうにも間に合わない。この街だけ襲撃がないのが不思議だつたけど、ここが本命だからだとはね……」

敵は用意周到としか言いようがなかつた。

「やるしかないってことか」

テデイも鍵を取り出した。

魔人との戦いからそこまで回復はしていない。不安はあつた。だが敵の姿が明確になつた以上、迷いなき正義はその力を發揮する。そう彼女は信じている。

「本当は穴から遠い場所で戦いたい所だけど、住民の被害を考えるとこここの結界の内側でやるしかない。母校を自分たちの手で跡形もなく消すことになったとしても。他の魔法を準備している時間の猶予もあるかどうか、本気で来るからには守護者を抑える手立ては考えてあると思うべき、売村は実質防衛専門だから……」

ぶつぶつと玲於は呴きながら室内をぐるぐると歩き回る。

それが緊張したときの彼女の癖であることはテデイもわかっていた。本人は自嘲気味に才能なしなどと言つていたが、資質という意味での才能はある。問題はそれを生かせない性格、要するに守護者に向かない人間性だつた。リラックスしていないと真価が發揮でき

ない。およそその時点でダメなのだが、資質を持つて生まれた時点で他に道もない。

追い込まれてこの場所にいる。

「大丈夫」

テディは玲於の肩を叩いて笑った。

「あたしが本当の天才の仕事を見せてあげるよ

「……そういうことをさらつと言うのがアンタのイヤなところよ

言葉の意味を察して、玲於は頭を搔いた。

みんな現実に追い込まれている。

「最年少記録破られたの、実は悔しかったんだ」

それでも、彼女たちは屈しない。それが世界を守る正義だと信じているからだ。だからこそ、逃げたくなる状況に陥ろうとも、さらには自分を追い込みながら前に進む。そうすることでしか道は切り開けないと知っているからだ。

事態は最終局面を迎えるとしている。

聖木乃女子学院前、三人の女子と、一人の男が遠巻きに正門を見ていた。

地元の地理を知り尽くす彼女らと、潜伏と潜入を生業にしてきた男の経験と、ある種の悪運によって、幾度も捕縛される寸前のピンチを切り抜け、なんとかやってきたのだ。

「なんか、魔法少女が次々出てきてるっすね？」

「なにかあつたのかしら?」

「慌ただしい、ぜつと」

傍目にも学院の状況は緊迫していた。

自衛隊の誘導で校内から自動車が次々と吐き出され、その後、格好とはアンバランスなまでに一様に真剣な面持ちの少女たちが街へ飛び出していく。頭上も過ぎていく彼女らに見つからないように身を低くして隠れながら、四人はある種のチャンスを感じていた。

「このビデオに紛れれば中に入れるのではないか。」

「オニーアイサンの言つことが本當なら、学院の中庭が魔界に通じてる
つてことつすよね?」

「そういうこと」

「正直、信じられません。そういう口実で下着泥棒みたいなことじ
やないんですか?」

「もう性犯罪者から離れてくれない?」

「離れられない、ぜつと」

女子たちからぼろくそに言われながらも男は諦めない。それが冴
えない彼の人生を変える正義だと信じているからだ。だからこそ、
なんと言われようとも、目的に向かつて進む。そうすることでしか、
この人生を変えられないと思い込んでいるからだ。

「行こうか」

自分の人生にかつてない好機が巡つてきていた。そう感じられた。
背中を押す風に身を任せ、好男は学院へ走り出した。

12 進むべき道（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

「最初で騒ぎすぎたかしらと反省はしています。やはり流行から背を向けて作りたいものを作っていると思ったから好きになつたというか。それなら応援しなきやつていうか。でも最近は見放されないように、流行に乗れるようについて、媚が見えてきてしまって。他のアニメなら媚びてきても仕方ないかもと思ひますけど、この場合は冷めますね？」

「最近あんまり話に出ないと思つてたら切つてたっすかー、自分もボーダーライン上っすけどね。キヤラ萌えに傾いちゃつて力入れるポイントを間違えた感はわかるつす」

「惜しい、ぜつと」

「なんの話してんの、この状況で？」

好男は緊張感のない女子高生三人組に言つた。

「「「アニメ」」」

三人は声をそろえた。

「話題、尽きないんだね……」

学院までの道のりでも、そしてこうして生徒のみが知つていると、いう抜け道を通つて敷地内に入り込んで彼女らの話題はまるで変わらなかつた。そつち方面への知識がほとんどない好男にしてみればそこまで数限りないアニメが放送されているということ自体不思議ですらあつた。集中していないうでの的確に人の気配を避けていることには舌も巻く。

だが、首尾よくここまで来られたのだ、そろそろ潮時だらう。

「シリーズ構成の名前を見たらある程度、出来の良し悪しも推測できるじゃないですか？そういう意味で予想できないからこそ期待を集めてるんだと思うつすよ、あれは」

「焦れるには早すぎる、ぜつと」

「そうかもしけませんけど、やっぱりもうひと押し欲しくなるとい

ろでしよう？ 強い引きがあつたのに、上手く観る人を掴めてない
ように感じられます」

「それはヤタテっちが、じゃないつか？」

「男性キャラ同士の関係性が立つてない、とか言うんだ、ぜつと」
好男は、そろそろと三人から離れ、隠れていた校舎の物陰からゆ
つくりと外に出ると駆け出した。校舎内に人の気配はもうなかつた。
どうやら中にはいる人間が外に出されている。それがなぜかは彼にも
わからなかつたが、大変なことが起こるとしているという空氣は
感じ取れていた。

もしかすると自分以外にも魔界の穴を目指している人間がいるか
もしれない。

懷に仕舞つていた写真を撮り出す。

魔界の穴のある場所として、資料の中にはあつた一枚だつた。桜の巨
樹、高等部の中庭。それだけわかつていれば十分である。校内の地
図などはweb上からでも得られる。問題は、穴をどうやって開け
ればいいのかということだつた。だが、そのことについてもおよそ
の目星はあつた。この学院の理事長、金が流れるところに情報もあ
る。

一般常識だ。

「理事長室も高等部にあるつてあの子らが教えてくれたからな……」
さりげない会話から情報を聞き出すことは仕事だつた。

運営組織を考えれば大学部あたりにあるのが自然な部屋だが、高
等部にあるといふことが逆に魔界の穴について書かれた資料の確度
を高めていた。なにかがあることは間違ひない。さらに好男にとつ
て都合のいいことに、校舎はまったく戸締りがなされていなかつた。
まるきり慌てて逃げ出したという風である。

危険がせまつてゐるからでは？

一瞬、脳裏によぎつた思考を振り払つて、好男は靴のまま校内に
入り込んだ。ここまで来て怖気づいてはいられなかつた。彼は基本
的には小心な男だ。だが、危険と言うならば学院の外で起こつてい

る状況の方がよほど危険であるように感じられた。少なくとも守護者は危険だった。焼失した駅前の光景を思い浮かべて、腹に力を入れる。

校舎内にはじつとりとした熱がこもっていた。

そして女子校だからだろうか、好男には嗅ぎ慣れない甘いようなねばつくような匂いが漂っている。生徒の出入りが普段より少ないであろう夏休みの最中でこれなのだから、普段はどれだけなのだろうと思しながら、彼は自分が勃起していることに気付いた。

「おつかしいな、溜まつてたわけじゃー……？」

頭を搔きながら呟く。

こうして許可のない場所に立ち入るのも、危険を感じることも、彼にとっては極めてまれなことだつた。怖さがある。それと同時に興奮もしている。それはむしろ情報を扱う人間の端くれだつたからこそ、核心に迫る高揚なのかもしれない。

ここで得た情報を持ち帰るだけで自分はやり直せるのではないか？だが、そんな期待は開け放たれた理事長室の惨状で吹き飛んだ。破壊された机がそれを雄弁に物語つていた。これは終わつた現場だつた。それでもなにか情報が残つていなかど、そこらじゅうのものをひっくり返してみたが、好男が求めるものはなかつた。少なくとも、ここにあるのはただの学校の理事長室である。

萎えていた。

「……どうすつかな」

無傷で残つっていた立派な椅子に腰かけ、窓の外を見る。

見えるのは中庭だ。そこにあるのは巨樹。こうして目が届く場所であるからこそ、ここに部屋を設けたことに疑いの余地はなかつた。推測は当たつている。問題は先を越されたということだ。好男は天井を見上げる。

「だれにだ？」

この理事長室を荒らしたのは？

椅子から立ち上がり、好男は窓にかぶりつく、植生の激しい中庭

は校舎の四階から見下ろしたのでは人影を探すのも難しかつたが、よく見ると巨樹の根元に何人かの少女がいる。わずかに吹く風にゆれる隙間でブロンドの髪がなびくのを確認した。

「あれは」

駅前で少年に詰め寄っていた守護者のリーダー格。

それがすぐそばの中庭にいる。魔界の穴を守る目的と予算を共有しているはずの理事長室が荒らされていることを知らずにだらうか？まさか、そんなことはありえない。街も学院も混乱していたので室内が荒れていることを不審にも思わなかつたが、ここには絶対的な守りの人材があつて、それはそうたやすく崩れるはずはないのだ。内部に通じていない人間にここを荒らすことなどできはしない。だとすればこの状況は。

「彼女らは裏切られたんだよ」

「は？」

好男は思考に集中していて、背後に入人が立つたことに気付かなかつた。

「最も信頼していた相手」

どこか古めかしい学生服を着た少年がいた。

「学院の理事長に、ね」

七三にセットされた髪の毛と凜々しい眉、今どきのイケメンというよりは昔ながらのハンサム、モノクロ映画にでも出てきそうな一枚目の少年はすらりと伸びた腕を口元に当てるときスリと笑つた。上品だったが、少し上品に過ぎた。

「ここは女子校だろ」

とつさにはなんと言つていいのかわからず、好男はそう口にした。

「それはそうさ。僕がここ的学生だつて言つたかい？ 大友くん」「名前を……」

「野末亮平。覚えているだろ？」

「……」

好男に情報をリークしてきた大学教授の名前だつた。

「お前は、だれなんだ」

「僕かい？ まだ名前は決めてない。これからやつてくる新しい時代が適当な呼び名を与えてくれるとは思つけれども。かつては『先生』と呼ばれることが多かつた。あまり好きな呼ばれ方ではないけれどね、不便ならばそう呼んでくれてい」

澄み切つた発音で、少年はさらさらと喋つた。

それは先生という単語に見合はない外見の違和感を消し去るゆつだつた。言葉の意味はわからないが、相手は好男がどうしてここにいるのかといふ理由さえも知つてゐるのだ。

「それじゃ、先生。理事長が裏切つたつていつのは」

「言葉通りの意味を」

「つまり守護者と対立してこらつてことなのか？」

「そう」

「なぜだ？ 学院の理事長には魔界の穴とやらを守るメリットがあつたんじゃないのか、莫大な予算も動いている。こつして街をひとつ封鎖するような力もある。それを手放す理由なんてあるとは……」「重要なことは、そうこつた今の時代をあの理事長は必要としてこないといつことか」

言いながら、少年は薄く微笑んだ。

「そして僕自身も」

「この少年は何者なのだ？」

「魔界の穴は開くのか？」

好男の声は震えた。

「どうだらうね。でも、どちらでもいい

「……？」

「希望は残るとわかつてゐるのだから、パンドラの箱は開けるべきなのを」

楽しそうに言つと、少年は好男を手招きした。

「ついておいで、ここにこると巻き添えを食つよ？」

「先生は、何者なんだ？」

拒否することもできず、好男は促されるままに少年の後を追う。
「なに、大友くんと同じ、興味本位の傍観者だよ」

笑子の身体から抵抗する気力は失われていた。

記憶しているよりもはるかに年老いた祖母の顔を見て、笑子も流れた時の重みが実感としてわかつてきいていた。語りかけてきていた猫の言葉を疑つていたわけでもなかつたし、ケータイも、街の変化も、現実であることはわかつていたのだが、彼女自身にしてみれば、死んで蘇つたというより未来へ飛ばされたという方が素直な感覚で、それは今も変わっていない。

頭の中が整理できなかつた。

最初に見たときから勇希が自分に似ていることがわからなかつたわけではない。瓜二つ、鏡写しのような人間、それでもそれを認めたくない気持ちがあつた。それがどういう気持ちなのか自分にもよくわかつていなかつたのだが、母親だと告げられてその正体が恐怖なのだと認めないわけにはいかなかつた。自分の知らない自分がいて、自分が知らない自分の子がいる。飛ばされたかに見えた時間は確実に流れている。取り残されているのはだれなのか。

そして、その父親である猫は

『そのことは気にしなくていい！』

自分の知らない自分の、夫ということだ。

笑子がその現実について考える間もなく、その猫はその子によつて殺されかけ、次にはわけのわからない大人たちによつて子が殺されかけ、そこに祖母が現れた。それぞれがなにを言つてているのか、なにを争つているのかもわからない。ただハツキリしているのは、死んだ自分の存在がそれに影響を与えていくということだけだつた。

「本当に、お母さんになるつもりなの？」

「え？」

笑子は不意に呼びかけられた。

「だから、いつこいつになつてるのは、あなたがはじまりなんじゃないの？」

氣絶した勇希から離れないと駄々をこね、まとめて車に押し込められる」とになつた舞が膝枕した少年の頭を撫でながら言つた。

「……わたしが」

笑子は俯いて考える。

「そうよ。よくわかんないけど、猫のお父さんも、勇希くんも、あなたが死んだから生き返らせたんでしょう？ それでお母さんにいつてもらうかどうかで揉めてた」

「……そうみたいでした」

整理すればそういうことだった。

「そうみたいじゃなくて！」

舞が怒鳴り、運転席の男がバツクリラー越しに後部座席を見た。笑子ははじかれるように顔をあげ、隣に座っている少女と皿を合わせる。

「なれるの？ お母さん？」

「……わかりません」

「舞にはわかるよ。なれない」

言つて、舞は勇希の頭を抱きしめた。

「それは……」

「勇希くんのこと、好きじゃなつて顔に書いてある

「そんなこと」

笑子は首を振つた。

「なら好きなの？ お母さんになれるほど？」

「……」

笑子は黙るしかなかつた。

「別にそれでいいんだと思つ。母親になつてとか、妻にならなくていいとか、そんなの男の勝手な言い分だよ。そんなことで悩んだりする必要ないって。あなたはあなたの生きたいように生きるべや、それは権利とかなんとかじやなくて、気持ちとして」

「舞さん」

見ると舞は笑子に向かつて笑いかけていた。

なにか重たいものがすっと抜けていく感覚があった。それは猫が言つた自由の押しつけでもなく、勇希が言つた愛でもなく、でも心につかえていた硬い重石だつた。

「勇希くんには舞がいるから、お義母さん」

その言葉に笑子は吹き出した。

「結局、お母さんなの？ でも、いいの？ 女装する子で？」

「好きだから」

舞は顔を真つ赤にして言つた。

「……物好きだなー」

自分と同じ顔の子をどんな人間であつても好きだと言つてくれることがなぜか嬉しくて、笑子の顔は緩んだ。わからなかつたが、母親と言うのはそういう感覚なのかもしかなかつた。けれども、そんな顔を見られるのはなぜか恥ずかしくて流れる車窓に目を移す。

「だから、お義母さんは思う存分、第二の人生を楽しんでください」「そうさせてもらいます」

自分のすべきことはなんなのか。

見慣れた、それでいて変化した街並みを過ぎ、まず勇希の曾祖母、祖母の家として懐かしい聖家の前に車が停車すると、笑子は舞に目配せをして車から飛び出した。すかさず運転手が取り押さえようとしたが、後ろから回り込んだ舞に膝裏を蹴られ、アスファルトに崩れる。

確かめることだ。

猫の気持ちと、自分の気持ちを。

「がんばって！」

ぴょんぴょん跳ねながら、舞は両手を振つて見送つていた。

「ありがとう！」

それに応えながら、笑子は迷つことなく全力で走る。

言つべきことがある。

祖母と一緒に猫が行場所はどこなのか、笑子には考えるまでもなくわかつっていた。この街で一番大切な場所、代々守ってきた場所、あの大きな樹の下へ。ずっと呼ばれていたのだ。目覚めた時から、あるいは、目覚めるずっと以前、死んだ時から。

「生き返るために」

かつての自分が死んだのだと受け入れるために。
新しい人生のために。

1-3 傍観者（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

13 猫には猫の戦いといつものがあるらしい。

「見られているな」

助手席の男がそう呟き、運転席の女がハンドルを強く握った。学院に近付くにつれて、確かに感じる視線が増えている。街から人の気配が減っていくのと反比例するように、冷ややかで、敵意に微かな哀しみも混じつたそれは、私の隣に座る千笑に向かつて注がれている。周辺から撤退していく自衛隊の流れに逆らい、学院へ向かう私たちの車両はおそらく目立っていて、おおよその事情は相手方にも把握されていると理解できる。つまり、千笑が守護者の敵に回ったのだということを、だ。

車内の緊張は否応無く高まっていた。

「候補生たちは、こちらに手を出せませんよ」

その視線を受け止めるように窓の外をじっと見たまま、千笑は言った。

「どうしてわかる？」

男は拳銃を取り出し、弾丸を確かめながら言つ。

「街の住民を巻き込むような指示を出せる者が学院にはいないわね」
住人は既に人質の扱いだった。

「我々を学院で迎え撃とうということか」

「そういう決断をするでしょう」

守護者と警察の争い。単純に言えば構図としてはそういうことだ。守護者が魔界の穴を守つて世界の安定を維持しているというのは、魔法に対抗できるものが魔法だけであるという前提にたつた自然な決め事だった。だが、そのバランスは既に崩れた。人工魔力生成装置を体内に埋め込むという技術によって、擬似的なものとはいえ、鍵がだれの手にも入りうる状況が生まれている。資質の有無に関わらず、魔法を使えるようになるということだ。そうなれば、人々は魔法が持つ有用性を意識せざるを得なくなるだろう。

人を蘇らせる。

ほぼ無限の寿命を手に入れることに等しいこの一点を以つても魔法を活用しようという動きが起こらないわけがない。私がどうしたかは言つまでもないことだ、それでも私は自力で魔力を生成する道を選んだが、魔界の穴といふ無尽蔵の魔力供給を可能とする場所を奪い合う状況は遅かれ早かれ起こつた。そしてそれを守るという名目で独占していると看做されるだらう守護者とそれ以外の人々の争いも起ころ。

いづれは、と私は思つていた。

遠くない未来の状況として想像はしていた。しかし、それについて深く思い悩むことはなかつた。それがどういうものであるにせよ、人が新しい力を求めるわけがない。人工魔力生成装置を完成させる前も、争いへの時計の針を進める自覚はあつたが、それを止めようとは一瞬たりとも思わなかつた。そういう意味で私こそが典型的に愚かな人間の一人であり、それを自覚する悪辣な人間である。言い訳はしない。後悔もしていない。

その気持ちは変わつていい。

正直なところ、守護者と警察の争いはどうでもよかつた。？先生？の政治的正義を考えればおそらく奪い合いになる前に魔力を地上に開放してしまおうとでも思つてているのだろうと推測はできる。とは言え、あえてそんなことをしなくとも、魔界の穴が存在する意味を考えれば、この世界がいづれ魔界と同じになることは間違いないことだ。守護者とはつまり、それを先送りする存在というだけのことだ。科学的に言えば。

けれども、そのために笑子は命を懸けた。

十年、魔力生成の研究を進めながら、私は私のしようとしていることが笑子の遺志に背いているのだということには気付いていた。あえて目を背け、耳を塞ぎ、間違つっていてもそれでいいのだと己に言い聞かせた。彼女を蘇らせるためにこの世界が犠牲になろうとも構わないと本気で思つていたし、今も思つてはいる。反省などしない。

これは報いだ。

静まり返った学院に到着し、肺まで焼けるような空気を吸いながら、私は覚悟を決めていた。反省などしない。だから、最期ぐらいは笑子の遺志に殉じよう。

「目的を忘れるな、学院の管理鍵は聖の血を引くものにしか使えない。我々は中庭まで理事長を連れて行く。それで勝ちだ。守護者との戦いに拘るな」

既に到着していた三人と合流すると、男がそう告げ、四人が頷く。「では行きましょう」

「ええ」

男に促され、歩き出した千笑を五人が囲んで正門をくぐる。私はそつとその足下に近付き追いかける。

「自分の身は自分で守れよ、馬園。君を同行させるのは……」

「わかっている」

男の嫌味も遮つて私は応えた。

敷地内に入ると空気が変わった。暑いことは変わらないが、異様な殺氣が周囲を取り囲んでいる。実際のところ、それは犬に睨まれた猫が感じるものに似ていて、逃げ出したくなるような重苦しさを与えていた。そう感じていたのは私だけでなく、千笑をガードする五人も同様のようで、反射的に銃を周囲に構えた。

「たつた五人？」

コツ、とそれは脚を開いて立っていた。

「いや、六人か……理事長も含わせると」

いつの間にそこに現れたのか、私たちが向かう進行方向正面に一人の女性が立っていた。若いが、この空間に充満する殺気の全てを一人で発していることは間違いないその異様な迫力に男たちの顔色も変わる。守護者に間違いない。

「そう言つて頂けるのはありがたいのかしらね？ 正井さん」

千笑が立ち止まり、男たちは油断なく警戒をつづける。

正井玲於、私もその名前は知っていた。若くしてかなり組織の上

部に食い込んでいる。男たちもそれを知っているのだらう。銃口を向けながらも、引き金を引けずにいる。守護者の世界はおよそ実力主義である。

「でも安心して、現役を退いて久しいこの身体では守護者の力に耐えられやしない」

そうつづけて、さも面白いジョークでも言ったかのように微笑んだ。

「敵であることは否定なさらないんですね、理事長」
正井の胸からは真紅の光が溢れ出している。

「否定すれば信じてくれるのかしら？」

「いいえ」

光の進りが大きくなつていく。

「理事長がそこの人たちを連れて学院に戻ってきたのは見ていましたから、それでもう、アタシとしては躊躇う理由がありません。なにか言い残すことはありますか？」

「ないわね」

千笑がそう言つと、正井はハイヒールを脱ぎ捨てた。

「一人に気を取られ過ぎるな、守護者はまだいる！」

明らかに緊張した声で、男が他の四人に号令する。

「さて、たつた五人でやる気になつてるアンタたちの実力を見せてもらおうかな……」

五発の発砲音。

そして私の左斜め前にいた女の腕が砕ける音。

ほとんど同時だつた。

正井に当たつていた弾は一発、額から血が流れ出していたが、その振るわれた蹴り一発をガードした女は吹き飛ばされ、千笑を囮んでいた陣形は一気に崩れた。しかし、すかさず他の四人がさらに発砲する。

だが次の瞬間で後方の男が地面に叩きつけられていた。

「銃弾に魔力を込めるなんて……」

金髪の守護者。昨日の。

「魔力解除の欠点である相殺を手元から離すことで解決か。ヤだねー、そういう伝統を無視した合理性の追求。アタシたちの立場がなにじゃない？」

そしてもう一人の女が地面を転がつていく。

一瞬の攻防で、立つてるのは一対一。圧倒的な実力差だ。
「なるほど、これが本物の守護者ということか、子供とは違う
だが、それでも指揮する男は冷静だった。
さらに連續で発砲。

二人は避ける。

同時に、もう一人の男が千笑を抱きかかえて距離を取った。
取り残された私は慌ててそれを追いかける。

「だが、当たれば効くという意味では同じことだ」

男の銃口は校舎の屋上を向いていた。

「どう見る？」

「速度で追いついてきてるってことは、あっちも魔力を使ってるで
しょ」

そこに一人の守護者がいる。

距離を取つたといふことは、おそらくは男の言つ通りなのだ。
魔力による《変異》を攻防において使つてている守護者にとつて魔力を解除された状態で受ける銃弾は生身のダメージと変わらないものになる。既に相当消耗した状態で受けた勇希ほどに覗面の効果は得られないにしても、スピードで肉薄して、確実な武器があるのならば、戦いはわからぬ。

吹き飛ばされた三人が、それほどの深手でもない様子で立ち上がりつていくのを視界に捉えながら、私は千笑の言葉を思い出していた。
守護者たちは街の住民を巻き込まない。つまりは、全力で戦えないのではないか。となれば。

「ここは一人でいい！ お前たちは理事長を連れて中庭へ！」
男の叫びをきっかけにして私は走り出す。

千笑を抱えた一人を三人が囮んで守護者たちがいるのとは逆の校舎に飛び上がる。

この状況では、だれも私に注意を払う余裕はないだろう。

だが、だからこそ私に勝機がある。

守護者と警察の争いに興味はない。己のことだけを考えるならこの世界のことですら私にはどうでもいい。だが、勇希がいる。ここで私のすべきことはひとつだけだ。あの日の言葉に殉すること。かつての笑子の遺志に応えることだけだ。

『行かなくてもいいじゃないか?』

もう子供を産むことで、聖の家を出たことで、守護者としての義務は負つていなかつた笑子に私はそう言った。現場を離れ、絶対的にブランクのある彼女にまで知らせが回ってきた時点でよほどの事態だった。嫌な予感しかしない。

私の不安を感じてか、腕の中で勇希が泣き出した。

『行かないわけにはいかないのよ』

息子の頭を撫でながら笑子は首を振った。

『ここが正義の街である限り、わたしは死ぬまで守護者だから』それが私の最後に聞いた妻の言葉だった。勇希がピタリと泣き止んだことは覚えている。だが、その時、どんな顔をしていたのか、正直に言つて思い出せない。思い出されるのは、棺に納められて家に戻ってきた時の、奇妙に晴れ晴れとした死に顔だけだ。

正義の街。

笑子がその言葉に込めた意味はわからない。だが、確かなことがひとつある。

だから、彼女は死ぬまで戦つたのだ。
ならば、私も戦わなければならない。

きっとまだここは正義の街であるはずだ。月日が流れ、街並みが変わろうとも、守護者たちが守ってきたものはまだここにある。千笑の思惑がなんであれ、笑子が守ろうとしたものがあるのなら、私もそれを守ろう。私は死ぬまで守護者の夫なのだ。

するべきことはシンプルである。

千笑が管理鍵を使うことを阻止すればいい。

守護者と警察が争っている間に、おそらく千笑はある巨樹の元へ赴くはずだ。そこが最大のチャンスであり、私が猫であるアドバンテージを生かす場面だ。鍵を奪うのだ。年齢がいくつだったかは忘れたが八十とか九十とかの老婆と猫ならばまだしも私に優位である。

中庭へ先回りして機をうかがうのだ。

背後で校舎が砕けていた。

私は茂みに飛び込み、身を低くして素早く移動する。

他にどれだけの守護者がいるかもわからない。昨日のこともある。場合によっては私の存在が知られているとも限らなかつた。この作戦は極めて隠密裏にこなさなければならない。土壇場で鍵を奪つて逃げるというただそれだけのことであるだけに、失敗は許されない。失敗すれば魔界の穴は開いてしまう。

ともかくできるだけ先んじて現地に赴き、絶好のポジションを探さなければ。

中庭を囲んでいる渡り廊下にはシャッターが下りていた。回り込めば反対側にも入り口はあるだろうが、考えるまでも無く向こうも閉じられているだろう。おそらくまつすぐな進入を阻むために。だが、それほど悲観することもなかつた、夏だけに適当に開け放された窓を見つけるのはそれほど難しくはなかつた。私は一端校舎の中に入り込み、そこから中庭を目指す。窓から覗くと、中庭には一人、守護者らしき少女がいた。三角フラスコのような体型で、ストレートの黒髪が眉毛のところでパツツンと切られている。おだやかな印象で、よくわからないのだが、妙なステップを踏み、ダンスを踊っている風である。見た目に反してというか、軽やかだ。ともあれ注意が散漫なことに越したことはない。

都合のいいことに、昨日、勇希が守護者と戦った時に空けたらしい穴がブルーシートで簡易的に塞がれているのを見つけた。これぞ

正に導かれて書ひものだらけ。

すべての流れは私に向いている。

そう考えていた私こそが注意力散漫だったに違いない。

「ここで逢つたが百年目」

それは動物言語だつた。

「お久しぶりでや。あつしの」と覚えてこいつしゃいやすか?」

- 1 -

中庭から、彼「等」は現れていた。

塞がれていない穴から、次々に現れる。

「だんな、あひじひ風はね、忘みは忘れねえつひもーんでやあよー。」

二〇一九年五月

といへる器官を震わせているのかわからぬ。鳴き声が激しく重なつていて、十四や二十四ではない、百か二百か。人の気配のない廊下の中央で、私は数え切れぬほどの鼠に取り囲まれていた。窮鼠なんとやらではない。窮鼠。アクシテントもいいところである。

辛うじてそう言つただ。

一旅館で死ぬ♪ハニ

初めて知った。

猫には猫の戦いといつものがあるらしい。

「猫風情が、鬱を詠めるにえらこ皿あんじやうすね?」

13 猫には猫の戦いとこのものがねりっこ。
(後書き)

お読みいただきありがとうございました。

アイコンタクト。

溜息を吐きながら送られた玲於の視線だけでテディは自らの役割を了解した。

「理事長を……」

男の叫びが終るより早く一人は校舎の上から飛び降りる。それを見て男が銃を構え、見越してテディは剣を抜き放つた。銃口は玲於に向いている。

「三度目はないよ

」この場から離れようと/orする理事長たちから目を離さず玲於は言つた。

「ありがとっ」

発砲音、そしてテディの剣が銃弾とぶつかって相殺。テディは扉を開放。

次の瞬間で男を校舎に叩きつけた。

突進したテディは黄金色の光に包まれている。

「ケダメノだな……」

崩れ落ちる校舎から男が這い出してきた。

地面上に血を吐き捨て、肋骨を押さえながら歩いてくる。

相手がこのくらいでは死なないことはテディもわかつていていた。なんらかの方法で魔力を使っている五人の襲撃者の中で、リーダーと思われる男一人だけ明らかに動きが違っていた。資質を持っている。失敗続きのテディの名誉挽回に玲於が手柄を譲ってくれる程度には強さを感じさせる相手であった。

「女子校を襲撃する男こそケダメノだわ」

それだけに油断はできない。テディは両手を地面に置く。

「女子に紛れて通っている熊よりマシだろ？」

テディの一撃でボロボロになった上半身の服を脱ぎ捨てながら、

男は拳銃から弾倉を引き抜く。そしてそのまま銃を投げ捨てた。

「一人で熊と獅子をどうにかできると？」

軽口で応じながら、露わになつた男の胸部に機械が埋め込まれている様子をテデイは確認する。それが魔力を供給しているであろうことも容易に推測できる。

狙いは絞られる。

「これからどうにかする。それにしても理解に苦しむところだ。魂を安定的に制御するためにケダモノに同化しようとすると守護者の

」

ゆつくりと歩きながら男は弾丸を掌に出していく。

間合いに入つていた。

「お喋りには無理よつ！」

四足となつたテデイは後足で地面を蹴り、伸び上がって前足を振り上げた。

「そうでもない」

男は銃弾の一つをテデイの鼻先で潰して見せた。

魔力の干渉があつた。

その瞬間にテデイの身体を覆つっていた魔力の体毛が消え失せ、そこを狙つて男の拳がカウンターでテデイのボディを強かに打つ。

「かはつ」

テディの口から抑えきれない息が溢れた。

「扉さえ開放すれば自分たちが優位だと考える。そこが守護者の弱点だろう」

そう言いながら男は肋骨の下に突き刺さつた拳をそのまま振り上げる。

「解除までいかなくとも同程度まで魔力量を相殺すれば、あとに残る《変異》した肉体は大人の男と、小娘のそれだ。どちらが優位かは考へるまでもない」

「……っ、小娘え？」

テデイは空中で再び魔力を取り戻したが、

「そうだ、君らのよくな子供が守護者など、笑えない話だ」

男の追い打ちで地面に叩きつけられる。

正門前の地面が深く抉れて、砂礫が巻き上がる。

魔力による防御は働いていたのでダメージはなかつたが、テディにとつてはこうも簡単にあしらわれる状況と言うのが屈辱的であつた。口に入った土を噛んで、彼女は男を見上げる。

男は指先で銃弾を弄びながら見ていた。

「君らは同条件の力を持つ者、あるいはまったく力を持たない者、そのどちらかとしか戦つてきていない。守護者の弱点を衝かれるという状況を想定していない。その優位性は相手が魔力を使えないという前提に立つたときのみ有効なものだ。こうして鍵がなくとも魔力を用いて戦えるようになるこれから時代にはもつ……」

「あなたたちのそれに鍵と同じ性能があれば、つてことでしょ」

テディは男に向かつて爪を振り上げた。

剣と化した五本の衝撃が地面を裂いて男に襲いかかる。

「その通り……」

だが、それをものともせず、隆々とした身体から血飛沫を迸らせ、男は直線に突つ込んでくる。そこには覚悟の眼差しがあつた。

「いい度胸ねつ！」

かわすことはできなくもなかつたが、テディはあえて真つ向迎え撃つ。

小娘などと言われては引き下がれない。渾身の力で振りぬかれようとしたテディの拳に向かつて男が銃弾をぶつけてくる。魔力が相殺。互いの攻撃がただ殴り合つのと同じ条件でぶち当たる。体格差はそれほどなかつたが、

「つ！」

ほぼ腕力の差でテディがぐらついた。

「そうだ！ この装置では扉を開放するにも十分な魔力は得られないと！」

男はそれを見逃さず、立て続けに打撃を叩きこむ。

「だが、それはっ！」

「だつ」

首から上へ、容赦なく意識を刈り取りに来る攻撃にテディの身体が宙を泳ぐ。

「今だけのことだ！」

浮いた少女の顎を男は思い切り蹴り上げた。

「技術は進歩する！」

「……」

中空へ放り出されたテディは白由を剥いた。

「そして伝統は淘汰される！」

両腕、両脚が重力にひかれるままテディの肢体が弧を描くのを見て、男は胸の装置のカバーをはぎ取った。銀色の管が体内に突き刺さり、その中央にはビリーヤード球ほどの水槽、薄い青色の液体が「じぼじぼ」と泡を立てている。

「悪しき因習として！」

残りの銃弾を男は水槽に押し込んで潰した。ぐしゃりと潰れる音とともに内側から液体と血が溢れ、苦痛に顔を顰める。だが同時に男の身体が透明な輝きに覆われる。

「く……」

意識が飛んでいたのは一瞬。

だが空を仰ぐテディの視界に直後、祈るように両手を組んだ男が現れる。

「……つるぎ？」

守護者たちのそれとは違い、絶対的な魔力の不足が見て取れるナイフほどの大きさだが、テディの目には陽の光を歪めるその形が見えていた。

「まずは心臓！」

「！」

反射的に動いた手を貫いて剣がテディの胸に突き刺さった。

「おおおおっ！」

男は見えない柄を捻りながら力任せに腕を振りぬく。

テディはなんとか着地したが脚の踏ん張りがきかず、ずるずるとすべて校舎の壁にぶち当たる。気管から血が吹き出し、激しく噎せ入つて膝をついた。

「浅かつたか！」

「つは

次の瞬間には男の手が頭蓋を掴んでいた。

壁をこするようにして引きずられ、そのまま校舎を貫いてグラウンドへと飛び出す。テディは力を使おうとしていたが不完全ながらも心臓をやられていて身体に魔力が行き渡らない。

「わかつていたはずだ！」

「……な」

「君らは守護者の名に縛られ、この世界のあるべき姿を見失つているだけだと！」

叫びながら男は両手でテディの頭を抱える自分の身体」と投げ打ち地面にぶつけ、首に膝を押し付け押さえつけた。そして再び剣を抜き放つ。

「その軛を今、解いてやる！」

「……っ！」

声は出せなかつた。答える代りに、テディは男の顔面に向かつて血反吐を吐きかけた。

「う

見開かれていた男の目に血が入つてたじろいだところを両足で地面を蹴り体勢を入れ替えようとする。構わず振り下ろされた男の剣が頬を掠めて逸れた。衝撃にグラウンドが陥没する間にテディは起き上がつて男と距離を取る。

「行儀の悪いガキだ！」

「れ、げほつ、礼儀作法でなにも守れないって……ばつ」

立つてはいたものの、テディの血は止まらない。

魔力による回復に頼るにしても要の心臓に深手を負つてはその速

度も遅くなる。扉の開放も維持できない。今の彼女は最低限の魔力で立つ裸の少女に過ぎない。死ぬには浅手でも戦いつづけるには深手だった。それは誰の目にも明らかだ。

「あ、あたしたちがなにに縛られてるって？」
だが、相手は一線を越えた。

「守護者であることに、だ」

「……バカね」

テディは跳んだ。

剣を抜くこともできなかつたが、それでも戦わないわけにはいかなかつた。

「最初の勢いはもつないようだが！」

「んぐっ」

迎え撃つた男の手が胸の傷口を深く抉つた。

空中で突き刺された格好で、テディの身体を血が滴り落ちていく。
「みんな、死ぬような気持ちで守つてきたのよ！」

心臓を引きずり出そうとするかのような男の腕をテディは掴んで押し止める。

「それが……」

だが男は表情を変えずさらに深く突き刺そうとする。

「あたしたちが守つてるのは、そういう積み上げた過去そのもの！
その上に立つてあたしたちがあるの！ それがわからぬヤツに

……」

その一瞬、テディは男の腕を自ら押し込み、

「死ねえええつ！」

バランスを崩した男に向かつて渾身で頭突きを見舞つた。
ごづん。

大地の芯を打つような深い音が一人の頭蓋に響いた。テディは男の腕を引き抜き、そのまま仰向けに倒れる。視界が白くぼやけ、ぐにゃぐにゃに揺れた。地面も空も混ざつて溶けて見える。

「言いたいことはそれだけか……」

しかし、男は立っていた。

「ならば、君が死ぬことになる」

焦点の合わない眼を向けるも、両手を組み、横たわるテディに向かって歩み出す。

「……つあ！」

逃げようとしたが、テディは動きは深まつた傷の激痛でワーンテンポ遅れた。

やられる。

「終わりだ……」

男が腕を振り上げ、その手の先で陽射しが屈折する。

眩しさに目を細めながらも、テディは自分を殺す相手を見据えた。だが、

「……あなた、それ

振り下ろされるその瞬間、男の手が消え失せた。

「時間切れ、か」

言つと、地面に接する足からその肉体が光の粒になつていいく。そのままテディの横に男は転がった。先端から腕と脚が消えていく。「まさか、自分の肉体を魔力に《転移》して……」

テディは呟いた。

「そうだ。それでもしなければ守護者と互角になど戦えない」「なぜそこまで」

さきほどまで殺すつもりだった相手だが、

「そんなことして、この襲撃が上手くいっても、生きられないじゃない」

言わずにはいられなかつた。

「資質は父から受け継いだ」

男は目を瞑つた。

「その父は守護者に殺された」

「復讐、だったの？」

横たわる男の影が薄くなつていくのを見ながらテディは問う。

「いや、父の思想はくだらない。魔力を金儲けに使うつもりだった。資質は受け継いでもそんなものは受け継ぐつもりはない。だが、子は父親を越えなければならない。同じ資質を持った人間として、もつとまともな思想と力で守護者を打倒しようと思つた」

「……そんなことしなくても資質があつたなら」

「どうでもいい父親でも、殺した相手に『すること』はない。母の哀しみを見ている。子供なんだ。そうするしかなかつた。血を受け継ぐということはそういうことだ」

「は、あなたこそ縛られているんじゃない」

テディは空を見上げて言つた。

「……そうだな、確かに」

消滅は加速していき、男の身体はその言葉を最後にして消える。後には胸に埋め込まれた装置だけが壊れたおもちゃのように残されるのみだ。

「バカね」

意識を保つのも限界だった。

グラウンドに吹く風に任せて、テディは目を閉じた。

笑子は追われていた。

「どこいったの、あの子…」

「例の子でしょ、どうしてこいつちに？」

「それが、どうも一緒に戻ってきたとか……」

「どういうこと?」

「よくわからないんだけど」

聖家の本宅から学院までは一キロあるかないかの距離だった。自衛隊こそいなかつたものの大勢の候補生たちが様子を見に外に出てきた住民を避難させている。特に隠れることなくまっすぐ走つていた笑子も当然のことながら発見された。

勇希と間違えられていることはわかつたが笑子としても捕まれなかつた。そもそも、市内に入った時に守護者の少女に手痛い目にあ

つてもいる。様子を窺う限り候補生たちが悪い人間ではないのだろうと推測はできても頼る気にはなれない。

「……ん。

それほど遠くない場所から、花火が爆発した時のような強い空気の振動が響く。

「学院が

「これ、行つた方がいいんじゃないの?」

「でも本当に守護者の人たちでもやれないのだとしたら出る幕なんて……」

「例の子もそうだとしたら」

「とりあえず数を集めましょう」

話し合っていた候補生たちが一団となつて移動するのを見送り、笑子は民家のブロック塀裏から這い出した。生い茂った庭木の下、ベタベタする蜘蛛の巣を払つて再び学院へ向かう。こんどは見つからないように、注意しながら。

学院に近付くにつれて人の気配は減つていた。だが、なにかが爆発するような音は激しさを増す。笑子は近場の初等部から敷地内に入つた。かつてとそれほど変化のない学院内に入つたことで彼女にある程度状況が把握できるようになる。

「高等部の方だ」

音のした方角に辺りをつけ、笑子は走つた。

卒業記念に植えた木が大きく育つていて、時の流れを確認しながら、笑子は校舎の外を迂回して中等部を突つ切り、高等部のグラウンドに出る。広いグラウンドだったが、目が行くのは巨大なクレーターが出来ている地面と、向こうで砕けたようになつてている校舎だった。ほとんど災害の爪痕である。

「……まぞのさん」

じつとりと汗をかいた手でワンピースの布地を掴みながら笑子は注意して歩く。

勇希と警察の戦いの様子は見ていた。巻き込まれては元も子もな

い。

「「ウヰ……」

風のせざめきに混じつてしまつよつな小さな声だつた。

「え？」

しかし周りを見回せば、グラウンドのえぐれた土とは明らかに違う白い肌がすぐに目に留まる。それが裸の女性であるということが瞬時に理解できず、一度立ち止まつたが、よく見るとその肌は血に濡れていることもわかつて笑子は駆け寄つた。

「だ、大丈夫ですか……」

とても大丈夫に見えないと想いながら笑子は言う。

仰向けに寝ている女性の胸は中心に大きな傷があつた。それは塞がつてゐる途中の状態だったが、もちろん戦つてゐる現場を見ていたわけではない笑子にそれはわからない。

「……お母さんには会えた?」

「え? あ……はい」

勇希と間違えられていることはわかつたが、笑子は訂正しなかつた。自分が蘇つて、その息子とそつくりだといふ事情は、自分では説明できないと思つたからだ。それに、会つてゐることは間違いない。

「そつ。良かつた。約束、守つてくれて」

「……はい」

約束?

「ひとつ、お願ひがあるんだけど」

「あ、はい、なんでしょつか?」

「「」の鍵」

傷口に手を当てると、そこから黄金色に輝く鍵がすつと現れた。

「あたし、動けないから持つていつて」

「え、と、それは」

「……境界域で説明したけど、その逆で、一本、鍵があれば穴は閉じられる。最初の樹のところに仲間がいる……から、見せて、それ

で話は通じるから……

「樹……」

女性は笑子に鍵を握らせて田を閉じた。

「お婆様の言つていた、樹？」

学院の高等部、中庭。

笑子は受け取った鍵をジッと見つめて、勇希がしていたように自分に突き刺してみる。それは驚くほどすんなりと胸の中に納まつた。そしてじんわりと身体に力が満ちていく。

「……これを使って、そうか」

鍵の声に耳を澄ませながら、笑子は女性の身体を持ち上げた。

裸のまま放置はできない。

14 同類（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

14 私の猫生終わりました。

狂暴化した鼠など手に負えない。

背後から飛び掛ってきた一匹は叩き落したものの、直後には全身に噛み付かれ、私は絶叫した。発情期の猫がするよりよほど人間臭い己の声が廊下に響き渡る。肉を食い千切られ、汚れたモップのように倒れ臥す姿を幻視して、なにふり構わず逃げ出そうとする。

鼠、怖い。

「逃がさねえっちゅーんでやす！」

あの鼠の声が聞こえた。

へばりつく鼠を払いのけながら、私はともかく走った。前脚と後脚に食らい付いたままの鼠がいたが、速度を上げ、壁に体当たりを繰り返して押しつぶし引き剥がす。その度に激痛が襲つたが気にして入られない。視界の隅で鼠色の群れがひとつ生き物のように蠢いて折つてきている。それはもちろん彼らにも有史以来鼠取りとして人と共に生きてきた猫に対して恨みはあるだろうが、鼠が猫を襲撃するなんてこれまで聞いたことがない。中庭から出てきたことから推察するに、魔力の影響？

校舎が振動していた。

おそらく守護者と警察とが戦っているのだ。ガラスの碎ける音に、建物 자체が歪むような音発砲音、そして外気が弾ける音、戦いが行なわれている区域が広がっているのか、複数の方向から聞こえる。巻き込まれてはかなわない。追つてくる鼠にフェイントをかけるよう、私は曲がり角、ギリギリを駆け抜け、壁を蹴つて急角度で、音から離れようとする。

鼠の群体が打ち付ける波のように碎けて割れた。

「これで……つ？」

ぢぢぢぢぢぢぢぢ……。

校舎の揺れに混じつて聞き取れなかつたが、それは廊下の天井か

ら聞こえていた。蛍光灯の傘が唐突に落下し、床板に当たつて砕けた。とつさにかわした私は泥の塊のように落ちてくる無数の鼠の姿を見た。先回りと言うか、最初から包囲していたと言うか、

「いつか、校舎中に」

蔓延つてゐる。

血の気が引いた。一瞬で私を取り囲んだ時よりその数が増やしていく。

と云ふ事でも相手でゐる数ではない

考えてはいられなかつた。停止しかけた脚を動かし、正面の群れを飛び越える。猛追してくる後続の集団と一緒にになり、勢力は拡大。既に馬一頭分ぐらいの質量だ。千、二千？　どこまで増えるのかわからない。

下を覗けていく。

後には次から次へと螢火灯と傘が落下し、鼠が増えてしまつた。

鼠たちは鳴いていた。

言葉ではない。動物の本能が恐怖をして告げている。一匹一匹は小さな声が大きなうねりとなつて建物に反響していく。それは怨嗟だ。私にもわかる。私に対してというより、力を得たことによる猫への報復に他ならない。語りかけてはいない。純粹な怒りだ。猫によって殺されつづけたあまたの同胞への。それは正義によく似てい

昨日、あの場で鼠一匹叩き殺しておいたのだった。

鼠に感情移入などできるか。

猛烈な後悔が襲う。不要な慈悲が巡り巡つて帰ってきた。人でなくなつたのに猫にもなりきれない私の失策だ。おそらく猫たちは容赦しないのだ。食うものと食われるもの、自然には絶対的な力関係がある。それを本能が理解している。どうしようもない。もう後には戻れない。中庭からも離れてしまつた。こんな連中に追われているのでは中庭に潜伏することもできない。なんとかしなければいけない。なんとか。

先は行き止まりだつた。ドアがあつて閉ざされている。その手前に上に上がる階段、左側は教室、右側は窓、夏ではあるが使用されていないからか窓が開いている様子がない。鼻先で感じられる。空気が流れていないので。一階へ上がつても、猫である私はどこかひとつ窓さえ開いていれば飛び出すことも可能だが、もちろん開いている保証はない。鼠たちはさらに勢いを増している。もはや鼠色の濁流だ。追いつかれれば死が待つていて。しかし猫の肉体は連續で長距離を疾走するようにはできていない。狩猟スタイルから行つても待ちのハントをする動物なのだ。最高速度をそう長い時間は維持できない。

G組からA組へ、教室カウントダウンが一気に進む。
上がるしかない、そう思った時、

「こつちなんか変な……」

天運。まだ私は見放されはいなかつた。

廊下の奥のドアが開いて、制服の少女がこちらを覗き込んで目を丸くした。

無理もないことだ。

「どうしたのナツメちゃ……」

「ぜ、っく

あまり共通項を感じさせない三人の少女が私の背後、鼠の大群に硬直している。

なにふり構つてはいられなかつた。

「助けてくれ！」

私は叫んだ。

「「「え？」」」

三人はほとんど同時にそう咳いて声した方を見、私を認識した。鼠に気をとられて猫など田にも入つていなかつたに違ひない。だが、喋る猫となればそれはもう絶大なるインパクトだらう。そうであるはずだ。YouTubeならば百万再生も目指せる。

「鼠に追われているんだ！ 助けてくれ！」

ともかくドアを開けておいてくれ、私は一直線に彼女らの隙間を目指して走る。

階段を過ぎ、

「トムヒジヒリーツス！」

「逆だから！ 多いし！」

「こっち来る、ぜつと！」

あと一息、飛べば出られる。

慌てている三人の足元へヘッドスライディング。
ばたん。

「あ

まつたくの不意打ちでドアが閉まって、私は顔面から突っ込んで廊下に倒れた。

終わつた。

いいいいいいいいいいいいいい……。

迫つてくる。

鼠。

私の猫生終わりました。

動けそうもない。

「いやいや、助けなきゃダメっす！」

首根っこを掴まれ、私は外に引っ張り出された。一人の少女が私を引っ張つている。

「閉めて閉めて、すぐ閉めて！ ミズキちゃん！」

「了解だ、ぜつと」

再びドアが閉まつた直後、卵が壁にぶつけられたときのよつた音が連續した。見えなくともおよそわかる。方に近い鼠が一気に衝突したのだ。その勢いは恐ろしいもので、閉じられたドアがひしゃげて外側に膨らむ。下の鼠を押し潰しても、そういう自滅的突進であつた。

少女たちは一瞬硬直したが、すぐに駆け出した。

「逃げるつす！」

抱え上げられその場を連れ出されながら、私は一度と鼠は逃がすまいと心に決めた。

少女たちが逃げ込んだのはうす暗い、いわゆる体育館裏といつやつだつた。

「ここまでくれば大丈夫、つすかね？」

「大丈夫、じやない？」

「……大丈夫だ、ぜつと」

それほどの距離ではない。三百メートルかそこらだ。若い割には息切れが早い、そんなことを思いながら、私は首を振つた。ここでは大丈夫ではない。

「助けてくれてありがとう、感謝する」

「……」

私がふたたび喋つたことで、少女たちはさきほどのことが錯覚でないことを感じたようだ。喋る猫という奇異以上のことがここで起ころうとしている以上、私も己を守ることだけに囚われていられない。ストレートに注意を喚起しなければ。

「しかし、鼠は情報を共有する。学院内にどれだけの数がひそんでいるかわからない。一匹に見つかれば数分の内には周辺数キロ半径で見つかるのと同じことになる。ここもすぐ見つかるだろ？。君たちは急いで敷地内から出るべきだ」

「偉そうな猫つすね……」

よく日焼けした少女は眉をひそめて私の顔に詰め寄つた。

「よく見たら不細工だし……」

落ち着いた雰囲気のある少女も腕を組んで不愉快そうだ。

「……」

表情の薄い少女はなにか言いたげな風で両手の指を合わせてもじもじしている。

「どうも信用が得られないようだ。猫だから無理もないのだが。「えー……いや、自己紹介が遅れたが、私は元人間の猫だ。偉そうに聞こえたとしたら申し訳ない。学院の異常は気付いていると思うがこれからもつと酷いことになるかもしない。私にもこれからどうなるかということを確定できないし、詳しく説明している時間がないのがあれなのだが」

「魔法つすよね？」

「……そう、魔法。知っているのか？」

「変なオーライサンに話は聞いてるつす。ここに魔界の穴が封じてあるとか、信じてなかつたつすけど、猫が喋っちゃあ、ちょっと信憑性あがつたつすよ？」

「その点では、ね。でも、猫の話を信じるつて言つのもなんか道理に合わないような」

「ヤタテっち、黒猫は喋るもんつすよ、ジジ然り、夜一さん然り……は、オジサンこゝつすけどもしかして人間に戻ると美女パターンもあるつてことつすかね？ どうつすか？」

少女たちには緊張感が足りなかつた。決定的に。

しかも、なにを言つてるのかさっぱりわからない。これがジェネレーションギャップというやつなのだろうか。長年大学で学生たちとも交流があつてそれほど置いていかれているとは思つていなかつたのだが現実こうだ。自信がなくなってきた。

「ナツメ！」

私が言葉を失つていると、ずっと黙っていた少女が振り返るほどの大聲を出した。

「ミズキっち？」

「抱いていい？」

そう言つ少女の呼吸が荒い。

「……ああ、あの猫氏、この人は猫好きでして、いいっすよね？」

「いい？」

そう呟いて私はハツとして身構えたが遅かった。

猫になつてもつとも屈辱的なことはなにか。鼠のようなものまで食べることか？ いや違つ。人間に可愛がられることだ。猫好きは思うより多い。老若男女、彼らは出会つた猫をとりあえず写真に収めようとする。そして目を細めながら接近してくる。それはまあいい。逃げられる場面ならば。だが一度捕まつてしまえば、もうこれでもかというぐらい撫でられる。そして、私の人としての意思とは関係なく、猫の身体は悦びを覚える。

「にやああああああああん」

どこから出でいるのか口にもわからない甘えた声が我慢できない。そのとき、私の人としての尊厳は完膚なきまでに破壊される感覚がある。

いつも思つ。

私の人生はもう終わりだと。

「ンニヤああああああああああああああああああああん
もううイヤ。

「……おお、オジサンが悶えていり」

「オジサンは受けつて言つより攻めなんだけどな……」

「にやんこにやんこ」にやんこ可愛い、可愛い、ぜつとー」

「にやにやにやにやにやあああん」

「にやんこ……そう言えば、名前的にあんまり自分の口から言いたくはないっすけど、夏目友人帳の安定感は凄いものがあるっすよね……ねえ？ ヤタテッち」

「総受け」

「にやんこも？」

「むづるん」

「ハードっすね……」

そして可愛がられている猫を助ける人間はいない。
私が話をした限りでは多くの猫が人間に愛玩されることについて
「気持ちが良くてエサももらえてまつたくいいことだ」という意見
が圧倒的大多数を占めているのでこればかりは猫になってしまった
以上は甘受する他ないのである。

「にゃあ」

ひとしきり、全身を余す所無く可愛がられた私は氣力を根こそぎ
刈り取られた。

「で、この猫氏の意見を聞くっすか?」

制服の少女は他の一人に尋ねた。

「危なって言うなら逃げた方がいいと思う、少なくとも魔法があるのは確かみたいだし」

聞いていないようでしつかりと趣旨を理解している少女が答え、
「にゃんこ、もふもふ、満足、ぜつと」
うつとりとしながらもう一人が関係ないことを言つてゐるようで
帰ることに同意した。

「ナツメちゃんはいいの?」

「自分から非日常に入り込むのは死亡フラグもいいところすからね、
ここは退くのがアニメ研究会のあるべき姿といつことで、じゃ、猫
氏、自分たちは行くつすから」

少女たちは現実的な結論に達したようだった。どこか浮世離れし
てゐるようで、しつかりと自分というものを持つてゐる。若者とは
強かなものだ。

「……安全に送り届けたいところだが」

それに私にはここで為すべきこともある。

「猫にそこまで期待しないつすよ」

「失礼します」

「ばいばい、にゃんこ」

それぞれがなにかを納得した表情で去つていくのを私は地べたで

見送つた。

撫で回された身体の痺れと程よい倦怠感がなかなか抜けない。

しばらく遠くで響いていた戦いの音は止んでいる。決着が付いたのだろうか。警察側が負けてくれるのならば、千笑の目論みは不達ということになり私としては鼠の危険を冒してまで鍵を奪う段取りをつけなくても良くなるのだが、そこまで都合よくはないまい。

守護者が守っていることを前提に乗り込むからにはそれを排除する筋立てを考えるのは当然のことだ。よもやつかり負けてそれまでということにはなるまい。とはいっても、学院内に異質な気配が漂っているということもない。まだ魔界の穴は守られている。ともかく、

問題は鼠だ。

やり過ごしたとは言え、高等部の校舎には確實にいる。校舎を通る手が使えないのなら別のルートを探さなければならない。周囲を校舎と渡り廊下で囲まれた中庭に、中を通らずに行く方法はひとつひとつしか思い浮かばない。

屋上伝しに別の校舎から一気に飛び込むのた

しかし、問題は建物の配置が頭に入ってない」となんだか……」

ほかの建物の方向に並んで立つ高等部の校舎

い。別の建物を経由していけるものなのかどうか。鼠に注意しながら

「アーティストの心」

「フラグフラグって現実でそういうの」と言わないでー。」「いやんこ、まだいる、ぜつとー

騒がしい声が戻ってきていた。

..... నుండి వారి ప్రమాదానికి బయలు లేవు.

- 1 -

嫌な確信を持つて振り返ると、帰つたはずの少女たちがこちりに

戾つてきていて、そしてその背後から無数の濁つた色が追いかけて
きている。ドブのような色だ。

「！」こっちに逃げてくるな！」

もう大人の分別も無く私は言つた。

「なに言つてるんすか、安全に送り届けたいつていつたのは猫氏つ
すよ！」

「建前だ！ それは！ 期待しないつて言つただろう？」

無力な猫に頼らないでほしい。

「期待はしないけど、猫なら鼠ぐらにどうにかならないんすか？」

「無茶言つな！」

「最低つす！」「最低だよ、オジサン」「にゃんこー。」

私は私のことでいっぴいいっぴいなのだ。

大人とはそういうものなのだ。これが非情なる社会の現実なのだ。
そうでなければこれほど事態は悪化しなかつたし、私は猫にもなつ
ていない。子供はそういう大人を見て、身勝手に育つて社会を堕落
させ、そしていつか限界を迎える。それだけが人類の営みであり歴
史の永劫なる繰り返しなのだ。どうしようもない。そう言い聞かせ
て生きていく。

少女たちを待たず、私も走り出した。

「待つて！ にゃんこー！」

「無理、もう無理だから！」

「役立たずっす！」

「この件に関しては！ 役立たずで結構だ！」

身も蓋もないことを叫びながら、私たちは敷地内を走り回ること
になつた。

助けを呼ぼうにも、学院は街から孤立している。

14 私の猫生終わりました。（後書き）

お読みいただきありがとうございました。こましだ。

15 変態女装少年とストーカー少女

広い日本庭園を臨む畳敷きの大広間。やたらと寝心地のいい布団の上で目覚めた勇希は、しばらく天井を見つめて身体を起こし、ここが聖家、つまり母の実家であることを思い出した。毎年の正月に訪れるときは何百人という人々が押し寄せ、曾祖母に挨拶をし豪華な料理を振舞われる部屋だったが、何十か何百かわからない畳の真ん中にぽつんと布団を敷かれてしまつたので光景が一致しなかつたのだ。

ぱちちゃんと庭の鯉が跳ねる。

「……あれ？」

記憶が？がらない。

頭を搔き、掛け布団の上にうつ伏せで静かな寝息を立てている舞を起こさないように身体を引き抜く。父に鍵を渡したところまでは覚えている。見る限り舞は無事だ。あとは父と母。広い部屋を見渡してもいなかつたが、勇希はそれほど慌てなかつた。

「バアちゃんのとこか……」

母方の祖母、つまり母の母。父とともにここに来ているのなら会いに行くのが当然である。

勇希は着せられていた浴衣の襟と裾を整え、ふらつきながら歩き出す。

立ち上るとどうしようもない倦怠感が勇希の全身を覆つっていた。まっすぐ歩くこともできず壁をつたうようにして進むが、途中で膝が折れた。負けたのだ。ひんやりとした床板に手を突いて締め付けられる胸に任せて息を吐きながら痛感する。母と舞を守るつもりで、そう言つた。けれど負けた。守れなかつた。そして鍵を差し出して命乞いをしたのだ。

『……これを渡せば、みんな、助かる？』

拒絕したはずの父に。そしてその向こうにいる敵に。

「あああっ！」

何度も頭を振つて拳を握りしめ、勇希は振り上げる。だが、振り下ろせなかつた。

『うつせーんだよ！ 役立たずの猫はそこでたまつてろ…』

『あんな猫の子のつもりはない！』

勝つつもりだつたのだ。

父が力の無い猫である限り、自分が勝つはずだつた。だが、肝心な所で負けた。守るべきものを守れず、自分が言つたことしすら守れず、そして父が父であることに甘えた。都合よく子供ぶつた。それが勇希にとつてなによりも悔しいことだつた。半年前、父が死んだことになつたときに、自分は自立して大人になるのだと決めていたのだ。

拳から力が抜け、腕ごと床に垂れ下がつた。

「勇希坊ちゃん」

「……」

パタパタと駆け寄つてくる声に振り返る。

「お身体の具合がよろしくないんでしょう？ お布団まで……」

古くからいるという聖家の使用人の女性だつた。勇希も何度も顔を合わせている。

「いいよ、バアちゃんは？」

身体を抱えようとする手を押さえて、勇希は自分で立ち上がる。

「千栄子さまなら仏間に居られますか……」

「ありがとう」

見守る視線を背中に感じながら、勇希はふたたびよろめいて歩く。どう思おうと結果が全て。負けは負けなのだ。

「バアちゃん、いる？」

「勇希かい？ お入り」

「……」

襖を開けると、勇希の予想に反して、仏間にいたのは静かに正座している祖母のみで、猫の父や少女の母の姿はなかつた。屋敷の中

ではそれほど広くない部屋を見回しながら、勇希はまず仏壇に線香を立て、合掌する。いくつかの先祖の遺影の中に祖父の顔がある。

「大きくなつたねえ」

「……夏休みの頭に来たばかりだよ?」

そう答え、勇希は祖母の正面に正座する。

今でも学院の理事長を務め、聖家のトップに君臨する曾祖母千笑と比べると、祖母千栄子はそれほど高齢でもないといつのに落ち着いた色合いの着物を着て、お婆ちゃん然としていつも二口二口している。派手な洋装を着る曾祖母とは逆の趣味だ。そんな祖母が勇希は好きで、同じ市内にいるといつもあってよく顔を出していた。

「お菓子、食べるかい?」

「え?」

「丁度ねえ、水羊羹を頂いたんだよ。そろそろいい具合に冷えて…

…

千栄子はそそくせと立ち上がるつとする。

「バアちゃん、あのせ、ちがうよ。甘いものとかは別に。おれ、その、どうしておれがここにいるのかとか、もつと話すことあるじやん。父さんと母さんは? いるんでしょ?」

「いないねえ。圭介さんも……笑子も」

勇希に背を向けたまま、千栄子は小さな声で言つた。

「……え? 気付かなかつた? 如月、つておのれの同級生と一緒にきてるはずだよ、同じ年ぐらいの、おれとそつくりの女の子が……あと猫、ぶつさいくな猫、あれを父さんだつて言つてもわからぬいかもしれないけど、その……え? や……うそ?」

いくら喋つても振り返りもしない祖母のノーリアクションに勇希はからからになつた喉を押さえた。考える限り、もうすべて決着がついていたはずだった。

「いない? だつて……」

鍵を渡してみんなが無事のはずだ。

「その勇希そつくりの子は、圭介さんを追いかけたいた

千栄子はまるで他人事のように咳いた。

「一緒にいたお嬢さんが教えてくれたよ。そつこいことだそつだ」

「……バアちゃん、なんで落ち着いてんの？」

飲み込めない違和感を勇希はそのまま口にした。

「生き返ったんだよ？ 母さんが。母さんってことばバアちゃんの

……」

「死んだんだよ。娘は、もうとつぐに」

「や、だから死んで、生き返って」

「笑子はこの家の呪いを背負って死んだんだよ」

千栄子はそこで振り返った。

「正義の街。あの日、あの子はそつこいつてねえ」

「……正義の、まち？」

祖母は、今まで勇希が見たことのない顔をしていた。圧倒的な怒りと哀しみ、千笑と笑子そして勇希自身、血の繋がり。あらゆるもののが含まれていて、そして千栄子自身がどこにもない。それは役目を終えた植物に似ていた。後は枯れて土に還るだけの。

それだけは直感できた。

「バアちゃん、もしかして今日のこと全部……」

「『めんねえ……勇希。巻き込むつもちはなかつたんだよ』

「『めんね、母さん。今日はひとりなんだ』

「……どうしたんだい？」

勇希を連れることなく笑子が聖家に帰ってきたのはその日が最初で最後だった。

「ま、母さんの顔を見に、つてことかな

「？」

笑子は久しぶりに守護者として戦わなければならぬのだと説明した。

「で、魔王だつて。笑っちゃうよね。この一十一世紀で

「魔界が統一されたということになると、それがどういった意味かはわかる。」

守護者にはならなかつた千栄子にもそれがどういった意味かはわかる。

「たぶんね。少なくとも上はそう判断してるみたい。記録が残つてゐる限りではあつちの争乱が治まつたことつて今までなかつたみたいで、それも魔人たちが主導して大きな国が出来上がつちやつたといつことになると、こつちも対応しなきやいけないつてことになつて」

「……攻めてきたのかい？」

「ううん、違う。今回の件はぶっちゃけ内輪揉め」

苦笑して、笑子は落ち着かないように、

「魔王は必ず攻めてくるから、こちらの戦力を増やすためにも広く守護者の存在を世に知らしめるべきだ、という人たちと、攻めてくることは間違いないにしても、戦力を増やすということ自体が相手を刺激して危険を招くから先に魔王側との交渉を進めるべきだ、といふ人たちが一つに割れちゃつて。この一年ぐらいはそれでも、ま、いつもの派閥争いみたいなもので大したことなかつたらしいんだけど、どうも両方に相手を捻じ伏せてでも強行にやろうつて人たちが出てきちゃつて、あれだよ、欲望のタガが外れちゃつたね。いよいよ、というか遂に。拠点となる魔界の穴の奪い合いになつてしまつた。そうなつてくると、当然、狭い地域に穴が密集している日本は激しい戦場という事になつてくるわけで、わたしにもお鉢が回つてきちゃいました。といつ眞命。大体のところ、そういうことだから」

早口でまくしたて、片方の手を包むようにキュッと握る。

「味方だった人たちと戦うのは、辛いよね……」

「笑子……」

「母さん、勇希のこと、お願ひね」

千栄子の言葉を遮るように、言つと部屋を出て行つとする。

「あなたが死んだら、子供は……」

「親はなくとも子は育つ、って言つでしょ？ わたしもそつ

「……」

言葉を失い、千栄子は俯いた。

「皮肉で言つてるわけじゃないよ、母さん。わたしが母さんの立場だつたとしても、同じことをしたかもしない。勇希が生まれてからよく思つ。許せるかというとわからないけど、責められない。母さんはわたしの母さんだし、孫を可愛がつてゐる姿を見るとね、絆される」

「笑子」

「……お婆様は中立を貫くつもりみたい。どちらも正しい、時間をかけて話し合え、つてね。いい歳して理想論もカッコ良いじゃない。だから、わたしは戦うこととした。母さん、聞きたくないかもしれないけど、これは母さんに対する罪滅ぼしの気持ちだと思つ」

千栄子は首を振つた。

それを見て、笑子はゆつくりと息を吐く。

「お婆様にも圭介にも言つてないけど、勇希には資質があった」

「……！」

「かなり強い資質だと思つ。母さんは運が悪かつたんだよ。ま、わたくしが生まれた時点でお婆様も気付いてはいたはずだから、何十年もの確執を放置している時点で悪いのはどっちが明らかなんだけど。それももういい。頑固なこの家の事情はもう終わりにしよう」

笑子はそう言つて千栄子の両肩に手を置いた。

「たぶん、わたしが死んでも戦いは終わらない。明るい未来も期待できない。それはずっと、ずっと前からわかつてた。この家に生まれて、守護者になつて、ずっと、ずっと絶えず感じてた。でも戦うしかない。これからもずっと、ずっと最後まで。なぜなら、それが大勢の守護者を送り出してきた聖家に課せられた責任だから。ここを守つていくことが正義だと教え、示しつづけてきたわたしたちがそれを背負わなくてだれが背負つの？」

千栄子は、笑子の瞳から流れ落ちる涙を見ていた。

「だから戦う。わたしは。せめて、ここを守るこれからの子たちが、自分の戦いが正義だと信じられるように。木乃市は、守るために値する正義の街だと胸を張れるよ！」

徹頭徹尾、勇希には理解できなかつた。

「ごめんねえ、ごめんねえ……」

話を追えて畳に額を擦りつけ、そう言いつづける祖母をそのままにして、勇希は立ち上がる。かつて母がなにをして、これからなにが起こるかとしているのか、肝心なことがなにもわからない。なにも伝わつてこない。

しかし、それがすべてなのだとこゝは勇希にもわかつた。

「バアちゃん、父さんと母さんはどう？」

「……行つてはいけない、勇希。そこに行つても

「どこだよ！」

田の前の老婆にぶつけても仕方がないと感じながらも、勇希は怒鳴つた。

「こままだと一人とも死んじゃうんだ！」

この状況で、母が死ぬ直前の話をする理由はひとつしかない。祖母はもう諦めているのだ。蘇った母の命さえもどうにもならないと孫に婉曲に告げたに過ぎない。

「……ああ、ああ、ああ」

千栄子は頭を上げることなく嗚咽を漏らした。

「くそつ

仏間から勇希は飛び出して、ともかく屋敷の外へ出ようと廊下を走つた。身体が思うように動かず、よろめいて何度も転びながら、それでも立ち上がつた。自分のせいだという思いがあつた。あそこで戦つて勝つていれば、勝てないまでもみんなを連れて逃げていればこんなことにはなつていない。それが出来なかつたという無力を痛感する。

「ちつく、しょ……」

這つよつにして玄関先までたどり着くと、舞がいた。

「どこへ行くの？」

舞は勇希の顔の前にしゃがみこんで小首を傾げてみせる。大きく見開いた眼と口元が笑っていて、明らかにバカにしてくる。口に出さずとも顔が雄弁に語っていた。

「……どこだつていいだろ、つづーか、パンツ見えてんだよ」「うんざりしながら勇希は視線を逸らして答えた。

「見てもいいよ」

丈の短いスカートの裾をひらひらさせながら舞は言つ。

「見ねーよ、隠せよ」

自分のときはそれほど気にしなかつたが、人にやられると非常に鬱陶しいことだと勇希はよつやく父の言葉の意味を理解した。デザインが派手だ。

「えいっ」

舞は勇希の顔面にチヨップした。

「……だつ？」

首が押し込まれるような痛打であった。

「えいっ」

もう一撃。

「ちょつ、ま

「えいっ、えいっ、えいっ」

さらに連打。

「やめろっ！」

「やめろっ！」

「どこへ行くの？」

「つづー、だから……どこだつて

「えいっ！」

もう一方の手で舞はチヨップ。

「んがっ」

「こんな状態の勇希くんになにができるの？」

「あなのー……」

「勇希くんはビーフでお母さんを追いかけるの?」

「そんなの、決まって」

「えいっー！」

「がつ！」

やられっぱなしの上に、こんなところで足止めを食らっている場合でもない。

「いい加減にしろー！」

勇希は勢いだけで立ち上がり、舞の胸倉を掴んで立たせ「ジャマだ、どけー！」

突き飛ばす。

「お母さんの行き先、知ってるよ?」

よひけて廊下の壁にぶつかりながら、でも動じることなく、舞は含み笑いで言つ。呪を交差させ、腕を組み、嬉しそうに自分の胸を撫でた。

「……どこだよ」

苛立ちを堪えるよひて勇希はぱりぱりと頭を搔く。

「先に舞の質問に答えてよ」

「質問?」

「まだお母さんと結婚するつもつなの?..」

「……そんなことビッグでも」

「よくない」

「……」

冷ややかな声に勇希は舞の顔を見る。真剣な表情ではあった。

「守るって言つたのに、おれは、守れなかつた。だから……というか、最初から、ダメだつてことはわかつてた。母さんになつてくれつて言つても、同じ年ぐらいで、ビッグにもならない気がして……それに、本当のことを見つたらもう……こいだろ、これで」

言しながら、勇希自身、自分がなにをしたかったのかよくわからなくなつてきていた。鍵が胸の中にはつたときは確かに感じられた

確信が霧散してしまつている。

なにより、それどころではないのだ。命の危険が迫つているかも知れない。

「それで、母さんはどう？」

「もうひとつ」

舞は指を一本立てた。

「時間がねーから」

「舞と結婚の約束をして！」

勇希の声をかき消すほどの大声は静かな玄関先でじんわりと反響した。

「……は？」

「お母さんと結婚する気がないなら、舞と結婚して！」

「……意味がわからん」

話の腰を折られ、気力を腰碎けにされた勇希は座り込みそうになり、壁に寄り掛かった。

「じゃなかつたら、なにも教えないし、ここも通さない！」

「それ、質問じゃなくてキヨーハクだろ……」

「どうするの！」

舞はつかつかと勇希の前に詰め寄つてくる。

「どーもこーもねーよ、おれは別にそんな……ん？」

キスされていた。

体重をかけられて、立つてゐるのがやつとだつた勇希はずるずると座り込み、口の中に差し込まれた舌の感触に戸惑つていて。これまでに何度もされてきたことではあるが、今までになく大人しく、そして奇妙に甘酸っぱい味がしていた。

唇を離すと、舞の顔は真つ赤になつていた。

「舞にはわかつてたよ、勇希くん、ずっとさみしかつたんだつてこと

「……さみしかつた」

「女装しても、マザコノでも、舞は、勇希くんの側からぜつたい離

れないよ？ ね？」

「ね？ つて……おれは、その」

状況は既に勇希の思考の限界を超えていた。

両親のこと、祖母のこと、そして自分のこと、街、今日起じつた諸々の状況、なにもかもが整理できずに頭の中でぐるぐると回っている。順序立てて考えるには身体も疲れすぎている。時間がない。そしてなにより、舞の言葉は概ね正鵠を射ていた。

さみしかったのだ。

物心つく前には死んでいた母、研究に没頭してきた父、不在は常に埋まらない空白として心の中にはあった。友だちもそれほどできず、学校では浮いた存在になり、そういう時に語りかけてくれたのは舞だつたことは確かだ。救われる思いがあり、そしてストーカーになつてからも彼女を決定的には拒絶できない自分がいた。わかつてくれているのではないかという、期待はなかつたとは言えない。総じて言えば、付け回されても嫌いにはなれなかつた。

いつかはストーカーが治まれば、あるいは好きになるかもしれない、そんな曖昧な感情はあつた。恋人というよりは主に友人としてあることは確かだつたが。

「如月のことどー想つてるのか、わかんねーから……」「好きって言って！」

全開の瞳孔で見つめる舞は、勇希の両肩を掴んで、壁にガンガンと押し付けた。

「え？ つだ、や、だから……そこまででは」

「そこまでもどこまでもないのー、言えばいいから、言つてくれるだけでいいからー。」「……好き？」

勇希は妥協した。

「愛してる？」

さらに顔を近付け、鼻息荒く舞は畳み掛ける。

「あい？ そんな、ぜんぜ……」

「愛してる！」

「あ、あい？」してゐる

猛烈に妥協した。

「結婚する？」

「けつこ……ってなに言わせ」

「結婚するよね！」

舞は容赦なかつた。

「……え、あの」

どつと冷や汗が出てきていた。

勇希には自覚がある。自分が黙つていてもモテる美少年であり、将来それなりに選ぶことのできる立場にあるのだという未来への展望があった。その根本を揺るがされている。いくつもあつたはずの道が、気がつけば一本道になつている恐怖感。それはもはや理屈ではなく、実感だつた。ここで言つだけなら難しくはない。それで母を追える。簡単なことだ。小学六年生の約束が未来永劫有効だなんてありえない」とは常識で考えれば当然だ。

「本気？」

だが、田の前の少女にそれが通用するのかどうなのか。

「本気」

「……た、たぶんだけど、おれよりいじ男にこれから出合つと思つよ、如月は」

「話を逸らさないで」

「お、おれがいやだつて言つたら？」

恐る恐る、勇希は仮定を述べる。

「頭叩いて、寝かせて、引きずつて布団に連れて行く。今日は終わ

り

重々しく、それ 자체が鈍器のような声で舞は言つた。

一瞬の静寂。

聞き耳を立てていたかのように鎮まつていた蝉の声に取り囲まれる。密着してくる舞の身体は汗ばんでいて、勇希の首筋も濡れ始め

ている。体温はそろそろピークを超えたがこの夏の気温より明らかに熱く、互いの荒い呼吸が混ざって空気が薄く感じられる。

「あ

不意に舞は咳いて、少し腰をすらした。

「あ……」

勇希も腰を引く。身体は節操がない。

「わかった、如月、結婚しよう」

言っちゃったよ、とどこか冷めた自分を感じながらも、覚悟を決めて勇希は言った。

「え？」

「それでいいような気がする」

別にモテることに誇りをもっていたわけではないのだ。

「……うわ、じゃないよね？」

「如月の気持ちが変わらないなら、おれがもらつてやる」

パチパチと落ち着かないままたきをしている舞を自分から抱きしめながら、勇希はその耳元に囁くよつと言つた。言つながら自分を納得させた。

「変わらない、舞は変わらないよ！」

母親の実家の玄関先でなにをやつているのだろうか。

抱いてみると柔らかく小ねぐ、それほど恐ろしい女の子であつたのかどうかさえわからない舞の感触を感じながら、これでよかつたのだ、と勇希は何度も自分の中で繰り返す。ちょっとストーカー気味で、ちょっとの氣があるだけで、可愛いものだ。間違いない。力を込めないと気持ちが揺らぎそうだった。

「ダーリン、ちょっと苦しいよ」

「……それで、行き先はどこ？」

呼びかけには突つ込みを入れずに勇希は言った。

「そうだね、うん、その前にダーリン、着替えないとー。」

「は？ 着替え？」

「ウエディングドレスがあつたのー！」

満面の笑みで、舞は言い、手を叩いて立ち上がった。

「……ごめん、意味わからない」

勇希は気付いていなかった。

これが大いなる受難のはじまりであるといつひと。

15 変態女装少年ヒストーカー少女（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

15 ジジからは私の戦いだ。

逃げれば逃げるほど鼠が増える。

そう錯覚してしまつほど、数限りない鼠が私たちの行く手に現れた。校舎の下から、生垣の中から、駐輪場の上から、虚を衝いてやつてくる。その度に急カーブを切り、前後左右、東西南北、あちらからこちらという判断もままならないまま、走るしかなかつた。

「……ど、どうして追いついてこないの？」

私の後ろをついてくる少女の声に、ハツと氣付いた。

「確かに……」

単純なトップスピードで言えば相手が完全に上回っているはずだ。猫の狩りにおいても、ルートを見越しての先回りと待ちでやつと捕らえられるのが鼠だ。鬼ごっこなど勝負にもならない。もちろん鼠共も無限のスタミナを持っているわけではないし、その点では猫や人間の方が優れているとも言えるが、それを見越してヤツらは次から次へと先回りをして、距離ではなく数で圧倒しようと……。

「いかんつ！」

誘いこまれている。

前脚を突つ張つて急ブレーキ。切り替えして追つてくる鼠共を睨む。

推測通り、ヤツらは追う足をぴたりと止めた。

「ね、猫氏、急に止まられるつとと」

「ナツメちゃん？」

「……あ」

一番遅れていた少女が私をかわそうとして軽くジャンプしたのだが着地できずに転倒した。どう見ても運動不足だろう。年頃の女子にあるまじきあられもない体勢になつていて。それを見て、他の二人が助け起こしている。

視線を感じて私は横の校舎を見上げた。そこにあの例の鼠がいた。

耳を立ててみると感じられる。ヤツは同族に向かつて蟲のみに通じる言語で何らかの指示を出している。おわりく、私をどこかの行き止まりまで追い込み、皿ひとどめをせわうと詰つのだな。

「狙いは私だろう！　この人間たちは逃がしてくれないか！」

「そういう状況になつた時点で話は通じないと理解しつつ、私は呼びかけてみた。学院の生徒ということは笑子の後輩でもある。まさか鼠のエサにするわけにはいかない。

બાળ કાવ્ય

鼠共は答えなかつた。動物に話し合いなどという概念はないのだから仕方がない。食うか食われるか、これは人間が考えるより自然界における絶対的なルールだ。

逃げていくもはじまらない。

「いやんこ、なんて？」

動物言語が聞き取れず首を傾げる少女たちに私は首を振った。
猫の身体でこの事態のすべてを解決するのは土台無理だ。できる
ことからやらなければ。

「すまない。絶対に助けられるという確約はできないが、ここは私
があの鼠の群れに飛び込む。その隙に逃げてくれ。多少は時間が稼
げるはずだ」

「猫氏」「猫ちゃん」

二人の少女は私の覚悟を汲んでくれたのか、真剣に頷いた。猫ぐら
い簡単に見捨てる事もできるだろうに、なんとも真面目な子たちである。助け甲斐があるじゃないか。どうして学院にいたかはわからぬが、巻き込んだのは私なのだ。さつきは見捨てようとしたが、知恵をつけた鼠の一網打尽にされるぐらいなら、犠牲は少ない方がいい。

「にゃん」、そんなのダメだ、ぜつとー。

一人、猫好きの少女だけ私を止めようとしたが、残る一人が腕をロックした。

「いくぞ！」

そう叫んで、私は鼠共に突っ込んだ。

一瞬で鼠の鳴き声しか聞こえなくなつた。飛び込んで振るつた猫パンチで数匹を弾いたが、ものの数にはならない。鼠共はまったくひるまず、数十、数百の群を単位に次から次へと襲い掛かつてくる。ひとつひとつのが塊が猫一匹より大きいだろう。かまわずムチャクチヤに脚を振り回し、口に入つてきたものに噛み付いてやつたが、分が悪過ぎる。

鼠色の泥沼に飲まれるように、上も下も蠢くヤツらでわけがわからぬ。身体中が噛み付かれて痛みもよくわからなくなつていた。猫になつて半年、幾度も見た光景が蘇つてくる。死んだ猫のぼろぼろの毛皮だけが吹き曝しになつた、あの光景。車に轢かれたのかなんなのか、住宅地界隈レベルならば食物連鎖の頂点に近い位置にありながら、極めて無力で無残な死の姿。あれを見るたびに猫になつてしまつた己の不幸を呪つた。これでは毛皮も残るまい。

これで終わりなのか。

研究に費やした十年、猫としての半年、そして結果としての昨日、今日。

せざむといひた。

妻は蘇つた。息子も生きている。それ以上になにを望めというのだろう。無力な猫だ。惜しむような命でもない。見知らぬ少女たちを助けようとした。十分だ。さすがに魔法の力を駆使する守護者たちのように世界を、この街を守ることは荷が重い。そもそもそれは私の仕事でもない。求められてもいない。そう、それで……。

よくないだろ。

「レインの畜生共があああつ！」

どこからそんな力が出たのか、私は鼠を跳ね除け、宙を舞つてい

た。

「」のまま死んだら、カツ「悪い男のままだ。

笑子の夫として、勇希の父親として、そしてなにより私自身生きたことに胸を張れない。

猫にされて、鼠に食い殺されるなど許容できるか。

「ここからは私の戦いだ。

「まだ、歯向かうんでやすか……」

校舎の雨どいの外側をするするとあの鼠が滑り降りてきた。

「言つたはすだ、鼠風情が……」

着地しただけで崩れ落ちそうになる四肢を氣力で支えながら私は言い放つ。

「……猫と鼠の理には歯向かつているのはどっちか、教えてやる」「減らず口がそれだけ叩けりや十分でやす」

鼠が歩くと、私を取り囲んでいた群れが道を開けた。

「逃がした獲物をそのままにはしておかないあのアマの鞆に忍び込み、やつてきたこの場所で得た力、正に鼠を超えた鼠、ちゅー鼠！これほど早く使えるとはあっしの幸運も満更バカにしたものもないっちゅー……田ン玉かつぽじつてよーくみるといいでやす！」

「……」

うだうだ喋つている間に攻撃したかったが、満身創痍の私は動けなかつた。

立つているのがやつとだ。

「ちゅうううううううう……」

鼠が唸り声を上げる。

異様な気迫だった。鼠の毛は激しく逆立ち、剥き出しの前歯が見る見る鋭さを増していく。食欲をそそる風だった丸みを帯びたシリットは筋肉質になり、そして明らかに大きくなつていく。モルモットより小さいものから、猫よりも大きいカピバラクラスへ。しあののつそりとした愛嬌のある感じではなく、攻撃的なげつ歯類の意氣を残して。

私は思わず後退り、周囲の鼠共も気圧され、じりじりと下がつていいく。猫と鼠と言ふ関係性においてこれまだ幾度も命をかけた戦いはしてきたが、そういうレベルの問題ではない。魔力だろう。こいつは鼠でありながら資質があつたのだ。人間以外にも資質がある可能性は把握していたが、実際に田にする機会があるとは思つてもいなかつた。

でかい犬に睨まれるより恐ろしいじゃないか。

「ちゅーちゅーちゅーちゅー」

怯える私を壁つよひに鼠は鳴いた。

じんじんと髭がかつてない感覚を伝えてくる。

「どうでやす？ ちゅー鼠」

猫の私の三倍はあるつかといつ身体をさらに大きく見せるようにふんぞり返つて、鼠は勝ち誇つた。動物として勝ち誇るに値する身体であることは間違いない。濶んだ鼠色をえ、くすんだ銀色べらりの貫禄を感じさせるのだ。

「……ちゅー鼠だな」

それはもう超つて言えよ、と懸念を吐く氣力も湧かない。

「さ、鼠捕り、来ないんでやすか？」

鼠は勝利を確信していた。そしてそれは事実その通りだつた。

「い、今、行くところだ」

強がつてはみたものの、前脚を一步出すだけで身体が竦む。

ぢつ！

「こつちからこくでやすよ！」

鼠の声より、周囲の鼠が動搖する方が早かつた。

「どつこいしょおーつ！」

「は？」 「く？」

私と鼠はほとんど同時に空を見上げた。

ハンバーグをこねるときにボールに叩きつけるよつた音、といつただろうか。私の耳に生暖かいものが当たり、直後生温い液体が周囲に飛び散つた。こつん、と地面上に転がつたものは、ヤツのじご自慢

だつたであろう立派な白い歯。猫に歯向かう牙だつた。

目の前の鼠が跡形もなく潰れていた。

「まったく、テディめ、ちゃんと結界を修復しないから、その辺の生き物が魔獣になる」

両脚で鼠がいた地面を踏みしめているのは正井玲於。

私の戦いが茶番でした。

「……」

鼈のない頭の先から、太い尻尾まで、紅蓮の輝きを放つ体毛に覆われたその姿は獅子。それも本当に狩りをする雌のライオンである。新鮮な人間の血の臭いがする。ついさっき、ちゅー鼠を見たときよりも、私の猫の本能が平伏を要求する莊厳な気迫が溢れていた。逃げたいけれども、逃げた時に命がないのは明らかであるという絶対の危機。

できることはひとつだけだ。

私はじろりと血溜まりになつた地面に仰向けに転がり、腹を見せる。

「あー、で喋る黒猫つてのはアンタ?」

玲於はそんな私の首をつかんで持ち上げる。

「は、はい」

誤魔化すという考えも浮かばず反射的に答えていた。

「連中と一緒にいたでしょ、五人のうち四人はもう始末したけど、肝心の理事長がいない。どこにいるか知ってる? 知ってるわよね?

? 答えて」

それほど高圧的な口調ではなかつたが、存在が高圧的なのだ。

「……し、知りませんが」

声が震える。

「あ?」

「し、知らないですが、中庭に向かつているはずだと

「なんことは知つてんの!」

「は、はい……」

それはそうだ。あまりにもわかりきつたくだらない情報だ。

「役に立たない猫ね」

「よく言われます」

息子にも言われました。

「管理鍵は取り戻さないと安心できないからなー……あ」

なんかムシャクシャするのでシマウマの一匹でも殺つてやるか、とでも言わんばかりのしかめ面をした玲於の目が唐突に見開かれた。瞳孔がぐりぐりと動く。獲物を見つけたという喜びが迸っている。自分が見られているという訳でもないのに、内臓が凍るようだ。

しかし、私も恐る恐る彼女の視線の先を見る。

「あれは……」

リーダーを失った鼠共は早々に逃げ出そうとしていた。その行く先、近場の地面だったのだが、千はいる群れが一気に吸い込まれるように消える場所がある。いくらなんでも鼠穴の規模ではない、どう見ても不自然な光景だった。

「そういうことか」

守護者の判断は早かつた。玲於は私を掴んだまま、つかつかとその場所に向かっていき、鼠」と地面を踏みつけた。『ごほん、と土埃とともに地面が落ち、校舎の下に向かって延びる人間も通れる通路が露わになつた。古い石造りの頑丈そうな地下通路である。

「理事長が見つからないわけだ」

「この学院は昔、城のあつた場所に……」

笑子にそういう話を聞いたことがあった。

「うるさい。知ってる」

私は黙るしかなかつた。

15 IJUからは私の戦いだ。（後書き）

お読みいただきありがとうございました。こましだ。

16 IJの緊急事態にケンカです。

複数方向からの風の流れ、散らばつていいく鼠共の気配、入るまでもなく地下通路が広大で入り組んでいるのは明らかだつた。作られた頃からそうだったのか、後に追加して行つたのかはわからないが、学院の敷地にくまなく張り巡らされていると考えるべきだつた。

長身の玲於は腰を屈め、片手に私を掴んだまま奥まで入つていつたが、通路がさらに地下へ伸びる分岐を見つけて、これが平面的ではなく立体的構造を持つていてことを確認して、首を振つた。ここを追跡するのは現実的ではないということだろう。

魔界の穴を守ることを優先するならば、中庭で待つほうが賢明なのだ。

「アンタ、理事長の目的は知ってるの？」

地上に戻つて、私を地面に放り投げると、玲於は言つた。
「私にも具体的には……ただ、私の妻を殺したもののが最期を看取るのだ、と」

よろけて着地して、私は率直に答えた。

「妻？」

「ああ、十年前にここで死んだ守護者、笑子は……」「ちょっと待つって」

私の言葉を遮つて、玲於は怪訝な表情をした。

「……アンタ、奥さんの死体は見た？」

「それがなんだと」

「頭と、心臓、残つてたはずよね？」

重要なことだという風に言葉を区切つて玲於は念を押す。

「それはもちろん……」

動かない妻の姿を思い出して、言葉が詰まつた。

「……話が見えてきたわ」

そう言つと、玲於は悔しそうに歯噛みした。

「どういふことだ」

「は？ アンタの奥さんちの事情よ！ アタシより つ？」

なにか瘤に障ることを言つてしまつたらしく、玲於が声を荒らげた瞬間、その動きが止まつた。何事が、と考える間もなく、地面を伝つて私の全身にも悪寒が走る。髪がへたり、四肢から力が抜け、意思とは裏腹に耳がペたりと閉じて震えながら座り込んでしまう。身体の自由が利かない。

玲於は背後の校舎、その先にある中庭の方角の空を見上げた。

「伏兵の一人や二人、いるだろ？ とは思つてたけど、だれが……？」

「……ま」

魔力なのか？

声すら上手く出せず、身体の震えも止まらない。恐怖とは違う。得体の知れない寒氣としか呼べないものが当たり一面に溢れ、支配しようとしている。ふと見ると、地下通路に逃げ込んだ鼠共が戻つてきている。ヤツらは私など田に入らない様子で、学院から逃げ出そうとしている。その光景から類推されるものはひとつしかない。沈没する船。

本格的にまずい。実際のところ、今日この場にくるまでまずくないことなどひとつもなかつたが、この猫の身体が動いてくれないのでは逃げることもままならない。なにもできない。もしかするとこれは、猫の身体と私の魂が分断……。

「いくよ」

「！」

同意など待つてくれるはずもなく、玲於は私の身体を抱えて飛び上がつた。

無重力感さえ覚える勢いで、一つの校舎を飛び越え、まっすぐに中庭へ飛び込む。その間も寒気はどうどんと増していく。その正体に近付いている。

「正井さん！」

巨樹の前に、さきほど廊下から見たフランク少女が地面に手をつ

きしゃがんでいる。その手の先からは放射線状に光が伸びていた。

おそらくこの場を守る結界に魔力を送り込んでいるのだろう。体型からおよそ察しはついたが、自らの身体に対しても《変異》を行なうより魔力の《転位》を得意とするタイプの守護者に違いない。

「あ、ああ、あの、」、「」、「めんなさい、勝手に開いちゃって……その、あれ」

少女はペニペニと頭を下げながら、もう一方の手で正面を指差す。

「……ちつ」

玲於が舌打ちし、私も目を見開く。

黒い、霧のようなものが区画の一辺、渡り廊下から溢れていて、あれほど生い茂っていた植物が、中庭の半分ほどまでそれに侵食されるように枯れていった。水分を完全に失い、見るからに風化寸前の有様である。そしてその方向から寒気もやってきている。

なにかがいる。

「売村、どのくらい持つ？」

玲於は私を少女の横に置いて、霧のようなものとの間に立ち塞がるよう立つた。全身から放たれる紅蓮の光が勢いを増していく。寒気が少し弱まった感覚がある。なんとも頼もしい。

「け、けつこう全開です。二十分いけるかどうか……」

「範囲を狭めていいから十分延ばして」

「は、はい！」

少女が大きく頷くと、一気に中庭の植物が枯ればじめる。結界を小さくしているのだろう。樹を中心にして、私たちはその内側、そして玲於は外側に立つことになる。

「貧乏くじはアタシだつたか……」

広がつてくる霧を前に、玲於は深呼吸すると大地を蹴つた。

直後、正面にあつた渡り廊下が吹き飛ぶ。こちらにも向かつてくる爆風に、私と少女は体勢を低くして耐えた。結界の面に、墨をぶちまけるように霧のようなものが付着して、すぐに消える。横で少女が苦しそうに息を吐く。見るとほつほつと汗が肌に浮き上がつて

いた。

「あれは一体……」

「だれかが、強制的に扉を開きました」

私の呟きに少女が答えた。

「強制的に？」

「ええ、そう意図して資質のない人に大量の魔力を《転位》すると

」

不意に、広がっていた黒い霧のようなものが一点に凝縮され、私たちの視界にそれが姿を現した。前に立つ長身の玲於さえも見下ろす漆黒の巨体。男だ。拳を振り下ろしていくらしく、足下が徐々に沈んでいる。

「ヒトでさえ、容易く獣に堕とされます」

ヒトの魔獸。

「オ、マエラ、ガロロシタ、セカイオレ、ノアシタ」

魔獸と化した男が裂けた口を開く。黒い体の中で、そこだけが赤い。収まりきらないおろし金のようなざらざらとした舌でたどたどしく話す。意味はわからない。だが、

「メニ、アワスオナ、ジトコロオク、テヤル、シネ」

明確に敵意がある。黒く染まつた白目の中に浮かぶどんよりとした黒目がこちらを見ている。隣の少女の汗が垂れた。

「シネ」

もう一本の腕を振り上げた。その勢いだけで背後の窓ガラスが砕け、建物にも亀裂が入っていく。正対している玲於の顔はこちらからは見えないが、既に一本の腕を両手で受けていて、立っているのが必死の状況にしか見えない。為す術などなかつた。

「正井さん……」

少女は歯を食いしばりながらも、目は閉じなかつた。

どうしようもない音とともに、ひしゃげた玲於の身体が左側面の校舎に突き刺さる。その後、拳の勢いなのか巨大な穴が校舎に開き、

崩れた。中庭を形成する一辺が失われ、この場所はグラウンドに剥き出しになる。守るものはもう少女の結界しかない。

「オマエラダツ、ギハ」

魔獣男はのつそりとこちらに向かって歩いて歩いてくる。

「……あの」

唾を飲み込んで、少女は呟いた。

「死にたくないですよね？」

「……ああ、もちろん」

少女が私に伝えたい意味はわかる。わかりすぎるほど。

けれども死ぬ。

それでも死ぬ。

ともかく死ぬ。

もう死ぬ。

「冷蔵庫のエクレア、食べてくれば良かつた。ひとつとかないで」

集中するように目を瞑つて、少女はそう言った。

「……ご愁傷様」

もつたいないとはいつこいつことだらう。

魔獣男が目の前に立ち、腕を振るつた。

「アグヲオオオオオオオ！」

結界が干渉して男は苦悶の声を上げていたが、その人の頭の五倍はあるうかという大きな拳がじわじわと突き抜けてくる。逃げたい。だが身体はまったく自由にならない。おそらくあの黒い霧のような魔力を受けたときに、私の魂と猫の身体を繋いでいるものが致命的に切れてしまったのだ。どうしようもない。これは、もう。ダメだ。死ぬ。

「まぞのさん！」

見上げていた視線の先で、黄金色の光が走った。両手で剣を握り、腕ごと拳を切り落とす、見覚えのある長い黒髪ワンピースの少女が、いた。

「笑子？」

なぜ？ ここに？

「ヲウオ オオオオアアアアアア！」

魔獣男は痛みに仰け反り、先のない腕を空に掲げる。そこから噴出す黒い血が、私たちに容赦なく降り注ぐ。凄惨としか言いようがない。

「……」

横で少女も呆気に取られている。

「無事、ですか？」

「こちらを振り向かず、剣を構えて笑子は言つ。

「な、なんとか」

「なら、良かつたです」

そう言つて、ちらりと私を見ると、哀しそうに笑つた。よくわからないが、なんとか生き延びた。と、油断する間もなかつた。次の瞬間、笑子の身体が地面に叩きつけられていた。声を出す間もない。魔獣男はまだ苦しんでいる。だれがやつたのか、私の目では捉えられなかつた。

「華夢衣？」

となりで少女が叫んだ。

「対象、確認……」

そこにいたのは、今日、市内に戻つた時に出会つた守護者がいた。どうやら私には笑子が、となりの少女には彼女が、タッチの差で助けに入ろうとしていたらしい。その結果が、

「復讐」
リベンジ

「いや、ちょっと待て、違う……」

君を倒したのは勇希だ。といつかりベンジはおかしいだろ。守護者として。

と、言葉を挟む時間が足りなかつた。

「つたい……、あ、あなた、あの時の」

極めてバッドなタイミングで笑子が目を覚まし、一人はにらみ合う。相手は笑子を勇希と誤解しているが、笑子にしてみれば数時間

前の因縁だった。子供のケンカがはじまる瞬間、というのは大人が敏感に感じられて、まったく止めようもないことのひとつだろ？

「ちょっと、華夢衣、そんなことしてる場合じや……」

届かない。

そう思つたに違ひない。横の少女と私はどちらからともなく顔を見合わせた。

「抹殺」

「やられるもんですか！」

頭の後ろの方でカーンと、乾いたゴングが鳴る。

この緊急事態にケンカです。

まあ、この二人は状況を把握していないわけですが。しかし、子供のケンカとは言え、互いに守護者の力を持っているとなると……いや、待て。どうして笑子がもう鍵を手に入れているのだ？　それも勇希が使っていたものとは違う色の光を放っている。

猫の目では追いきれないハイスピードのケンカで、周囲には土煙が上がり、見る見る校舎がなくなっていく。もうほんと巨樹が全方位から剥き出しである。ひっくり返った魔獣男の血で私たちはどうどりであり、呆然と佇むばかりだ。

なにがなんだかさっぱりだ。

「なかなか目論見通りにはいかないものだね。馬園くん

「理事長！」

私が声の方向を見るより早く、となりの少女が叫んだ。

若い男だった。少し時代がかつた一枚目で、学生服を着ている。そしてその横に千笑が立っていた。そうだった。私の目的はともかくこの場で魔界の穴を開くことを阻止することだった。立たなければ、そう思つが自由が利かない身体と、ぬめった血で脚が滑る。

「理事長！　なんでこんなことを

「……」

少女の言葉に千笑は答えない。

「そこの守護者、黙つていってくれないか？　話の途中なんだ」

「は……？」

もはや私はこの場にいるだけ、役立たずにもほどがある。あつと思う間もなく、その若い男が少女の頭を掴んで放り投げ、背後の樹にぶつけた。結界が解けた影響なのか見る間に枯れ始めた葉が情緒もなく散り落ちる。守護者をぶんぬげるなど、人間業ではないというよりこの男も力を持っている。そう判断する以外ない。

「私の名前を？」

「まだ、気付かないのかい？」

男はポケットから白いハンカチを取り出し、血を浴びた少女を掴んだ手を拭う。そしてそれをそのまま地面に捨てた。黒く染まっていく。

「もしかして？先生？……？」

私にはよく見覚えのある仕草だった。ハンカチは一度しか使わない。

「この状況でも、そう呼んでくれるのかい？」
若返っている。

そう表現するしかない男がそこにいた。

16　「この緊急事態にケンカです。（後書き）

お読みいただきありがとうございました。こましだ。

17 ギブ＆テイクは終わった。

笑子の葬儀で、私は？先生？と出会った。

ということながら、私自身はあまり覚えていない。

妻の死を知つてから、葬儀後しばらくまでの私の記憶は極めて曖昧になつてゐる。後に母に叱られたが、茫然自失そのものだつたといふことらしい。その様子を見かねて聖家の人たちが葬式の一切合財を取り仕切つてくれたのだそうだ。喪主としての挨拶も原稿を渡され、それすら最後まで読み切れなかつたとか、実際とても情けない有様を晒したようだ。

しかしどもかく、気付いたとき、その名刺は手元にあつた。

肩書きも、名前もない。あるのは電話番のみ。裏にも表にもなんのメッセージもない。しかし、絹のような手触りの紙に洗練された書体で印字された数字の列はただそれだけで異様な存在感を放つていた。私は吸い込まれるように電話していた。

後から考えると不思議なことだつたが、その時は？先生？に直ぐ通じた。

「もしもし？」

『ああ、馬園くんだね？』

相當に年季の入つたしゃがれ声であることは間違ひなかつた。

「はい。そうです」

自宅からかけていたので番号でわかつたのだろうとは思った。

「あの、こちらからお電話差し上げて失礼は承知していますが、あなたは、その……」

『構わない。こちらが何者かは教えないことにしている』

「それは、どういう意味で」

『大学に秘密にして進めている研究があるね？』

私の質問には答えず？先生？が要件を切り出した。

「え？ それは……」

どちらが電話をかけた側なのかまるでわからない。

『亡くなられた奥さんを蘇らせたくないかい？』

「……蘇らせる？」

その時には既に引き込まれていた。

『詳細については追つて伝えよう。まずは研究を進めるといい。それが近道だ。予算についてもこちらで手を打つ。ただ内容は秘密のまま、派手にはしないことだ。必要なものがあればこの番号にかけるといい、次からは専属のスタッフが対応する。期待している』

それだけ言うと、私の返答を待たずに切った。

一方的な通告である。

今となつてみれば、おそらく同様のことを相当数の研究者に仕掛けっていたのだろうとも思うが、十年前の私は、混乱しながらもその言葉に一縷の希望を見ていた。地獄に仮。一本の蜘蛛の糸のようなものだ。死んだ妻が蘇るかもしれない。

人工的に魔力を生成する研究をはじめたのは私に魔法の資質がなかつたからだ。

好きになつた相手のことをよく知りたいと思うのは自然のことであると思う。それが魔法ともなれば自分で使ってもみたいと思うのも自然だろう。探究心を揺られないわけがない。だが、魔法を使うためにはそのエネルギーとなる魔力が最低でも必要である。しかしそれはこちら側に自然に存在するものではない。ならば作るしかない。基本的にはそういう流れだ。

もちろん、完璧なゼロからでは無理だつただろう。笑子と結婚する前に、魔法について最低限の知識は（関係者となるにあたつて必要なことであるとして）教わつていたし、笑子本人からも守護者たちが候補生のときに渡される教本を読ませもらつてもいた。

ただ、それだけでは不十分だつた。確かにこととしてわかつていたのは魔界の生活技法を完全に伝える書物は現存していないことと、守護者たちも必要な幾つかの魔法と鍵の使用法程度（それでも膨大ではある）ぐらいしかわからないということだけだ。魔法の根本的

な仕組み、特に魔力を構成するものについてはほとんど「ブラックボックス」になっている。そこにについてなにか確証があれば、秘密になどせず別の名目で堂々と研究をはじめたのだが、ともかくなにもかもが手探りでの研究だった。それも仕事の合間をぬつてのことだから、笑子が死んだときの時点では完成への見通しも立つてはいなかつた。

それでも認められた。

「僕の研究が近道……」

自分の研究がどこから漏れたのかを考えるより、その事実が私を奮い立たせた。若かつたのもあるが、期待されれば期待に応えたくなるのが人情だ。直後に届いた蘇生魔法に関する資料に、研究予算、そして教授への抜擢、有頂天になるには十分すぎた。あの番号にかけば、必要なものはすぐ届けられる。その過程で対応していた男が？先生？と呼んでいたので私も気付けばそう呼ぶようになつていた。

魔力を生成するまでに二年かかった。

そのことを伝えると、すぐに呼び出された。

迎えに来たリムジンは外の景色が見えないようになつており、どこをどう走ったかもわからない。到着した場所はどこかの地下で、そこから階数表示のないエレベーターに乗せられ降りた場所は古書が散乱する書斎のような場所だった。もちろん外は見えない。わからるとすれば？先生？という人物がどこまでも自分の素性を隠したいということだけだった。

「一度目になるかね？」

ぼさぼさの白髪頭を搔きながら壁一面の書棚にかかつた梯子をおりてくる。

「一度目？」

「奥さんの葬儀の時に名刺を手渡しただらう？」

「……あ、はい」

そうか、と私はそこでやつと納得した。

「覚えていなくても無理はない。あの時は、とても生きた目をしていなかつたからね。しかし今はどうだ。充実した顔をしている。手を差し伸べた甲斐があるというものじゃないか」

「先生?は快活に笑うと、私の手を取つた。

人間の私はチビの部類だが、しかし目の前に立つた老人はとても大柄だった。腰がいくらか曲がっているのにそれでも頭三つほど大きい。太くて白い眉毛に、立派な鼻、深く刻まれた皺の中にあって見開かれる目の迫力は圧倒的だった。そのときの私の目が生きていたかどうかはわからないが、そちらこそ生きた目、と言うべきだった。なにがどうしたというものでもなく握手をしながら、私の足がガクガクと震えた。

「よく頑張つたね。馬園くんならやつてくれると思つていた」

「いえ、まだ生成に成功しただけです……」

その成功さえも偶然の産物であつたといつことは多くの発見と同様である。

「しただけ? 自分の仕事を卑下するのはよくない。何十年、何千人が挑んだ最重要課題をたつた三年でクリアしたのだ。才能と強運、両方を持つものでなければできないことだよ」

「それはもう?先生?からお預かりした過去の研究資料あつてこのもので……」

「いい。馬園くんをここに呼んだのは祝杯を挙げるためだ、かけたまえ、いい酒がある」

高級すぎて美味しいのかどうかもわからないウイスキーを飲みながら、私は?先生?の研究について初めて聞かされることになる。

「薄々は気付いていただろうと思う。求めているのは永遠の命だ

」

?先生?は口元をハンカチで拭き、「ミニ箱に放り込んで言った。納得すべき動機ではある。

どういう人物であるかはまるでわからない?先生?だが、相当な金と権力を有することは間違いない、そういう人々が最後に求め

るものはそれ以外にないと言つても過言ではない。でも、永遠の命を得て、さらに魔法の研究を完璧なものにして世界平和を実現したい。そういう趣旨のことを話した？先生？を素直に信じたというわけではない。私もそこまで世間知らずではないし、おそらくもつと口に出せない理由もあるだろ？とは思つたが、特にその考えに共感を求められたわけでもなかつた。？先生？は私の利用価値を認め、私も利用されるからには目的を果たそうと自分の目的を再確認したに過ぎない。

それで十分ではあつた。

「馬園くんのことはずっと監視していた。悪いとは思ったが老い先長いとは言えない身でね。どうしても研究を独占されるのではと疑つてしまふのだよ。しかし、少なくともこれまでの時点ですういう素振りはなかつた。だから……亮平

「はい、先生」

「よく知つた顔だと思うが、これからはこの男も研究に加えてもらいう

はじめて知らされたことだが、野末亮平は？先生？の遠戚であるということだつた。友人だつたことは偶然だつたが、研究について漏らしたのはこの男であつたのだ。そういう忌みで、私の情報は、ほとんど筒抜けだつたということだ。

そこで研究の完成した暁には真つ先に？先生？にそれを提供するという契約を結ぶことになる。多額の報酬と蘇生の石版の情報と引き換えでというものだ。契約が本当に履行されるのか疑念はあつたが、妻の蘇生という目的の前には選択の余地はない。

それからは一年に一度程度のペースで？先生？に研究を直接報告することになった。最終的に六年近くかかつたわけだが、まったく死ぬ気配などなく、私を急かすこともなく、焦つているという雰囲気を出したことは一度もない。その命の先行きには興味がなかつたが、？先生？を失えば研究は飛び、妻も蘇らないとわかっている私もただ研究に没頭しつづけた。そして最初の装置が一年前、半年前

に一つ目の装置は完成し、私は猫にされた。

それが私と？先生？のほとんど全てだった。

まるで自分が黒幕だとでも言いたいかのよつた口ぶりの、若返った？先生？を前にして、私はゆっくりと口を開いた。

「……？先生？が野末に命令して私を猫にしたのだとは思つていません」

そんなことをする合理性がなにもない。

「契約通り、生成装置の一号機は差し上げました。報酬と蘇生の石版は受け取りました。見る限り先生もあと九十年は生きられる。永遠にはまだ遠いかも知れませんが、今更、こんな形で私の邪魔をする理由があるとは思えない。邪魔だと思うならもつと早い段階で猫などという回りくどいことをせずとも消せばすむことで、それもできたはずだ。そんな価値さえも私にないことはよく存知だと思いませんが」

「馬園くんの悪い癖だ。自己卑下が過ぎる」

？先生？はそう言つと、隣に立つていた千笑の背中を押した。

「人は言わないかもしないが、珍しい男だよ。妻を蘇らせること以外は、金にも権力にも魔法にさえも執着しなかつた。長く生きて多くの人間を見たつもりだが、賞賛されるべき美德を持つているのではないかと思うね。だからこそ生かしたという面もなくはない。亮平の件についてはこちらの不手際だ。済まなかつたとむしろ言わせてもらいたい。これが終わったら人間に戻れるよう計らおう」

「それには及びません」

反射的に答えていた。問題はそんなことではないのだ。

千笑が無言のまま巨樹に向かつて歩いていく。動けない私の横をすり抜け、さきほど投げられ横たわっている少女の脇を素通りし、一直線に。上空では笑子が戦つていて、爆音と閃光が交互に繰り返されている。呻いていた魔獣男も立ち上がりはじめた。

「それは……猫の今までいい、という意味かい？」

「もう、世話にはならない。やつこつ意味ですよ
ギブ＆テイクは終わつた。

ここで力を振り絞らなくてどうする。

私はともかく立ち上がるうとした。だが、思つよつに猫の身体は動かない。猫として目覚めた日にさえ感じることのなかつた不自由だつた。前脚を立てても後脚が自然にはついてこない。細い筒に腕を突つ込んでなにかを引っ張り出すよつたもどかしい反応だつた。

「んんにゃああああ！　つあ！」

跳ね上げるよつに後脚を立てるごとバランスを崩して顔面を地面に打つた。

「孫娘が命懸けで守つたものをこんな風に無に帰すんですか！」

千笑に向かつて叫ぶ。身体の向きを変えるだけで猫の身体は左右にぐらついた。

「笑子が守つた正義の街は、まだここにあるはずだ！」

「だからこそよ」

千笑は胸元から小さな箱を取り出していた。

あれか。

私はまったく自然な動きにならない四本の脚をでたらめに動かし、転がるように突進する。話し合つて通じるものでもないだろうとは思つていた。現実的に言えば、この状況になるまでに結論などとつくに出している。だが時間ぐらいは稼げるかも知れない。

「見えないんですか！　今、この場でも戦つている笑子が！」

「……」

私の言葉に千笑は空を見上げた。

鍵を奪うチャンスは今しかない。私は勢い任せに飛び上がつた。

「黙つて見つているわけがないだろう？」

一瞬で？先生？が追いついてきていた。予想していなかつたわけではない。

守護者を投げ飛ばした時点でのくらこのことは、
だが、できることなどなにもない。

「……っ」

めきめきと全身が碎ける音と共に猫の身体が地面に押し付けられていた。？先生？の若い手が頭を掴んで締め付けている。どこかの骨が折れて刺さつたらしく、じわりと痛みが広がり始める。呼吸が苦しい。

「圭介さん」

千笑が箱の中から古ぼけた鍵を取り出した。守護者のそれとは違つて特別な雰囲気はまるでない。よく磨かれているが明らかに輝きは鈍い。

「正義が、不要だったのです」

「……」

声が出なかつた。

「正義がすべてを殺した。そういうことだよ、馬園くん」

？先生？はそう言うと私の頭から手を離した。

「この混沌とした状況を見ればわかるはずだ。人を狂わせ争いに至らしめる。それが正義だ」

私は既に原形を失い、瓦礫の山と化しつつある周辺を見渡した。

笑子は、おそらく私を助けるために。

相手の守護者は、復讐のために。

魔獣男は、自らの暴走する欲望のために。

守護者たちは、その使命を果すために。

？先生？は、世界平和のために。

戦つている。

このすべてが、正義？

17 ギフ&テイクは終わった。（後書き）

お読みいただきありがとうございました。
ごめんなさい。

まるで知っているみたいだ。

自分の身体が、理解するより早く動くのを感じながら、笑子はまた目の前の相手が振るう剣を紙一重でかわし、軽く反撃を加える。力を確かめるように。

「……い？」このつ

数分にも満たない攻防だったが、相手は弱っている。

「もう、止めない？」

狙いもなにもなく振り回された剣を反射的に抜き放った剣で受け止めながら、笑子は呼びかける。どうしてかはわからないが実力差が歴然だつた。猫を助けようとした瞬間から、力が溢れて止まらない。最初こそ怒りに任せて戦つてはみたものの、あまりにも手応えがなく、冷静になつてきている。

「……！」

じわ、と相手の目に涙が浮かぶのがわかつた。

「……や、あの、『ごめん』」

気が済んじやつたから、とは流石に言えなかつた。

「ほら、疲れたし、ね？」

高等部の校舎もなくなつちゃう……い？

相手が剣から手を離し、蹴り上げてきた脚を思わず掴んだ。

渾身の力が込められているのはわかるのだが、それも容易く往なせてしまつ。

「……」

明らかに泣くのを堪えている相手の表情が見て取れる。

まるでいじめているみたいで気が引ける。

「よ、よくよく考えたら、わたしたち自己紹介もしてないし？ あ、わたしからね？ 笑子、笑う、子供の子つて書いて、笑子。あなたは？」

じんわりと嫌な汗をかきながら、笑子はなんとか懐柔しようとする

る。

「……華夢衣」

そういうながら相手の少女はもう一本の脚で地面を蹴り、身体をひねつて掴まれた脚を振りほどき、間合いを詰めて連打。鋭い突きと蹴りが襲う。

「かむい、さん？　へー、そう、カツコいい名前だと思つ、雰囲気あるよ」

しかし難なくそれもかわしながら、笑子は相手のスピードに合わせてバックステップ。

かわした拳が校舎の壁を砕き、力を込めた脚が周囲のものを吹き飛ばしていくことに罪悪感を覚えながらも、これ以上相手を痛めつける気にはなれなかつた。確かに痛い目に合わされはしたが、その借りはもう返してしまつた。十分過ぎるほどに。

「復讐^{リベンジ}」

そしてどうやら相手は人違いをしている。

自分と勇希が見間違えられやすいのは笑子も理解していた。

「や、あの、わたしは、違うよ？　かむいさん^が言つてるのはたぶん、わたしの……」

わたしの？

思わずステップが止まる。なんて言おうとした？

「油断……」

「あ」

避けきれず思い切り蹴り飛ばされ、笑子は残っていた校舎に叩きつけられる。反動で前のめりに倒れたところをさらに踏みつけられ、崩れた壁が背中に降り注ぐ。

「こ、ども？」

わたしのこども？

まさか。

「抹殺」

「ありえないっ」

背中に向かつて剣を振り下ろそうとしている華夢衣」と笑子は跳ね起きた。そのまま中空に浮いた相手を蹴つ飛ばすと、深く息を吐いた。鍵を差し込んでから、奇妙な違和感が広がっている。「こうして立つておる自分に対する違和感、自分が自分でなくなるよつた。

「落ち着け、わたし」

そう呟いて、胸に手を当てる。

心臓の激しい鼓動。生きている証拠。生きている。

「わたしは」

どうしてここに?.

頭痛がして、こめかみを押さえる。

「わたしは……まことに、生き返らせてもらつたから……」

笑子は猫の姿を探した。そのためにここへ来たのだった。助けた直後に華夢衣に攻撃され、わけがわからなくなつてしまつたが、一時の感情に振り回されている場合ではない。

すっかり見通しがよくなつてしまつた校舎の向こうにその姿はあつた。

「まことに」

猫は地面にぐつたりと身体を横たえていた。息も絶え絶えの様子で。その横には学生服の若い男が立つていて、そして二人が見ている枯れかけた樹の前には記憶する印象より随分年老いた祖母がいる。その手には古びた鍵、どこかで見覚えのあるものを握つて。

把握すると同時に、猫に向かつて踏み出そつとした足がもつれた。

「んう?」

眩暈、そして吐き気。

見たことのないはずの光景が、重なつて見える。

樹は完全に枯れている。同じ場所に祖母が立つていて。記憶にまだ近い祖母、そしてその横に立つ、女性。だれかはわからない。しかし、どこかで……同じ鍵を手にしている。微笑んでいる。なにかを言つておる。そして祖母を押しのけて……。

「ううう……」

口に手をあて、笑子は目を瞑つた。

なぜかはわからないが見ていられなかつた。全身の力が抜ける。のどもとに込み上げてくる熱に反して、手足の先まで震えてきた。寒氣がする。痛いほどの太陽の光が当たつているのはわかるのに、唇に触れる指は凍えるほどに冷たい。

既視感。

あの光景をまるで知つてゐるみたいに。

「オオーン！」

狼が吠えた。

首筋に喰らいついた牙の感触と同時に、笑子の視界が空を泳いだ。ぐるりと一回転して地面に突き落とされる。

骨に刺さつてくる痛みで現実に引き戻され、反射で笑子はその頭に剣を突きたてる。気遣つ余裕はなかつた。白い毛のようを見えたそれは硬く、光が弾けた。さらに牙が深く突き立てられ、息も吸えなくなる。

「 のっ」

力任せに牙と首の隙間に手を突つ込んでこじ開ける。掌を鋭い歯の先が貫くのが見えたが、首が取れるとそのまま両手を口の中に押し込んだ。

「かむい、さん？」

人間の顔ではなくなつてしまつた相手に笑子は言う。人間が狼になつてゐるというより、狼が人間になりかけているという方が自然な姿だつたが、目の色は変わつていない。間違えようもなかつた。

「グルルルルルグ」

唸りを上げ、ぶんと首を振つた勢いで笑子は飛ばされる。考へてゐる暇はなかつた。

自分に起こつてゐる違和感と向き合つてゐる場合でもない。まずは、猫を助けなければ。

体勢を立て直し、笑子は向かつてきした狼の顔面を蹴り上げた。

「ぎゃん

「あうっ」

だが同時に爪が脇腹に食い込んでくる。力が拮抗しているのがわかつた。今度氣を抜けば殺られる。

同じ頃。

学院からなんとか逃げ出した三人は奇妙な一人乗り自転車と出くわしていた。

「あの、同じ顔か、喋る猫、見なかつた？」

「？ええ？喋る猫は見たつすけど、あの、学院は今ちょっと危ないと思……」

ナツメは、問われた意味より一人の扮装に目を奪われながら答える。

「学院！そつか」

少年の方は手を叩いた。

「ほら、行き先わかつたでしょ？」

少女が勝ち誇ったように言つ。

「ほら、じゃねーよ！如月が母さんの行き先知つてるつて言つから……」

「方向は合つてた！方向は！あと、如月じゃなくて！」

「あ、舞！そー、舞な！わかつた、もー、間違えない！」

「舞じやなくて、ハーネって呼んで！」

見ている三人はびっくりした。傍目にも脈絡がない。

「うえ？ハつて？おま、バカかよ……そんなもん言えるわけ少年も顔を真つ赤にしている。

「はい、嫌がらない！せーのー！」

「は……なー、やっぱそれはちょっと、恥ずいよ。変だし

「恥ずかしがらない！変じやない！せええのー！」

少女は掛け声を張り上げる。

「……にー」

「声が小さい！」

「……は、はにー？」

「もつと、大きな声で！」

「ハニーっ！」

言わなければ先には進めないであろうと観念して叫んだ少年。それはヤケクソ以外のなにものでもないよつこ三人には見えた。痛々しい。

「アイラブコー！」

「あ、あいらぶゆう」

愛もごり押しだつた。

「オーケーっ！ 行くよ、ダーリン…」

「たのむ……うん。あ、ありがとうございましたーっ！」

一瞬で明らかに顔色が悪化した少年は思い出したよつこ三人に頭を下げた。

仲が良いのかなんのかわからないやりとりを繰り広げた一人乗りは呆気にとられる三人を置き去りにしていく。いつ転ぶかわからないうるさく危なつかしい自転車捌きで。

しばらくしてから、ナツメが納得したように頷いた。

「……如月つて苗字に生まれたら、そう呼ばれたくなるつすね？」
「ナツメちゃん、それは、伝わりにくいネタじゃないかな？ わかるけど」

ヤタテは苦笑いした。

「ハニーフラッシュ！ だ、ぜつと」

ミズキは例の有名アニメソングを口ずれる。

「駅前で見た男の子だつたね」

「ああ、言つてた美少年つて彼つすか、なるほど」

「ノーマルなんだ……」

心底ガッカリという風に呟く。

「ヤタテっち、どう見てもあの一人はノーマルじゃなかつたつすけど」

「男女交際だもの、ノーマルよ」

「ま、ノーマルな倒錯ではあつたつすけど……」

ノーマルという定義があやふやであつた。

それぞれ妄想の中に沈み、学院から離れていく。学院周辺には既に人の気配はなかつた。候補生たちが住民の避難を終えつつあつたのだが、三人には知る由もない。夏の陽射しは頂点を越え、ゆるやかに夕陽へと変わりつつあつた。

「……つていうか、あの一人のあまりのインパクトでうつかりしてたつすけど、学院つていま大変な状況になつてるつすよね、行かせて……？」

ナツメは青ざめながら言つた。

「「あ」」

完全に呼び止めるタイミングを逸していた。

「大丈夫でしょう、だつてあの子、戦つてたし」

「魔法少女少年だ、ぜつと」

「なんかナチュラルに戦うとか魔法とか言つてて、日本ヤバいつすかね……？」

相当、深刻な状況かも知れない。

彼女たちはそれぞれそのことには気付いていたが、それ以上は追求しなかつた。

今日も、明日も、明後日も、どこかのチャンネルで確実にアニメが流れつていて、それをああでもないこうでもないと言いながら観る。そういう日常がなにかの拍子に壊れてしまふかも知れない。などということは、想像する意味もないことだつたからだ。仮になくなつたとしても、なにかが代わりになるし、本当になくなつたとしても最後には自分の頭の中でそれらはすべて完結させることができる。強かだつた。踊らされているようで、最後まで自分の好きなものしか愛さない。なによりも非現実に支えられながら、だれよりも現実に楽しんでいる。

オタクは死なない。決して。

「戦いも魔法も、通つてきた道だよ、ナツメちゃん」

「正義の心はパイルダーオンされている、ぜつと」

「そっすね。魔法とかなんとか、ありきたりの設定つすもん。自分ならもつと……」

三人は無事に帰宅し、その晩もアニメを見る。

世界が変化したこと気に付くのはもう少し後のことだ。

校舎が崩れていく轟音に、眠つてもいられなかつた。

「……せんせん、収まつてない」

初等部の保健室。

壁に貼られたプリントや、視力検査用のボードなどにひらがなが目立つ室内は高等部のそれと構造は同じなのに、どうしようもなく牧歌的だつた。テディは自分が鍵を手渡したことを思い出し、つまり渡した相手がここまで運んでくれたのだろうと状況を把握する。悪い夢だつた、と言いたかつたが、男との戦いで受けた確實な傷が胸に残つていて、それは酷く悪夢的に痛んだ。傷口は塞がつていたが、傷跡は残りそ�である。

「屈辱つていうか、玲於に合わせる顔がないよね、これは……」

昨日からまるでいいところがない。

子供にしてやられ、魔人からは逃亡し、敵とはやつと刺し違えである。

抉れた傷口を撫でると溜息を吐き、ベッドから降りる。椅子に引つ掛けた白衣を羽織つて窓辺に立つ。中等部を挟んで向こう側にある高等部の建物が見えるわけではなかつたが、巻き上がる粉塵を観ればおおよそどんな状況にあるのかは察せられた。魔界の穴がまだ無事であることも。

本当に魔力が溢れ出せば、学院の敷地内はすぐ中庭と同じく植物が異常な活性を見せる状態になるに違いなく、それが学院の外周に張られた結界を破つて街へ広がつていくのも時間の問題になる。それだけは避けなければならなかつた。

魔界や魔力や魔法、そう言つたことをいつまでも隠し通せるもの

ではないことはテディにもわかっている。この世界がそういう意味で歪にできていることも感じている。だが、現時点ではそれをすべての人々に受け入れさせる準備どころか、受け入れさせるかどうかを決める話し合いのコンセンサスさえも形成されていない。だからこそ、現場の守護者にかかる責任は重い。起こってしまった対処するなどといついい加減なことには断じてできないのだ。

「行かなきや、ね」

鍵を渡した時点で、できることはそれほどなかつた。

それでもテディには見届ける責任があり、そこから逃げない責任感がある。

校舎を出たところで、ボロボロのまま歩く玲於と合流する。

「なに、そのカツコ、白衣だけ？ 露出狂？」

テディの姿を見てそう言う玲於だったが、彼女自身も魔力が安定せず、裸同然である。

「ごめん、やられた。天才がザマーないつて笑つてよ」

苦笑いしかできなかつた。

「……生きててなによりよ」

責めるでもなく、しみじみと玲於は答える。

「やだな、しんみりしちやつて。そつちは？」

「人間の魔獣。いつちの防御が役に立たない。ぜんぶ相殺されちゃう」

「ついてない」

「本当に」

テディは玲於の腕を取つて、肩を貸すと引っ張るように進む。

「手はあるの？」

「売村一人じや守りきれない。穴を開けられるのは織り込んだ上で、すぐに閉じるしかない」

「……十年前と一緒にしたことね」

暗澹たる気持ちでテディは言つ。

「歴史は嫌なところばーっかり繰り返すから嫌い」

玲於はそう吐き捨てた。

16 歴史は蘇る（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

千笑は鍵を握った手を突き出し、一歩前に進む。

すると、巨樹はまるで自ら鍵を求めるようにその太い幹から細い枝を幾本も伸ばしはじめる。それらは不自然に曲がり、まるで光に向かうように鍵に絡みつき、そのままそれを伝つて老婆の腕まで飲み込んだ。そして後から後からやつてくる枝がそれをさらに飲み込み、その太さを増していく。

勇希が守護者の鍵をはじめて使つたとおとはまるで違つ反応だつた。

「圭介さん、正義とは呪いのよつなものよ」

重なりながら腕に絡む枝に肩まで飲まれながら千笑は静かに言つた。

「目的の正しさ故に、あらゆる手段を正当化してしまつ……」

力チリ。

『あなたもいらっしゃい。笑子を殺したもののは最期を看取りに』

そういうことか。

私にも千笑がなにを言おうとしているのかよつやく理解できた。不自然に響く鍵音と共に、老婆に絡みついた枝から枯れていいく、樹皮から水気が失われ、太い幹の表皮が剥がれる。穴から溢れ出す魔力を吸収することでそれを封印していた巨樹がかさかさと音を立て死んでいく。私の髪が張りつめ、小刻みに震えた。なにが正義かを議論している場合ではない。

「それは子供の理屈でしょう!」

私は叫んだ。もはや叫ぶことしかできなかつた。

「確かに、笑子はこの街を守るために死んだのかもしない! けれど、だからと言つて、この街を終わらせることでその正義を葬つてなんになると言つんですか!」

それでは本末転倒以外のなにものでもない。

「……」

千笑は答えず、枯れしていく樹をただ静かに見上げていた。

「答えてください！」

「無駄だよ、馬園くん」

？先生？がそう言いながら千笑の脇を抜け、巨樹の幹に触れる。少し力を入れただけでそれは脆く崩れ、空洞になつた内部が露わになる。濃密な魔力の気配がそこについた。

「この樹は、十年前、きみの亡くなつた奥さんが命と引き換えに維持したものだ。それをその祖母である彼女がこうして破壊している。生半可ではない覚悟の上の決断だ」

笑子。

そう言われて私は樹を見上げる。

「圭介さん」

ゆつくりと千笑は口を開く。

「これが正しい行いではないことはわかっているの。笑子の遺志にも背くでしょう。けれど、この十年状況は悪化しつづけていた。確認されているだけでも地球上の魔界の穴は加速度的に増え、対して、それを守る守護者の数は決定的に不足している。ある地域ではすでに地上が完全に魔界化して放棄された。中の人間諸君。正義とあなたは言つたけれど、それは犠牲の上に立てられた墓標のようなものよ。この樹がそうであるように」

巨樹が風化していく。

？先生？が微笑んだ。

「守護者と言うシステムは、この世界を維持できればこそ存在価値があつた。かつては聖家のような人々が、小さな地域をひとつ的世界として守れればそれで良かつたかもしない。だが、現在、地球規模の情報を知りうる状況にあつて、この世界で魔法を独占する人々は、この世界を守ることもできなくなつている。すでに守護者に存在意義はない。本来ならば、魔法という情報を広く人々に知らしめ、全人類の力を以つて魔界化を食い止めるべきだろうが、しかし

守護者の組織はそうしなかった。守れる地域を守り、かつて人が魔界に異端者を放り込んだように、世界を切り捨てようとしている。

「これのどこが正義だと？」

そう言いながら樹の内部に腕を突っ込む。

「正義を葬る。馬園くんはそう言つたが、正義は既に死んでいる。それを世界に知らしめる。魔界の穴を開き、この国を魔界に叩き込む。それが第一歩だ」

「……だ、としても」

なにかを言わなければならなかつた。

知らないことばかりだ。そして十年、私が妻を蘇らせることに必死になつてゐる間にも、千笑は苦惱しつづけていたに違いない。守護者として生き、孫娘を守護者として死なせ、その上の決断がこれであるとするならば、私の言葉など綺麗事にもならない。

だが、それでも、肯定はできない。

「その先に？先生？の言つ世界平和はありますか？ 魔力が世界に広がれば、多くの人々は欲望に飲まれ新たな争いが生まれる。守護者が世界のすべてを守れなくとも、少なくともそうならない世界を維持できるなら存在意義はあるはずだ。ならば……」

「誤解しているな、馬園くん」

私の言葉を遮つて？先生？は首を振つた。

「確かに魔力によつて欲望のままに行動する人間は争いを起こすだろう。だが、それは現在の状況とどう違う？ 国力や、武力や、経済力、そういうた類の争いがあるだけだ。魔力によつて、人の争いはもつと原始的なものに回帰する。生存競争だ。それは戦争などよりずっと純粋で、平和な争いだよ。多数を排除するために効率の概念が失われ、個々人が争うのだから平等でもある。その先に、魔界に適応した種による新たな秩序が生まれるはずだ。それこそが僕の望む世界平和であり、僕はそれを見届ける。そのための永遠の命だ」

「…………」

なにも言えなかつた。結局、私もそれに手を貸したのだ。

生存競争。その通りだ。笑子を生き返らせるということと引き換
えに、私はすべてを譲り渡した。笑子の正義を売り払う結果になる
とは考えせず。私の欲望を、正義を追及した。

巨樹がゆっくりと倒れる。重量を失い、倒れた先から砂のよろこびに碎け散る。

「……変わらない人。あなたの望みは果しました、だから約束は……」

そ、言ひて、千笑は地面に膝を突く。薄く笑つてゐるよ、にも見えたが、目には生氣がなかつた。力なく地面に垂れ下がつた腕はやけに白く、皮膚が透けて骨のよう見える。

「うわ。なんかに呑ぬといこ

笑子に斬られた腕が回復をはじめて、いる。

「やつとか。資質のない人間では魔力が十分でもいかんせん吸収に

同是力歴記

二三九

轄に付ていなければ、腕を震ふ男が現り、何が

魔界の方が開きはじめている。目標から逃れ出していくつもりはない。質的にも量的にも違う、呼吸が苦しくなつて、視界の色を変えてしまふような勢いで、魔力が噴出してゐる。そして生成装置で作つたものとは違う嗅いだことのない獸じみた匂い。

見殺しにするわけにはいかない。

もはや猫の肉体は限界たつたが私は立ち上がる。後脚が折れてしま、ふらふらと揺れるが三本で地面を蹴る。折れた骨で呼吸も苦しい、痛みで眩暈がする。だが、だれかの助けは期待できない。目では捉えられないが、ずっと笑子とあの守護者の少女は戦っている。私がやるしかない。一人の老人の考えはわからないではない。世界のことなど考えたこともない私は、それを否定する言葉をもたない。だが、それでも死んだ笑子は、この街を守りたかったのだ。

それだけが私の信じる真実であり、それ以外に正義はない。

たが、それでも。死んだ笑子は、この街を守りたかったのだ。
それだけが私の信じる真実であり、それ以外に正義はない。

「正義は、死んでなどいない……！」

「ヲヲウウォヲヲオオオオオオオオオオオオ……」

か細い私の叫びは男の叫びに搔き消された。

千笑の頭に向かつて巨大な拳が迫つていいくのがスローモーションで見える。

不思議なことに、さつきはあれほど自由にならなかつた猫の身体は想像より早く動き、アドレナリン的な働きだろうか、痛みもそれほど感じない。身体が軽い。火事場のなんとかというヤツだろう。力が漲つてくる感じさえあつた。

私は跳ぶ。

跳んだところで猫の死体が増えるだけだとわかつていた。だが、もう行動できずに無力を嘆くだけの己ではいたくない。ただそれだけだつた。それだけで十分だつた。男の拳が千笑の頭を掠める直前に、私の前脚が拳を横から……押し出していく。

「あれ？」

まだスローモーションだ。千笑の目が驚愕に見開かれ、？先生？が顔をしかめるのを視界に捉えた。男の腕の筋肉が突つ張つた。おそらく私を弾き返そうと、しかし、それでも私の一本の前脚がその軌道を逸らしていく。

どういうことだ？

本能が先に動いた。私はくるりと身体をひねつて、男の拳を蹴つた。気付けば折れていた後脚が治つている。全身の筋肉もかつてないほどに躍動する。痛みはどこにも感じない。それどころか絶好調と言つても過言ではない。

「にやあおつ！」

叫びながら、全力で男の顎に後脚を叩き込んでいた。

「ヲウツ」

びくん、と魔獸男の背が仰け反つて、振るつた腕が空を切つた。一回転半、反動で空中を回り、着地した時、私は、私が借りている猫の肉体に起こつた変化を知覚する。体毛の隅々まで神経が行き

届き、空腹の時に獲物を見つけるときよりも圧倒的に滾る攻撃性、地面に立てた爪が鋭く深く地面を抉った。

「やつてくれましたね……」

千笑がそう呟いた。生氣が戻っている。

「……はい、やりました」

この猫の身体に。

「資質があつたということか」

背後で？先生？はそう呻いた。その片腕は樹があつた場所に開いた黒い空間の歪みに差し込まれている。今の私には彼がそこから魔力を自らの肉体へ吸い上げているのが感じられた。守護者の鍵を使つている訳ではないらしい。

「だが、力の差は歴然だ」

「オオオオオオオオオオオオオオヲヲツ！」

気を取られている場合ではなかつた。

私は再び振り下ろされた魔獸男の拳をまた横へ弾く。

肉体を『変異』させたとはいゝ、人間と猫にもともとある体格差もなにも埋まつてはいない。正面からは受けられようもない。いつの間にかもう一本の腕が復活していて、さらにもう一撃来るのを逸らす。ともかく受け流す他ない。相手が完全に魔力に引っ張られて、思考力を維持していながら幸いだつた。

「圭介さん、かまわず逃げなさい。その力があれば……」

「そうはいかないですよ！　あなたは笑子の祖母で、笑子が守つた人だ！　私は自分勝手な人間で、もはや、すつかり自分勝手な猫ですが……」

拳の風圧に跳ね飛ばされそうになりながら、私は地面に踏ん張る。

「……昔も今も、やらかした責任ぐらいは取ります！　取つてみせます！」

「シネ」

魔獸男は一つの拳を組み、高々と振り上げた。

黒い白目の光沢が怪しく揺れる。完全に敵と看做された。

冴え渡る動物的勘が、あれは往なせないことを告げている。千笑を狙つていればこそ、横槍にも意味があつたわけで、私自身を狙わればもう力負けは間違いない。かといって逃げれば相手が不意に千笑に狙いを変えないとも限らない。

「圭介さん！」

「この世界の先が絶望だとしても！」

私はやれることをやるしかない。

「私にもあなたにも、他のだれにも、未来へ絶望を押し付けることはできないはずだ！」

叫んで、拳に向かつて突進する、

瞬間。

「よくぞ言つたあーっ！」

赤い獅子が横から男の顔面を蹴り飛ばした。

「キヤ、ガツタヨコカ、ラマ、タ」

「テティ！ 売村！」

ずるずると踏ん張つて倒れない男をにらみつけながら、獅子、正井玲於は叫ぶ。

「わかつてる！」「わかつています！」

気付くと、白衣を着た昨日の金髪の少女が千笑を抱え上げ、さきほど？先生？に投げられた守護者の少女が私を捕まえて、魔界の穴から距離を取る。

「さて、そこのアンタが首謀者つてことでいいのかしらね？」

「この状況を見ればわかるだろう？」

「ええ、せつかく魔界の穴が開いたつてのに、その身体で魔力をほとんど吸つてる辺り、燃費のよくない魔人みたいだつてこともね……まあ、大体、話は聞こえてたけど、猫の言つ通り、そんな絶望を押し付けられるのも、世界平和を押し付けられるのも、迷惑！」

魔獸男へ警戒しながらも、玲於は両手の爪から燃えるような剣を抜き放つた。

「ならばどうする？」

?先生?が緊張するのがわかつた。

「今すぐアンタを殺して、幕を引かせてもらひー。」

そう言つた瞬間には踏み込んでいた。

だが、直後、玲於と?先生?との間に、なにかが降つてきて、彼女の足は止まつた。

「……あ、う」

ぼろぼろになつた笑子だつた。ワンピースは無残に千切れ、腕や脚、腹や首に至るまで鋭く噛まれ、さらに爪で刻まれた形跡が見て取れる。どうやら戦いは負けに終わつたようだ。

私は飛び出せうとしたが、守護者の少女の腕がそれを許さなかつた。

そして白い狼と追いかけるようにその横に立つ。

「華夢衣、戻つてきてたの?」

玲於はその姿を見て、安堵したような呆れたような顔をした。

「なら、こんな子供と遊んでないでそこの男を……」

私がそれに気付くより、私を抱える少女が息を飲む方が早かつた。

「……?」

玲於は次の言葉を発する寸前。

狼の牙が、獅子の喉笛に喰らいついていた。

「よくやつた……華夢衣」

満足そうに?先生?が咳く。

「裏切つた?」

そう言つたのは金髪の少女であり、抱えられた千笑は言葉を失つてゐる。

「驚くには値しないだろ? きみたちのトップが裏切つていたんだ。その部下だつて裏切らないとはだれにも言えまい。まあ……それなりの数を送り込んだというのに、的確に裏切り者で無い者を最後までここに残した正井玲於くんの慧眼には恐れ入るがね」

迂闊だった。

よくよく考えてみれば、市内に入ろうとして対面した時から、あ

の狼の守護者の行動だけは違和感があった。どこかでまだ若いから不規則な行動を取るのだと納得していたが、穴を守るために行動するのであれば、笑子と戦う理由はなかったのだ。

隠してすらいなかつた。

狼が口を開けると、玲於の身体がふらりと倒れた。

「ララララオオオオオオ！」

そこへ待ち構えていた魔獸男の拳が振り上げられる。

「玲於！」

金髪の少女が悲鳴をあげた。

チリンチリン！

「ぱぱぱぱーん、ぱぱぱぱーん、ぱぱぱぱぱん、ぱぱぱぱぱん、ぱぱぱぱ
ぱん」

場違いな自転車のベルと、聞き覚えのある曲の歌声が中庭に響いた。

「ハイ、ダーリン！」

自転車を漕ぐ、タキシードの少女。

「ハイ、ハニー……」

その背中に手をかけ、荷台の上に立つウーティングドレスの少年。

「馬園勇希と！」「如月舞は！」

「結婚しました！」

ぽかんとする、というのほこりいう状況だつ。

その場にいた全員が、動きを止めた。

息子よ、空氣嫁。

18 息子よ、空氣嫁。（後妻や）

お読みいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1252t/>

正義の街

2011年10月8日03時22分発行